千葉県文化財センター調査報告第445集

松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書 1

―― 印西市松崎Ⅱ遺跡 ――

平成15年 3 月

千　葉　県　企　業　庁

財団法人　千葉県文化財センター

松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書 1

―― 印西市松崎Ⅱ遺跡 ――

序　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第445集として，千葉県企業庁の松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴って実施した印西市松崎Ⅱ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡では，弥生時代終末期から古墳時代前期の住居跡が多数発見されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年３月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　清水新次

凡　例

1　本書は，千葉県企業庁による松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県印西市松崎字浦1,037-1ほかに所在する松崎Ⅱ遺跡（遺跡コード327-003）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，千葉県企業庁の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織，担当者及び実施期間は第１章，第１節に記載した。

5　本書の執筆は，第２章第２節・第３章第１節を古内茂が担当し，それ以外の部分は西野雅人・鈴木弘幸が担当した。なお，第１章第２節において安川正行，旧石器について山岡磨由子，縄文時代石器について島立桂，土師器について蜂屋孝之・木島桂子，製鉄関連遺物について小林信一の協力を得た。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁生涯学習部文化財課，印西市教育委員会，千葉県企業庁ほか多くの方々から御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

　　第３図　　国土地理院発行　1/25,000地形図「小林」

8　遺跡付近航空写真（図版１・２）は，京葉測量株式会社によって撮影されたものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。

10　本書で使用したスクリーントーンの用例は次によるか，または図中に示した。

炉・焼土面　　・土器

焼土　　・石器

粘土・カマド袖　　・土製品

・鉄器

本文目次

第1章　はじめに …… 1
第1節　調査の概要 …… 1
1　調査の経緯と経過 …… 1
2　調査の方法 …… 3
第2節　遺跡の位置と環境 …… 7
1　遺跡の位置と環境 …… 7
2　松崎遺跡群と周辺の遺跡 …… 7
第2章　検出した遺構と遺物 …… 13
第1節　概要 …… 13
第2節　旧石器時代 …… 13
1　概観 …… 13
2　層序 …… 13
3　第1文化層 …… 16
4　第2文化層 …… 35
5　第3文化層 …… 36
6　第4文化層 …… 36
7　単独出土の石器群 …… 50
第3節　縄文時代 …… 61
1　遺構と出土遺物 …… 61
2　遺構外出土遺物 …… 62
第4節　古墳時代 …… 76
1　住居跡 …… 76
2　竪穴状遺構 …… 133
3　墳墓 …… 135
4　掘立柱建物 …… 139
5　土坑 …… 140
第5節　奈良・平安時代 …… 142
1　方形周溝状遺構 …… 142
2　竪穴状遺構 …… 143
3　土坑 …… 145
第6節　中・近世 …… 146
1　掘立柱建物 …… 146
2　地下式壙 …… 150
3　溝状遺構 …… 151

4　野馬土手 ……153
第7節　その他の遺構・遺物 ……155
1　土坑 ……155
2　炉跡 ……162
3　ピット群 ……162
4　遺構外出土遺物 ……163
5　砥石・軽石 ……166
付表 ……168
第3章　まとめ ……183
第1節　旧石器時代 ……183
第2節　弥生時代末期から古墳時代前期 ……184
第3節　古墳時代から奈良・平安時代 ……190
第4節　中・近世 ……190
報告書抄録 ……巻末

挿図目次

第1図　グリッド命名法 …… 3
第2図　上層遺構配置 …… 5
第3図　松崎Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
第4図　松崎遺跡群 …… 12
第5図　遺跡土層断面図 …… 14
第6図　地形図及び調査対象範囲 …… 15
第7図　基本土層図 …… 16
第8図　第1地点遺物分布・出土遺物 …… 16
第9図　第2地点遺物分布 …… 17
第10図　第2地点出土遺物 …… 19
第11図　第3地点器種別分布 …… 20
第12図　第3地点母岩別分布・出土遺物 …… 21
第13図　第4・5・6地点器種別分布 …… 23
第14図　第4・5・6地点母岩別分布 …… 25
第15図　第4・5・6地点出土遺物（1） …… 27
第16図　第4・5・6地点出土遺物（2） …… 28
第17図　第4・5・6地点出土遺物（3） …… 29
第18図　第4・5・6地点出土遺物（4） …… 30
第19図　第4・5・6地点出土遺物（5） …… 31
第20図　第4・5・6地点出土遺物（6） …… 32
第21図　第7地点遺物分布・出土遺物 …… 33
第22図　第8地点遺物分布 …… 34
第23図　第8地点出土遺物 …… 35
第24図　第9地点遺物分布 …… 37
第25図　第9地点出土遺物 …… 38
第26図　第10地点遺物分布・出土遺物 …… 38
第27図　第11地点遺物分布・出土遺物 …… 38
第28図　第12地点遺物分布・出土遺物 …… 39
第29図　第13地点遺物分布・出土遺物 …… 40
第30図　第14地点器種別分布 …… 41
第31図　第14地点母岩別分布 …… 42
第32図　第14地点出土遺物 …… 43
第33図　第15地点器種別分布 …… 44
第34図　第15地点母岩別分布・出土遺物 …… 45
第35図　第15地点礫接合資料 …… 46
第36図　第16地点器種別分布 …… 47
第37図　第16地点母岩別分布 …… 48
第38図　第16地点出土遺物 …… 49
第39図　地点外及び単独出土遺物分布 …… 51
第40図　地点外及び単独出土遺物（1） …… 52

第41図　地点外及び単独出土遺物（2）……53
第42図　縄文時代遺構・出土遺物……61
第43図　縄文土器出土比率(左)と掲載資料内訳(右)…62
第44図　縄文土器時期別分布……64
第45図　遺構外縄文土器1（第1群～第10群）…66
第46図　遺構外縄文土器2（第10群）……67
第47図　遺構外縄文土器3（第12群・第14群）…68
第48図　遺構外縄文土器4（第14群・15群）……69
第49図　遺構外縄文土器5（第15群）……70
第50図　縄文時代上製品・石器1……72
第51図　縄文時代石器2……73
第52図　縄文時代石器3……74
第53図　縄文時代石器4……75
第54図　SI-001（1）……76
第55図　SI-001（2）……77
第56図　SI-002……78
第57図　SI-003……79
第58図　SI-004……80
第59図　SI-005（1）……81
第60図　SI-005（2）……82
第61図　SI-006……83
第62図　SI-007……84
第63図　SI-008……85
第64図　SI-009……85
第65図　SI-010……86
第66図　SI-011……87
第67図　SI-012……88
第68図　SI-013……89
第69図　SI-014……90
第70図　SI-015……90
第71図　SI-016……91
第72図　SI-017……93
第73図　SI-018……93
第74図　SI-019……94
第75図　SI-020……94
第76図　SI-021（1）・SK-075……95
第77図　SI-021（2）……96
第78図　SI-022……97
第79図　SI-023……98
第80図　SI-024（1）……99
第81図　SI-024（2）……100
第82図　SI-025……101
第83図　SI-026（1）……102
第84図　SI-026（2）……103
第85図　SI-027……104
第86図　SI-028（1）……105
第87図　SI-028（2）……106
第88図　SI-028（3）……107
第89図　SI-028（4）……108
第90図　SI-028（5）……109
第91図　SI-029……110
第92図　SI-030……111
第93図　SI-031……112
第94図　SI-032……113
第95図　SI-033（1）・SK-077……113
第96図　SI-033（2）……114
第97図　SI-034……115
第98図　SI-035……116
第99図　SI-036……117
第100図　SI-037……118
第101図　SI-038……119
第102図　SI-039（1）……120
第103図　SI-039（2）……121
第104図　SI-040……122
第105図　SI-041（1）……123
第106図　SI-041（2）……124
第107図　SI-042……125
第108図　SI-043（1）……126
第109図　SI-043（2）……127
第110図　SI-044……128
第111図　SI-045（1）……129
第112図　SI-046……130
第113図　SI-047……131
第114図　SI-048……132

第115図　SK-070 ……133
第116図　古墳時代　竪穴状遺構（1）……134
第117図　古墳時代　竪穴状遺構（2）……136
第118図　古墳・上壙墓（1）……137
第119図　古墳・土壙墓（2）……138
第120図　古墳時代　掘立柱建物跡（1）……139
第121図　古墳時代　掘立柱建物跡（2）……140
第122図　古墳時代土坑 ……141
第123図　方形周溝状遺構 ……142
第124図　奈良・平安時代　竪穴状遺構 ……143
第125図　奈良・平安時代　土坑 ……144
第126図　SB-003 ……145
第127図　SB-004 ……147
第128図　SB-005 ……148
第129図　SB-006 ……149
第130図　地下式壙 ……150
第131図　野馬土手 ……154
第132図　不明土坑（1）……156
第133図　不明土坑（2）……158
第134図　不明土坑（3）・炉跡 ……160
第135図　遺構外出土遺物 ……163
第136図　砥石（1）……164
第137図　砥石（2）……165
第138図　軽石 ……166
第139図　弥生末～古墳前期遺構配置 ……186
第140図　印旛沼周辺の弥生後期~古墳前期の集落 …189

表　目　次

第1表　遺構検索表 …… 4
第2表　第1地点出土遺物属性 …… 54
第3表　第2地点出土遺物組成 …… 54
第4表　第2地点出土遺物属性 …… 54
第5表　第3地点出土遺物属性 …… 54
第6表　第3地点出土遺物組成 …… 55
第7表　第4・5・6地点出土遺物属性 …… 55
第8表　第4・5・6地点出土遺物組成 …… 56
第9表　第7地点出土遺物属性 …… 57
第10表　第8地点出土遺物属性 …… 57
第11表　第8地点出土遺物組成 …… 57
第12表　第9地点出土遺物属性 …… 57
第13表　第9地点出土遺物組成 …… 58
第14表　第10地点出土遺物属性 …… 58
第15表　第11地点出土遺物属性 …… 58
第16表　第12地点出土遺物属性 …… 58
第17表　第12地点出土遺物組成 …… 58
第18表　第13地点出土遺物属性 …… 58
第19表　第14地点出土遺物属性 …… 58
第20表　第14地点出土遺物組成 …… 59
第21表　第15地点出土遺物属性 …… 59
第22表　第15地点出土遺物組成 …… 59
第23表　第16地点出土遺物属性 …… 60
第24表　第16地点出土遺物組成 …… 60
第25表　地点外及び単独出土遺物属性 …… 60
第26表　縄文土器集計結果 …… 63
第27表　上製品 ……168
第28表　石鏃 ……168
第29表　打製石斧・磨製石斧 ……168
第30表　磨石・石皿類 ……168
第31表　縄文土器 ……169
第32表　古墳時代住居跡 ……171
第33表　上師器・須恵器 ……172
第34表　砥石 ……182
第35表　軽石 ……182
第36表　土製品・石製品 ……182
第37表　鉄製品 ……182
第38表　SK-014鉄滓・鉄塊等 ……182
第39表　文化層と石材 ……184
第40表　古墳時代出土遺物数集計 ……185

図版目次

図版1　松崎Ⅱ遺跡付近航空写真（1）
図版2　松崎Ⅱ遺跡付近航空写真（2）
図版3　第1文化層
図版4　第1・3・4文化層
図版5　第1文化層出土遺物（1）
図版6　第1文化層出土遺物（2）
図版7　第1文化層出土遺物（3）
図版8　第1文化層出土遺物（4）・第2文化層・第3文化層出土遺物
図版9　第4文化層出土遺物
図版10　地点外及び単独出土遺物
図版11　縄文土器1・石鏃1接写
図版12　縄文土器2
図版13　縄文土器3
図版14　縄文土器4
図版15　縄文土器5
図版16　縄文土器6
図版17　縄文土製品・縄文石器1
図版18　縄文石器2
図版19　縄文石器3
図版20　SI-001～003号住居
図版21　SI-004～006号住居
図版22　SI-007～009号住居
図版23　SI-010～012号住居
図版24　SI-013～015号住居
図版25　SI-016～018号住居
図版26　SI-019～021号住居
図版27　SI-022～024号住居
図版28　SI-025～027号住居
図版29　SI-028-A, 028-B, 029号住居
図版30　SI-030～032号住居
図版31　SI-033～036号住居
図版32　SI-037～039号住居
図版33　SI-040～042号住居
図版34　SI-043～045号住居
図版35　SI-046～048号住居
図版36　古墳時代土坑・墳墓（1）
図版37　古墳時代墳墓（2）・ピット群・建物跡，奈良・平安時代墳墓（1）
図版38　奈良・平安時代建物跡・墳墓，中・近世建物跡
図版39　その他の土坑（1）
図版40　その他の土坑（2）
図版41　その他の土坑（3）
図版42　SI-001～003, 005号住居出土土器
図版43　SI-005～007号住居出土土器
図版44　SI-007～012号住居出土土器
図版45　SI-012～016号住居出土土器
図版46　SI-017, 019～021号住居出土土器
図版47　SI-021～022号住居出土土器
図版48　SI-022～025号住居出土土器
図版49　SI-025～026号住居出土土器
図版50　SI-026～027号住居出土土器
図版51　SI-028号住居出土土器
図版52　SI-028号住居出土土器
図版53　SI-028号住居出土土器
図版54　SI-028号住居出土土器
図版55　SI-028～031号住居出土土器
図版56　SI-031～033号住居出土土器
図版57　SI-033～036号住居出土土器
図版58　SI-037号住居出土土器
図版59　SI-037～039号住居出土土器
図版60　SI-039～040号住居出土土器
図版61　SI-040～041号住居出土土器
図版62　SI-042～043号住居出土土器
図版63　SI-043～045号住居出土土器
図版64　SI-045～048号住居出土土器，遺構外出土土器
図版65　砥石接合状態・軽石
図版66　古墳時代石・土製品，鉄器
図版67　炭化種子・SK-014鉄滓

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過

松崎地区内陸工業団地（松崎工業団地）は，都心から約35km，成田空港から約20km，千葉市から約20kmの距離にある千葉ニュータウンの市街地に隣接している。千葉ニュータウンは，北総広域都市圏における中核都市として昭和44年から整備が進められているもので，計画面積約1,900ha，計画人口19万4千人，船橋市・印西市・白井市・本埜村及び印旛村の3市2村にまたがる大きな街である。「住む」「働く」「学ぶ」「憩う」などの各種機能の複合した総合的都市づくりを目指しており，近接地には工場や研究所等の関連施設用地の整備も計画されている。当初，市街地開発区域内には業務系施設の整備が不可能であったが，昭和61年に新住宅市街地開発法の改正によって，区域内にも整備が可能となり，準工業地域の指定が可能となった。千葉県の「ふるさと5か年計画」「千葉県工業振興立地ビジョン」において，松崎工業団地は中核的な工業団地として位置付けられ，千葉県と千葉県企業庁によって整備が進められている。

千葉県企業庁は，周辺の自然・文化・環境等の保護に最大の注意を払い，開発に先立って千葉県教育委員会に対し埋蔵文化財の有無を照会した。これに対し，千葉県教育庁生涯学習部文化課（現文化財課）では，予定地内に存在する埋蔵文化財について，やむを得ず記録保存することとし，遺跡名を松崎遺跡群のⅠから Ⅲ遺跡とした。発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり，平成5年の開始から現在に至るまで，旧石器時代から中・近世にわたる貴重な遺物や遺構が数多く出土している。本書は，この事業の最初の報告書であり，発掘及び整理作業は現在も進行中である。

本書で報告する松崎Ⅱ遺跡の発掘調査は，平成5年9月13日から平成13年4月27日まで，断続的に6年次にわたって実施した。上層については，遺跡規模66,309㎡を対象とし，7,084㎡の確認調査，30,710㎡の本調査を実施した。下層については，1,895㎡の確認調査，2,306㎡の本調査を実施した。調査の結果，旧石器時代の遺物集中地点，弥生時代末期から古墳時代前期の集落，奈良・平安時代の住居跡，中・近世の掘立柱建物跡，野馬土手などを検出した。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織，担当者及び作業内容は，下記のとおりである。

（発掘調査）

カッコ内の番号は第4図の地点を示す。なお，（3）は欠番である。

平成5年度（1）

期　間　平成5年9月13～平成5年9月30日

組　織　印西調査事務所長　田坂　浩

担当者　副所長　及川淳

内　容　上層確認調査　2,050㎡

平成6年度（1）

期　間　平成6年4月5日～平成6年8月31日

組　織　印西調査事務所長　谷　旬

調査担当者　分室長　蕃　淳一，研究員　猪股昭喜

内　容　上層本調査7,900㎡，下層確認調査898㎡

平成７年度（２）

期　間　平成７年４月５日～平成７年７月７日

組　織　印西調査事務所長　谷　旬

担当者　分室長　蕃　淳一，技師　立和名明美

内　容　上層確認調査1,100㎡，下層確認調査409㎡・本調査456㎡

平成11年度（４）

期　間　平成11年８月１日～平成12年３月29日

組　織　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　高橋　覚・井上哲朗，主任技師　石田清彦

内　容　上層確認調査1,200㎡・本調査7,700㎡，下層確認調査500㎡・本調査1,050㎡

平成12年度（５）

期　間　平成12年４月１日～平成12年12月27日

組　織　北部調査事務所長　石田廣美

担当者　主席研究員　池田大助，上席研究員　川端保夫

内　容　上層確認調査2,414㎡・本調査19,200㎡，下層本調査800㎡

平成13年度（６）

期　間　平成13年４月１日～平成13年４月27日

組　織　北部調査事務所長　石田廣美

担当者　北総調査室長　蕃　淳一，上席研究員　川端保夫・木下圭司

内　容　上層確認調査320㎡，下層確認調査88㎡

（整理作業）

平成13年度

期　間　平成13年４月１日～平成14年３月29日

組　織　中央調査事務所長　三浦和信

担当者　主席研究員　高橋博文，副所長　加藤正信，上席研究員　猪股昭喜・鈴木弘幸・大谷弘幸・西野雅人

内　容　記録整理から実測・トレースの一部，原稿の一部

平成14年度

期　間　平成14年４月１日～平成15年３月29日

組　織　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　上席研究員　西野雅人・小笠原永隆

内　容　原稿の一部から報告書刊行

2　調査の方法

調査区の設定　松崎遺跡群全体(Ⅰ～Ⅶ遺跡,第4図)を対象として,公共座標(国家標準直角座標第Ⅸ系)に基づく40m×40mの方眼網を設定し,大グリッドとした。大グリッドは,北西を起点として西から東に向かってA・B・C…,北から南に向かって1・2・3…とした。ただし,数字と紛らわしいI・O・Vは使用しなかった。大グリッド内は4m方眼の小グリッドに分割し,西から東へ00・01・02…,北から南へ00・10・20…とした。したがって,各々の小グリッドは,たとえば2C-50,3G-99などと呼称する(第1図)。

遺構番号　調査時点では1号住・2号住(または001号住・002号住)…という名称を使用した。整理作業の段階で遺構種を示すアルファベットを関した番号に付け替えた。遺構種の一覧を下に示す。ただし,異なる調査年度の間で,一部番号の重複が存在したため,一部で番号自体を変更している。旧番号:新番号の対照は第1表に示した。記録類を含めた資料は可能な限り新番号に修正したが,遺物の注記番号は旧番号のままである。

SA:野馬土手

SB:掘立柱建物跡

SD:溝

SH:ピット群

SI:住居跡

SK:土坑

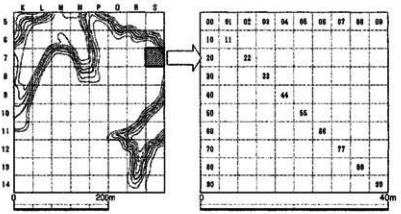
SM:古墳

SS:周溝

上層確認調査　調査対象範囲の10%を限度として確認トレンチを設定した。遺構や遺物集中の検出を目安として本調査の必要な範囲を確定した。

下層確認調査　調査対象範囲に2m×2mの確認グリッドを調査対象面積の4%を限度に設定した。石器が出土した地点について周囲を拡張し,遺物集中の存否と広がりを確認した上で,本調査を要する範囲を判断した(第7図)。

本調査　上層の本調査範囲と検出した遺構の配置を第2図に示す。下層の本調査範囲と検出した石器出土地点を第7図に示す。



第1図　グリッド命名法

第1表　遺構検索表

遺構No.	旧番号	時期	種別	備考	位置
SA-001		近世	馬場土手		12M
SB-001		古墳	掘立柱建物	SH-007内	09R 38
SB-002		古墳	掘立柱建物	SH-003内	09R-61
SB-003		中近世	掘立柱建物	SH-001内	09Q 49
SB-004		中近世	掘立柱建物	SH-006内	10Q-39
SB-005		中近世	掘立柱建物	SH-006内	10Q-46
SB-006		中近世	掘立柱建物	SH-001内	11Q-31
SD-001		中近世	溝		08P
SD-002		中近世	溝		10P
SD-003		中近世	溝		08N
SD-004		中近世	溝		09L
SD-005		中近世	溝		10L
SD-006		中近世	溝		12L
SD-007		中近世	溝		10L
SD-008		中近世	溝		10L
SD-009		中近世	溝		10L
SD-010		中近世	溝		12L
SD-011		中近世	溝		10L
SD-012		中近世	溝		10L
SD-013		中近世	溝		12Q
SD-014		中近世	溝		12Q
SD-015		中近世	溝		12Q
SD-016		中近世	溝		09Q
SD-017		中近世	溝		10Q
SD-018		中近世	溝		10Q
SD-019		中近世	溝		11Q
SD-020		中近世	溝		08Q
SD-021		中近世	溝	台地整形に伴う	12H
SH-001		不明	ピット群		11Q
SH-002		不明	ピット群		09Q
SH-003		古墳	ピット群		09R
SH-004		中近世	ピット群		08Q
SH-005		不明	ピット群		09N
SH-006		中近世	ピット群		10Q
SH-007		古墳	ピット群		09R
SI-001		古墳前期	住居跡	上器集中	09M-56
SI-002		古墳前期	住居跡		10N 10
SI-003		古墳前期	住居跡		09N-83
SI-004		古墳前期	住居跡		12N-23
SI-005		古墳前期	住居跡		11P-07
SI-006		古墳前期	住居跡		09P-03
SI-007		古墳前期	住居跡	土器集中	08P-02
SI-008		古墳前期	住居跡		09P-08
SI-009		古墳前期	住居跡		09N-39
SI-010		古墳前期	住居跡		09P 41
SI-011		古墳前期	住居跡		09P-68
SI-012		古墳前期	住居跡		09P-79
SI-013		古墳前期	住居跡		08Q-11
SI-014		古墳前期	住居跡		08R-20
SI-015		古墳前期	住居跡		08R 76
SI-016		古墳前期	住居跡	土器集中	09S-08
SI-017		古墳前期	住居跡		07Q 80
SI-018		古墳前期	住居跡		07Q-61
SI-019		古墳前期	住居跡		08P-64
SI-020		古墳前期	住居跡		08R-72
SI-021		古墳前期	住居跡		09R-52
SI-022		古墳前期	住居跡	土器集中	09Q-14
SI-023		古墳前期	住居跡		08Q-96
SI-024		古墳前期	住居跡	土器集中	09Q 53
SI-025		古墳前期	住居跡		09R-85
SI-026		古墳前期	住居跡	土器集中	09Q-84
SI-027		古墳前期	住居跡		09R 65
SI-028		古墳前期	住居跡	土器集中	10R-14
SI-029		古墳前期	住居跡		08P-39
SI-030		古墳前期	住居跡		09Q-11
SI-031		古墳前期	住居跡	唯一の掘開	10R-40
SI-032		古墳前期	住居跡		09P-47
SI-033		古墳前期	住居跡		09P-66
SI-034		古墳前期	住居跡		10P-24
SI-035		古墳前期	住居跡		09P 09
SI-036		古墳前期	住居跡		10R-44
SI-037		古墳前期	住居跡		10P 17
SI-038		古墳前期	住居跡		10Q-23
SI-039		古墳前期	住居跡		10Q-87
SI-040		古墳前期	住居跡		10Q-64
SI-041		古墳前期	住居跡		11Q-01
SI-042		古墳前期	住居跡		10P-47
SI-043		古墳前期	住居跡	土器集中	10R 33
SI-044		古墳前期	住居跡		10Q-26
SI-045		古墳前期	住居跡		10Q-58
SI-046		古墳前期	住居跡		10Q-29
SI-047		古墳前期	住居跡	上器集中	09P-96
SI-048		古墳前期	住居跡		10Q 46
SK-001		縄文	土坑		08M-24
SK-002		不明	土坑		08M-85
SK-003		不明	土坑		08M-01
SK-004		不明	土坑		08M-99
SK-005		不明	土坑		08M-29
SK-006		不明	土坑		08M 27
SK-007		不明	土坑		08M-27
SK-008		-	欠番		-
SK-009		不明	土坑		08M-77
SK-010		-	欠番		-
SK-011		不明	土坑		08M-85
SK-012		奈良・平安	土坑	ｱﾜ散布	12N-96
SK-013	小判形土坑1	古墳	土坑	馬形埴輪	08M 93
SK-014	小判形土坑2	古墳	土坑	鶏形埴輪	09N-58
SK-015		古墳	土壙墓		11P-00
SK 016		-	欠番		-
SK-017		-	欠番		-
SK-018		不明	土坑		10N 28
SK-019		不明	土坑		09P-91
SK-020		不明	土坑		08N-91
SK-021		-	欠番		-
SK-022		不明	土坑		08N 94
SK 023～026		-	欠番		-
SK-027		不明	土坑		09L-07
SK-028～031		-	欠番		-
SK-032		不明	土坑		10L-53
SK-033		不明	土坑		09L-59
SK-034-035		-	欠番		-
SK-036	SK-681	不明	土坑		13Q-67
SK-037	SK-682	不明	土坑		13Q-67
SK-038	SK-683	縄文	土坑		13Q-27
SK-039	SK-684	不明	土坑		13R 70
SK-040	SK-685	不明	土坑		13Q-68
SK-041	SK-686	不明	土坑		13N-67
SK-042	SK-687	不明	土坑		13N-41
SK-043	SK-688	不明	土坑		13Q-15
SK-044	1号三坑	古墳	墓穴状遺構		08S 83
SK-045	SK-002	不明	土坑	SH 004内	11Q-50
SK-046	SK-003	不明	土坑	SH-001内	11Q 51
SK-047	SK-004	不明	土坑	SH 001内	11Q-32
SK-048	SK-005	不明	土坑		10Q-92
SK-049	SK 006	不明	土坑		11Q-91
SK-050	SK-7号	不明	炉		10P-38
SK-051～054	SK-008	-	欠番	SH-002の一部	09R 61
SK-055	SK-012	奈良・平安	墓穴状遺構		09R-46
SK-056-057	SK-013	-	欠番	SH-002の一部	09R-72
SK-058	SK-015	不明	土坑		09R-90
SK-059	SK 016	不明	土坑		09N 40
SK-060	SK-017	古墳	墓穴状遺構		10Q-83
SK-061	SK-018	不明	土坑		09Q-97
SK-062	SK 019	不明	土坑		10P-99
SK-063	SK-020	不明	土坑		10P-99
SK-064	SK-021	古墳	土壙墓	小川組系	10Q-99
SK-065	SK-022	不明	土坑		11P 09
SK-066	SK-023	不明	柱穴	SH-001内	11Q-11
SK-067	SK-024	縄文	土坑		10Q-90
SK-068	SK-025	不明	土坑	SH 003内	10P 79
SK-069	SK-026	縄文	陥し穴		09Q-39
SK-070	SK-027	古墳	住居跡		09S-10
SK-071	(2)-SK 001	不明	土坑		12J-95
SK-072	(2)-SK-002	不明	一坑		12J-90
SK-073	(2)-SK-003	中世	地下式壕		11J 73
SK-074	(2)-SK 004	不明	土坑		11J 79
SK-075		不明	土坑		09R-42
SK-076	SI-021 A区	古墳	墓穴状遺構		09R-42
SK-077		不明	土坑		09P-78
SK-078		-	欠番		-
SK-079		不明	土坑		10Q-15
SK-080	SI-049	古墳	墓穴状遺構		09P 94
SM-001	1号周溝墓	古墳	古墳		10P-18
SS-001	1号周溝墓	奈良・平安	方形周溝		13M-04

第２図　上層遺構配置

第2節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と環境

松崎遺跡群の所在する印西市は，千葉県北部に広がる下総台地の北端に位置する。北に利根川，東に印旛沼，西に手賀沼という，水と緑豊かな地域である。松崎Ⅱ遺跡の付近は，印西市松崎字連（さざなみ），字笹目にあたる。最寄り駅は北西3.1kmにある北総公団線千葉ニュータウン中央駅である。この付近の台地は，印旛沼の西端に繋がる新川から入り込んだ大字松崎付近の谷（松崎谷）によって開析されている。遺跡はこの谷の最奥部に面し，北側でもうひとつ西側の大字船尾付近の谷（船尾谷）の最奥部に面している。松崎谷が印旛沼低地に開くあたりは，昭和30年代まで湖沼が存在した。第140図で使用した地形図のように，この地は印旛沼から小河川を若干遡った地点ということができる。台地上の標高は24m～26m，現水田面との比高差は13m～15mほどである。

2　松崎遺跡群と周辺の遺跡

当遺跡群の調査報告のはじめにあたり，遺跡群とその周辺の発掘調査の成果を概観してみたい。カッコ内の遺跡番号は第3図と同じである。周辺遺跡は第3図よりやや広く，第140図の範囲，すなわち印旛沼低地水系の西半分を対象とした。なお，松崎遺跡群については当遺跡以外の成果は整理作業中であり，将来訂正される可能性がある。第4図には遺跡群周辺の微地形と遺跡の区分を示した。

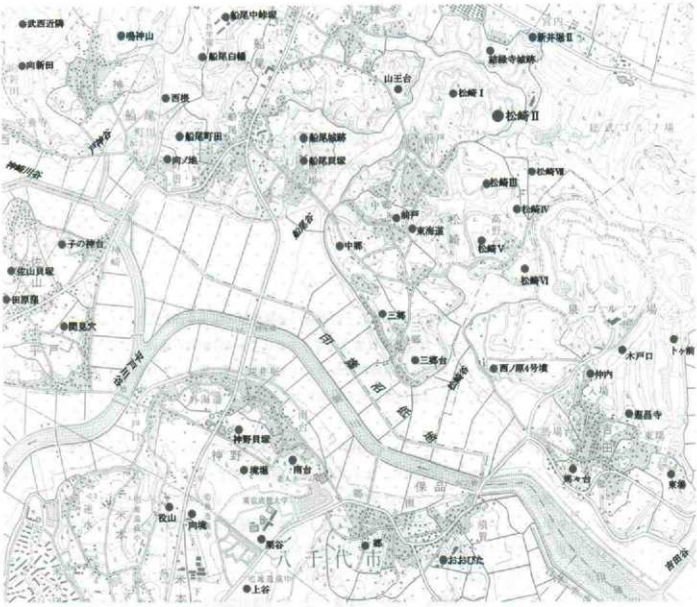
（1）旧石器時代

旧石器時代の石器群は松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ遺跡（1・2・3・4・6）で検出され，複数の文化層が確認されている。合計で40か所ほどの石器群から，ナイフ形石器・削器・剥片・敲石などが見つかっている。Ⅰ遺跡とⅡ遺跡の間の小支谷を挟んで，石器群が集中していた。とくに，Ⅱ遺跡のⅨ層の石器群はいわゆる環状ブロックを形成していた可能性があり，注目される。西側の船尾谷を挟んだ船尾台地上には船尾白幡遺跡（11）がある。Ⅲ層からⅧ層にかけて17か所の石器群を検出しており，Ⅲ層の細石刃ブロックなどがある。台地の南端部の向ノ地遺跡（15）や，さらに西側の台地上にある向新田遺跡（8）でも石器が出土している。東側の谷を挟んだ吉田台地上の馬々台遺跡（27）や印旛沼低地を挟んだ南側台地上の八千代市おおびた遺跡（32）では，有舌尖頭器やナイフ形石器が出土している。印旛沼南岸は旧石器時代の遺跡が少ないが，地図の範囲より南の萱田地区では多数見つかっているので，その傾向は調査例の少なさに起因するものと思われる。萱田地区では坊山遺跡，井戸向遺跡，白幡前遺跡，ヲサル山遺跡で多くの石器群が検出されている。一方，北側の印旛沼低地との分水界付近には，全国的に知られている木刈峠遺跡がある。25か所の石器群，6,200点に及ぶ石器が出土している。また，新山北遺跡では，径60mの環状ブロック群と約1,500点の石器が出土している。

（2）縄文時代

松崎遺跡群では，未調査のⅤ遺跡を除く各遺跡から早期～晩期にわたる遺構・遺物が検出されている。様々な時期の土器がそれほど集中せずに出土する傾向にあるが，Ⅲ遺跡で検出した早期の竪穴住居と炉穴群が注目される。松崎Ⅲ・Ⅵ遺跡の早期撚糸文期・条痕文期の土器群も比較的まとまっている。

周辺をみると，早期後葉・条痕文期の遺跡がまとまっている。炉穴群と貝層をもつ船尾貝塚（16），八千代市岡見穴遺跡（整理作業中）をはじめとして，炉穴群を検出した遺跡は枚挙に暇がない。松崎Ⅲ遺跡で40基以上，平戸台地上地図範囲外の瓜ヶ作遺跡で100基近く，馬々台遺跡（27）で30基以上，トヶ前遺



No	遺跡	旧石器	縄文早	縄文後	弥生～古墳前	古墳中・後	奈良平安	中近世
1	松崎Ⅰ	○			●	○	○	○
2	松崎Ⅱ	○	○		●	○		
3	松崎Ⅲ	○	●					○
4	松崎Ⅳ	○			●		○	
5	松崎Ⅴ						○	
6	松崎Ⅵ	○	○				○	
7	松崎Ⅶ	○					○	
8	向新田				●			○
9	武西近隣							○
10	鳴神山						●	
11	船尾白幡	○	○	○	●	○	●	
12	船尾中峰塚							○
13	西根			●				
14	船尾町田				●	○		
15	向ノ地	○			○	○	○	○
16	船尾貝塚		●					
17	船尾城跡							●
18	山王台				●			
19	龍禅寺城跡							○
20	中郷					○	○	
21	三郷					○		
22	三郷台						○	
23	東海道					○	○	
24	時戸				○	○	○	○
25	西ノ原4号墳					○		
26	仲内					○	○	○
27	馬々台	○	●	○	●		○	
28	東塚				●	○	○	○
29	塩昌寺					○	●	○
30	水戸口	○		○		○	○	
31	トヶ前		●		○		○	
32	おおびた	○		○	●	○	○	
33	郷			○	○		○	
34	上谷						○	
35	紫谷		●		●	○	○	
36	南台					○	○	
37	滝堀		○		○		○	
38	神野貝塚			●				○
39	向塚		○		○		○	
40	牧山		○		○		○	
41	蔵地		○		●	○		
42	子の神台	○	○		○		○	
43	田面窪				●			
44	佐山貝塚			●				

●はおもな集落遺跡

第3図　松崎Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡

跡（31）で50基以上発見されているほか，真木野向山遺跡，新井堀Ⅱ遺跡，船尾白幡遺跡（11），栗谷遺跡（35），境堀遺跡（37），向境遺跡（39），役山遺跡（40）をあげることができる。前期では，黒浜式の集落が地図の範囲外の八千代市中ノ台遺跡，ヲイノ作南遺跡で発見されているが，手賀沼低地周辺に中心があって印旛沼低地周辺には少ない。中期では，松崎遺跡群と同じ台地上に前戸遺跡（24），三郷台遺跡（22），三郷遺跡（21）があり，いずれも加曽利Ｅ式土器が見つかっている。詳細は不明であるが，広範囲にわたって分散的で小規模な居住の痕跡を残しているようである。萱田地区のヲサル山南遺跡では阿玉台期の集落がみつかっている。後・晩期では，戸神谷の低湿地から加曽利Ｂ式土器が大量に発見された西根遺跡（13）が注目される。現在当センターで整理作業を実施している。印旛沼南岸の台地上には佐山貝塚（44）と神野貝塚が存在する。いずれもヤマトシジミ主体の貝層をもつ大規模集落である。

（３）弥生時代から古墳時代前期

松崎遺跡群ではⅠ・Ⅱ・Ⅳ（１・２・４）遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期の集落を検出している。弥生時代末期から古墳時代初頭にまたがる集落が多いため，この区分で記載する。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ遺跡で集落を検出したほか，Ⅰ遺跡では７基の初期方墳（出現期古墳・方形周溝墓）も検出しており，貴重な発見といえる。

印旛沼低地付近を広くみても，弥生中期の遺跡は少ない。周辺で集落が確認されているのは，印旛沼低地を挟んだ南西側台地上に位置する田原窪遺跡（43）くらいであろう。同遺跡は40軒ほどの住居跡を伴う小規模な環濠集落である。

当地域に集落が数多く形成されるのは，弥生後期の後葉である。この時期の集落はきわめて多く，密度が高い。印旛沼周辺の中でも，印旛沼低地西端部から入り込む小谷や，神崎川と平戸川（現新川）河口付近の広い低地に面した台地縁辺に集中がみられる。代表例として，印旛沼低地の北岸においては，松崎遺跡群のほかに山王台遺跡（18），船尾白幡遺跡（11），船尾町田遺跡（14），馬々台遺跡（27），東場遺跡（28），向新田遺跡（８）をあげることができる。南岸では，栗谷遺跡（35），おおびた遺跡（32），萱田遺跡群（とくに権現後＋ヲサル山），南西岸の平戸台地上では道地遺跡（41），子の神台遺跡（42），間見穴遺跡，佐山台遺跡などをあげることができる。未調査の遺跡を考慮すると，この時期の集落は当地域の台地縁辺に連綿と展開した可能性が高い。とくに平戸台地上では，道地遺跡や佐山台遺跡をはじめとして調査されただけでも数百軒の住居跡を検出しており，中心的な集落が存在した可能性がある。

集落の数からみると墳墓はとても少ない。初期方墳は松崎Ⅰ遺跡のほかに，平戸台地の東山久保遺跡，萱田地区のヲサル山遺跡と井戸向遺跡でも見つかっている。いずれも集落内の一角に位置するものである。なお，この時期の様相については，当遺跡の調査・整理の成果を加えて，第３章まとめにおいて再度取り上げてみたい。

（４）古墳時代中・後期

松崎遺跡群では古墳時代中期の遺構を検出していない。周辺でも前期から継続する遺跡があるものの，調査例は少ない。印旛沼南岸の萱田地区北海道遺跡では集落を検出し，石製模造品の工房跡を多数調査した。古墳時代後期の住居跡は松崎Ⅰ遺跡と当遺跡で検出している。周辺では同じ台地上に東海道遺跡（23）・前戸遺跡（24）で集落を調査しており，いずれも当センターで整理作業を実施している。また，未調査であるが三郷遺跡（21），中郷遺跡（20）もこの時期の遺跡とされている。東側の吉田台地上では，遮呂寺遺跡（29）で集落を調査している。西側の船尾台地上には，船尾町田遺跡（14）がある。30m級の

前方後円墳を含む3基の後期古墳が確認されている。そのほか，印旛沼低地西半には群集墳が点在するが，いずれも大きな群を形成せず，大きな古墳を含まないのが特徴である。

（5）奈良・平安時代

松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ遺跡（1・2・3・4・6）で奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。同じ台地上の前戸遺跡（24），東海道遺跡（23）は古墳時代から続く集落である。三郷台遺跡（22），中郷遺跡（20）もこの時代の遺跡とされている。船尾台地上に船尾白幡遺跡（11），鳴神山遺跡（10）という大集落の存在が知られており，前者は船尾郷の拠点的な集落と考えられている。いずれも多数の住居跡，掘立柱建物跡とともに墨書・刻書土器，帯金具をはじめとした大量の遺物が出土している。また，戸神谷の低湿地にある西根遺跡（13）からは，古墳時代～平安時代の水路跡から，多数の木製品が出土している。人形・馬形の形代，丸木杭・梯子・柱材を伴う堰跡などが見つかっている。東側の吉田台地上では遮昌寺遺跡（29），東場遺跡（28）があり，遮昌寺遺跡では93軒の住居跡を検出している。印旛沼低地を挟んだ南岸の台地上には栗谷遺跡（35），境堀遺跡（37），役山遺跡（40），郷遺跡（33），上谷遺跡（34），南台遺跡（36）がある。栗谷遺跡からは住居跡130軒以上，終末期方墳22基などを検出している。

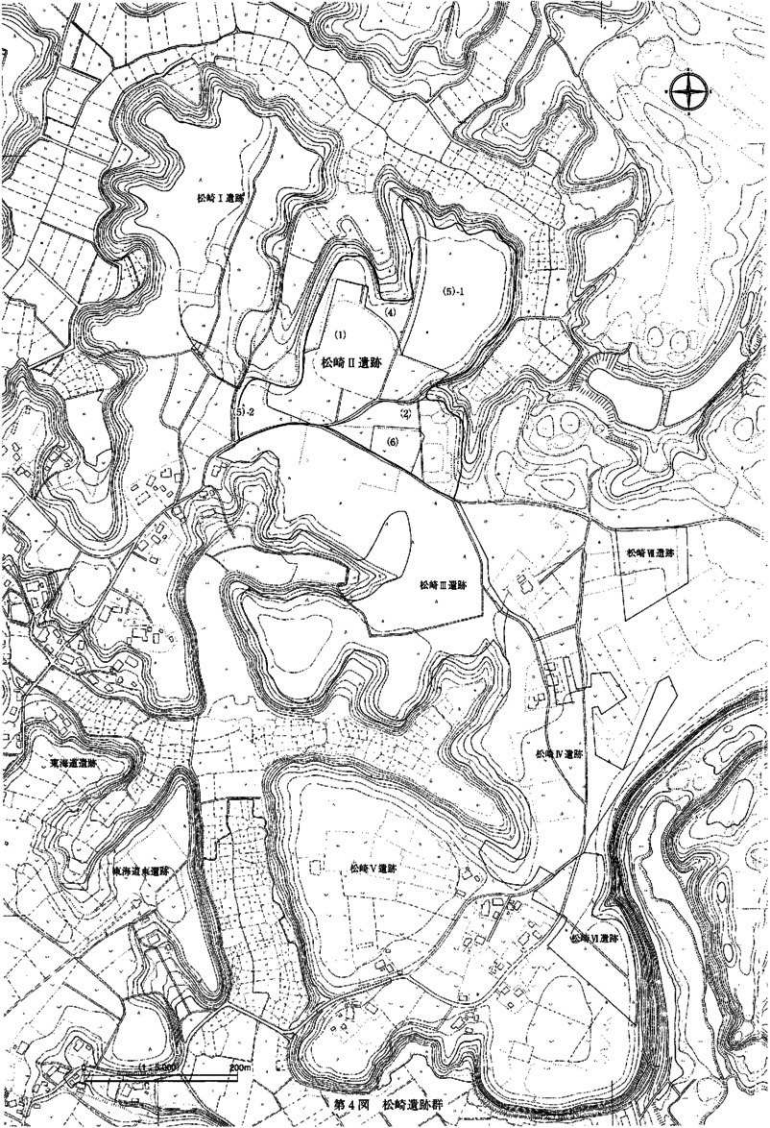
（6）中・近世

当遺跡及び松崎Ⅲ遺跡では中・近世の溝，掘立建柱建物群，野馬土手，土壙墓群などを検出している。松崎Ⅲ遺跡は台地整形区画3か所を伴う村落跡である。印西牧と，「寛文朱印留」や「元禄郷帳」にみえる松崎村の一部を調査したものであろう。同時代の周辺遺跡では，土塁・空壕とともに中世陶磁器類が多数出土した船尾城跡（17）がある。白井城に付属する城あるいは砦とされている。そのほか，中世板碑を出土した船尾中峠塚（12），江戸中期頃の供養塔や庚申塔を伴う結縁寺塚群，近世庚申塔列や土手・溝・道路を検出した向新田遺跡（9，武西近隣遺跡），中世土壙墓，天目茶碗・水甕等が出土した仲内遺跡（26），塚3基を検出した神野貝塚（38）内の塚群がある。

参考文献（第3章の参照文献も含む）

印旛郡市文化財センター　1992　『トヤ前遺跡発掘報告書』
印旛郡市文化財センター　『印旛郡市文化財センター年報』昭和62年度～平成5年度
印旛村教育委員会　1980　『吉田馬々台遺跡縄文早期炉穴址群の調査』
印旛村教育委員会　1988　『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』
大野康男　1991　「八千代市白幡前遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―」千葉県文化財センター
おおびた遺跡調査団　1975　『おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設地内遺跡』
小高春雄　1995　「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『研究紀要16』千葉県文化財センター
加藤修司他　1984　『八千代市権現後遺跡』千葉県文化財センター
阪田正一・藤岡孝司　1986　『八千代市ヲサル山遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―』千葉県文化財センター
佐藤克己　1978　『船尾城遺跡』八千代市遺跡調査会
佐藤克己他　1980　『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会
都淳一　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―八千代市島田込ノ内遺跡―』千葉県文化財センター
鈴木道之助　1975　「木苅峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』千葉県都市公社

千葉県教育委員会　1997　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛・印旛地区（改訂版）－』
千葉県教育委員会　1990　『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』
千葉県教育委員会　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和47～53・59・62・63年度，平成元～６年度
千葉県文化財センター　『財団法人千葉県文化財センター年報』昭和50・55年度，平成５～12年度
千葉県文化財センター　『房総考古学ライブラリー４　弥生時代』
千葉県文化財センター　『房総考古学ライブラリー６　古墳時代(２)』
野村幸希・古内茂　1976　「船尾白幡遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ」千葉県文化財センター
藤岡孝司　1986　「印旛沼南部地域における後期弥生時代集落の一形態―八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析―」『研究紀要10』千葉県文化財センター
藤岡孝司　1986　『八千代市井戸向遺跡』千葉県文化財センター
藤岡孝司　1987　『八千代市白幡前遺跡』千葉県文化財センター
藤原　均他　1984　『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会
古内　茂　1984　「船尾町田遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅶ」千葉県文化財センター
八千代市史料編纂委員会　1974　「八千代の歴史」『八千代市史』
八千代市教育委員会　1988　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和62年度』
八千代市教育委員会　1995　『市内遺跡発掘調査報告　平成７年度』
八千代市教育委員会　『八千代市埋蔵文化財発掘調査年報』平成６・７年度
八千代市教育委員会　1987　『八千代市埋蔵文化発掘調査報告書』
八千代市教育委員会　1994　『八千代市埋蔵文化財調査年報』
蕨　茂美　2001　『栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会


松崎Ⅰ遺跡
(5)-1
(4)
(1)
松崎Ⅱ遺跡
(5)-2
(2)
(6)
松崎Ⅶ遺跡
松崎Ⅲ遺跡
松崎Ⅳ遺跡
東海道遺跡
東海道水遺跡
松崎Ⅴ遺跡
松崎Ⅵ遺跡
1:5000
200m

第4図　松崎遺跡群

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　概要

今回の調査で発見した遺構・遺物の時代は，旧石器時代から中・近世に及んでいる。旧石器時代・第２黒色帯下部の石器群や，弥生時代末期から古墳時代の集落をはじめに，多くの成果を得た。出土した遺構と遺物は巻末の抄録に記載したとおりである。掲載は時代順としたが，旧石器時代以外の遺構・遺物属性表は54ページ以下に付表としてまとめた。

第２節　旧石器時代

１　概観（第５・６図）

当遺跡における旧石器関係の調査は調査区全域の66,000㎡余を対象とし，上層での遺構確認調査と同時並行に実施した。原則として40mの大グリッドに２mの小グリッドを設定し（第６図），それぞれを立川ローム層下部に位置する暗色帯及びその下層までを確認するような方法で調査を実施した。その結果，16地点において石器群が検出され，その総数は254点を数えた。出土層位は第Ⅲ層のソフトローム層から第Ⅸ層の暗色帯にまで認められ，その層序から大きく４期にわたる活動の痕跡が確認された。地形的にみると，北に向かって延びる台地の浸蝕部，いわば谷頭部付近に集中的に検出できた。とりわけ第Ⅸ層の暗色帯下部から検出された石器群（第４・５・６地点）は大きな広がりを有しており，ほぼ同時期の所産として捉えられた。さらに調査区の南東隅に検出された石器群は近接して位置し，北東方向から入り込む谷頭部にあたり第Ⅲ層出土石器群の主要な部分を構成していた。だが，この14・15・16地点出土の石器群は，いわゆるソフトローム層からの出土であり原位置を保持しているものかどうかは若干疑問が残る。また，第８地点とした周辺では縄文期の包含層が存在し調査をすすめたが，縄文期の遺物取り上げ後に若干の石器が出土した。さらに下層へと調査を継続したが，数点の出土にとどまった。

２　層序

次に堆積土について触れておく。当遺跡の場合も下総台地で見られるような平均的な堆積を示しており，後述する第１文化層，第４～６地点の南側においての堆積層を基本土層（第７図）として図示した。さらに南北方向に５か所の堆積土確認のためのグリッドを設定した。台地中央の層序はほぼ標準的な堆積を示すが，傾斜部に至ると第Ⅴ層のＡＴが比較的よく確認できた。一方，北辺では風化によるものか第Ⅸ層の暗色帯より上層については明確な分層をなし得なかった。さらに暗色帯内の間層は台地中央部にその存在がよく表れていた。各層の概略を記すと以下のようになる。

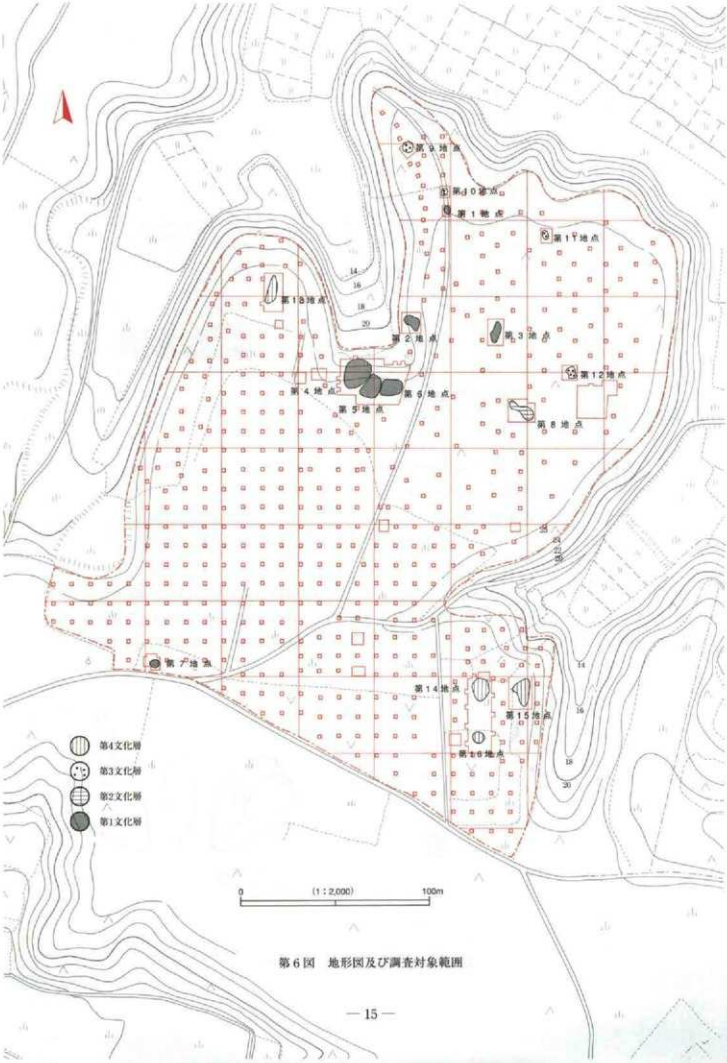
第Ⅰ層　　表土（耕作土）。

第Ⅱ層-a　黒褐色土，a・bともに縄文期の遺物包含層。

第Ⅱ層-b　黒褐色土，テフラが斑状に認められる。

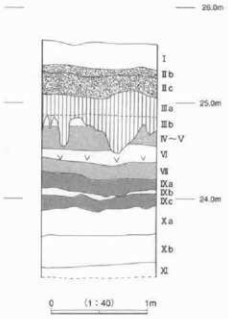
第Ⅲ層-a　黄褐色土，いわゆるソフトロームでb層と比較するとやや明るい。

第５図　遺跡土層断面図



第6図　地形図及び調査対象範囲

第Ⅲ層-b　黄褐色土，Ⅲ層下部を形成し，Ⅵ層にまで達する。
第Ⅳ層　褐色土，一部に存在し，Ⅴ層よりやや明るい。
第Ⅴ層　褐色土，暗色帯にあたる部分であるが，明確に認識はできない。
第Ⅵ層　明褐色土，本層下部ではＡＴの混入が確認された。
第Ⅶ層　暗褐色土，暗色帯への漸移層であり，下部では黒色味が増す。
第Ⅷ層　----------
第Ⅸ層-a　黒褐色土，暗色帯の上部を構成する。
第Ⅸ層-b　黒褐色土，僅かな間層として存在し，上下と比較し，明るい色調を示す。
第Ⅸ層-c　黒褐色土，暗色帯の下部で赤色スコリアを含む。
第Ⅹ層-a　褐色土，粘性を有する立川ローム最下層。
第Ⅹ層-b　褐色土，色調的にはやや明るい。
第ⅩⅠ層　武蔵野ローム。

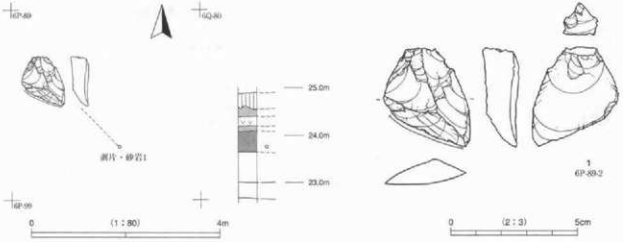


第７図　基本土層図

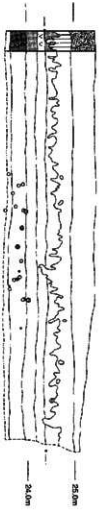
3　第１文化層

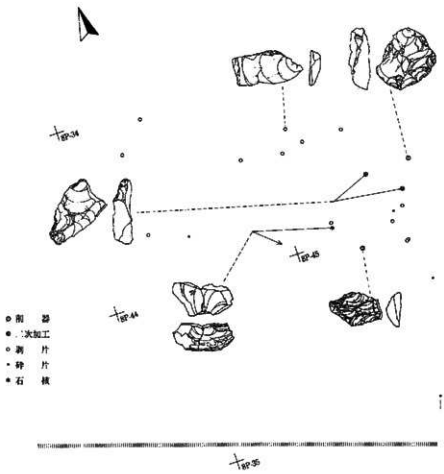
本文化層に該当する出土地点は第１～７地点となり，その中心を占めるものが第４～６地点となる。出土層位は概ね暗色帯下部が主体となっているが，上半部にまで及ぶ石器群も存在した。また少量の出土しか認められず，単独出土として扱える場合もあるが，調査の上で地点別出土として処理したため敢えてここではそのまま記述しておくこととする。

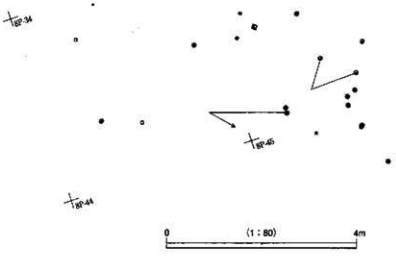
第１地点（第８図，第２表）



第８図　第１地点遺物分布・出土遺物







安山岩1
安山岩2
流紋岩1
黒曜石1
珪質頁岩1
チャート2
瑪　瑙1
瑪　瑙2
瑪　瑙3

第9図　第2地点遺物分布

出土状況　6P－89区で確認調査時に1点だけ出土した。その後，調査区を拡張したが本資料の1点だけにとどまった。

出土遺物（図版5）　砂岩製の分厚い剥片で，表面には様々な方向から剥離した痕跡が認められる。下端には僅かながら刃こぼれがあり，石器として使用していたことが窺える。

第2地点（第9・10図，第3・4表，図版3・4）

出土状況　8P－35区を中心に分布し，8P－34・45・55区に及び，総計22点を数えた。出土層位は暗色帯下半部で30～40cmの高低差を有し，径約5mの小範囲の中で検出された。ただ図示（第10図－6）したように8Q－45区出土の遺物と接合したため興味ある事実を提供した地点といえよう。

出土遺物（図版5）　総数22点の出土遺物で構成されていた。欠番は自然石あるいは混入品であり，整理作業の段階で除外した（以下，欠番は同様な扱いとする）。主な石器を図示したが，ここでは定形的な石器は少なく，砕片の類が多い。

削器（2・5）　強いていえば2と5が削器にあたろう。いずれも裏面右下に粗雑な剥離で刃部を作出している。

二次加工剥片（3・4・6）　3は右側側縁を上下方向から剥離し石器としており，二次加工剥片と分類したものの機能的には削器に近いものと想定される。4は横長の剥片で打面部に若干の剥離が認められるが石核から剥離するときにできたものであろう。6は残核と考えられるが一部に調整痕のような微細な剥離が認められるため，これも石器として使用していたものと推測できる。

石材　石器として使用された石材についてみると，2・3・6は瑪瑙，4が安山岩，5が黒曜石で気泡，不純物が多く含有している。その他剥片・砕片については17点あるが，14点は長さ2cm未満で砕片に近いが，本報告では概略1cm未満のものについて砕片として分類した。

剥片・砕片の類を含めた石材について観察すると，出土した22点のうち瑪瑙が14点，安山岩3点，黒曜石・流紋岩・チャート・珪質頁岩・ホルンフェルス各1点で構成され，瑪瑙が卓越していた。瑪瑙だけを取り上げてみると2・3は色調，残された自然面などから同一母岩から剥離したものと認識できた。このような視点から14点の瑪瑙は3個体以上の母岩から剥離されていた。

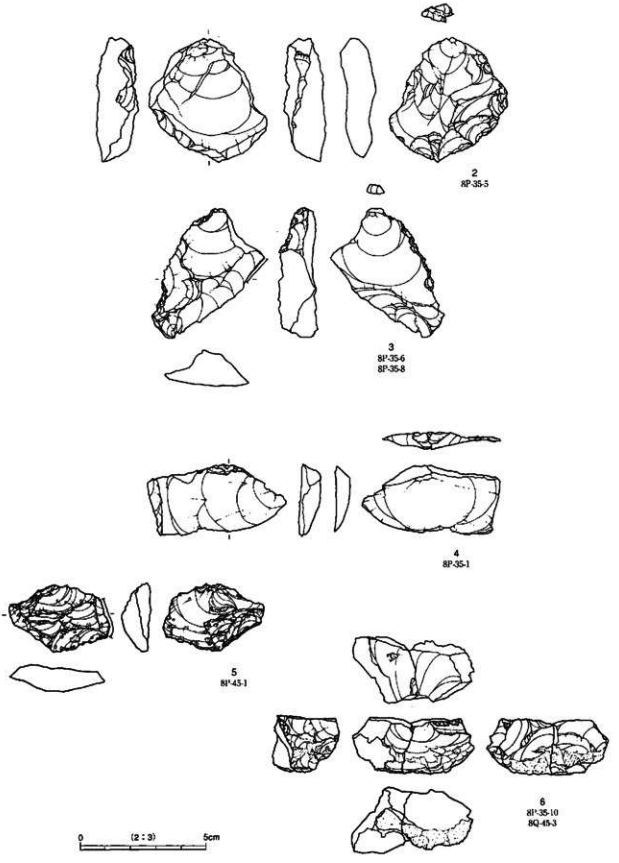
第3地点（第11・12図，第5・6表）

出土状況　8Q－45区を中心に南北方向に長く包含されていた。確認調査時に8Q－56区において剥片の出土が確認されたため順次調査区を拡張していった。その結果，出土総数は23点にのぼり，出土層位は暗色帯上半部のものが多かった。しかし第2地点との接合関係から同時期の所産として捉えた。

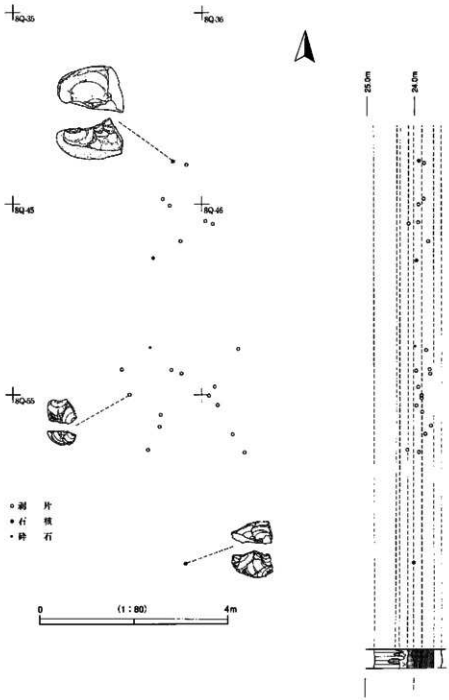
出土遺物（図版5）　本地点では明確な成品は検出されなかったため，残核を主に図示した。

石核（7～9）　7は表面に自然面を残すものの風化が著しい。打面調整をしながら横長の大形剥片を剥取した痕跡を残す。8は残核に近い部分と思われる。剥離も多方向に認められる。9は明らかに残核で，剥離面から観察すると剥離は3方向に認められる。

石材　出土した23点の内訳は，瑪瑙・玉随が12点，ホルンフェルス6点，珪質頁岩・安山岩各2点，流紋岩1点となる。このうち，石核の7は安山岩，8は珪質頁岩，9は瑪瑙である。ここでも瑪瑙が中心を占めており，第2地点出土の瑪瑙と同一母岩から剥離されたと思われる剥片も存在した。ここで玉随と分類した剥片は明らかに同一母岩から剥離したもので乳白色を呈した半透明で砂岩質や頁岩質の石材が付着していた。その他，ホルンフェルスの6点も色調や剥離方法が共通しており，同一母岩と看做された。



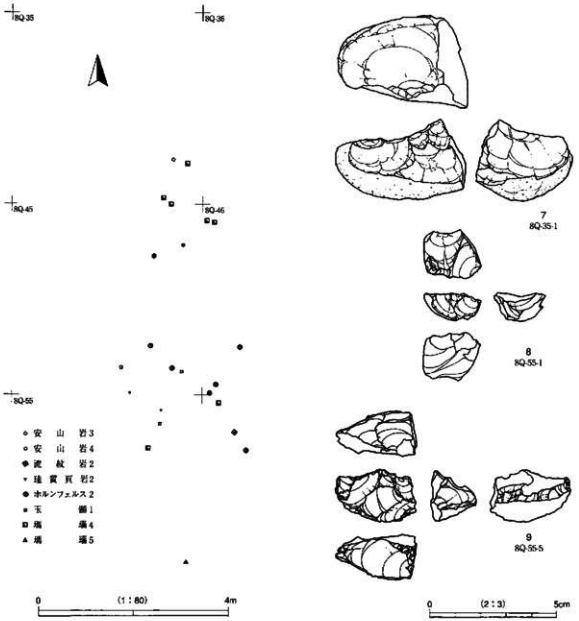
第10図　第２地点出土遺物



第11図　第３地点器種別分布

第４・５・６地点（第13～20図，第７・８表，図版３）

調査状況　本地点は遺跡の北側先端を抉り込むように形成された小支谷の南において集中的に検出された石器群である。確認調査時に３か所のグリッドで検出されたため，それぞれ別地点と認識しつつ調査を続行した。このため結果的には３地点として捉えたことになるが調査が進捗するに及び出土層位，石材等から同一時期の活動痕跡と把握できる状況となった。しかも整理作業においては接合の状況なども踏まえ一層同時期の所産として認識しつつ作業を遂行した。このため本報告では４～６地点として一括で記載していくこととする。



第12図　第３地点母岩別分布・出土遺物

出土状況　本地点では斜面部に接しているわりにはほぼ第Ⅸ層とした暗色帯に包含される。その事実から判断すると当時の生活面は比較的よく保たれていたと考えてよいであろう。出土総数は114点を数え，とりわけ集中する場所は第４地点（第13図）とした部分でここからは局部磨製石斧も出土している。これらの石器群を層位図に透写してみると暗色帯下部に70～80%が集中する。次に母岩をもとにした接合資料を観察すると，第４地点と第５地点，第４地点と第６地点での接合関係が確認された。このことからも相互の関連は明確であり，第１文化層の中心を構成していた場所といえよう。

出土遺物（図版6・7・8）　総数114点で構成される石器群は成品もまた多い。局部磨製石斧2点をはじめ削器4点，石錐，楔形石器，台形石器など豊富な器種を有する。また二次加工剥片とした石器はその形態から削器の範疇に入れることも可能な石器であり，間接生産具の目立つ石器群と位置づけられよう。

局部磨製石斧（16・17）　2点はともに暗色帯最下部から出土している。16は表裏面とも風化が著しく明確な磨製部分は認められない。横幅は上下ほぼ6～6.5cmで一定し，頭部が特定できないような形態を示す。おそらく上下ともに刃部としていたものであろう。石材は軟質のホルンフェルスであり，硬質材料の加工には適さない石材であり，用途としてはむしろ土掘り具の類が考えられよう。17はかなり大きな原石を用いたものであろう。偏平な表面部分を薄くかつ大きく剥離し，刃部を除き周囲を軽く整形した横長剥片を素材としている。刃部はその周辺のみ薄く鋭利に作出され，丁寧に研磨が施された見事な石斧である。しかも刃こぼれ痕が認められず，石材にはやや軟質のホルンフェルスを使用しているため分割・折断のための用途を想起させる。

削器（11・12c・13・18）　削器として分類できる石器は4点出土した。11は自然面を残す縦長剥片の主剥離面を左右から二次剥離を施し，きれいに整形し石器としている。出土地点からみると，折れて廃棄されたものと考えられた。12cは接合資料で図示したように6点の剥片が接合できた。12cは4点で構成された左側縁を粗雑な剥離により石器としている。4点の分割は意識的なものか使用の結果によるものか判然としない。13も自然面を残す。一次剥離の結果できた湾曲した鋭利な面を刃部とし，僅かな調整剥離により石器に仕上げている。18は表面の右側縁中央部を粗雑な剥離で整形し削器としている。裏面での二次剥離は認められない。使用石材は11が安山岩，12cが珪質頁岩，13・18が瑪瑙。

台形様石器（10）　基部に近い左側面に整形のための剥離が認められるため，台形様石器とした。作りは雑であるが刃部となる裏面先端には著しい調整痕を施している。基部には自然面が残る。石材には珪質頁岩を使用。

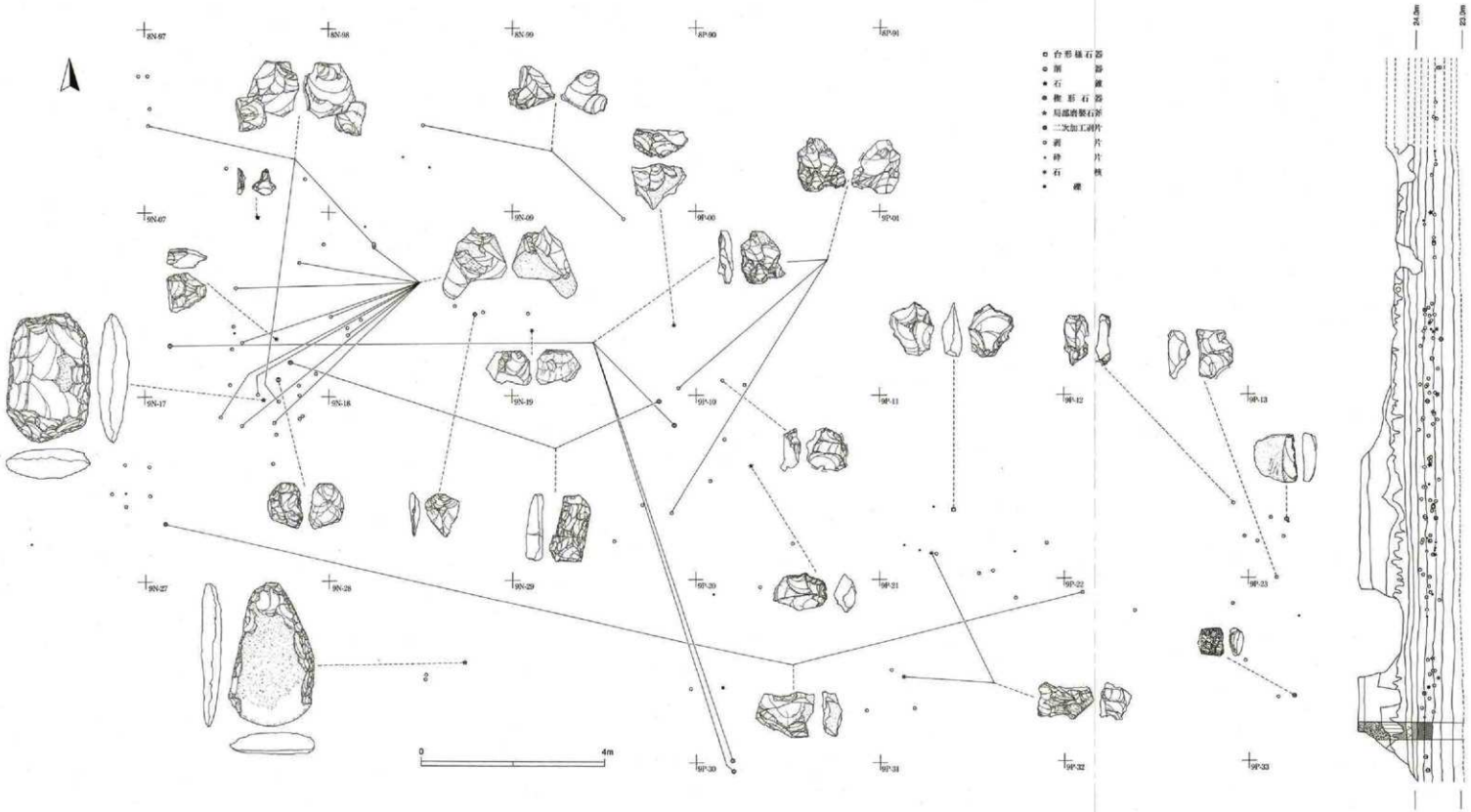
石錐（14・25）　14は錐のような先端部を有するが加工は施されていない。側縁に調整痕が認められるため石器としての使用は十分考えられる。ここでは石錐の可能性もあるということでここに含めた。25は自然面を多く残しており，打面部も認められるところから残核を利用して錐にしたものであろう。錐の先端部を作出するための剥離は左右から丁寧に施されている。断面三角のきれいな錐といえよう。石材は14が瑪瑙，25が珪質頁岩である。

楔形石器（15）　黒曜石製で断面は三角形に近い。右側面は折断したような痕跡をもつ。裏面では刃部のみに調整痕が認められる。表面はほぼ全面にわたり整形の溜めの剥離が施されている。

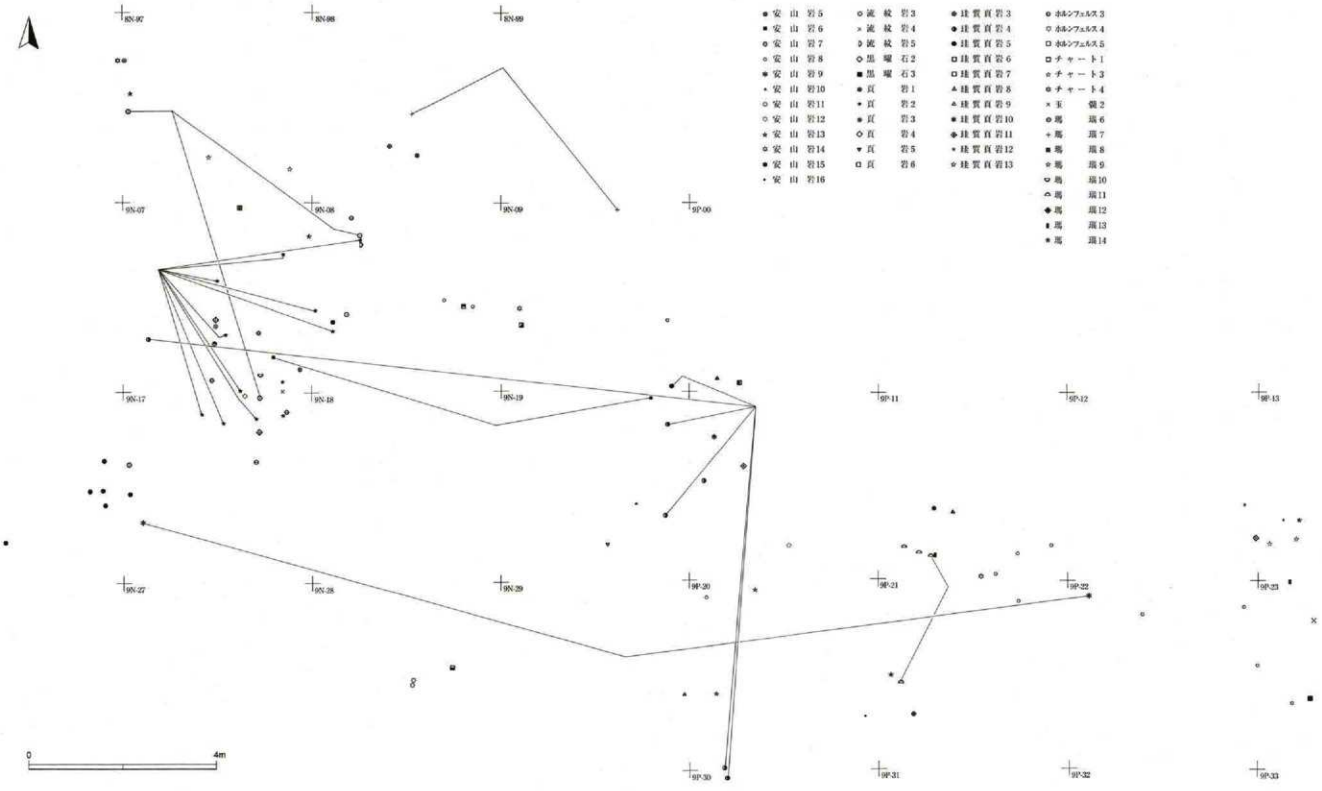
二次加工剥片（19・28a）　19は薄く三角形に近い剥片で，主要剥離面の打点部左に剥離痕が認められる。用途としてはスクレイパーの類となろうが定形石器とはいいがたいく加工剥片とした。石材は珪質頁岩。28aは約20m離れた資料が接合したもので打面に沿って2回の剥離が認められる。剥片剥離時のものとも考えられる。石材は安山岩。

使用痕剥片（20・21・22・29c）　使用痕あるいは微細な調整痕の施されるものを使用痕剥片とした。20は珪質頁岩製で主剥離面右上に微細な使用痕が認められる。21は打面再生による剥片となろう。薄くなった右側縁に微細な調整痕が認められる。石材は珪質頁岩。22は瑪瑙製の分厚い剥片で下半湾曲部に沿って刃こぼれ痕が残る。29cは第4地点内で3点が接合したうちの1点で主剥離面左側縁に使用痕が残る。鋭いエッジを刃部にしている。石材は瑪瑙。

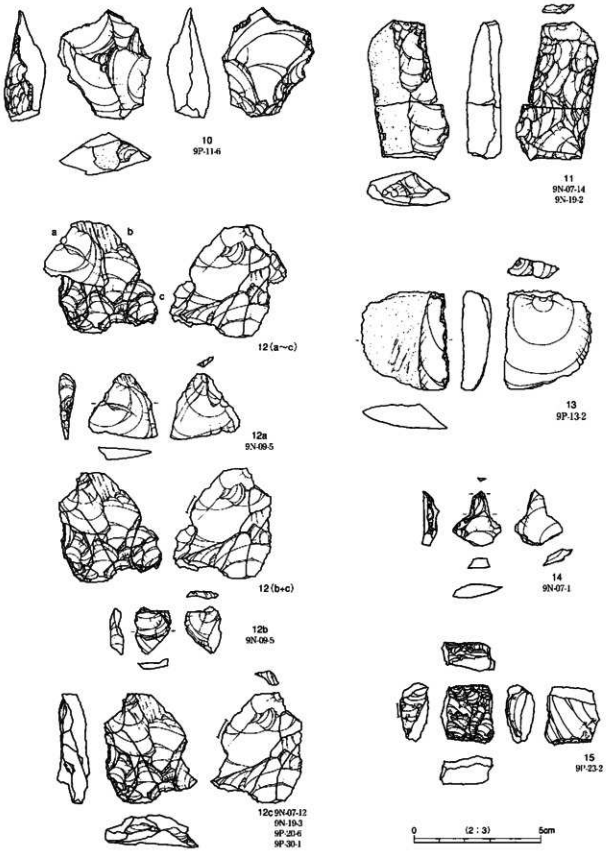
接合資料(11・12・27・28・29・30・31) 12は接合剥片や12cから複数の打面が設定されていたことが理解できる。27は残核となろうが，剥離に一定の方向性はなく，平坦部を打面とし数方向からの剥離が認められる。分割は



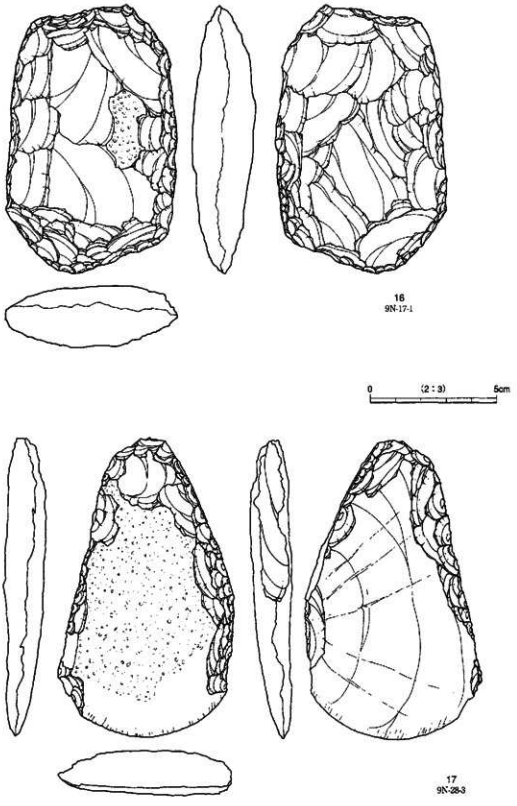
第13図　第4・5・6地点器種別分布



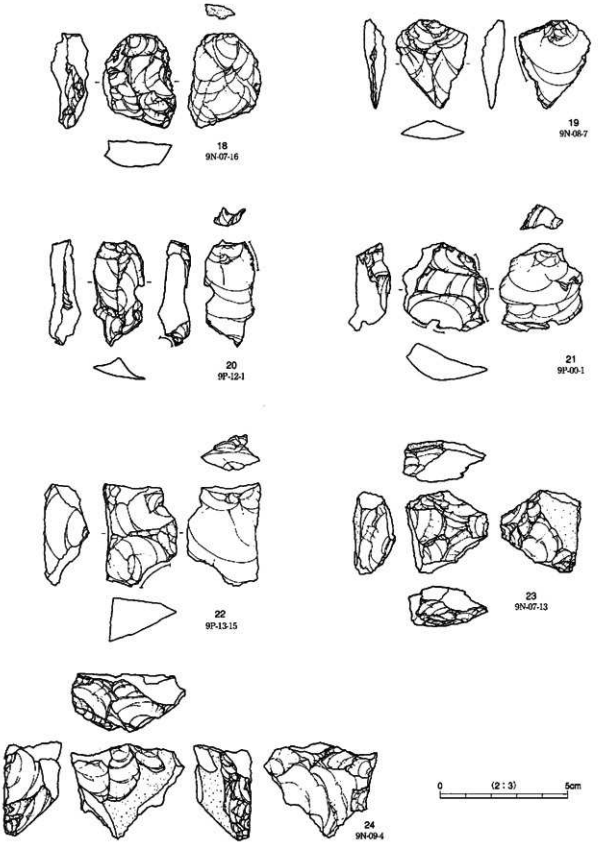
第14図　第4・5・6地点母岩別分布



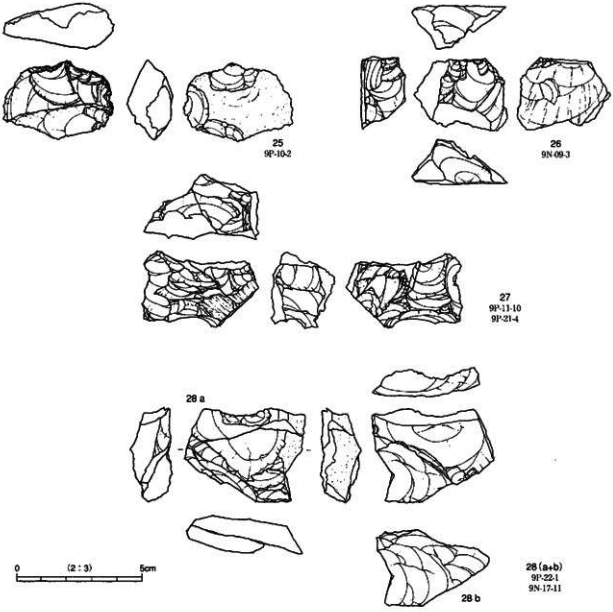
第15図　第4・5・6地点出土遺物（1）



第16図　第4・5・6地点出土遺物（2）



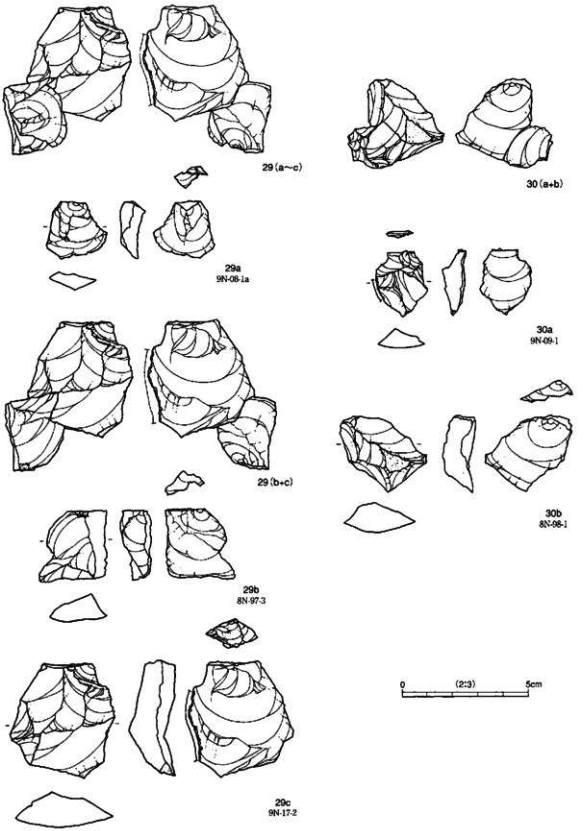
第17図　第4・5・6地点出土遺物（3）



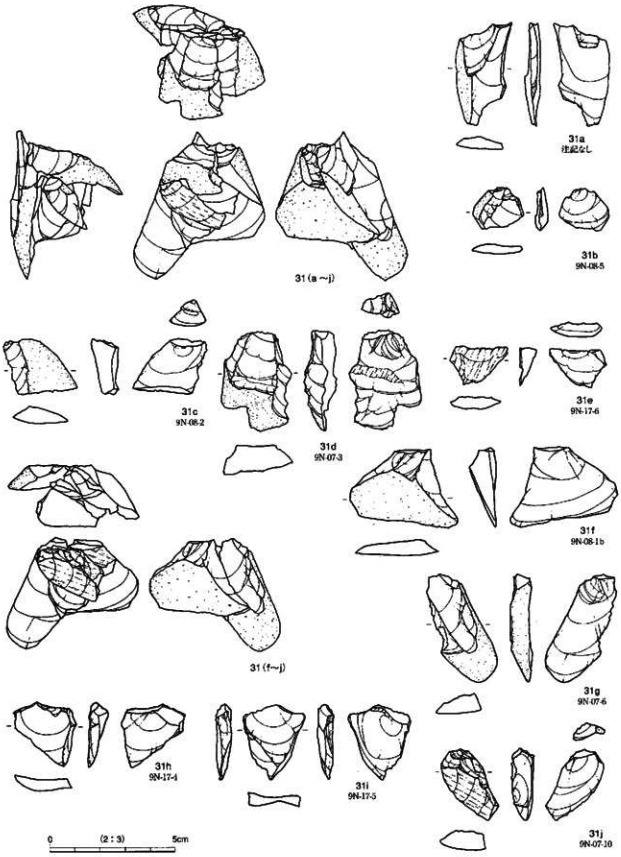
第18図　第4・5・6地点出土遺物（4）

打面再生のためであろうか，分割後も表面中央で数回の剥離痕が認められる。29・30も接合剥片をみる限り異なる方向から剥片が剥離されており，最終的には形状にとらわれることなく剥離していたように思われた。いずれも石材は瑪瑙。31は剥片10点が接合した貴重な例である。石材も頁岩で見分け易い。原石は拳大よりも大きいものと考えられた。残された形状から推察すると31の上面を軽く剥離し打面を設定，打面調整を加えながら数枚剥離した後，2回の剥離（31c·31d）により打面再生を施し，6枚の剥片を剥離している。本資料での剥片はほぼ一定の方向で剥取されており石器の素材となるべく大形剥片も存在する。しかし成品といえる石器は含まれていない。

石核（23.24.26.27）　本地点出土の資料は全て残核であり，概ね多方向からの剥離痕を残す。とりわけ23は一部に自然面を残すものの小剥片に至るまで剥取している。24も自然面が残る。打面には数回の調整剥離が施される。下端部両側面には粗雑ではあるが二次剥離が施され，掻器として使用された可能性も否定できない。いずれも安山岩。26は珪質頁岩製で打面調整は認められない。表面の節理面からも剥取さ



第19図　第4・5・6地点出土遺物（5）



第20図　第4・5・6地点出土遺物（6）

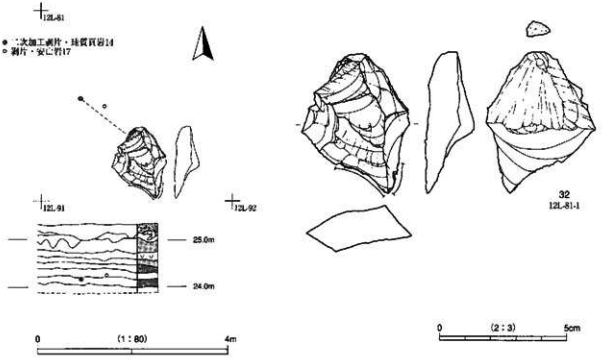
れている。

石材　これまで述べてきたように定形石器以外の成品も含め石器として利用されている石材の内訳は，珪質頁岩６点，瑪瑙５点，ホルンフェルス２点，安山岩１点，黒曜石１点，頁岩１点となる。さらに残された石核は安山岩２点，瑪瑙１点，珪質頁岩１点となり，ほぼ石器群の構成と共通する。また肉眼で識別できる範囲において母岩の個体別資料の確認をしてみた（第８表）。ここでも安山岩12点，珪質頁岩11点，瑪瑙９点となり，この３石材が卓越した構成比率を有する。次いで頁岩，チャート，ホルンフェルスとなり黒曜石は僅少でしかない。むろんこの傾向は剥片・砕片を含めた石材構成にも反映されており，第４～６地点での石材は主に安山岩・瑪瑙・珪質頁岩と局部磨製石斧の素材であるホルンフェルスによって賄われていたと考えてよいであろう。

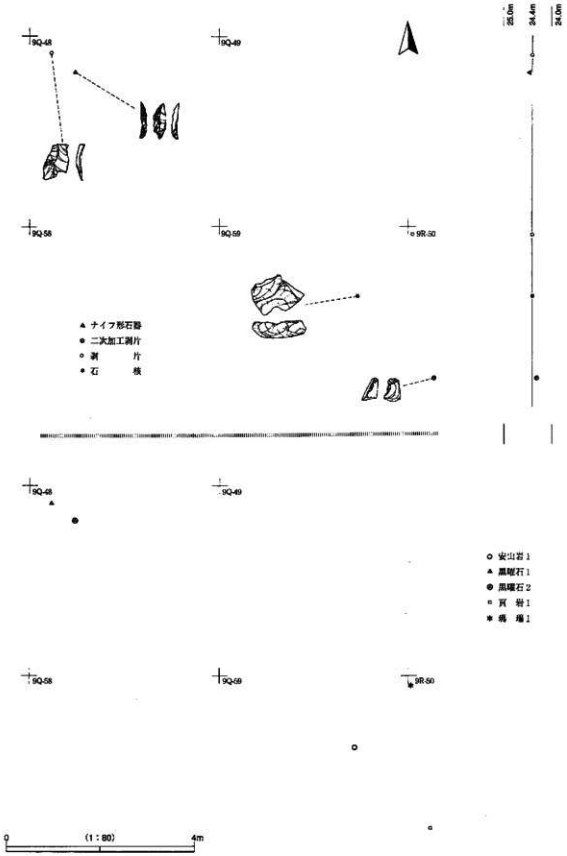
第７地点（第21図，第９表）

出土状況　12L-81区において暗色帯下部より2点の石器が出土した。その後周辺を拡張したが関連する石器は検出されなかった。このため前述した石器群との関係は資料が僅少のため比較・検討までには至らなかった。

出土遺物（図版７）　図示は１点だけにとどめた。珪質頁岩製の大形剥片で褐色を呈した節理面は鮮やかな色彩を帯びる。下端では僅かに調整剥離痕を観察できた。石器として使用していたことは疑いない。他の１点は白く風化した安山岩製の剥片であった。



第21図　第７地点遺物分布・出土遺物



第22図　第８地点遺物分布

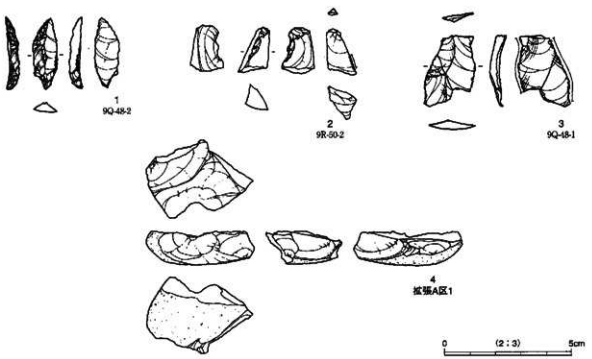
4　第２文化層

本文化層に該当する石器群は第８地点のみであり多くは語れない。遺物の出土層位も第Ⅶ層とした暗色帯への漸移層部分であり，しっかりした層序とはいいがたい。だが，出土したナイフ形石器についてみると前述した文化層よりも後出のものとみるのが妥当であろう。

第８地点（第22・23図，第10・11表）

出土状況　本石器群では９Q-48区において確認調査時に２点の石器が検出され，その後調査区を拡張した結果，合計5点の石器が出土した。調査は図示した範囲よりも広くなっているが作図の都合上，余白は略している。出土層位は第Ⅶ層の暗色帯への漸移層部分にあたり，標高は24.4m前後を示す。本地点に隣接して存在する第３地点の石器群と比較するとほぼ40～50cm上部で検出されており，明らかに第１文化層よりも後出の石器群であると認められた。

出土遺物（図版８）　５点のみの出土で砕片となるような小剥片は存在しない。１は黒曜石製で縦長の剥片を素材としたナイフ形石器で茎部を抉るように整形している。表面左側に背面加工を施し，小形のナイフに仕上げている。石質は良好で，気泡等もなく透明質の中に線状の黒色帯が入る。２は頁岩製の剥片で，下部は折断により欠損している。残存部には２～３回の二次剥離が認められるため石器としての可能性も残る。３は透明な黒曜石の薄い剥片で左右の側縁に使用による刃こぼれ痕が認められる。４は自然面の認められる分厚い剥片で，主剥離面を打面とした剥片剥離もおこなわれており，残核とも考えられる。石材は安山岩。他に図示しなかったが淡い乳白色を呈した剥片が１点出土した。瑪瑙又は玉髄となろうが，第１文化層出土の石質とは明らかに異なる色彩をもつ。



第23図　第８地点出土遺物

5　第３文化層

本文化層と認定した石器群は第９～12地点の４地点である。北方向に延びる台地の縁辺部において検出された，いずれも小規模な地点である。出土層序は第Ⅳ～Ⅵ層でいわゆるハードローム層が石器の包含層となっており斜面部にかかる部分ではより上層からの出土となるようである。

第９地点（第24・25図，第12・13表，図版４）

出土状況　本地点は調査区の北端に位置する。北西方向に尾根状に延びる台地に沿って確認グリッドを設定したところ６P-04区から剥片が検出された。その後，周辺部を拡張したが８点だけの出土にとどまった。しかも西に傾斜する地形のなかで検出されたため第Ⅲ層からの出土や倒木痕による攪乱層から出土した石器（第25図２）もあり，総じて出土状況は芳しくない。

出土遺物（図版８）　図示した石器以外は砕片に近い小剥片であった。８点とも安山岩で同一母岩から剥離されたとおもわれる剥片が7点あった。１は下半部が欠損しており右側面に二次剥離痕が認められる。使用中に破損したものであろうか。２はやや大きめの剥片であるが加工はなされていない。

第10地点（第26図，第14表）

出土状況　本地点は第９地点の東南に隣接して位置し，確認調査時に６P-69区から図示した２点が出土した。それに伴い周辺を若干拡張して調査を継続したが出土は２点のみにとどまった。出土層位は第Ⅴ～Ⅵ層であり，包含層を特定するには少ないすぎる遺物量といえよう。

出土遺物（図版８）　出土した2点を図示した。３は形状としてはナイフ形石器を想起させるが整形は基部左側のみで刃部の作出や背面加工が欠如している。背面部は鋭いエッジを利用していたらしく刃こぼれ痕が認められる。刺突具としての使用には問題はなかろうが定形石器とはいいがたい。４は主剥離面の左下半部を集中的に剥離する。２点とも二次剥離部分を刃部とした削器のような使用を想定したほうが妥当かもしれない。石材はいずれも半透明な良質の黒曜石である。

第11地点（第27図，第15表）

出土状況　７R-13区から２点のみ出土した。単独出土に近いが複数の出土であり地点別出土として取り扱った。確認後，周辺の調査を試みたが他には検出されなかった。出土層位はⅥ層であった。

出土遺物（図版８）　図示した石器の下半は欠損している。表面の左側縁には数回の小剥離が認められ使用していた可能性が高い。石材は凝灰岩。他の1点は，薄く小さな剥片でむしろ砕片に近いものであった。

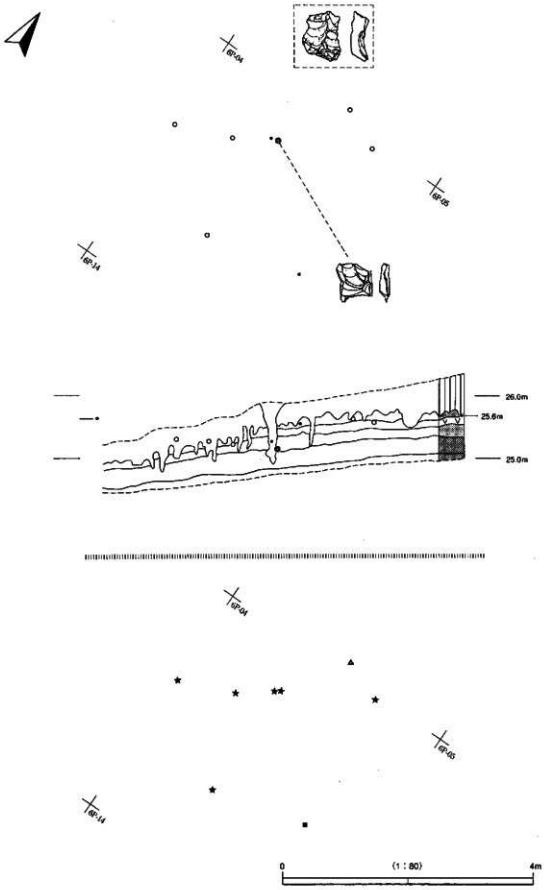
第12地点（第28図，第16・17表）

出土状況　本地点でも出土数は６点と少ない。８R-95区を中心に出土し，その範囲は狭く径２m程度で，調査範囲を拡大したが遺物の広がりは認められなかった。出土層位は，いわゆるハードロームの上部で，前述した石器群よりも若干後出のものと思われたが便宜的にここに含めて報告することとした。

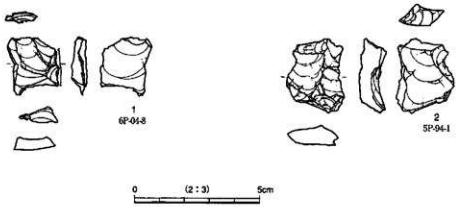
出土遺物（図版８）　図示した石器は３点で，６は小形ながら薄くきれいな縦長剥片を整形して作り出したナイフ形石器で基部及び背面加工は精緻に施されている。石材は頁岩。７はチャートの剥片。８は表面の剥離方向と主剥離面での打面方向が相違する剥片であり，打面を新たに設定した時に剥離された剥片と考えられる。下部の湾曲部を使用したものか刃こぼれ痕が認められる。石材は珪質頁岩。

6　第４文化層

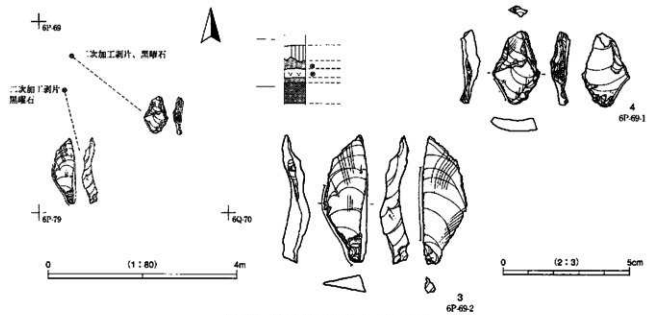
本文化層は第13～16地点の4地点で,このうち第15･16地点では礫群が主体で構成される内容となっていた。



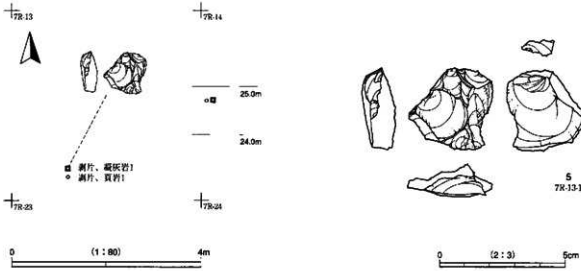
第24図　第9地点遺物分布



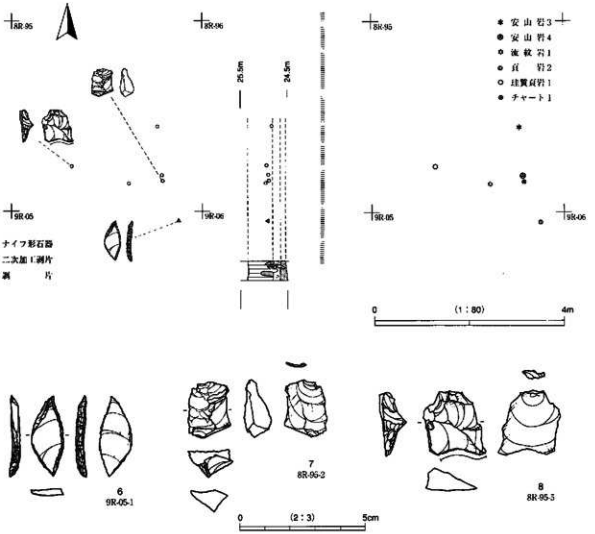
第25図　第９地点出土遺物



第26図　第10地点遺物分布・出土遺物



第27図　第11地点遺物分布・出土遺物



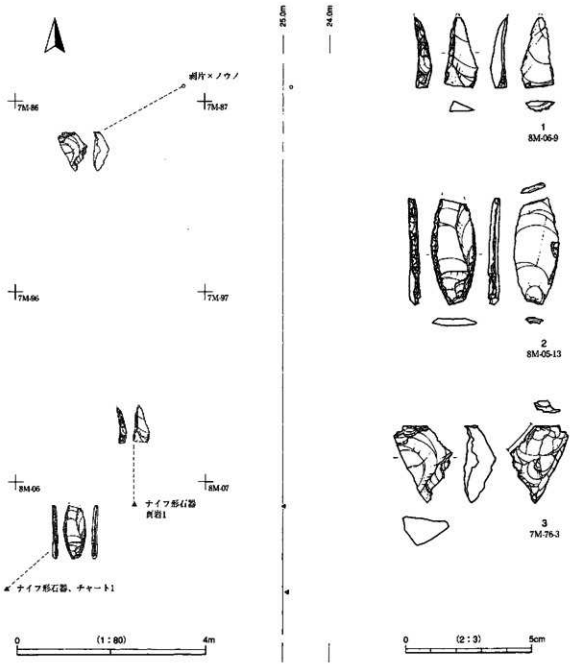
第28図　第12地点遺物分布・出土遺物

一方，第13・14地点では礫の出土はなく，剥片はきれいな縦長が特徴的な石器群構成であった。出土層位はいわゆるソフトロームからハードローム上面となっており，第Ⅲ～Ⅴ層が包含層と見做された。

第13地点（第29図，第18表）

出土状況　本地点での出土数は３点と少ない。しかも集中して検出されたわけではないため単独出土と捉えることもできる。調査では図示した周辺も若干拡張してみたが石器の広がりは確認できなかった。出土層位は第Ⅳ～Ⅴ層のいわゆるハードロームの上層部となっている。

出土遺物（図版９）　３点とも石器として使用されていたようである。１は基部を欠損するナイフ形石器で左側面に背面加工がていねいに施されている。下部には自然面が残り，欠損は節理面。石材は頁岩。２もナイフ形石器で先端部を欠損する。剥離は表裏両面とも同一方向を示し，薄い石刃状剥片が素材として用いられたものである。側縁の加工は一部主剥離面にも及ぶ。石材はチャート。３は裏面左側に刃こぼれ痕が認められる。おそらく石器として使用したものであろう。石材は瑪瑙。

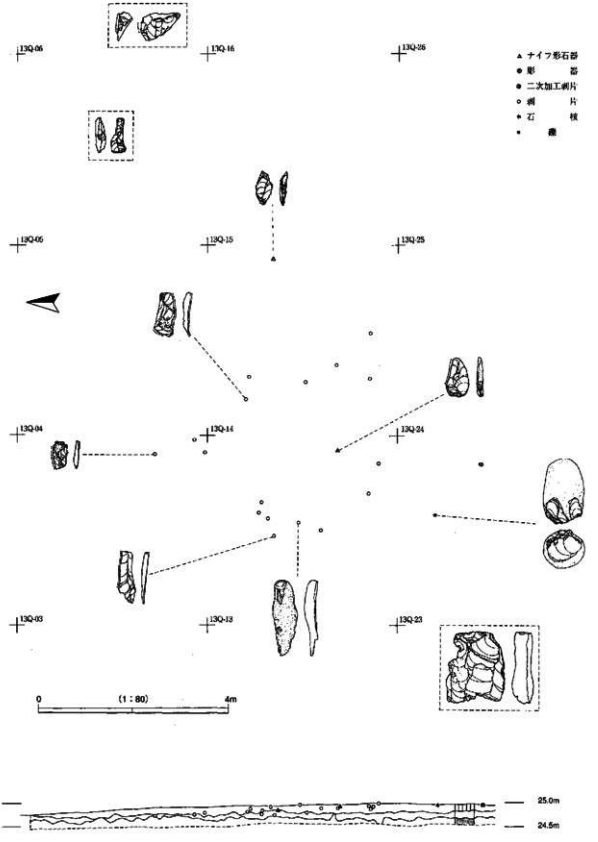


第29図　第13地点遺物分布・出土遺物

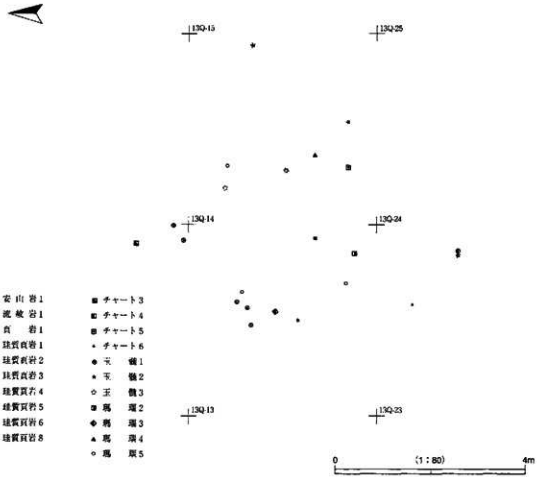
第14地点（第30・31・32図，第19・20表）

出土状況　本地点での出土遺物数は26点と本文化層中では最も多い。出土層位は第Ⅲ層下部となろうが13Q－14区を中心にほぼ径５ｍの範囲で集中的に検出されている。

出土遺物（図版９）10点を図示した。総体的に縦長剥片を石器の素材としていることが理解できる石器群構成を示す。成品としてはナイフ形石器，削器の他使用痕を有する剥片となり，内容的には貧弱といえよう。４・５のナイフ形石器はともに小形品であり，作りも概して粗雑である。特に４は薄い素材を用い，



第30図　第14地点器種別分布



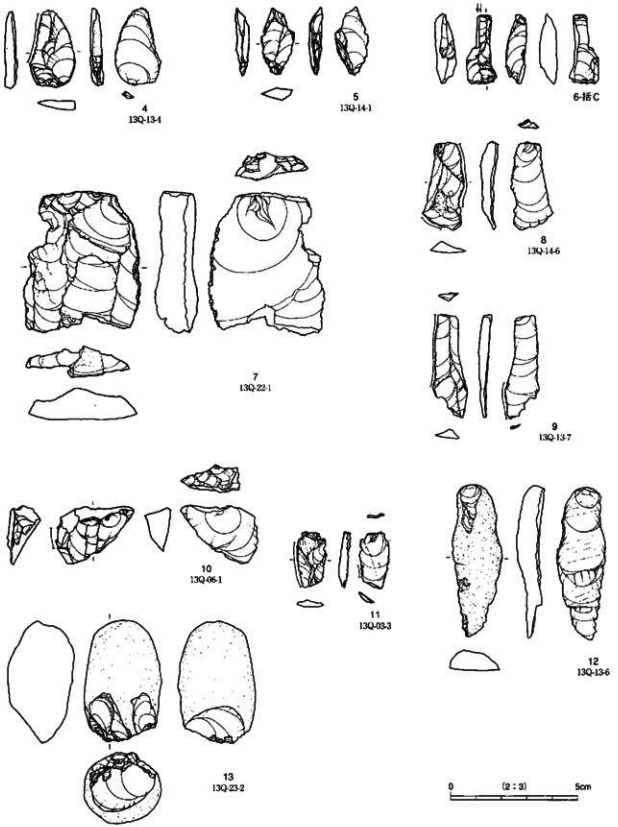
第31図　第14地点母岩別分布

右側面だけの加工で成品としている。5の側面加工も4～5回の剥離で終了させ，基部を簡単に整形し成品としている。ともに石材は珪質頁岩。6は尖頭器状の石器を横方向に折断するように剥離している。ファシットは2回以上施されているが，彫器面の再生を目的としたものとも考えられる。石材は珪質頁岩。7は大形剥片を用いた削器であり，刃部作出の剥離は小さく表裏両面から施されている。肉厚剥片のため打面の観察も可能で，表面方向からの打面調整の痕跡が明確に残る。石材は流紋岩。8～11は使用痕を残す剥片で，8・9などは縦長のきれいな剥片が素材となっている。12は使用の痕跡は認められないが十分素材となる縦長剥片である。8は玉髄，9・10は珪質頁岩，11はチャート，12は瑪瑙。13はチャート製の石核である。打面調整を施しながらの剥片剥離がよく理解できる石核である。打面調整は二方向に認められるため少なくとも2～3枚の剥片は剥離されていたと思われるが，剥取される剥片は小さく早々に放棄されたものであろう。石材はチャート。

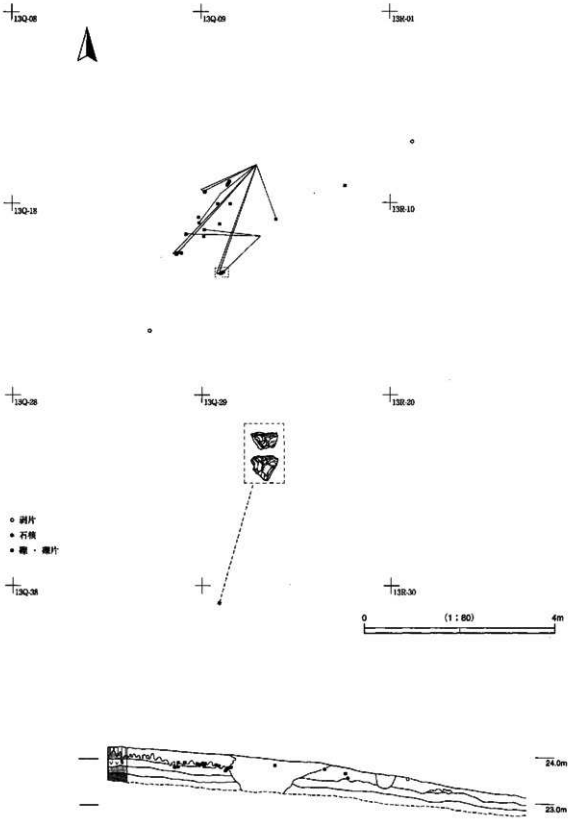
石材　本地点での石材をみると，珪質頁岩と瑪瑙系が主体を占めるが一方的に偏るような傾向は認められない。その内訳は珪質頁岩11点，瑪瑙・玉髄8点，チャート4点，流紋岩・頁岩・安山岩各1点となる。ここでの珪質頁岩はしばしば認められる淡褐色の光沢をもつ石材ではなく淡灰褐色で光沢をもたないものであった。

第15地点（第33・34・35図，第21・22表）

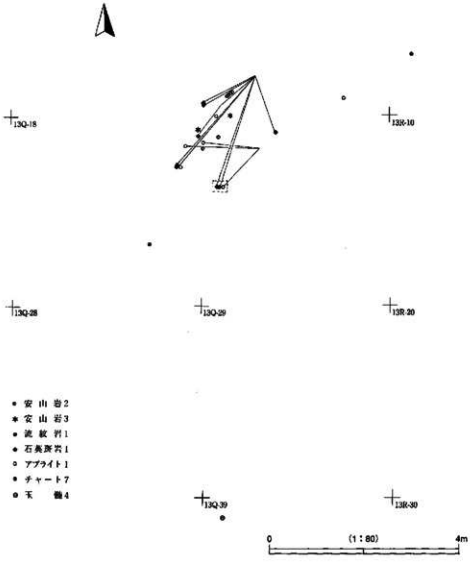
出土状況　本地点では計25点の遺物が出土した。その構成は石器・剥片類が3点，礫22点となり，いわゆる礫群と定義づけられる内容のものである。これら礫群の出土層位は第Ⅳ層のハードローム直上から一部第Ⅲ層

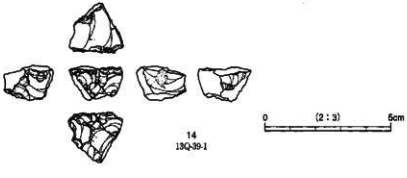


第32図　第14地点出土遺物



第33図　第15地点器種別分布



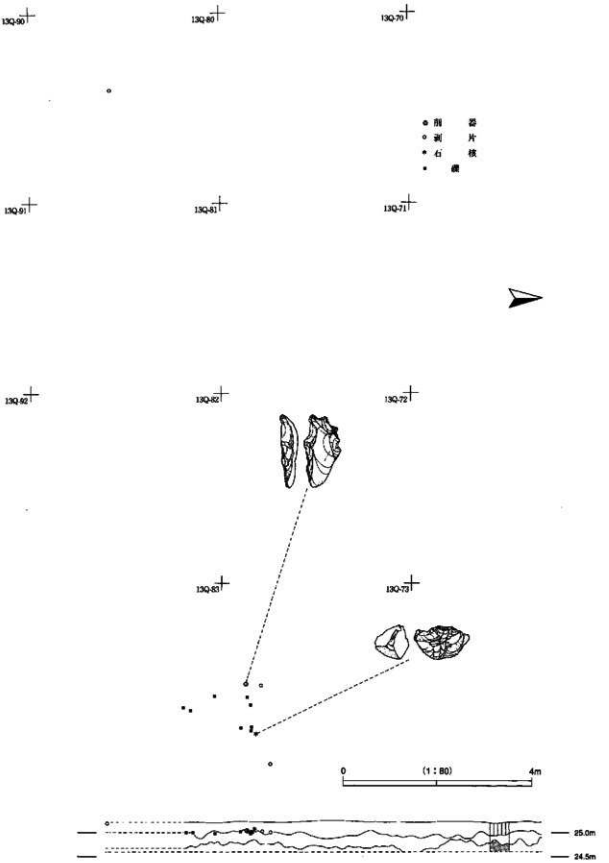


第34図　第15地点母岩別分布・出土遺物

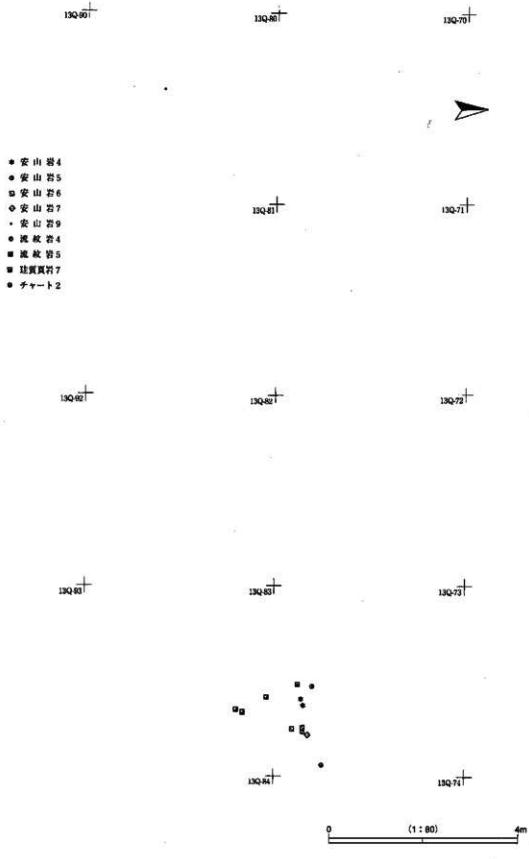
石英斑岩1

アプライト1

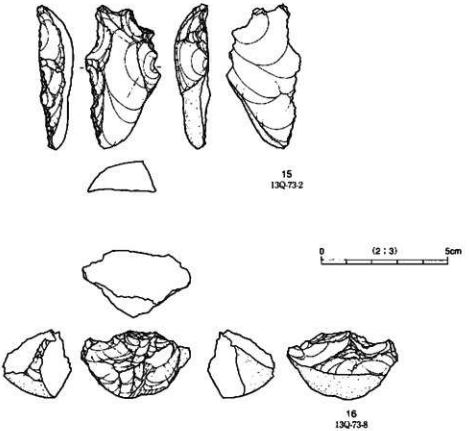
第35図　第15地点礫接合資料



第36図　第16地点器種別分布



第37図　第16地点母岩別分布



第38図　第16地点出土遺物

に包含されていた。出土範囲も狭く径２ｍ前後にまとまっており，接合できた礫も２点あった(第35図)。接合できなかった安山岩も明らかに同一個体と認識できるものも存在していることから本礫群は数個の拳大の礫で構成されていたとみることができる。他に礫群とは若干距離をおいて石核及び剥片が３点検出されている。

出土遺物（図版９）　礫群は第21表で示したとおり,石材はアプライト･安山岩･石英斑岩により構成される。個体別ということであれば安山岩が複数存在したということになろう。接合した２点では表面が淡褐色に変色している部分も認められた。石器類についてみると，14の石核はもっとも礫群から離れて出土したものであり礫群に伴う石器かどうかは疑問も残る。石材は玉随。他の２点はチャート･流紋岩の剥片で図示は省略した。

第16地点（第36・37・38図，第23・24表，図版４）

出土状況　本地点での出土は礫９点，石器類５点となっており，どちらかといえば礫群中心の構成となる。出土層位は第15地点同様ハードローム層の直上となっており，礫群の存在という共通点もあるためほぼ同時期の所産と考えてよいであろう。なお，この中には13Q-80区から１点だけ出土した安山岩の剥片を含めているが，本地点を構成する石器群とはいいがたい。近辺での出土であり，ここに含めて記述した。

出土遺物（図版９）　図示した石器は２点で，他の剥片は小剥片となる。また礫もすべて破砕されており図示は省略した。15は横長剥片を素材とし湾曲する刃部を作出した独特の石器で抉入削器，いわゆるノッチドスクレイパーに近い形態を有する。だが，表面左先端の欠損と右側の抉入をみると石錐を兼ねた石器として使用されていたとも考えられる。石材は珪質頁岩。16は安山岩の残核で，残された自然面から推考すると卵大程度の原石と考えられた。剥離された面からみると良好な剥片剥取はなされなかったようである。また６点出土し

た石器類のうち4点は安山岩，珪質頁岩・チャートが各1点となる。一方，礫では礫群と異なる礫が13Q-72区から出土したが出土層序が明確ではなく所属時期も特定できなかったため表に記載するだけにとどめた。

7　単独出土の石器群（第39・40・41図，第25表，図版10）

最後に単独出土の石器について参考までに述べておきたい。図示した石器群は20点だけであるが，他に小剥片などを含めると30点余となる。ただこれらの中には縄文時代的な要素を有する石器も含めて一括しており，ここでは縄文期以前を中心に記載していくこととする。

ナイフ形石器（1～7）　いわゆる尖頭器類として一括した。1は樋状剥離を有する尖頭器で基部を欠損する。表裏ともにほぼ全面にわたって加工されており，尖頭器作成後に樋状剥離を加えている。ただ左下端では整形のためか最後に剥離している。裏面では主剥離痕が一部に残ることから素材は横長剥片を利用していることが理解できた。石材には小石を含むが半透明の良質な黒曜石を用いている。2は基部だけを残すもので裏面の剥離から推察すると1と同様な作りかそれに近い器種であろう。石材は黒曜石であるが1よりも気泡を含む。3～7は珪質頁岩製で，3は基部を欠損するがきれいな石刃状剥片を素材としている。4は上半部が欠損するが，遺存する側縁部は丁寧な剥離で作出される。欠損部を含めると7～8cmの大形品となろう。5は小形品で数回の剥離で背面加工を終了させており，作りは粗雑である。6は湾曲した縦長剥片を素材とし，先端の一部が欠損する。表面には自然面を多く残し，左側だけに加工を施す。7も先端が欠損するやや小形のナイフである。横長剥片を素材とした成品で背面加工は上半部にていねいである。

打製石斧（8・12）　片刃の打製石斧で，新しい剥落面が三か所あり実測図では網掛けで区別した。出土地が溝であり，裏面は砥石として再利用されている。形態から縄文時代初期の所産かもしれない。石材は頁岩。12も打製石斧となろう。頭部と左上半部が欠損している。石材は雲母片岩。

二次加工剥片（10・11・13）　いずれも黒曜石製で一部に二次剥離が認められる。10・11は成品の断片か加工時に破損したものであろう。13は掻器のような使用が考えられる。

剥片（9・14～17）　使用痕の認められる剥片を主に図示した。この中には14・15のように十分石器に加工できる剥片もある。石材は9・16が珪質頁岩，17はチャート，他は黒曜石である。

石核（18～19）　残核と考えられる3点を図示した。これらの剥離方向は一定ではなく，平坦な面を打面とし種々な方向から剥離しており，縄文期の所産かもしれない。

出土遺物属性表（第2～25表）凡例

挿図番号：実測図・写真図版の番号。文化層ごとに1から順

打面：Cは自然面，Pは点状打面，Lは線状打面，1は平坦剥離，2以上は複剥離打面で，（　）内はネガティブバルブを有する剥離面数，－は欠損等による打面なし・計測不可を示す。

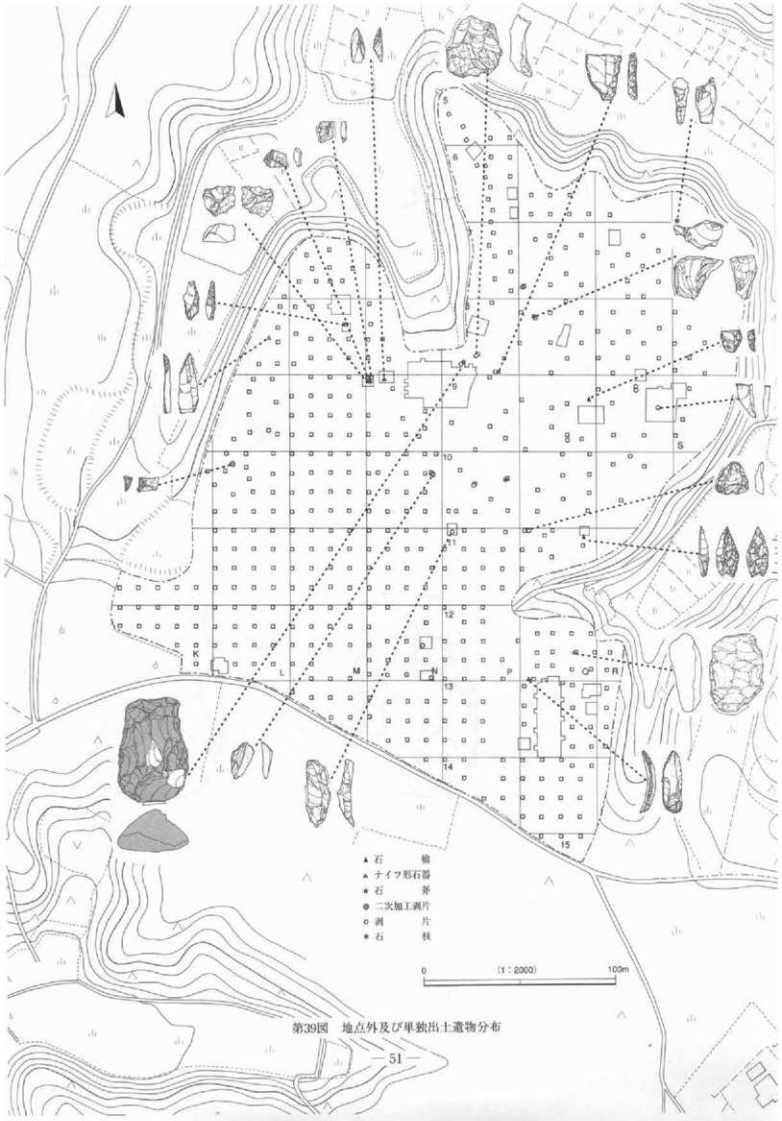
打角・剥離角：打角は，剥片の打面とポジティブバルブのなす角度，剥離角は石核の打面とネガティブバルブがなす角度。

背面構成：背面構成の観察可能な資料について，Ⅰは主要剥離面と同一方向，Ⅱは主要剥離面と逆方向，Ⅲは主要剥離面と直交または斜交，Ⅳは節理面，Ⅴは原礫面。

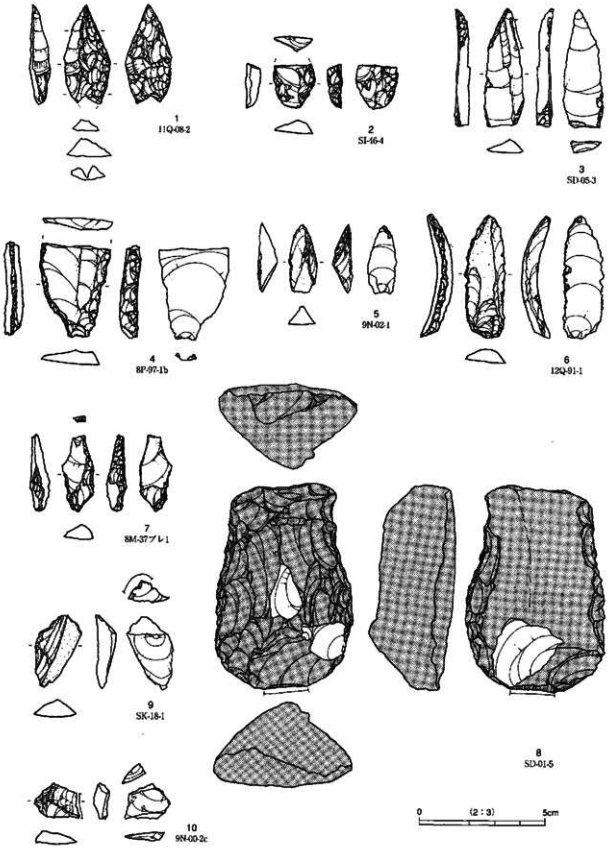
末端形状：Fは直線状，Hは蝶番状，Sは階段状，Oは石核においてアーチ状またはL字状をなす。

調整角：削器の刃部，ナイフ形石器の刃潰しなどの調整剥離角。　使用痕：Nは刃こぼれ，Hは被熱痕。

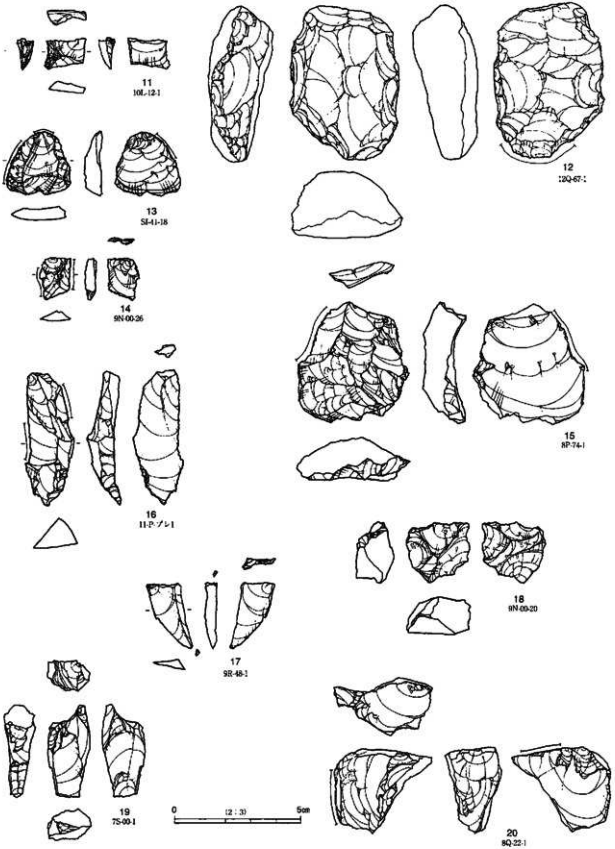
折れ面：Hは頭部，Mは中間部，Bは尾部，Rは背面から見て右側，Lは背面から見て左側，V-Mは垂直方向の中間部。



第39図　地点外及び単独出土遺物分布



第40図　地点外及び単独出土遺物（1）



第41図　地点外及び単独出土遺物（2）

第2表　第1地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
1	6P-89-002	剥片	砂岩 1	42.7	34.4	13.4	14.6	1	122	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		

第3表　第2地点出土遺物属性

番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	8P-34-001	剥片	瑪瑙 1	28.4	24.6	13.1	6.3	C	118	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	S				
	8P-34-002	剥片	安山岩 1	33.5	40.4	9.5	10.8	1	122	Ⅲ＋Ⅴ	H				
	8P-34-004	剥片	流紋岩 1	43.0	36.0	8.9	15.1	2 (1)	120	Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	F				
	8P-34-005	剥片	瑪瑙 2	16.0	9.5	4.9	0.6	1	86	Ⅰ＋Ⅱ	H				
	8P-34-006	砕片	安山岩 1	13.5	13.3	4.5	0.5	－		Ⅲ	H			B	
4	8P-35-001	二次加工剥片	安山岩 2	35.0	55.1	8.2	8.6	4 (2)	128	Ⅰ＋Ⅲ	H	73			
	8P-35-002	剥片	チャート 2	15.0	13.5	5.7	0.8	－		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F			B	
	8P-35-003	剥片	瑪瑙 2	14.8	22.0	8.9	1.8	P		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	8P-35-004	剥片	珪質頁岩 1	14.6	19.2	5.3	1.0	1	110	Ⅰ＋Ⅲ	H				
2	8P-35-005	削器	瑪瑙 3	48.6	47.0	16.4	28.0	1	117	Ⅰ	－	75～94			
3	8P-35-006 8P-35-008	二次加工剥片	瑪瑙 3	51.2	45.2	16.0	18.9	1	123	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	S	67～74	N		
	8P-35-009	剥片	瑪瑙 2	20.0	17.0	5.2	1.5	1	108	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	－			H	
6	8P-35-010 8Q-45 003	石核	瑪瑙 2	21.5	48.0	26.8	25.8		94						
	8P-35-011	剥片	瑪瑙 2	19.9	17.6	5.4	1.2	1	103	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	8P-35-012	砕片	瑪瑙 2	10.8	11.8	3.6	0.4	1	118	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	8P-35 013	剥片	瑪瑙 2	18.7	21.5	9.7	3.0	C	94	Ⅰ＋Ⅱ	F				
5	8P-45-001	二次加工剥片	黒曜石 1	27.0	40.0	12.0	8.1	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H	73～88			
	8P-45-002a	剥片	瑪瑙 2	15.5	16.8	7.8	1.7	C	99	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	8P-45-002b	剥片	瑪瑙 2	15.3	8.2	4.4	0.4	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	8P-45-004	砕片	瑪瑙 2	14.6	9.7	4.5	0.5	－		Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	8P-55-001	剥片	ホルンフェルス 1	13.2	17.8	3.2	0.6	1	96	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				

第4表　第2地点出土遺物組成

母岩番号/器種	石鏃	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・敲石	計	総重量g
安山岩 1									1	1			2	11.3
安山岩 2									1				1	8.6
流紋岩 1									1				1	15.1
黒曜石 1				1									1	8.1
珪質頁岩 1									1				1	1.0
ホルンフェルス 1									1				1	0.6
チャート 2									1				1	0.8
瑪瑙 1									1				1	6.3
瑪瑙 2									7	2	1		10	36.9
瑪瑙 3				1				1					2	46.9
合計	0	0	0	2	0	0	0	1	14	3	1	0	21	135.6

第5表　第3地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
7	8Q-35-001	石鏃	安山岩 3	32.0	32.0	37.0	49.2		99						
	8Q-35-002	剥片	瑪瑙 4	24.8	37.0	14.0	7.3	2	78	Ⅰ	H		N		
	8Q-35 003	剥片	瑪瑙 4	18.2	11.9	4.0	0.6	1	110	Ⅰ＋Ⅲ	O				
	8Q-45 001	剥片	瑪瑙 4	15.3	19.6	4.6	1.0	C	112	Ⅰ	F				
	8Q-45-002	剥片	安山岩 4	11.7	14.1	3.9	0.5			Ⅲ＋Ⅴ	－			M	
(6)	8Q-45-003	石核	瑪瑙 2				(25.8)								
	8Q-45-004	砕片	ホルンフェルス 2	10.8	12.0	2.4	2.0	－		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	S			B	
	8Q 45 005	剥片	玉髄 1	10.4	16.2	3.3	0.5	－		Ⅰ＋Ⅴ	H			B	
	8Q-45-006	剥片	ホルンフェルス 2	13.7	16.4	4.2	1.0	－		Ⅰ＋Ⅲ				B	
	8Q-45-007	剥片	玉髄 1	12.0	19.1	4.6	0.8	－		Ⅰ＋Ⅲ				B	
	8Q-46-001	剥片	瑪瑙 4	35.4	23.3	16.7	10.4	2	100	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
	8Q-46-002	剥片	瑪瑙 4	24.1	20.3	3.7	1.6	P		Ⅰ	H			R	
	8Q-46-003	剥片	ホルンフェルス 2	19.9	45.8	8.5	5.8	－		Ⅰ	H			B	
	8Q-46-005	剥片	ホルンフェルス 2	20.7	21.9	5.2	1.7	1	113	Ⅰ＋Ⅲ	H			L	
8	8Q-55-001	剥片	珪質頁岩 2	11.0	23.5	20.0	3.8		64						
	8Q-55-002	剥片	珪質白岩 2	22.0	12.3	5.3	11.3	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	8Q-55-003	剥片	玉髄 1	23.1	16.8	12.3	2.5	1	124	Ⅰ＋Ⅳ＋Ⅴ	S				
	8Q-55-004	剥片	瑪瑙 4	20.0	15.9	6.9	9.9	C	105	Ⅰ	F				
9	8Q-56-005	石核	瑪瑙 5	21.0	32.0	18.0	9.9		84						
	8Q-56-001	剥片	ホルンフェルス 2	11.9	27.5	4.2	1.1	L		Ⅰ	H				
	8Q-56-002	剥片	瑪瑙 4	16.2	20.1	12.9	3.5	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H		N?		
	8Q-56-003	剥片	流紋岩 2	24.1	12.0	2.4	2.8	1(1)	124	Ⅰ	H			R	
	8Q-56-004	剥片	ホルンフェルス 2	22.8	14.0	6.4	1.6	1(1)	97	Ⅲ				H	

第6表　第3地点出土遺物組成

遺物番号7/器種	石鏃	ナイフ形石器	台形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	剥片	砕片	石核	礫・敲石	計	総重量g
安山岩	3										1		1	49.2
安山岩	4								1				1	0.5
流紋岩	2								1				1	2.8
珪質頁岩	2								2				2	15.1
ホルンフェルス	2								5	1			6	13.2
不明	1								3				3	3.8
瑪瑙	4								7				7	34.3
瑪瑙	5										1		1	9.9
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	19	1	2	0	22	128.8

第7表　第4・5・6地点出土遺物属性

掲図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	縁	打面	打角 剥離角	背面構成	太陽形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	8N-96-001	剥片	流紋岩	3	31.5	27.1	10.7	7.0	L			I＋II＋III＋IV	H		H		
	8N-97-001	剥片	珪質頁岩	3	16.4	16.7	4.3	0.9	C	112		I	H				
	8N-97-002	剥片	チャート	3	18.4	23.2	3.6	1.3	I	122		I	H				
29b	8N-97-003	剥片	瑪瑙	6	28.5	27.5	12.5	7.5	I	110		I＋III	H				
	8N-97-004	剥片	チャート	3	22.1	29.1	10.8	4.3	C	90		I	O				
	8N-97-005	剥片	チャート	3	48.1	45.5	22.7	45.0	L			III＋V	F				
30b	8N-98-001	剥片	瑪瑙	7	30.5	35.0	13.0	8.9	I	104		I＋II＋III＋V	O				
	8N-98-003	砕片	珪質頁岩	3	11.1	12.5	1.6	0.2	I	106		I＋III	H				
	8N-98-004	砕片	頁岩	1	12.0	10.0	4.9	0.5	-			I＋III	H			B	
14	9N-97-001	石錐?	瑪瑙	8	21.9	19.0	6.8	1.3						68～75			
	9N-97-002	剥片	瑪瑙	9	35.1	38.3	17.9	23.3	L			I＋II＋III＋V	F				
31d	9N-97-003	剥片	頁岩	2	39.5	28.6	13.4	12.8	3	117		I＋V	S				
	9N-97-004	剥片	黒曜石	2	22.0	23.3	10.0	2.7	1(1)	110		III	H				
	9N-97-005	砕片	頁岩	3	14.9	11.3	4.4	0.6	-			I＋III＋V	S				
31g	9N-97-006	剥片	頁岩	2	42.8	28.5	8.4	8.1	I	110		I＋V	H				
	9N-97-007	剥片	ホルンフェルス	3	16.5	16.1	4.6	0.9	-			I＋III	S				
	9N-97-008	剥片	頁岩	2	24.1	32.0	6.2	3.4	I	110		I＋III＋V	H				
	9N-97-009	剥片	流紋岩	4	16.5	12.8	2.6	0.6	L			V	-			H	
31j	9N-97-010	剥片	頁岩	2	28.9	23.0	9.1	5.2	2	118		I＋II＋III＋IV	H				
12c	9N-97-012 9N-19-003 9P-20-006 9P-30-001	削器	珪質頁岩	4	44.0	36.1	12.9	12.6	I	112		I＋II＋III＋IV	-	72	N		
23	9N-97-013	石核	安山岩	5	33.0	32.5	17.0	18.0		87							
11	9N-97-014 9N-19-002	削器	安山岩	6	55.5	32.3	14.0	22.1	I	106		I＋V	-	84～102			
	9N-97-015	剥片	珪質頁岩	3	15.1	12.8	1.7	0.2				I	F			B	
18	9N-97-016	削器	瑪瑙	10	37.0	29.0	14.8	14.5	C	108		I＋III	S	76～84			
	9N-97-017	剥片	安山岩	7	35.2	10.5	6.7	1.7	I	114		I＋III	S				
29a	9N-98-001a	剥片	瑪瑙	6	24.2	24.0	9.5	2.9	3	86		I	S				
31f	9N-98-001b	剥片	頁岩	2	31.1	42.8	10.8	10.0	I			I＋III＋V	H				
	9N-98-001c	剥片	流紋岩	5	18.4	27.8	8.6	4.0	C	86		III＋V	H				
31c	9N-98-002	剥片	頁岩	2	21.8	29.6	11.8	5.4	1(1)	108		I＋V	-			H	
	9N-98-003	剥片	珪質頁岩	5	10.5	16.7	6.8	0.6	I	72		I＋III	H				
	9N-98-004	剥片	瑪瑙	6	17.3	18.0	5.0	0.9	L			I＋II＋III	H				
31b	9N-98-005	剥片	頁岩	2	16.5	16.6	20.0	1.4	L			I＋V	H				
	9N-98-006	剥片	安山岩	8	28.4	33.9	10.4	8.9	I	70		I＋III	F				
19	9N-98-007	一次加工剥片	珪質頁岩	6	35.0	29.0	9.0	5.3	L	100		I	H	62～66	N		
	9N-98-008	剥片	安山岩	8	22.8	29.6	12.7	5.7	I	88		I＋II＋III	H				
	9N-98-009	砕片	安山岩	7	8.0	5.4	3.3	0.1	-			III＋V	O			B	
30a	9N-99-001	剥片	瑪瑙	7	26.5	20.5	10.0	2.8	-	-		I＋III	H		N	B	
	9N-99-002	剥片	チャート	4	37.0	37.9	13.4	10.8	I	120		I＋III	S				
26	9N-99-003	石核	珪質頁岩	7	28.2	37.2	17.6	16.1		115							
24	9N-99-004	石核	安山岩	8	38.5	46.0	23.0	36.9		117							
12b	9N-99-005	剥片	珪質頁岩	4	18.7	14.2	5.2	1.0	I	108		I＋III	H				
	9N-13-011	礫	安山岩	13	24.1	41.5	13.6	10.7									
	9N-16-001	砕片	珪質頁岩	5	7.6	9.3	4.7	0.3	L			I＋III					
	9N-16-003	剥片	珪質頁岩	5	8.4	16.6	4.2	0.3	-			III＋V	H			B	
	9N-16-004	剥片	珪質頁岩	5	33.8	19.6	12.1	3.3	I	114		I＋III＋IV	F				
	9N-16-005	砕片	珪質頁岩	5	9.4	6.1	2.0	0.1	I	113		I＋III	H				
	9N-16-006	剥片	珪質頁岩	5	15.9	6.0	4.4	0.2	-			I＋IV	F			B	
16	9N-17-001	局部磨製石斧	ホルンフェルス	4	107.0	69.0	25.0	207.4									
29c	9N-17-002	剥片(ひび)	瑪瑙	6	46.0	41.5	18.5	25.2	6(2)	103		I＋II＋III＋V	S	-	N		
	9N-17-003	剥片	頁岩	4	56.3	36.2	22.0	58.0	C	120		V	F				
31h	9N-17-004	剥片	頁岩	2	24.9	25.[illegible]	7.9	3.1	3(1)	115		I＋III	-				
31i	9N-17-005	剥片	頁岩	2	28.5	23.0	6.8	3.1	2	115		I	H				
31a	9N-17-006	剥片	頁岩	2	18.0	22.8	6.9	1.8	1	103		III＋IV	H				
	9N-17-007	剥片	黒曜石	2	18.2	8.6	3.8	0.6	P			I	-			H	
	9N-17-008	剥片	安山岩	7	17.3	14.4	14.0	3.2	-			I＋II＋III＋V	O			B	
	9N-17-009	剥片	瑪瑙	6	17.5	13.0	4.4	0.9	I	100		I＋II	S				
	9N-17-010	剥片	珪質頁岩	5	26.6	34.4	7.6	5.6	I	115		I＋III	S				

28a	9N-17-011	二次加工剥片	安山岩	9	30.0	48.5	15.5	11.6	1	134	I＋II＋V	H	86			H	
	9N-17-012	剥片	頁岩	2	16.2	12.9	6.9	1.3	2	113	III＋IV	H					
	9N-19-004	剥片	安山岩	10	25.0	18.6	4.6	2.1	C	111	I＋III	H				R	
12a	9N-19-005	剥片	緑質真岩	4	25.2	27.4	6.5	2.2	1	96	II＋III＋IV	H					
	9N-19-006	剥片	真岩	5	15.1	30.7	4.9	1.8	5(3)	111	III	S					
	9N-28-001	剥片	安山岩	13	29.5	44.9	9.8	10.4	1(1)	104	I	-				H	
	9N-28-002	剥片	安山岩	11	47.3	41.6	8.5	12.0	1	115	I＋II＋III＋V	H					
17	9N-28-003	局部磨製石斧	ホルンフェルス	5	118.2	70.1	18.2	167.2						P			
	9N-29-001	剥片	緑質真岩	8	15.3	14.1	3.0	0.3	1	114	I	F					
21	9P-00-001	剥片(Uあり)	緑質真岩	9	35.0	33.0	16.5	9.3	1	128	I＋II＋III＋V	H		N		H	
	9P-00-002	剥片	チャート	1	25.1	32.0	16.3	10.2	1	116	I＋II＋III＋V	O				N	
	9P-10-001	剥片	珪質頁岩	10	18.9	15.5	8.3	2.0		124							
25	9P-10-002	石錐	珪質頁岩	11	31.2	44.0	18.5	19.4		63							
	9P-10-003	剥片	緑質真岩	4	18.8	11.1	2.7	0.5			I＋III	H				M	
	9P-10-004	剥片	安山岩	12	23.0	26.0	9.4	4.8	-		I	F				B	
	9P-11-001	剥片	安山岩	8	19.6	17.0	3.4	1.2	-		I	S				B	
	9P-11-002	砕片	安山岩	8	6.8	13.6	4.8	0.3	-		I＋III	H				B	
	9P-11-003	剥片	安山岩	8	26.8	19.0	6.3	2.4	2(1)	115	I＋III	H					
	9P-11-004	剥片	安山岩	14	34.2	23.5	9.4	4.5	1	113	I＋II＋III	H					
	9P-11-005	砕片	安山岩	16	8.6	9.7	2.3	0.2	1	116		H					
10	9P-11-006	台形環石器	珪質頁岩	9	44.0	36.5	17.0	17.8	C	-	II＋III	H	43～50				
	9P-11-007	砕片	黒曜	11	11.5	13.0	4.1	0.6	2(1)	100	III	F					
	9P-11-008	砕片	頁岩	12	12.7	9.1	2.5	0.2	L		I＋III	-				H	
	9P-11-009	剥片	頁岩	13	26.8	23.5	9.9	3.8	1	85	I＋II＋III	H					
27	9P-11-010 9P-21-004	石核	頁岩	11	30.0	46.3	20.2	26.2		123							
20	9P-12-001	剥片(Uあり)	珪質頁岩	12	42.1	20.0	12.5	6.2	2	109	I＋III	S	79	N			
	9P-12-002	剥片	黒曜石	2	32.8	26.0	9.9	5.6	1	126	I＋III	H					
	9P-13-001	剥片	安山岩	16	27.3	19.1	7.2	2.6	-		I＋V	S				B	
13	9P-13-002	削器	頁岩	9	39.0	35.0	12.6	14.0	2	131	I＋V	H	65～70				
	9P-13-003	剥片	珪質頁岩	13	14.1	22.6	6.7	1.3	4	96	I＋IV	H					
	9P-13-004	剥片	珪質頁岩	13	15.1	18.4	9.1	1.6	2	90	I＋V	S					
22	9P-13-005	剥片(Uあり)	黒曜	13	41.0	29.5	17.6	15.7	1	100	I＋III	F		N			
	9P-20-001	剥片	安山岩	13	13.4	16.2	4.0	0.9	-		I	H				B	
	9P-20-002	砕片	安山岩	8	13.2	9.0	2.6	0.2	F		III	H				M	
	9P-20-004	剥片	安山岩	16	20.4	33.9	9.5	6.7	1	95	I＋III	H					
	9P-20-005	礫	安山岩	13	34.5	47.2	12.0	17.9									
	9P-21-001a	剥片	黒曜	11	23.2	25.1	8.7	4.3	C	95	I	S					
	9P-21-001b	剥片	安山岩	8	17.1	10.4	3.2	0.4	-		I＋II	O				B	
	9P-21-003	剥片	黒曜	14	13.2	13.4	3.9	0.6	1	60	I＋III	H					
	9P-21-005	剥片	頁岩	1	20.4	21.0	5.0	1.3	1	80	I＋III	H					
28b	9P-22-001	剥片	安山岩	9	30.5	45.0	16.0	13.1	-	-	I＋II＋V	S				B	
	9P-22-002	剥片	安山岩	8	32.5	46.0	2.9	11.1	2	128	I	H					
	9P-22-003	剥片	安山岩	8	17.4	27.2	3.5	1.2	1	115	I	H					
	9P-22-004	剥片	安山岩	8	43.5	57.6	12.8	20.7	-		I＋II＋V	S				B	
	9P-23-001	砕片	玉髄	2	13.2	8.6	9.4	0.9	1	86	I＋III	H					
15	9P-23-002	楕形石器	頁岩	3	23.0	21.0	11.5	5.2					73～100			V	
	9P-23-003	剥片	安山岩	8	14.2	27.7	5.1	1.7			I＋III	S				B	
	B区一括a	剥片	黒曜	11	22.9	19.7	9.8	3.7	1	97	I＋II＋III	O					
	B区一括c	砕片	頁岩	6	15.7	10.5	4.6	0.8	-		I＋II＋III	B					
	注記なし	剥片	緑質真岩	13	14.7	19.2	4.2	0.9	3(2)	80	I＋V	H					
	注記なし	剥片	真岩	1	15.7	14.9	3.2	0.7	1	106	I＋II＋III	-				H	
31a	注記なし	剥片	頁岩	2	40.2	22.1	6.3	4.4	-		I＋V	F				B	

第8表　第4・5・6地点出土遺物組成

時期番号/器種	石槍	ナイフ形石器	台形環石器	削器	石錐	楕形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・磨片	計	総重(kg)
安山岩 5											1		1	18.0
安山岩 6				1									1	22.1
安山岩 7									2	1			3	3.0
安山岩 8									9	2	1		12	90.7
安山岩 9								1	1				2	24.7
安山岩 10									1				1	2.1
安山岩 11									2				2	22.4
安山岩 12									1				1	4.8
安山岩 13									1			2	3	29.5
安山岩 14									1				1	4.5
安山岩 15										1			1	0.2
安山岩 16									2				2	9.3
流紋岩 3									1				1	7.0
流紋岩 4									1				1	0.6
流紋岩 5									1				1	4.0
黒曜石 2									3				3	8.9
黒曜石 3						1							1	5.2
頁岩 1									2	1			3	2.5
頁岩 2									12				12	60.0

頁岩	3												1			1	0.6
頁岩	4											1				1	58.0
頁岩	5											1				1	1.8
頁岩	6												1			1	0.8
珪質頁岩	3											2	1			3	1.3
珪質頁岩	4					1						3				4	16.3
珪質頁岩	5											5	2			7	10.4
珪質頁岩	6									1						1	5.3
珪質頁岩	7											1				1	16.1
珪質頁岩	8											1				1	0.3
珪質頁岩	9			1								1				2	27.1
珪質頁岩	10											1				1	2.0
珪質頁岩	11						1									1	19.4
珪質頁岩	12											1				1	6.2
珪質頁岩	13											3				3	3.8
カルシフェルス	3											1				1	0.8
カルシフェルス	4								1							1	207.4
カルシフェルス	5								1							1	167.2
チャート	1											1				1	10.2
チャート	3											3				3	50.6
チャート	4											1				1	10.8
玉髄	2												1			1	0.9
瑪瑙	6											5				5	37.4
瑪瑙	7											2				2	11.7
瑪瑙	8						1									1	1.3
瑪瑙	9					1						1				2	37.3
瑪瑙	10					1										1	14.5
瑪瑙	11											2	1	1		4	34.8
瑪瑙	12												1			1	0.2
瑪瑙	13											2				2	19.5
瑪瑙	14											1				1	0.6
合計		0	0	1	4	2	1	2	2		79	13	3	2	109	1096.1	

第9表　第7地点出土遺物属性

検図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
32	12L-817 ゙v1	二次加工剥片	珪質頁岩	14	56.5	44.0	20.0	30.8	C	88	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ	S	86	N		
	12L-817 ゙v2	剥片	安山岩	17	44.2	26.8	8.8	7.6	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	H			B	

第10表　第8地点出土遺物属性

検図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
3	9Q-48-001a 9Q-48-001b	剥片(Uあり)	黒曜石	1	28.2	20.4	6.5	1.3	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	F		N	B	
1	9Q-48-002	ナイフ形石器	黒曜石	2	28.2	9.8	5.0	0.9			Ⅰ＋Ⅲ	O	81	N		
4	9Q-59-001	石核	安山岩	1	13.0	43.6	30.5	16.0		81						
	9R-50-001	剥片	瑪瑙	1	38.1	16.6	16.3	7.7	C	105	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F				
2	9R-50-002	二次加工剥片	頁岩	1	18.5	12.5	13.0	2.0	1	120	Ⅲ	－	63		H	

第11表　第8地点出土遺物組成

検図番号/器種	石核	ナイフ形石器	台形様石器	原盤	石鏃	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砂片	石核・礫・剥片	計	総重量g
安山岩	1									1		1	16.0
黒曜石	1											1	1.3
黒曜石	2	1										1	0.9
頁岩	1							1				1	2.0
瑪瑙	1								1			1	7.7
合計	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	5	27.9

第12表　第9地点出土遺物属性

検図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
2	5P-94-001	剥片	安山岩	1	29.5	22.0	11.0	6.0	1 (1)	103	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O				
	5P-94-003	剥片	安山岩	2	18.0	13.9	6.7	1.5	－		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	O			B	
	6P-04-003	剥片	安山岩	1	15.1	9.3	5.3	0.6	－		Ⅲ＋Ⅴ	H				
	6P-04-005	剥片	安山岩	1	16.6	19.2	7.1	2.6	－		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
	6P-04-006	剥片	安山岩	1	13.7	18.9	6.1	1.4	1	106	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	S				
	6P-04-007	剥片	安山岩	1	21.8	22.6	6.5	3.4	－		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H			B	
1	6P-04-008	二次加工剥片	安山岩	1	23.0	21.0	6.2	3.1	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	－	72	N	M	
	6P-04-009	砂片	安山岩	1	11.6	14.5	3.8	0.4	P		Ⅰ＋Ⅲ	F				

第13表　第9地点出土遺物組成

母岩番号/器種		石槍	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計	総重量g
安山岩	1								1	5	1			7	17.5
安山岩	2									1				1	1.5
合計		0	0	0	0	0	0	0	1	6	1	0	0	8	19.0

第14表　第10地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
4	6P-69-001	二次加工剥片	黒曜石	1	29.0	19.0	7.8	2.5	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	H	84	N	B	
3	6P-69-002	二次加工剥片	黒曜石	1	50.5	17.8	12.7	4.9	1	112	Ⅰ－Ⅱ＋Ⅲ	H	76	N		

第15表　第11地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
5	7R-13-001	剥片(Uあり)	凝灰岩	1	32.0	33.8	14.0	9.1	1	118	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ	F		N	H	
	7R-13-002	剥片	頁岩	1	27.4	21.2	6.4	2.6	L		Ⅰ－Ⅱ＋Ⅲ	H				

第16表　第12地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	8R-95-001	剥片	安山岩	3	25.0	19.5	7.2	4.0	1	105	Ⅴ	F				
7	8R-95-002	剥片	安山岩	1	22.5	17.0	11.0	2.5	L		Ⅰ＋Ⅱ	S	123			
	8R-95-003	剥片	安山岩	4	30.8	30.6	11.7	9.6	1(1)	130	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H				
	8R-95-004	剥片	流紋岩	1	41.6	41.9	12.4	18.0	1	124	Ⅴ	H				
8	8R-95-005	剥片(Uあり)	珪質頁岩	1	25.3	25.1	12.0	4.0	1	108	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F		N		
6	9R-05-001	ナイフ形石器	頁岩	2	32.0	12.8	4.5	1.4			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H	94～97			

第17表　第12地点出土遺物組成

母岩番号/器種		石槍	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計	総重量g
安山岩	3									1				1	4.0
安山岩	4									1				1	9.6
流紋岩	1									1				1	18.0
頁岩	2		1											1	1.4
珪質頁岩	1									1				1	4.0
チャート	1									1				1	2.5
合計		0	1	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6	39.5

第18表　第13地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
1	RM-06-009	ナイフ形石器	頁岩	1	28.8	13.0	6.5	1.5	－	－	Ⅰ＋Ⅴ	－	85～90		H	○
2	8M-05-013	ナイフ形石器	チャート	1	41.8	17.6	4.7	3.4	1	102	Ⅰ＋Ⅲ	－	70～86		B	○
3	7M 76-003	剥片(Uあり)	瑪瑙	1	31.0	23.0	125.0	5.6	1	128	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	S		N		

第19表　第14地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	13Q-03-001	剥片	玉髄	1	53.6	23.8	15.9	12.4	F		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
	13Q-03-002	剥片	頁岩	2	15.4	16.5	4.5	0.9	1	121	Ⅰ＋Ⅲ	S				
11	13Q-03-003	剥片(Uあり)	チャート	3	22.1	11.9	3.5	0.8	1	105	Ⅰ＋Ⅱ－Ⅲ＋Ⅳ	－		N	H	
	13Q-04-001	礫	チャート	4	45.6	27.3	11.4	18.5								
10	13Q-05-001	剥片(Uあり)	珪質頁岩	8	22.8	31.0	18.5	4.8	5(2)	114	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H		N		
	13Q-13-002	剥片	珪質頁岩	1	28.2	9.5	4.3	1.1	－		Ⅰ＋Ⅱ－Ⅲ	H				
	13Q-13-003	剥片	瑪瑙	2	33.6	13.0	5.5	1.9	－		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
4	13Q-13-004	ナイフ形石器	珪質頁岩	2	29.9	19.4	3.9	2.0	1	104	Ⅰ	H	86	N		
	13Q-13-005	剥片	安山岩	1	23.9	10.3	5.2	1.2	C	122	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	O				
12	13Q-13-006	剥片	瑪瑙	3	60.2	20.0	10.4	9.9	C	112	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	S		H		
9	13Q-13-007	剥片(Uあり)	珪質頁岩	1	40.8	13.5	4.9	1.3	－	－	Ⅰ	－		N	B	
	13Q-13-008	剥片	珪質頁岩	1	12.7	14.3	4.0	0.6	1(1)	108	Ⅰ＋Ⅲ	－			H	
	13Q-13-009	剥片	瑪瑙	5	16.8	11.7	2.9	0.5	F		Ⅲ				H	
	13Q-13-010	剥片	珪質頁岩	3	14.0	15.4	15.6	1.2	－		Ⅰ＋Ⅴ	O			B	
5	13Q-14-001	ナイフ形石器	珪質頁岩	4	26.8	13.8	5.2	1.4	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	－	67～70	N		
	13Q-14-002	剥片	瑪瑙	4	24.4	21.2	7.1	2.5	1	126	Ⅰ＋Ⅲ－Ⅴ	S				
	13Q-14-003	剥片	玉髄	2	35.3	15.8	4.0	2.1	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H		H		
	13Q-14-004	剥片	瑪瑙	5	34.9	45.2	17.9	25.7	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	S				
	13Q-14-005	剥片	チャート	5	24.9	25.0	6.5	2.7	1	95	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
8	13Q-14-006	剥片(Uあり)	玉髄	3	35.2	16.8	6.9	2.1	3(2)	92	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	O		N		
	13Q-14-007	剥片	珪質頁岩	5	10.0	13.1	2.5	0.3	－		Ⅰ＋Ⅲ				K	
7	13Q-22-001	削器	流紋岩	1	56.1	46.1	16.8	37.0	8(4)	108	Ⅰ＋Ⅴ	－	58～60	N	H	

	13Q-23-001a	剥片	珪質頁岩	4	35.4	20.1	8.7	4.9	1	128	I－III	H						
	13Q-23-001b	剥片	珪質頁岩	6	20.6	31.2	15.3	2.4	P		I＋V	O						
13	13Q-23-002	石核	チャート	6	48.0	30.5	29.0	52.8		92								
6	一括c	敲磨?	珪質頁岩	8	27.0	11.5	7.0	0.5						59～74				

第20表　第14地点出土遺物組成

母岩番号/器種		石鏃	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	敲器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計	総重量g
安山岩	1									1				1	1.2
頁岩	1				1									1	37.0
頁岩	2									1				1	0.9
珪質頁岩	1									3				3	3.0
珪質頁岩	2		1											1	2.0
珪質頁岩	3									1				1	1.2
珪質頁岩	4		1							1				2	6.3
珪質頁岩	5									1				1	0.3
珪質頁岩	6									1				1	2.4
珪質頁岩	8						1			1				2	5.3
チャート	3									1				1	0.8
チャート	4												1	1	18.5
チャート	5									1				1	2.7
チャート	6											1		1	52.8
玉髄	1									1				1	12.4
玉髄	2									1				1	2.1
玉髄	3									1				1	2.1
瑪瑙	2									1				1	1.9
瑪瑙	3									1				1	9.9
瑪瑙	4									1				1	2.5
瑪瑙	5									2				2	26.2
合計		0	2	0	1	0	1	0	0	20	0	1	1	26	191.5

第21表　第15地点出土遺物属性

検図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	太極形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	13Q-18-002 13Q-19-009 13Q-19-010 c	礫	アプライト	1	68.0	72.1	36.9	162.6						II		
	13Q-19-004	剥片	アプライト	1	7.6	6.6	6.0	0.4								
	13Q-09-006	剥片	アプライト	1	7.7	7.1	4.5	0.3								
	13Q-18-001	剥片	アプライト	1	49.0	33.0	14.7	29.2								
	13Q-09-003a	剥片	安山岩	2	33.7	20.9	15.7	10.0								
	13Q-09-003b	剥片	安山岩	2	13.0	11.0	8.4	1.3								
	13Q-09-003c	剥片	安山岩	2	10.9	10.5	8.8	0.8								
	13Q-09-003d	剥片	安山岩	2	7.7	7.1	6.1	0.3								
	13Q-19-002	礫片	安山岩	2	31.0	32.4	18.5	21.9						H		
	13Q-19-003	剥片	安山岩	2	50.5	30.6	24.9	61.1								
	13Q-18-004	剥片	安山岩	3	57.0	43.6	25.7	52.5						H		
	13Q-19-005	剥片	安山岩	3	57.0	48.9	23.7	64.4								
14	13Q-29-001	石核	玉髄	4	14.0	21.5	19.5	4.9		88						
	13Q-09-002a 13Q-09-002b 13Q-18-003 13Q-18-005a 13Q-18-005b 13Q-19-006 13Q-19-010a 13Q-19-010b	礫	石英斑岩	1	71.6	105.8	49.3	402.7						H		
	13R-00-001	剥片	チャート	7	20.5	20.6	5.9	3.1	C	112	I＋III	F			H	
	13Q-18-006	剥片	流紋岩	2	24.4	21.7	7.1	3.3	1	94	I＋V	S				

第22表　第15地点出土遺物組成

母岩番号/器種		石鏃	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計	総重量g
安山岩	2												6	6	95.4
安山岩	3												2	2	126.9
流紋岩	2									1				1	3.3
石英斑岩	1												8	8	402.7
アプライト	1												6	6	192.5
チャート	7									1				1	3.1
玉髄	4											1		1	4.9
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	22	25	828.8

第23表　第16地点出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	130 72-001	礫	流紋岩	3	222.1	112.1	98.0	3035.0								
	130-73-001	礫片	安山岩	4	43.4	35.4	26.8	43.2						H		
15	130-73-002	剥片	珪質頁岩	7	56.9	29.5	13.5	19.0	－		Ⅲ+Ⅴ	－	62～95			
	130-73-003	剥片	安山岩	5	30.0	11.3	17.1	5.2	1	94	Ⅰ+Ⅴ	0				
	130-73-004	礫片	安山岩	4	39.8	35.4	32.5	31.0						H		
	130-73-005	礫片	安山岩	6	57.2	34.9	19.3	41.3						H		
	130-73-006	礫片	流紋岩	4	43.6	40.5	16.2	25.7						H		
	130-73-007	礫片	安山岩	6	54.4	33.9	23.0	41.1						H		
16	130-73-008	石核	安山岩	7	26.8	43.5	26.2	23.7		72						
	130-73-009	剥片	チャート	2	15.9	23.4	6.8	2.0	1	115	Ⅰ+Ⅲ	H				
	130-73-010	剥片	安山岩	8	19.9	24.5	9.5	5.8	C	95	Ⅰ+Ⅲ+Ⅴ	0				
	130-80-001	剥片	安山岩	9	37.7	28.7	4.6	3.0	C	114	Ⅲ	F				
	130-83-001	礫片	流紋岩	5	16.0	8.7	6.0	0.8						H		
	130-83-002	礫片	流紋岩	5	22.1	16.2	10.1	2.5						H		
	130-83-003	礫片	流紋岩	5	23.9	15.2	7.9	3.2						H		

第24表　第16地点出土遺物組成

母岩番号/器種	石槍	ナイフ形石器	台形様石器	削器	石錐	楔形石器	局部磨製石斧	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫・礫片	計	総重量g
安山岩 4												2	2	74.2
安山岩 5									1				1	5.2
安山岩 6												2	2	82.4
安山岩 7											1		1	23.7
安山岩 8									1				1	5.8
安山岩 9									1				1	3.0
流紋岩 3												1	1	3035.0
流紋岩 4												1	1	25.7
流紋岩 5												3	3	6.5
珪質頁岩 7				1									1	19.0
チャート 2									1				1	2.0
合計	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	1	9	15	3282.5

第25表　地点外及び単独出土遺物属性

挿図番号	遺物番号	器種	母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	7Q-80-001	剥片	安山岩	a	23.5	17.8	5.3	2.0	2 (1)	122	Ⅰ+Ⅲ				L	
19	7S-00-001	石核	チャート	a	36.6	17.0	12.5	6.4		100						
7	8M-37プレ1	ナイフ形石器	珪質頁岩	g	30.5	12.6	8.0	2.3			Ⅰ+Ⅲ	0	78～97			○
15	8P-74-001	剥片(しあり)	黒曜石	h	48.0	44.5	16.6	24.6	－	－	Ⅰ+Ⅲ+Ⅴ	0		N	B	
	8P-82-001	剥片	安山岩	b	22.9	14.5	6.2	1.3	1	120	Ⅰ+Ⅲ+Ⅴ	F				
	8P-97-001a	剥片	珪質頁岩	a	23.2	30.9	7.8	3.7	5 (1)	96	Ⅰ	－			H	
4	8P-97-001b	ナイフ形石器	珪質頁岩	b	37.0	28.5	7.5	6.4	1	116	Ⅰ	－	80～85			○
20	8Q-22-001	石核	チャート	b	33.5	37.2	19.9	18.2		88～104						
18	9N-00-002a	石核	黒曜石	f	24.0	28.0	15.0	6.4		69						
14	9N-00-002b	剥片(しあり)	黒曜石	g	16.8	12.5	4.0	0.7	3	100	Ⅰ	－		N	H	
10	9N-00-002c	二次加工剥片	黒曜石	f	14.5	18.0	6.0	1.3	－	－	Ⅲ	－	86	N	M	
5	9N-02-001	ナイフ形石器	珪質頁岩	c	27.0	11.5	5.0	1.7			Ⅲ+Ⅴ	F	78			
	9Q-86-001	剥片	ホルンフェルス	a	27.8	18.4	6.0	2.2	1	120	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	S				
17	9R-48-001	剥片	チャート	c	26.0	17.5	4.5	1.0	1	90	Ⅰ	H				
11	10L-12-001	二次加工剥片	黒曜石	a	12.0	16.2	7.0	0.8	－	－	Ⅰ+Ⅲ	F	74		B	
	10P-38-001	石核	チャート	d	31.0	38.0	13.8	17.5		82						
	10P-44-001	剥片	珪質頁岩	d	25.1	39.8	7.3	5.6	－	－	Ⅰ+Ⅳ	H			B	
	10R-04-001	剥片	黒曜石	b	25.7	8.6	4.1	0.7	－	－	Ⅰ+Ⅱ	0			M	
16	11P-プレ1	剥片(しあり)	珪質頁岩	e	53.9	19.4	13.9	8.7	1	110	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	H		N		
1	11Q-08-002	石槍	黒曜石	c	39.2	18.5	8.5	4.2	－	－	－		58～73			○
	12N-57-001	礫片(？)	安山岩	c	108.5	41.4	36.5	207.6								
	12N-98-001	剥片	玉髄	a	15.8	10.5	4.1	0.5	2	120	Ⅰ+Ⅲ	F				
12	12Q-67-001	石斧	頁岩片岩	a	61.0	43.5	25.6	80.1						P		
6	12Q-91-001	ナイフ形石器	珪質頁岩	f	48.6	16.2	11.2	5.5			Ⅰ+Ⅲ+Ⅴ	0	72～83			
8	SD-01-005	石斧	頁岩	a	82.5	54.9	34.0	154.7								
3	SD-05-003	ナイフ形石器	珪質頁岩	g	47.0	16.0	6.0	3.8	－	－	Ⅱ	F	88	N	B	
	S1-25-012	剥片	安山岩	e	14.1	13.8	6.0	1.1	1	83	Ⅰ+Ⅲ	F				
	S1-25-021	剥片	安山岩	d	47.6	16.1	10.3	5.1	－	－	Ⅱ+Ⅲ	H				
	S1-41-001	剥片	チャート	f	31.0	13.5	5.8	2.0	L	－	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	S				
13	S1-41-018	剥片(しあり)	黒曜石	d	25.0	26.0	7.0	3.9	L	－	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	H		N		
2	S1-46-004	石槍	黒曜石	e	17.2	17.0	6.2	1.6					86		B	○
9	SK-18-001	二次加工剥片	珪質頁岩	h	29.0	18.5	8.0	2.5	1	140	Ⅲ+Ⅴ	H	88	N		
	一括a	剥片	チャート	h	31.9	20.8	8.0	4.2	－	－	Ⅰ+Ⅲ	F				
	一括b	剥片	チャート	h	17.2	10.6	3.1	1.7	P		Ⅰ	－			H	

第3節　縄文時代

縄文時代の土坑の可能性のある遺構3基，陥し穴1基と遺構外から出土した遺物を報告する。包含層調査をした地点を含めて，一時期の土器がとくにまとまって出土した例はみられなかった。そのなかで，若干まとまりを認めたのは，加曽利E式，称名寺Ⅱ～堀之内1式土器である。また，1か所で加曽利B式の完形土器が出土した。これらの時期には短期間居住地となった可能性がある。

1　遺構と出土遺物

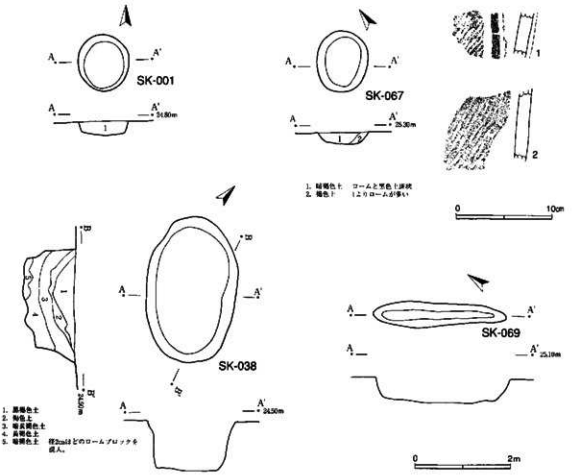
SK-001（第42図）

8M-24グリッド付近に所在する長軸1.2m，短軸1.1m，深さ0.3mの円形土坑である。底面はほぼ平坦であり，一部硬化していた。覆土には焼土ブロックと焼土粒を含む。明瞭な火床面は認められなかったが，火を焚いた遺構の可能性がある。

出土遺物　縄文土器8点が出土した。ごく小片のみであるが，劣化はしていない。後期前半の素文系土器1点を含めて，中期～後期とわかるものが3点みられた。詳細な時期は不明であるが，遺構は縄文時代の土坑と推定される。

SK-038（第42図）

13Q-27グリッド付近に所在する楕円形の土坑である。長軸3.5m，短軸1.9m，深さ1.1mあり，底面は多



第42図　縄文時代遺構・出土遺物

少凹凸がみられるが，概ね平坦である。覆土は黒褐色土を主体とする上層と，ロームブロックを含み暗褐色土を主体とする下層に分けることができる。出土遺物は皆無であり，遺構の時期・性格は不明である。陥し穴の可能性を考慮して縄文時代土坑に含めたが，判断材料が乏しい。

SK-067（第42図）

10Q-90グリッド付近に所在する長軸1.3m，短軸1.2mの楕円形の土坑である。深さは0.2mあり，掘り込みはやや傾斜をもち，底面は平坦だがやや丸みをもつ。

出土遺物　縄文土器小片３片である。１は胎土に雲母が目立つもので，加曽利ＥⅠ式のキャリパー形土器の胴部であろう。２は縄文の地文のみで表面は劣化している。もう１片は２と同一個体のごく小さな破片である。遺構の形状や出土遺物から性格や時期を判断するのは難しい。この付近は加曽利E式土器が比較的多く出土している。したがって，何らかの施設が存在した可能性がある一方，流れ込んだ危険性も高いといえる。縄文時代の遺構である可能性をもつものとして掲載しておく。

SK-069（第42図）

９Q-39グリッド付近に所在する長さ2.8m，幅0.5mの溝型陥し穴である。底面はやや丸みを帯び，オーバーハングは認められない。深さ0.8mが遺存した。出土遺物は認められないが，下総台地に溝型陥し穴が盛行した縄文時代草創期から早期の遺構であろう。

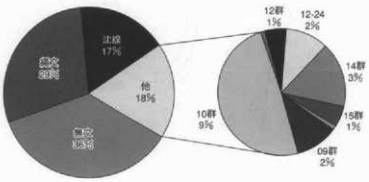
2　遺構外出土遺物

(1) 縄文土器

ごく小さな破片と劣化の著しい破片を除くと，縄文土器は遺跡全体で約7,500点出土している。これらは，関東ローム層より上位のⅡ層（新期テフラ層とローム漸移層）で取上げられたものが中心である。一部は縄文時代の包含層として調査を行ったが，整理作業の結果，同時期の資料が多数集中する例は全く認められなかったため，他と同様に大グリッド単位での報告にとどめることにした。そのほか，古墳時代の遺構等に混入していたものも多く，これも大グリッドに戻して扱った。分類は，中野修秀氏が示した分類大綱（中野2000）に準じて群の大別を行った。ただし，一部を変更し，群No.には空白がある。細分は行わず，本文中には随時型式名等を記載した。

縄文土器分類基準

第１群　撚糸文系土器
第２群　沈線文系土器
第３群　条痕文系土器
第８群　五領ヶ台式土器
第９群　阿玉台式土器
第10群　加曽利E式土器
第12群　称名寺式土器
第14群　堀之内式土器
第15群　加曽利B式土器



第43図　縄文土器出土比率（左）と掲載資料内訳（右）

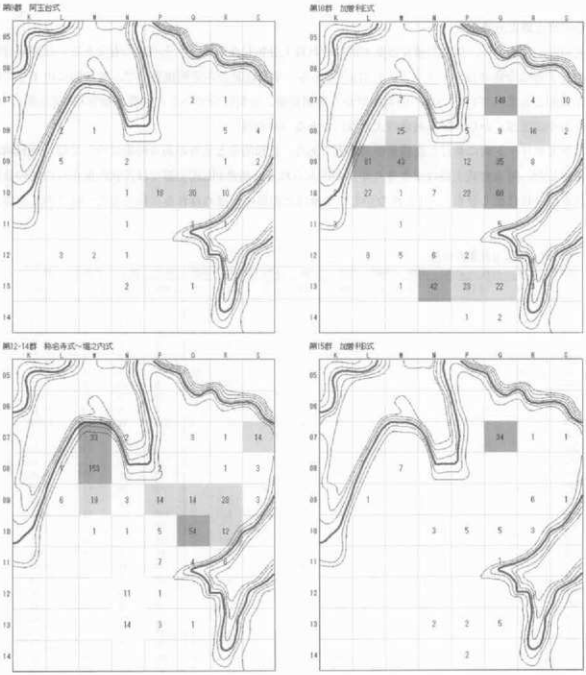
時期別の出土数と分布状況

縄文のみ，沈線のみ，無文の破片は基本的にそれ以上分類しなかった。その他の有文あるいは型式分類が可能な土器は全体の18パーセント，1,373点である。早期前葉から後期後葉まで，断続的に出土している。比較的まとまっているのは，中期中葉から後期前葉，分類区分でいうと10群（加曽利E式土器），12群（称名寺式土器）から14群（堀之内式上器）である（第43図）。

これを大グリッド別に集計した結果が第26表である。比較的まとまりのある時期については，第44図に分布を示した。阿玉台式土器はまとまりが1か所みられる。加曽利E式土器では舌状台地から台地の基部まで調査区全体に広く分布し，4か所ないし5か所ほどの集中が認められる。称名寺式～堀之内式土器も

第26表　縄文土器集計結果

地点	01群	02群	03群	08群	09群	10群	12群	12-14	14群	15群	無文	縄文	沈線	計
計	24	4	5	1	113	686	52	154	243	91	2,678	2,201	1,255	7,507
05P	2		1											3
06P												1		1
07M						7	11		22		56	42	3	141
07N									2		5	6	6	19
07P						2					2	3	1	8
07Q	12				2	148	3			34	108	251	51	609
07R					1	4			1	1	6	12	6	31
07S						10	1	10	3	1	39	33	23	120
08L					2			1			2	6	2	13
08M	1	1		1	1	25	2	52	99	7	543	594	258	1,584
08N													1	1
08P		3				5	1	1			11	14	14	49
08Q						9					21	12	7	49
08R					5	16			1		42	31	27	122
08S	5				4	2		3			43	29	12	98
09L					5	81		4	2	1	59	31	14	197
09M						43		11	8		108	57	54	281
09N					2			2	1		71	13	59	148
09P						12		11	3		185	53	153	417
09Q						35	7	4	3		67	18	34	168
09R					1	8	18	8	2	6	143	44	113	343
09S					2			2	1	1	33	7	8	54
10K						2					3	5	1	11
10L			3			27					30	23	10	93
10M						1	1				28	11	12	53
10N					1	7			1	3	19	4	10	45
10P					18	22		1	4	5	53	67	39	209
10Q					30	60		13	41	5	303	313	106	871
10R					10				12	3	47	54	18	144
11K						3					2	3		8
11L												1		1
11M						1					2	2		5
11N					1									1
11P								1	6		12	3		22
11Q					3	5	1	3		1	34	22	17	86
11R					1				6		14	14		35
12L					3	9					1	8		21
12M					2	5					13	5		25
12N					1	6			11		30	30	12	90
12P						2	1				4	2	2	11
13M						1					1	1		3
13N					2	42		13	1	2	95	113	83	351
13P						23		3		2	103	62		193
13Q					1	22			1	5	57	41	5	132
13R						3					9	6		18
14P						1				2	1			4
14Q						2						1		3
表採	4		1		15	35	6	11	12	12	273	153	94	616



第44図　縄文土器時期別分布

調査区全体に広がり，4か所の集中が認められる。加曽利B式土器は1か所に集中し，ほかはまばらである。なお現地でJE区・JW区として調査された包含層については小グリッド単位で分類・接合を実施して時期ごとに検討したところ，中期と後期が混じり，とくに集中は見られなかった。

以下は掲載資料の観察結果である。なお，基本的な観察事項は第31表に示したので，ここでは分類ごとの傾向とおもな土器についてのみ記載する。

第1群　撚糸文系土器（第45図，図版12）

口唇に押圧縄文をもつ1は井草式，その他は夏島式であろう。1はRL縄文が口唇上，内面口端，外面に施される。口唇はわずかに肥厚する。2～8には，口唇が若干屈曲するもの（2・3・5～8）と，しないもの（4）がみられる。屈曲するものには外面に接合痕（3）や折り返しの痕跡（5）をもつもの，ナ

デによって外面が若干へこんだものがある。2・7・8は撚糸文，3～6は単節RLを施文している。非掲載資料も合わせると7Q区で12点出土している。

第2群　沈線文系土器（第45図，図版12）

9は田戸下層式の尖底土器である。外面はケズリに近いナデ調整を施した後，口縁から胴下半部まで凹線が施されている。

第9群　阿玉台式土器（第45図，図版12）

10～12は隆帯か沈線による楕円区画文に角押文が沿うもので，11は阿玉台Ⅰa式ないしⅠb式，10・12はⅠb式であろう。いずれも円形竹管を用いたことが観察された。13は山形把手をもち，楕円区画に沈線が沿う。14・15は角押文が複列であり，阿玉台Ⅱ式であろう。14は半截竹管の内側で，15はおそらく2本の竹管を使って2列同時に角押文を施している。16はキャタピラ文，17は幅広の角押文の土器である。阿玉台Ⅲ式または勝坂式に伴うものであろう。19も阿玉台式後半の土器であろうか。18・20～22は勝坂・中峠段階の土器であろう。

第44図のように10P区から10R区にかけてややまとまって出土しており，そのほか遺跡全体に薄く広く分布していた。

第10群　加曽利E式土器（第45・46図，図版11～13）

23～30はキャリパー型の深鉢である。23は交互刺突文をもつが，隆帯は背割隆帯になっている。中峠段階から加曽利EⅠ式古段階の土器であろう。24・26は加曽利EⅠ～Ⅱ式，25・27～30は加曽利EⅡ～Ⅲ式である。31・32は連弧文系，34は曽利系の，いずれも加曽利EⅡ式に伴う土器である。34～36も連弧文系またはその影響を受けたものであろう。37は加曽利E式前半の素文系の土器であろう。49・50は加曽利E式前半に伴うとみられる鉢形の土器である。38～48は概ね加曽利EⅢ式であろう。38はナゾリによる低い隆帯で渦巻文を描く意匠充填系土器である。39・43・47・48は横位連繋弧線文系土器であろう。

第44図のように，4か所の集中がみられる。もっとも多い7Q区でも40m四方で148点であるからそれほど多いとはいえないが，一時的な居住・生活を示すものであろう。包含層調査が行われた13N区・13P区はとくに多いとはいえず，後期の土器も混じることからほかの区域と同様に大グリッド単位で扱った。そのほか，遺跡全体に薄い分布が広がっている。

第12群　称名寺式土器（第47図，図版11・14）

51～54は称名寺式後半の沈線による意匠文中に列点文を充填する土器である。51は小形土器の胴下半部～底部である。53は描線の内外に列点文をもつ。55は描線のみが描かれる。

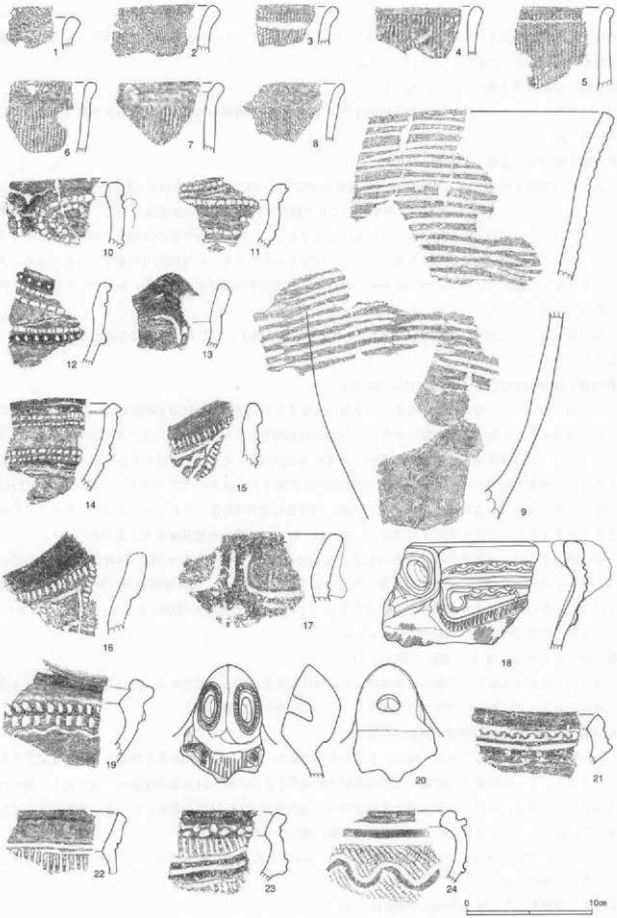
第14群　堀之内式土器（第48・49図，図版15）

75～95は堀之内式土器である。堀之内1式が中心である。75・76は単独の蕨手状意匠文内を無文とするものである。77～86は蕨手状沈線や蛇行沈線が区画効果をもつ。87～91は集合沈線の土器である。56～74は称名寺式・堀之内式に伴う素文系の土器である。第31表では12-14群と表記した。太い沈線によって口縁部を区画するものが多く，そのほか沈線・条線，縄文などが施される。

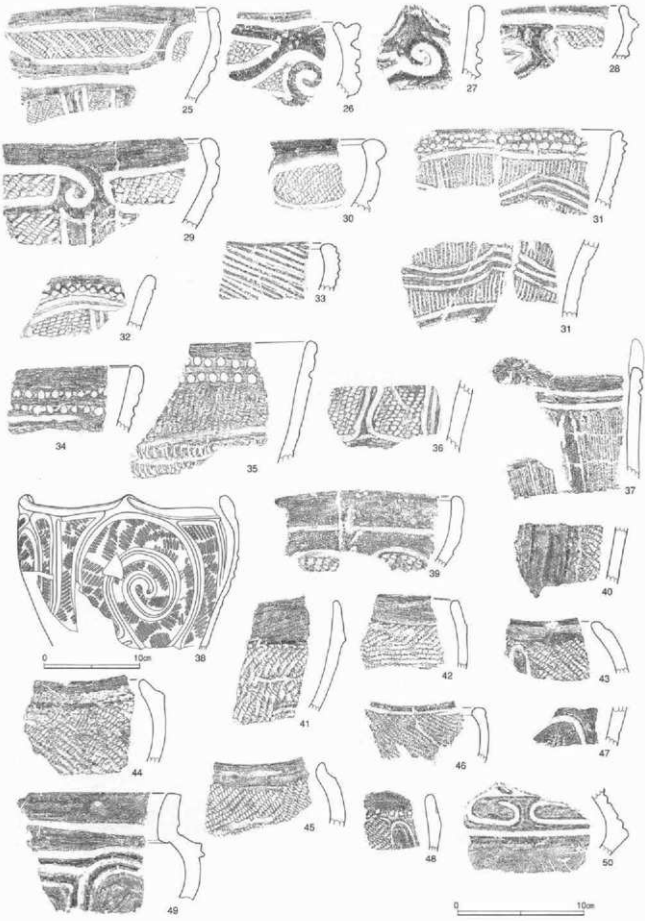
第12群から14群は第44図のように8M区付近と，10Q付近に大きな集中がみられた。そのほか，遺跡全体に薄い分布が広がっている。

第15群　加曽利B式土器（第49図，図版11・16）

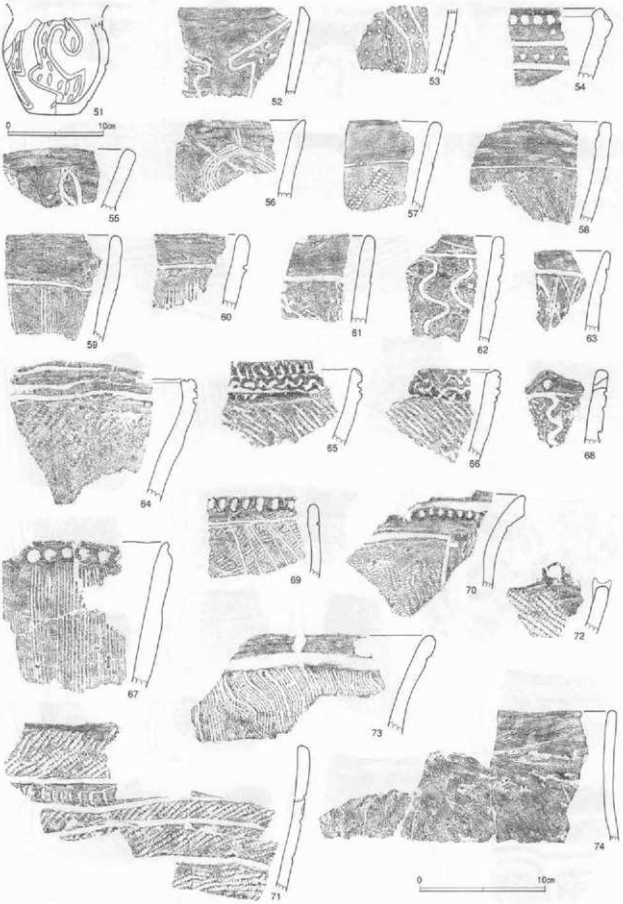
96～112は加曽利B式土器である。96・97は堀之内2式の系譜を引く素文系の土器である。紐線は口縁のや



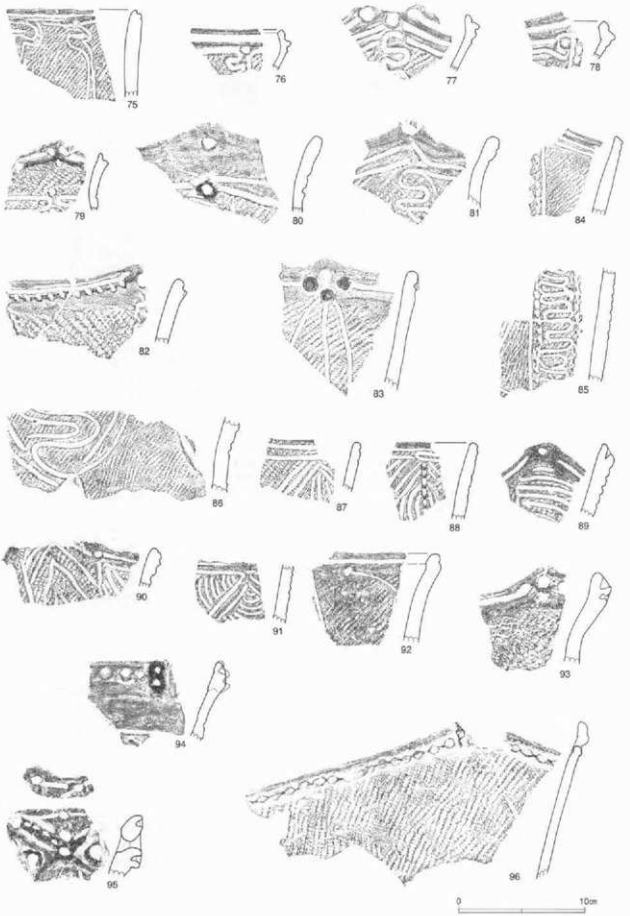
第45図　遺構外縄文土器１（第１群～第10群）



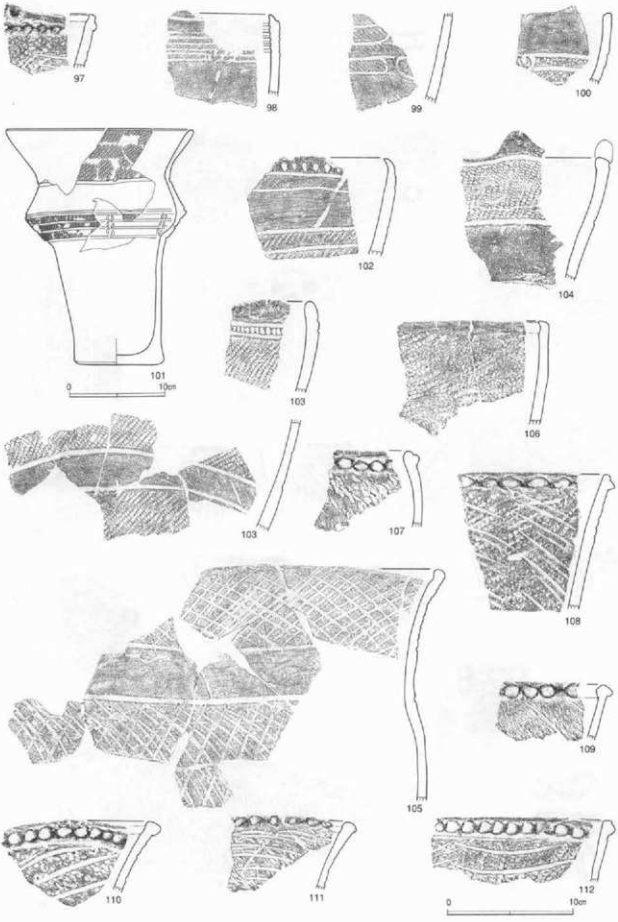
第46図　遺構外縄文土器２（第10群）



第47図　遺構外縄文土器３（第12群・第14群）



第48図　遺構外縄文土器4（第14群・15群）



第49図　遺構外縄文土器5（第15群）

や下がった位置にあり，口唇内面に沈線をもつ。97の外面の沈線は半截竹管による平行沈線である。98は外面と内面に平行沈線を施す。以上は加曽利B１式であろう。99～101は平行沈線間に括弧文が施される。加曽利B２式であろう。101は上半の一部と下半の全体が遺存する。102～104は加曽利B３式であろう。105は格子状沈線の半精製土器である。106～112は粗製土器である。106は紐線をもたず，内面に沈線をもつ。107～112は紐線をもつ。加曽利B２式か同心であろう。

第44図のように７Q区から比較的多くの土器が出土しており，大破片も見つかっている。一時的に居住・生活が行われた可能性がある。

（２）上製品（第50図，図版17，第27表）

土器片錘13点と土製蓋２点がある。土器片錘は，縄文中期の土器片に切込みを入れたものである。加工・使用の時期は素材となった土器の示す縄文中期阿玉台式から加曽利E式前半期であろう。

14・15は把手の付いた円形の製品である。形状から堀之内式に伴う土器の蓋であろう。14は大きめの蓋につまみ状の小さな把手を貼り付けている。15は小さめの蓋に粘土棒を貼り付けた大きな把手をもつ。残存部の形状からみると，把手の貼付位置は中心軸から外れているように思われた。外形が楕円形に近かった可能性もある。なお，土製品はすべて遺構外か，または古墳時代以降の遺構から出土した。

（３）石器

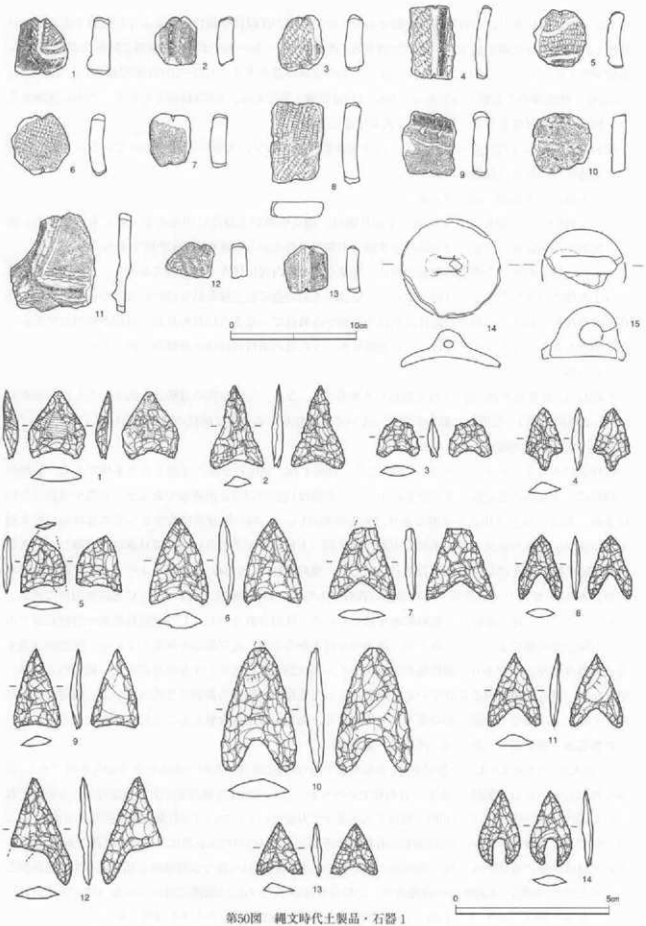
石鏃14点，石斧類８点，磨石・石皿類11点を報告する。なお，古墳時代の遺構から出土したもののなかには，古墳時代に加工・使用した遺物が混じっている可能性がある。縄文時代の遺構からは出土しなかった。

石鏃（第50図，図版11・17，第28表）

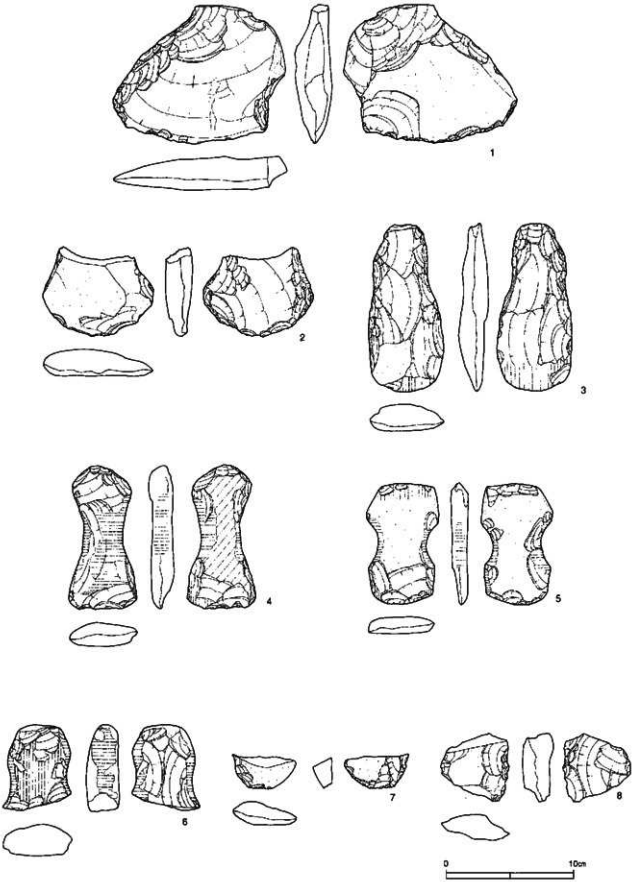
石材別にみると，チャート６点，黒曜石3点，頁岩１点，安山岩２点，玉髄１点と多様である。表面的な観察による産地の推定結果を第28表に示した。形態は14点中13点が凹基形であるが，先端や基部の形状は多様である。14点中10点が完形であり，完形率が高い。8・14の鏃身部に段をもつものは神奈川県大和市深見諏訪山遺跡の無文土器・爪形文土器に伴う例（大和市教育委員会1984「深見諏訪山遺跡」），印西市榎峠遺跡の撚糸文土器に伴う例（鈴木道之助1973「榎峠遺跡（CN404）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』）があり，草創期～早期前葉の資料であろう。４は後晩期であろう。３は先端欠損後に再加工されている。９～11は素材の主要剥離面を残している。注目されるのは，１の黒曜石製部分磨製石鏃である。石鏃調整剥離によって作られた後，両面の中ほどから先端，及び鋸面を研磨している。研磨面は艶を失って磨りガラス状であり，線状痕が明瞭につく。図版25右下にステレオ写真を示した。研磨の方向は一定でなく，磨り面は丸みを帯びている。研磨によって先端から縁辺の鋭利さを失っている。研磨の目的は薄くすることではなく，滑らかな面を作り出すこと，あるいは形状を整えることにあったと推定される。

打製石斧・磨製石斧（第51図，図版18，第29表）

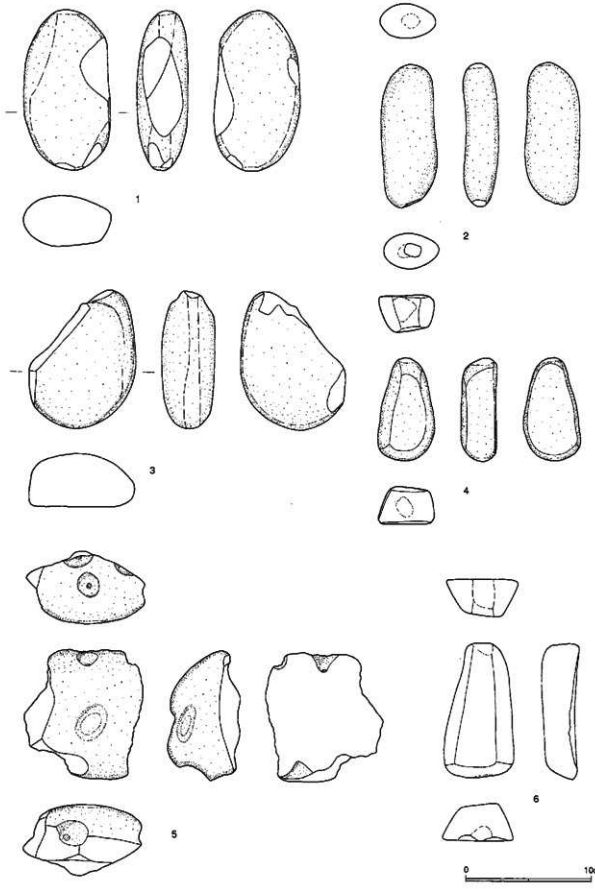
1は最大部で14cmほどある石器である。分類不能であり，縄文時代のものであるかどうかも不明である。刃部を作出しているので製品か，あるいは石核であろうか。2，4～6，8は打製石斧である。3は刃部のみ研磨されている。刃部は蛤刃状である。4・6の一端は丸みを帯びて刃が付いていない。7は打製石斧の刃部片であろう。このなかで，注目されるのは古墳時代前期の住居跡から出土した4・5の打製石斧にみられる磨耗である。刃部も含めたほぼ全面に磨耗がみられ，意図的に研磨された可能性が高い。図では特徴的な部分のみを磨耗範囲として示したが，実際には剥離面や自然面とした部分も含めて，さらに広範囲に認められる。5の刃部は磨耗によって丸みを帯びており，土掘り具としては機能を失うような加工といえる。6も同様であったかもしれない。



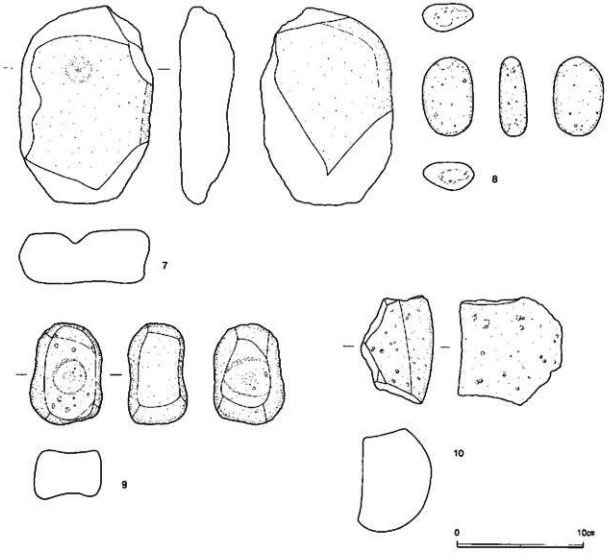
第50図　縄文時代土製品・石器 1



第51図　縄文時代石器 2



第52図　縄文時代石器 3



第53図　縄文時代石器4

石鏃1，打製石斧4・5の3点には機能を失うような，あるいは鈍化するような研磨が認められた。これらは，いずれも古墳時代前期の住居跡から出土しており，古墳時代人が砥石を使って研磨を行った可能性も充分考えられる。古墳時代前期の住居からは砥石が多数出土しており，一部は砥石に転用されたものであろう。

磨石・石皿類（第52・53図，図版19，第30表）

擦りや敲きなどの痕跡をもつ石器を磨石・石皿類としてまとめた。第30表に観察結果を示す。全体に破損品と破損後の再利用品が多数を占めている。1・2・4・6は古墳時代前期の住居跡から出土した。縄文時代の磨石類に似たものとしてここに掲載したが，むしろ古墳時代に使用された可能性を積極的に評価すべきであろう。4点は両端に叩きの痕跡がある点で共通する。このような資料は，これまで縄文石器の流れ込みとして扱うか，または非掲載とされることが多かったものと思われるが，本来古墳時代の石器が多く含まれているものと考える。とはいえ，時代を決定するのは困難である。あるいは縄文時代に持ち込まれ，使われた石器が古墳時代に再利用されたこともあったであろう。5・9・10は縄文時代特有の石皿，台石の特徴をもつものである。擦り用の凹面の作出，または使用による摩滅と，堅果類の打ち割り用に使われたと考えられている窪みがみられる。

第4節　古墳時代

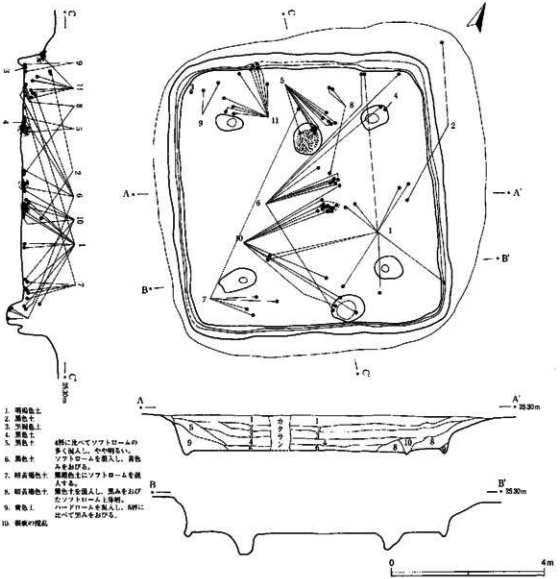
1　住居跡

検出した住居跡は49軒である。後期の住居跡1軒（SI-031）を除く，48軒が前期の住居跡と推定された。弥生時代末から古墳時代はじめころの短い時期に限られる。住居跡から出土した土器を全体的にみても，縄文土器以外はほとんどがこの時期の土師器である。また，住居跡と付属施設の形態も斉一性が高い。したがって，出土遺物が乏しい住居跡についても前期と判断した。そのため，個々の記載においては時期の判断を示さなかった。第3章において，全体的な傾向と特徴的な遺構出土資料の年代観について記載した。

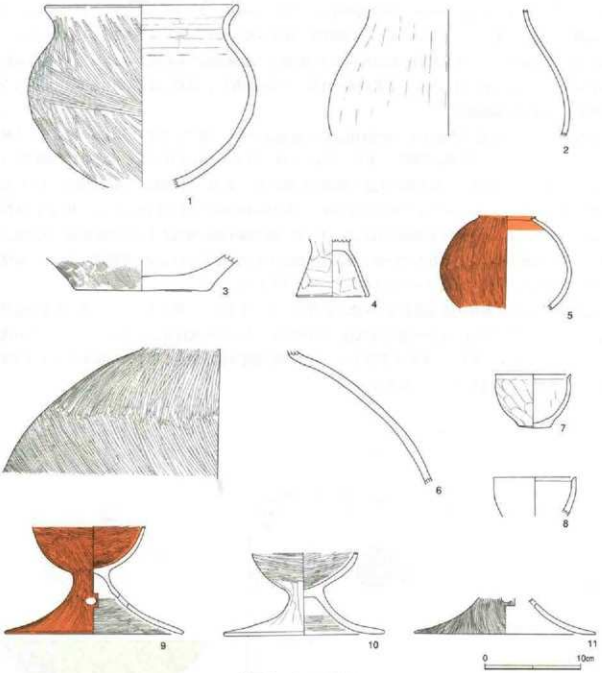
なお，第39表には，最終的に図を掲載しなかった参考資料も含めた遺構ごとの器種構成を示した。

SI-001（第54・55図，図版20）

9M-56グリッド付近に所在する。竪穴は8.75m×8.41mの隅丸方形で，深さは0.79m～0.81m，主軸



第54図　SI-001（1）



第55図　SI-001（2）

方位はN-28°-Wである。主柱穴と考えられる小穴が4基あり，深さは0.41m～0.61mである。掘り方の上部が広がっており，廃絶後に柱が抜き取られた可能性がある。壁溝は全周する。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.70m×0.90mの円形，深さは0.42mである。炉は1.31m×0.76mのわずかな掘り込みをもち，0.72m×0.83mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は黒色土・黒褐色土を主体とし，壁際の床面付近にはローム主体の8・9層がみられる。竪穴の壁上部が広がっているのは，この8層の形成と対応している可能性がある。竪穴の覆土上層と，広がった部分の覆土間で接合関係が認められた（2）ので，少なくとも，覆土上層は竪穴の範囲外に続いていたはずである。なお，南東部分の床面には1.48m×1.79m，厚さ0.15mの範囲で炭化物片を多く含んだ黒色土塊が検出された。

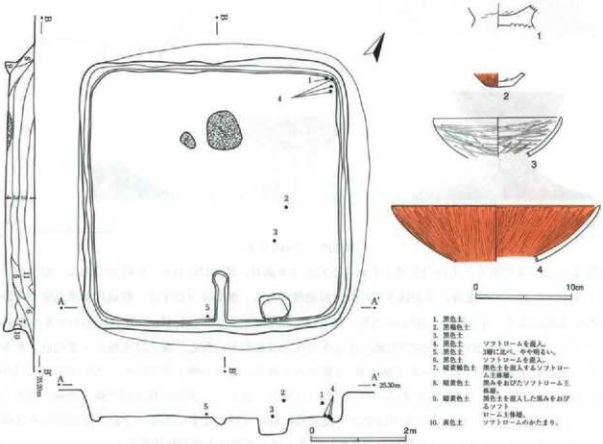
遺物（図版42）　土器片が多数出土している。床面付近の広範囲に分布しており，住居中央部や北西隅

付近にややまとまりが認められる。西北隅付近から出土した高杯（9）が完形に近く，他は破片である。広範囲で接合した甕（1），小形鉢（7）も6割程度に復元されており，完形品であった可能性がある。土器の大半は壁際のローム主体層の堆積以前，または堆積中に投棄されたものとみられる。小形鉢と高杯が複数出土している点が注目される。土器以外では軽石（第138図1），砥石（第136図9）が出土している。

SI-002（第56図，図版20）

10N-10グリッド付近に所在する。竪穴は6.25m×6.16mの隅丸方形で，深さは0.44m～0.56m，主軸方位はN-30°-Wである。壁溝は全周しており，南東壁の中央からいわゆる仕切溝が住居中央部に向かって1.22m伸びている。貯蔵穴は南東壁中央部と東隅の中間にあり，0.61m×0.52mの隅丸方形で，深さ0.32mの箱状を呈している。炉はほとんど掘り込みがなく，焼け面は床面から盛り上がっていた。0.82m×0.74mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。また炉の西側隣0.30m離れたところに0.35m×0.22mの範囲で同じく被熱を受け赤く硬化している。覆土は黒褐色土を主体としているが，壁際部分については壁上部が崩れ落ちたと考えられるロームを主体とした層がみられる。

遺物（図版42）　住居の北東隅付近から甕と高杯が，そのほか壺と高杯が出土している。非掲載資料も含めてすべて破片である。土器以外では砥石（第136図1）が1点床面付近から出土している。この砥石は，SI-004，017から出土した砥石と接合した。接合面も使用の痕跡があるので，欠損または分割されて運ばれた後にも使用されたことがわかる。



第56図　SI-002

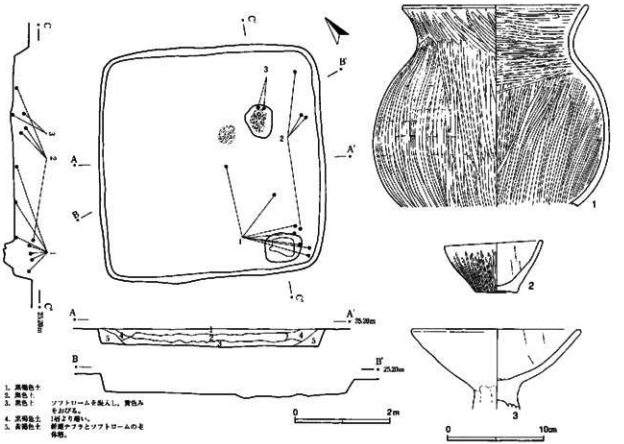
SI-003（第57図，図版20）

9N-83グリッド付近に所在する。竪穴の平面形は方形ないし隅丸方形で，規模は4.74m×4.78m，深さ0.31m～0.38m，主軸方位はN-36°-Eである。壁溝をもたない。貯蔵穴は南隅付近にあり，0.76m×0.58mの隅丸方形で，深さ0.21mである。炉は竪穴の中心軸からかなり東隅側に偏った位置にある。0.70m×0.61mのわずかな掘り込みをもち，0.31m×0.46mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。掘り込みの主軸は竪穴の軸にあっている。また西隣に0.43m×0.36mの範囲で同じく被熱を受けて焼けて硬化している。古い炉の痕跡であろう。覆土は黒褐色土を主体とした上層とロームを多量に含む黄褐色土を主体とした下層に分けられる。

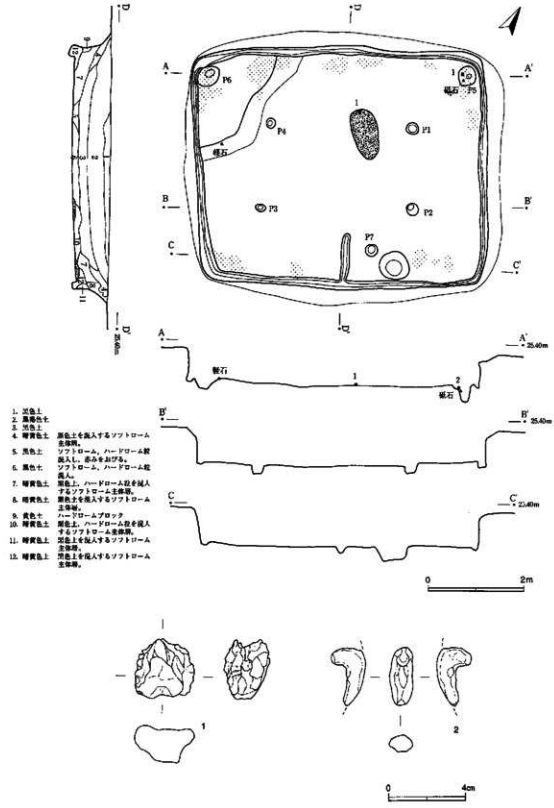
遺物（図版42）　炉の中とその上の覆土から高杯（3），周辺から鉢（2）が出土している。住居中央から貯蔵穴にかけて甕（1）が散った状態で出土している。2は完形に近い。

SI-004（第58図，図版21）

10N-23グリッド付近に所在する。竪穴は6.66m×5.66mの長方形で，深さは0.67m～0.82m，主軸方位はN-32°-Wである。壁溝は全周しており，南東壁中央部付近から仕切溝が住居中央部に向かって1.06m伸びている。西隅付近の床面はやや高くなっている。貯蔵穴は仕切溝の東側にあり，0.63m×0.57mの略円形で，深さは0.26mある。床面の小穴7基はいずれも0.3m以下の浅いものである。位置から，P1～P4は主柱穴の可能性がある。炉は1.08m×0.51mのわずかな掘り込みをもち，全体的に被熱による赤色化と硬化がみられる。またP5の近くに径0.12mの被熱・硬化面がみられた。発掘の床面近くには，焼土の堆



第57図　SI-003


1. 灰色土
2. 黒褐色土
3. 明色土
4. 暗黄色土　黒色土を混入するソフトローム主体層。
5. 黒色土　ソフトローム、ハードローム粒混入し、赤みをおびる。
6. 黒色土　ソフトローム、ハードローム粒混入。
7. 暗黄色土　黒色土、ハードローム粒を混入するソフトローム主体層。
8. 暗黄色土　黒色土を混入するソフトローム主体層。
9. 黄色土　ハードロームブロック
10. 暗黄色土　黒色土、ハードローム粒を混入するソフトローム主体層。
11. 暗黄色土　灰色土を混入するソフトローム主体層。
15. 暗黄色土　灰色土を混入するソフトローム主体層。
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
礫石
25.40m
0
2m
4cm

第58図　SI-004

積が多数認められた。床面は焼けていない。覆土は黒色土・黒褐色土を主体としており，床面近くにはローム主体層が形成されている。

遺物　非掲載の土師器小片が出土している。古墳時代前期の土器である。炉内の北端部分から焼成粘土塊（1），性格不明の土製品（2）と砥石（第136図3）がともにP5覆土中より出土している。この砥石は，SI-002，017から出土した資料（同2・3）と直接接合した。また，西隅付近の床の段差付近から軽石（第138図2）が出土している。軽石は平らな擦り面が多数あり，金属による溝状の研磨痕もみられる。

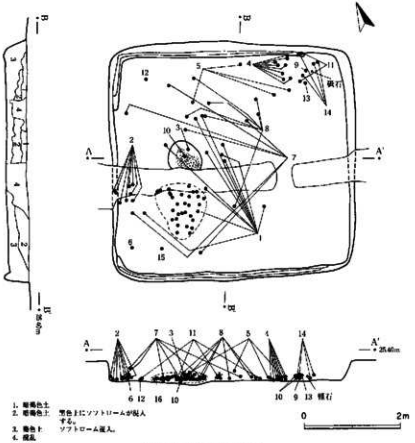
SI-005（第59・60図，図版21）

11P-07グリッド付近に所在する。SD-019に本遺構中央部を切られている。竪穴は5.14m×5.00mの方形で，深さは0.42m～0.47m，主軸方位はN-66°-Wである。壁溝は北東壁から北西壁の一部にかけてと，南西壁から西隅部分にかけての2か所に部分的にある。柱穴は検出されなかった。炉はSD-019に3分の1ほど壊されており，残存部径0.72mのわずかな掘り込みをもち，被熱により焼けて硬化している。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下層にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

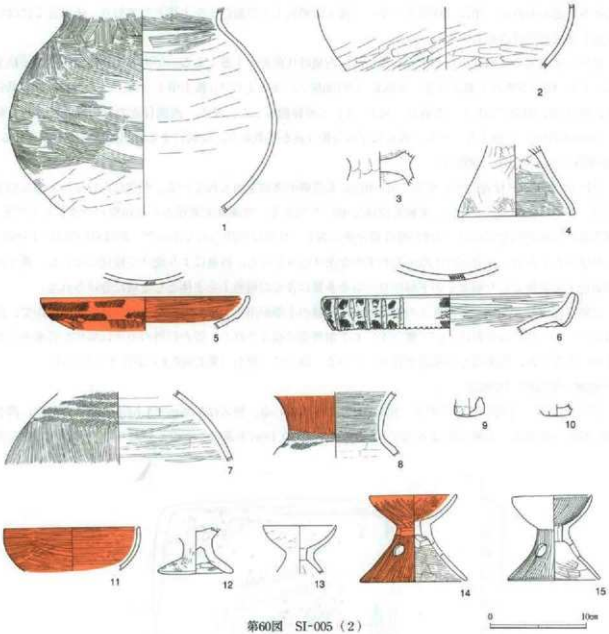
遺物（図版42・43）　床面直上の広範囲から多数の土器が出土している。小片が主体であるなかで，器台2点（14・15）は完形に近い。甕（1）も7割程度に復元された。器台以外の小片は破片が投棄されたものであろうが，装飾壺や小形壺が目立っている。ほかに，軽石（第138図3）が出土している。

SI-006（第61図，図版21）

9P-03グリッド付近に所在する。SD-001に切られている。竪穴は5.06m×4.62mの隅丸方形で，深さは0.23m～0.26m，主軸方位はN-50°-Wである。深さ0.18m未満のごく浅く先細りの小穴が3か所に記



第59図　SI-005（1）



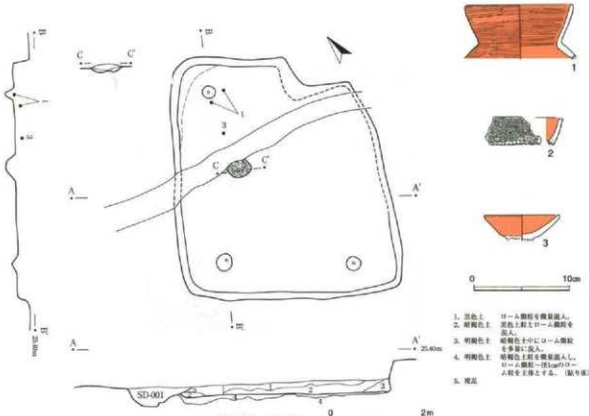
第60図　SI-005（2）

録されているが，柱穴とは考えにくい。炉はSD-001に３分の１ほど壊されている。が，残存部分の最大径0.52mの掘り込みをもち，最大径0.36mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は黒褐色土を主体とした層と壁近くロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版43）　出土量は少なく，図示したものを含めてすべて破片である。住居北隅付近のピット周辺から壷（１）と器台（３）が出土している。壷（２）は一括取り上げである。

SI-007（第62図，図版22）

８P-92グリッド付近に所在する。東側を南北にSD-001が切っている。竪穴は6.10m×5.30mの隅丸方形で，深さは0.34m～0.44m，主軸方位はN-22°-Wである。対角線に整然と掘り込まれたP1-P5-P3-P4は主柱穴であろう。深さは0.35m～0.60mである。また床面を剥がした結果，Ｐ5の西側に古い時期の柱穴と考えられるＰ２があり，深さは0.51mである。貯蔵穴は南東壁中央部と東隅の中間にあり，0.69m×0.56mの隅丸方形で，深さ0.29mである。炉は掘り込みをもたず，0.82m×0.68mの範囲で被熱による赤



第61図　SI-006

色化と硬化がみられた。全体に貼床をしており，主柱穴４基を結んだ範囲と貯蔵穴付近に床面の硬化が認められた。床面付近には焼土・炭化粒を多量に含む層が形成され，その上を黒褐色土とロームの混在層が覆っている。

遺物（図版43・44）　遺物は南東隅近くの覆土中に集中していた。完形，または完形に近い小形壺（３），壺（４），高杯2点（５・６）を含んでいた。土器以外では砥石（第137図12）が出土している。

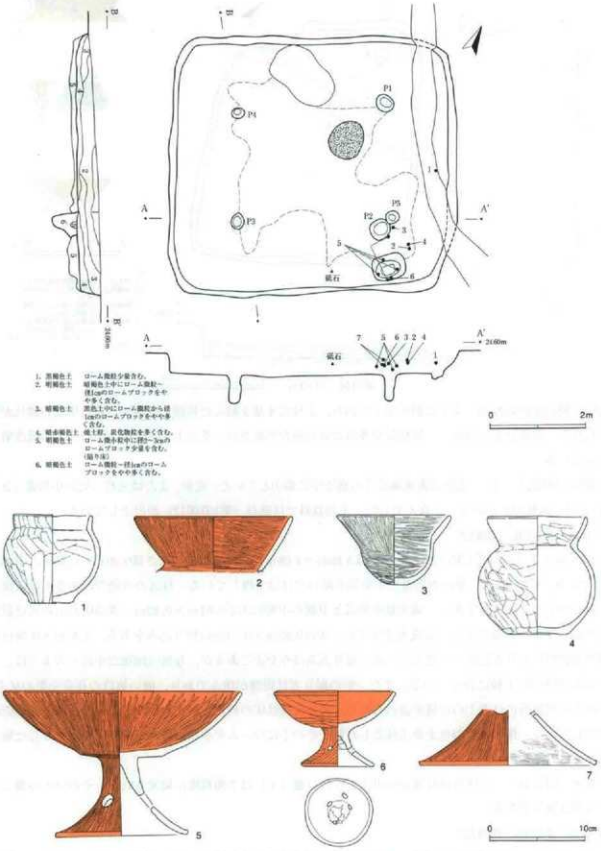
SI-008（第63図，図版22）

９P-00グリッド付近に所在する。竪穴は3.86m×4.08mの隅丸方形で，深さは0.39m～0.46m，主軸方位はN-46°-Wである。　壁溝が南東壁中央部を除いてほぼ全周している。柱穴の可能性があるのは，深さ0.39mの小穴１基のみである。南東壁中央部と東隅の中間にある0.61m×0.43m，深さ0.22mの穴は貯蔵穴であろうか。貯蔵穴としては底面が小さい。炉は0.83m×0.74mの掘り込みをもち，0.46m×0.36mの範囲で被熱により赤色化・硬化している。掘り込みはやや歪であるが，写真（図版22中段）のように，本来の炉は竪穴の主軸に合っている。また，炉の掘り方は周囲が窪んでおり，囲い施設の存在を思わせる。床面上の数箇所には焼土の堆積が認められた。図の破線は床の硬化を示す。炉や貯蔵穴の周囲と，壁際が硬化している。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版44）　住居東隅付近から出土した台付甕（１）は７割程度に復元された。そのほかの甕２点と高杯は破片である。

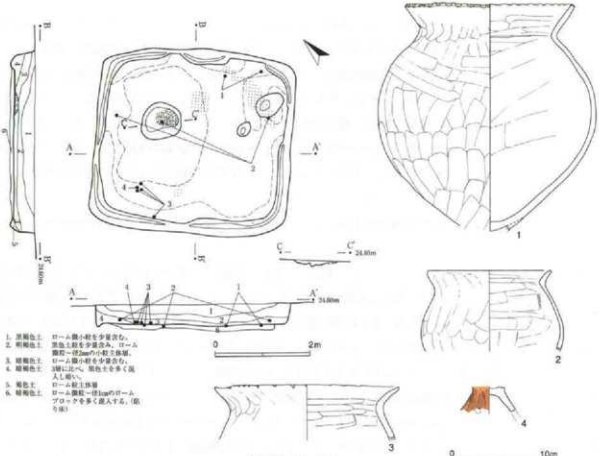
SI-009（第64図，図版22）

９N-39グリッド付近に所在する。竪穴の平面形は方形ないし隅丸方形で，規模は5.36m×5.41m，深さは0.35m～0.46m，主軸方位はN-43°-Wである。貯蔵穴は南隅付近にあり，0.76m×0.74mの隅丸長方形



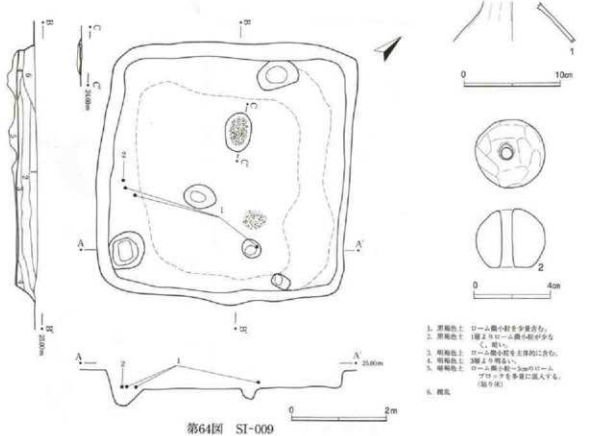
1. 黒褐色土　ローム粒粒少量含む。
2. 明褐色土　暗褐色土中にローム粒粒～径1cmのロームブロックをやや多く含む。
3. 暗褐色土　黒色土中にローム粒粒から径3cmのロームブロックをやや多く含む。
4. 暗赤褐色土　焼土粒、炭化物粒を多く含む。
5. 明褐色土　ローム粒小粒中に径2～3cmのロームブロック少量を含む。（貼り床）
6. 暗褐色土　ローム粒粒～径1cmのロームブロックをやや多く含む。

第62図　SI-007



1. 黒褐色土　ローム微小粒を少量含む。
2. 明褐色土　黒色土粒を少量含み、ローム微粒～径2mmの小粒子多量。
3. 暗褐色土　ローム微小粒を少量含む。
4. 暗褐色土　3層に比べ、黒色土を多く混入し硬い。
5. 褐色土　ローム粒子多量
6. 暗褐色土　ローム微粒～径1cmのローム・ブロックを多く混入する。(粘り強)

第63図　SI-008



1. 黒褐色土　ローム微小粒を少量含む。
2. 黒褐色土　1層よりローム微小粒が少なく、硬い。
3. 明褐色土　ローム微小粒々を主体的に含む。
4. 明褐色土　3層より明るい。
5. 暗褐色土　ローム微小粒～5cmのローム・ブロックを多量に混入する。(粘り強)
6. 焼土

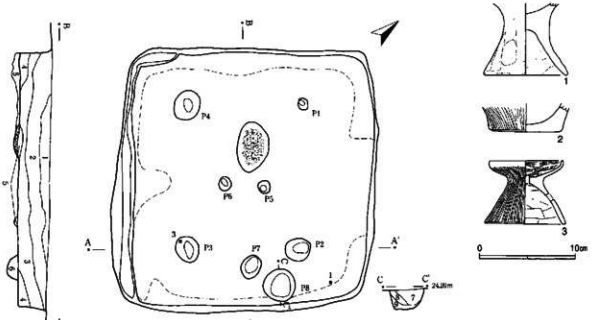
第64図　SI-009

で，深さは0.40mである。そのほかの小穴4基は深さ0.19m～0.24mとごく浅く，柱穴とするには貧弱である。炉は0.82m×0.54mの掘り込みをもち，0.63m×0.36mの範囲で床面付近が焼けて硬化している。炉の周囲は焼けておらず，掘り方の周囲は窪んでいる（図版13下段）ので，囲い施設を伴った可能性がある。このほかに，もう1つ，床面が0.53m×0.45mの範囲で焼けて硬化した部分がある。これが炉であると，むしろ南隅の貯蔵穴との位置関係が一般的な状態となる。古い炉の痕跡であろう。建て替えの際に主軸方位が90度回転した可能性がある。図の破線は床の硬化を示す。中心部は硬化しておらず，むしろ周囲が踏みしめられている。覆土は黒褐色土主体の上層と，ローム主体の床面付近の層に分けられる。ロームブロックを多量に含む上で貼床している。

遺物（図版44）　甕の小片と土錘が出土している。非掲載の土師器片も含めて前期の住居跡であろう。

SI-010（第65図，図版23）

9P-41グリッド付近に所在する。竪穴は5.48m×5.46mの方形で，深さは0.58m～0.72m，主軸方位はN-48°-Wである。壁溝は南西壁部分と西隅にかけて遺存する。小穴が7基あり，P1～P4は主柱穴であろう。深さは0.44m～0.58mである。P1以外は掘り方が大きく，柱を抜き取った可能性がある。炉付近，竪穴の中央には0.29m～0.32mの2基の小穴が並ぶ。棟持柱であろうか。P7は深さ0.24mで，位置から出入口施設の可能性がある。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.76m×0.68mの隅丸方形で，深さは0.45mである。炉は1.08m×0.67mのわずかな掘り込みをもち，中央にやや窪んだ被熱による赤色化・硬化面が形成されている。炉の上は貼床状に塞がれていた。床面のほぼ全体が踏みしめられていた。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。



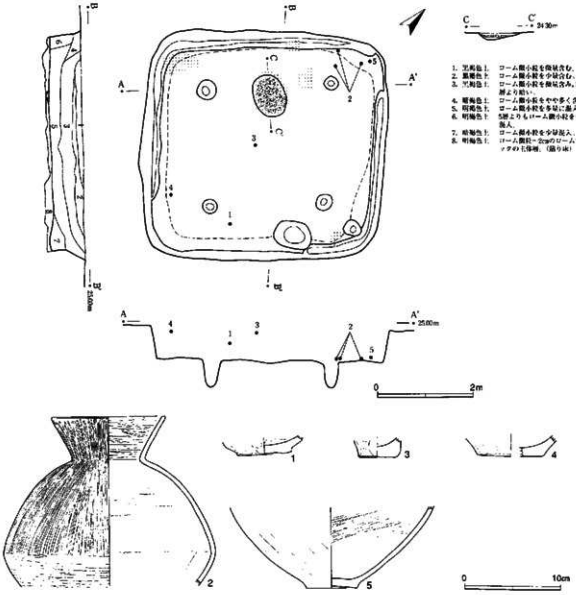
第65図　SI-010

遺物（図版44）　出土遺物は少ない。P３付近の覆土中から出土した器台（３）は７割程度に復元された。出土位置が不明の甕と壺は小片である。

SI-011（第66図，図版23）

９N-69グリッド付近に所在する。竪穴は5.12m×4.78mの隅丸方形で，深さは0.58m～0.73m，主軸方位はN-42°-Wである。南東壁と北東壁の一部を除いて壁溝をもつ。小穴は５基あり，主柱穴は深さ0.51m～0.57m，東隅の小穴は深さ0.32mである。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.79m×0.56mの楕円形，深さは0.32mである。炉は0.90m×0.67mのわずかな掘り込みをもち，ほぼ全面が被熱して赤色化・硬化している。床面付近には焼土・炭化粒が堆積していた。覆土は黒褐色土を主体とした上層と，ロームを多量に含んだ下層に分けられる。

遺物（図版44）　出土遺物は少ない。南隅付近の床面から出土した壺２点（２・５）と，覆土上層から



第66図　SI-011

出土した甕（1），壺（3・4）では投棄の時期が異なるであろう。床面出土の2点は遺存度が高いが，これも含めてすべて破片である。

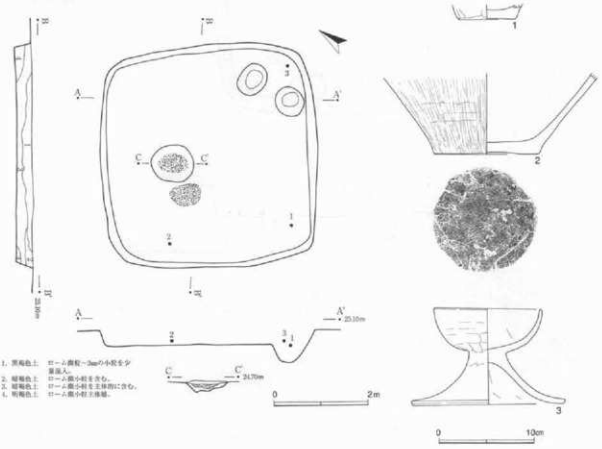
SI-012（第67図，図版23）

9P-70グリッド付近に所在する。竪穴は4.66m×4.61mの隅丸方形で，深さは0.32m～0.40m，主軸方位はN-37°-Wである。貯蔵穴は東隅付近に2基が並ぶ。北側が0.69m×0.54m深さ0.27m，南側が0.62m×0.56m深さ0.35mで，ともにほぼ円形である。新旧は判断できなかった。炉は0.90×0.75mの掘り込みをもち，0.56m×0.52mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。被熱した面は床面より高く，周囲は焼けていない。掘り方の周囲が一部窪んでいることも考慮すると，囲い施設を伴った可能性がある。また，隣の0.68m×0.45mの焼け面は硬化しており，古い炉であろう。貯蔵穴と炉が複数みられることから，建て替えが行われたものと考える。なお，当遺跡において，炉の位置が竪穴の中心軸からずれたものをみると，貯蔵穴側（東側）に寄るのが通例であり，反対側に寄っているのは唯一の例である。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版44・45）　出土遺物は少ない。東隅の貯蔵穴付近から完形の高杯（3）が出土した。甕底部と壺底部は小片である。

SI-013（第68図，図版24）

8Q-11グリッド付近に所在する。竪穴は6.82m×7.62mの長方形，深さは0.40m～0.53m，主軸方位は



第67図　SI-012

N-24°-Wである。壁溝は全周する。P1～P4は主柱穴で，深さは0.38m～0.64mである。P4には造り替えの痕跡が認められる。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.76m×0.60mの楕円形で，深さ0.24mである。炉は0.65m×0.62mの範囲のわずかな掘り込みをもち，全体的に被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は黒色土を主体とした上層と，ローム主体の下層に分けられる。

遺物（図版45）　出土遺物は少なく，台付甕（1～3），壺（4・5），器台（6）はすべて破片である。貯蔵穴の覆土中から軽石が1点出土している。出土地点は不明であるが砥石（第137図14）が出土している。

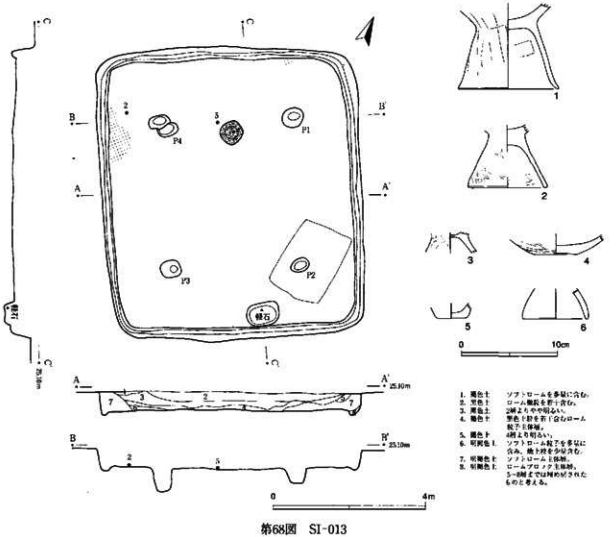
SI-014（第69図，図版24）

8R-00グリッド付近に所在する。竪穴は5.30m×5.86mの隅丸方形で，深さは0.36m～0.46m，主軸方位はN-19°-Wである。炉は掘り込みをもたない。0.73m×0.69mの範囲で床面が赤色化・硬化している。これ以外の，柱穴や周溝などの施設は見つかっていない。覆土は黒褐色土を主体とした上層と，ロームを主体とした下層に分けられる。

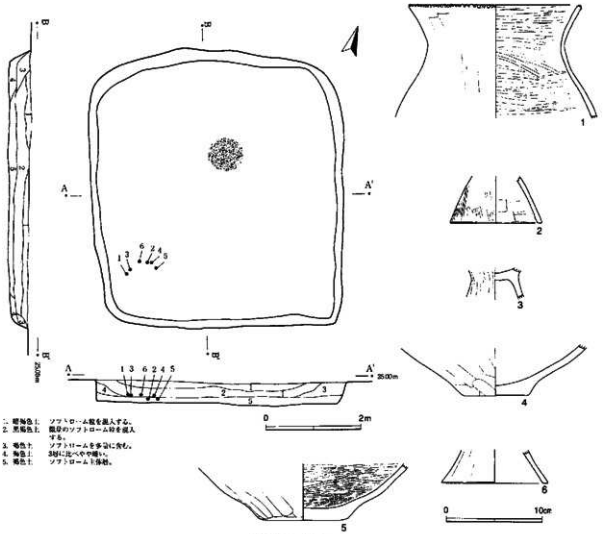
遺物（図版45）　出土遺物は少ない。甕（1），台付甕（2・3），壺（4・5），高杯（6）はまとまって，あたかも並べたように出土したが，すべて破片である。5層が堆積した後に廃棄したものであろう。

SI-015（第70図，図版24）

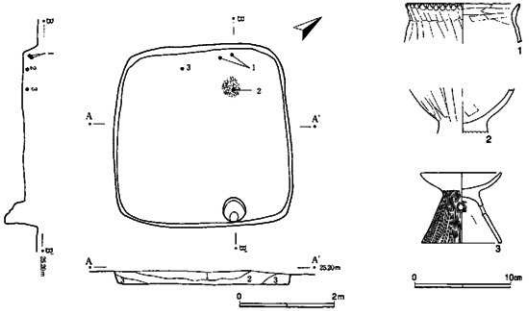
8R-76グリッド付近に所在する。竪穴は3.74m×3.80m，深さは0.26m～0.36m，主軸方位はN-59°-W



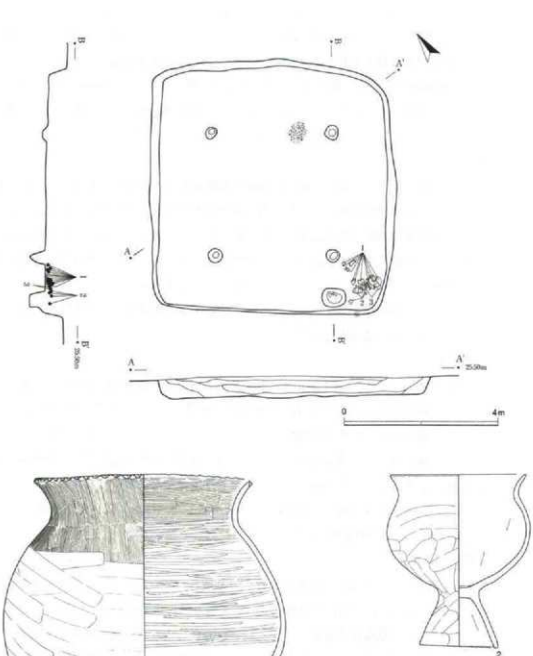
第68図　SI-013



第69図　SI-014



第70図　SI-015



第71図　SI-016

である。壁溝をもたない。南東壁中央部からやや東側に径0.48m，深さ0.43mの小穴がある。底に段があり最深部は壁側にある。貯蔵穴か，または出入口施設と考えられる。炉は掘り込みをもたず，0.51m×0.40mの範囲で被熱による床面の赤色化と硬化がみられる。位置はかなり北隅側に偏っている。図示していないが，床面近くに焼土の堆積がみられる。覆土は黒褐色土主体の上層と，ローム主体の下層に分けられる。

遺物（図版45）　出土量が少なく，器台（3）はほぼ完形で，壁際の床面直上から出土した。甕・台付甕（1・2）は破片である。ほかに，出土地点不明の軽石が1点出土している。

SI-016（第71図，図版25）

9S-00グリッド付近に所在する。竪穴は6.46m×6.66mの隅丸方形で，深さは0.46m～0.56m，主軸方位はN-30°-Eである。小穴4基は位置関係から主柱穴の可能性があるが，深さ0.11m～0.52mと浅く，不揃いである。貯蔵穴は南西壁中央南隅の中間にある。0.60m×0.46mの隅丸長方形ないし楕円形で，深さ0.39mである。炉は掘り込みをもたず，0.52m×0.44mの範囲で被熱による床面の赤色化と硬化がみられる。覆土は黒褐色土を主体とした上層と，ロームを多く含む下層に分けられる。

遺物（図版45）　少数ながら南隅付近に集中が認められる。潰れた状態で出土した台付甕2点（1・2）は，完形に復元できた。高杯（3）は破片である。

SI-017（第72図，図版25）

7Q-80グリッド付近に所在する。竪穴は4.30m×4.20mの隅丸方形で，深さは0.49m～0.56m，主軸方位は決めがたいが，炉の長軸を基準とするとN-18°-Wである。壁溝は全周している。炉は0.60m×048mの掘り込みをもち，一部が被熱により赤色化・硬化していた。写真（図版25中段）をみると，硬化の範囲は図より広く，中心付近全体に及ぶ。周囲は焼けておらず，囲い施設の存在を思わせる。東側は一部攪乱されている。覆土は黒褐色土を主体とした上層と，ロームを多量に含んだ下層に分けられる。

遺物（図版46）　壷・台付甕の破片，砥石（第136図2）を図示した。ほかに高杯が2点出土している。砥石は，SI-002，004から出土したものと接合した。

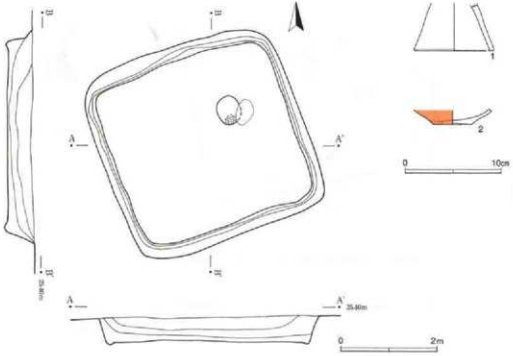
SI-018（第73図，図版25）

7Q-61グリッド付近に所在する。東側の一部が攪乱によって壊されている。竪穴の平面形はやや歪な方形で，規模は5.72m×5.18m，深さは0.42m～0.49mである。主軸方位は決めがたい。もし，P5を出入口施設とした場合にN-15°-Wとなる。壁溝は全周する。記録された小穴は，いずれも深さ0.10m～0.28mのごく浅いものである。規則的な位置関係をもち，上柱穴構造と出入口施設をもつように見えるが，いずれも柱穴とすることには躊躇せざるを得ない。炉は掘り込みをもたず，0.50m×0.38mの範囲で床面が赤色化・硬化している。覆土は黒褐色土主体層とその下の褐色土主体層に分けられる。出土遺物は皆無であった。

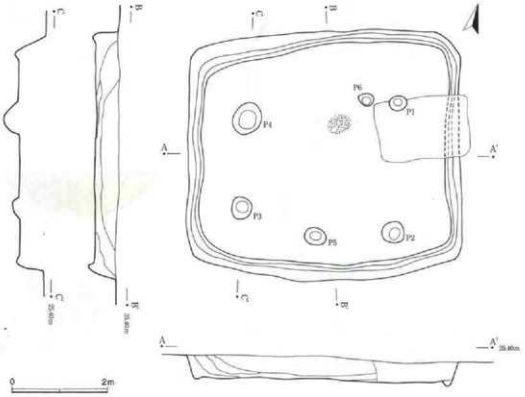
SI-019（第74図，図版26）

8P-95グリッド付近に所在する。北西側の約半分が攪乱を受けて失われている。竪穴の平面形は方形ないし長方形であろう。規模は一辺5.10m，深さは0.11m～0.15mである。主軸方位は決めがたい。小穴は8基あり，いずれも深さ0.11m～0.27mの浅いものである。柱穴としては貧弱であり，配置も規則的ではない。炉は掘り込みをもたず，0.38m×0.32mの範囲で床面が赤色化・硬化している。炉の長軸は竪穴の軸に合わない。また，床面付近の2か所に焼土の堆積がみられた。覆土はロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層である。

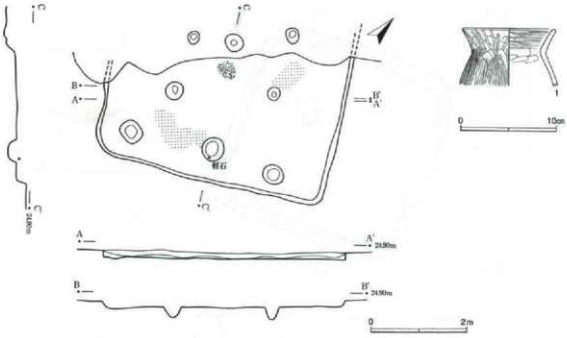
遺物（図版46）　出土遺物は少なく，甕（1）と非掲載の軽石が出土している。



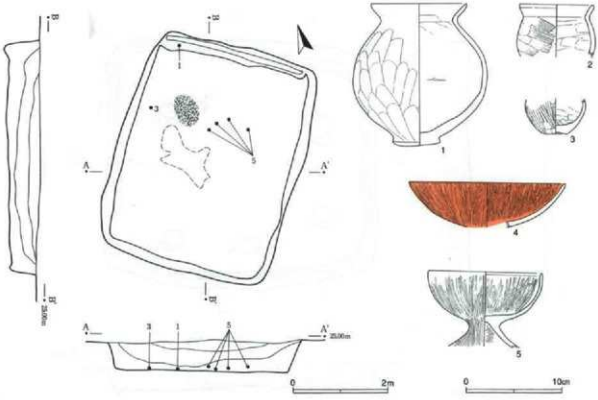
第72図　SI-017



第73図　SI-018



第74図　SI-019



第75図　SI-020

SI-020（第75図，図版26）

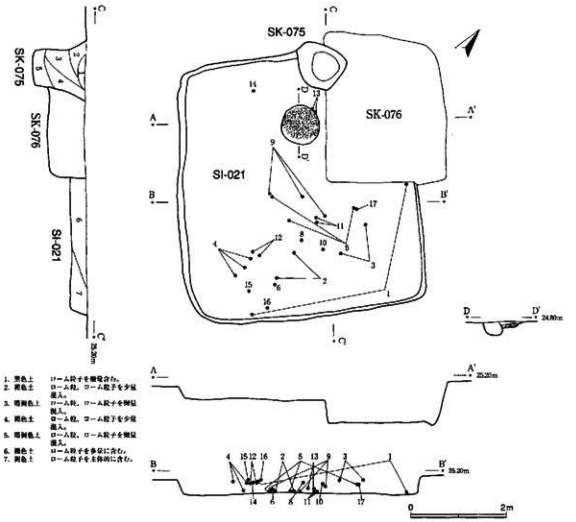
8R-72グリッド付近に所在する。竪穴は3.91m×4.88mの隅丸長方形で，深さは0.52m～0.71mである。主軸方位は判断が難しい。炉の位置は中軸の東側にずれるのが一般的であるので，これに従うとN-33°-Eとなる。壁溝は北東壁の1辺だけにある。炉は掘り込みをもたず，床面が0.70m×0.46mの範囲で赤色化・硬化している。炉の軸は竪穴に合わない。炉の南側に床面の硬化が認められた。

遺物（図版46）　床面出土は完形の甕（1）と鉢（3）の破片である。覆土最下層，床面から若干浮いていたのは高杯（5）である。出土位置不明の資料には非掲載も含めると高杯2点・甕1点・軽石1点がある。

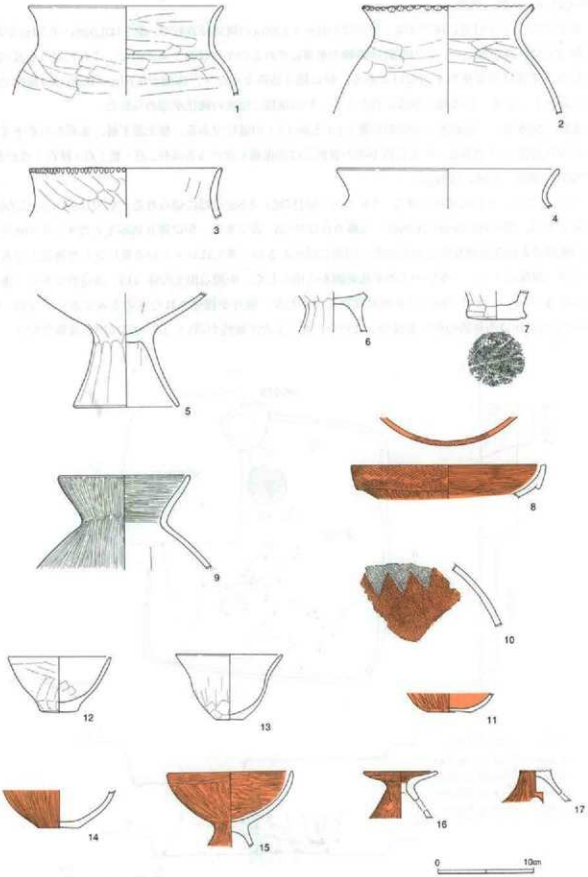
SI-021（第76・77図，図版26）

9R-52グリッド付近に所在する。SK-076（第117図）とSK-075に切られる。竪穴は5.10m×5.56mの隅丸長方形，深さは0.26m～0.36m，主軸方位はN-35°-Wである。炉は掘り込みをもたず，0.80m×0.66mの範囲で赤色化と硬化が認められた。円形に近く大きい。覆土はロームを多量に含んだ褐色土である。

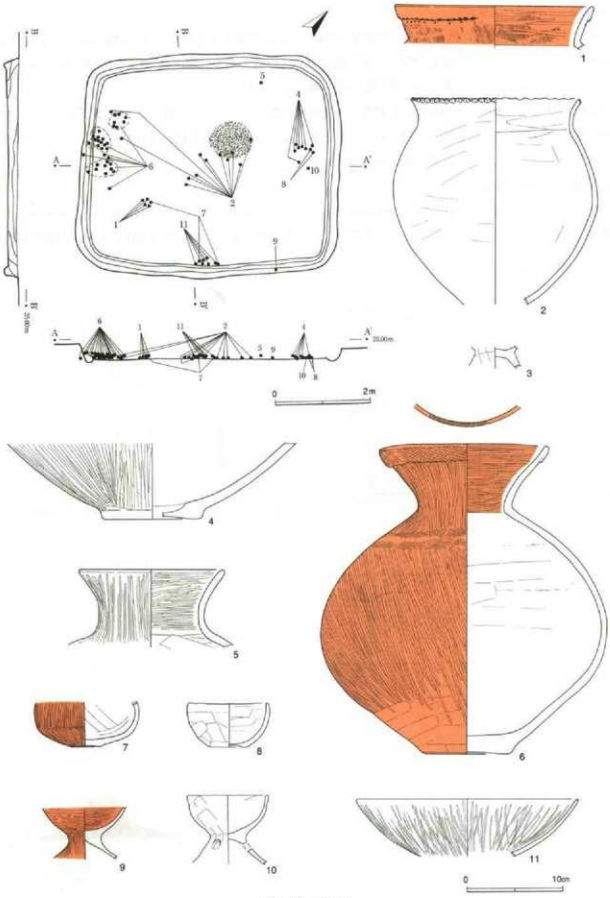
遺物（図版46・47）　多数の土器が広範囲から出土した。炉周辺出土の鉢（13）は完形である。南半の集中は鉢（12）と器台（16）が6割程度復元できたが，破片が投棄されたものとみてよい。なお，SK-076出土の高杯は当住居の破片と接合したので，流入した可能性が高い。SK-075は出土遺物がない。



第76図　SI-021（1）・SK-075



第77図 SI-021（2）



第78図　SI-022

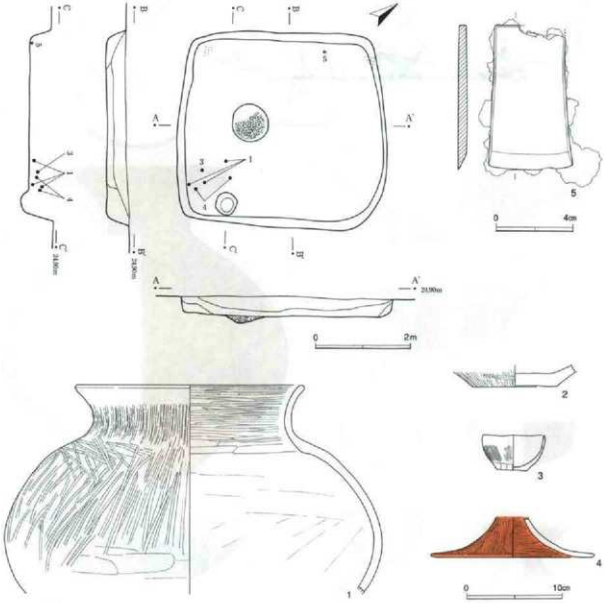
SI-022（第78図，図版27）

9Q-14グリッド付近に所在する。竪穴は5.45m×4.68mの隅丸長方形で，深さは0.19m～0.32mある。主軸方位は決めがたいが，横長の竪穴とみた場合でN-43°-Wとなる。壁溝は全周する。炉は0.92m×0.78mのわずかな掘り込みをもち，全体的が赤色化・硬化していた。

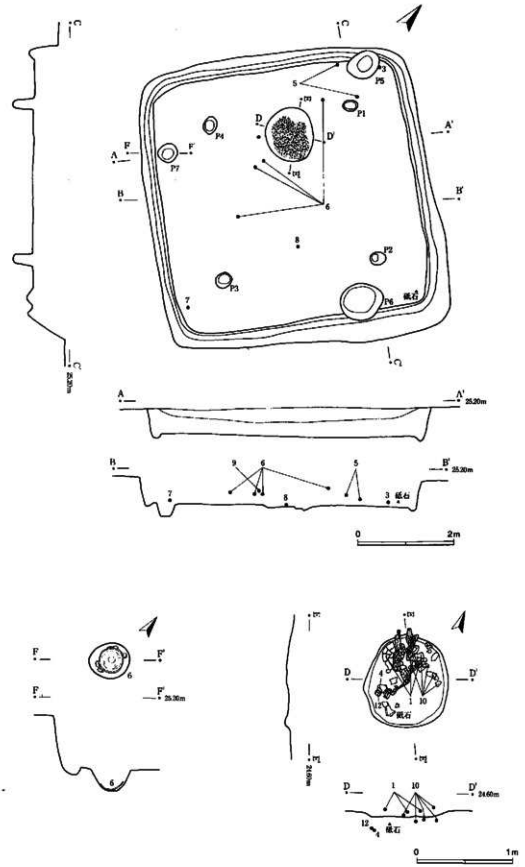
遺物（図版47・48）　床面付近の広範囲で多量の破片が出土したが，個体数はそれほど多くない。少数の個体が細かく潰れた状態であった。壺（6）と鉢（8）が完形に近く復元された。甕（2）も6割程度復元された。ほかは破片の状態で投棄されたものであろう。

SI-023（第79図，図版27）

8Q-95グリッド付近に所在する。竪穴は4.42m×4.08mの隅丸方形で，深さは0.36m～0.43mある。主軸方位は決めがたいが，仮に図示したようにみるとN-57°-Wである。南東壁中央部からやや南側の楕円形



第79図　SI-023


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
D
D'
A
A'
B
B'
F
F'
H
H'
C
C'
5
6
7
8
9
10
1
3
12
13
24.80m
25.20m
25.30m
24.60m
礫石
0
2m
1m

第80図　SI-024（1）

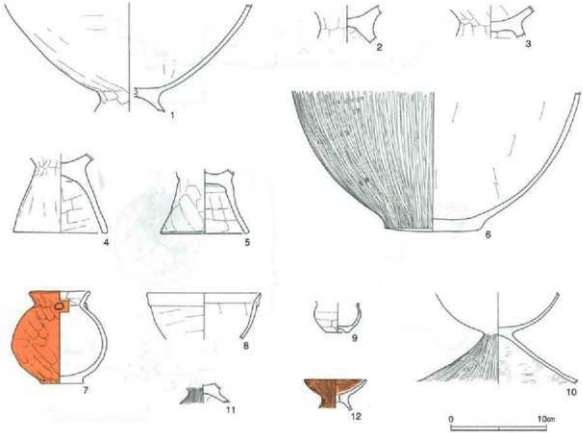
の小穴は貯蔵穴であろうか。0.44m×0.42m，深さ0.17mである。炉は0.78m×0.80mの掘り込みをもち，0.62m×0.48mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。北隅と西隅付近の床面近くに焼土の塊がある。覆土は黒褐色土を主体とする上層と，ロームを多量に含んだ下層に分けられる。

遺物（図版48）　出土遺物は少ない。南隅付近にやや土器が集中し，鉢（3），高杯（4），甕（1）が出土している。3は完形に近いが，ほかは破片である。砥石（第136図4）も出土している。また，北西壁近くから鉄斧（5）が出土している。砥石はSI-024出土の2点と接合する。接合する場所の厚みが他の2点より薄く磨り減っていることから，欠損または分割後，使用されたことがわかる。

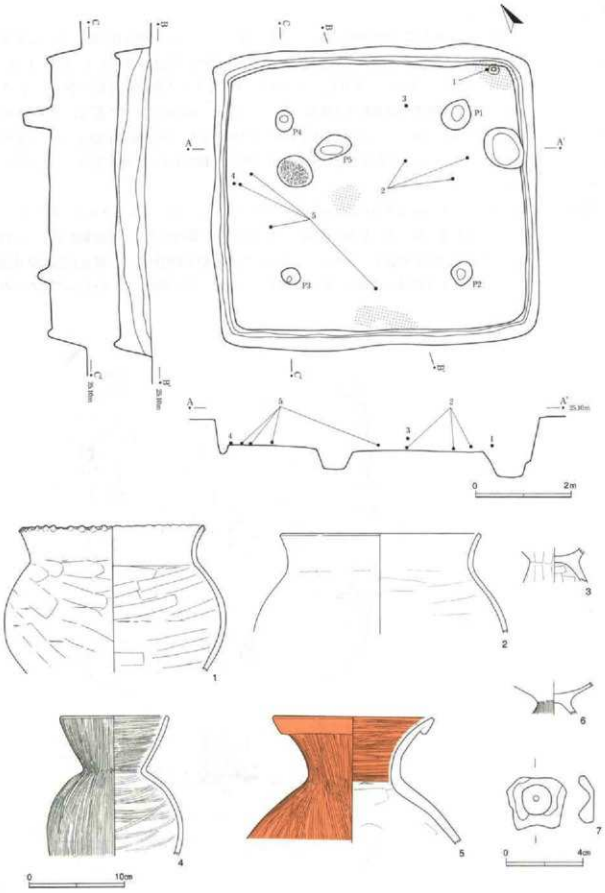
SI-024（第80・81図，図版27）

9Q-53グリッド付近に所在する。竪穴は6.14m×6.08mの方形で，深さは0.52m～0.63m，主軸方位はN-45°-Wである。壁溝は全周する。P1～P4の主柱穴以外に3基の小穴をもつ。南東壁のP6は0.92m×0.76m，深さ0.44m，北隅のP5は0.70m×0.53m，深さ0.21mである。また，南西壁付近のP7は0.42m×0.39m，深さ0.44mで，底から甕底部が出土した。P5とP6は貯蔵穴か。炉は0.98m×1.12mのわずかな掘り込みをもち，0.93m×0.82mの範囲で被熱硬化がみられる。中心付近がよく焼けて高まっており，上面から土器と炭化材が出土した。覆土は黒褐色土主体の上層と，ローム主体の下層に分けられる。

遺物（図版48）　床面近くから出土したのは台付甕破片（1・3・4），完形の壺（7），高杯破片（10）である。このうち1・10は炉内で炭化材とともに出土した。甕（6）はP7の底面から出土した。ほかは覆土中から出土した破片である。土器以外では，軽石と砥石が各1点出土している。3点出土した砥石のうち，2点（第95図5・6）は，SI-023出土の1点と接合する。



第81図　SI-024（2）

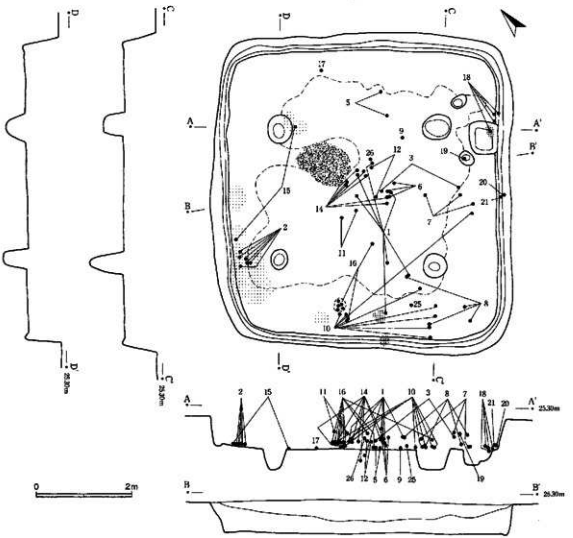


第82図　SI-025

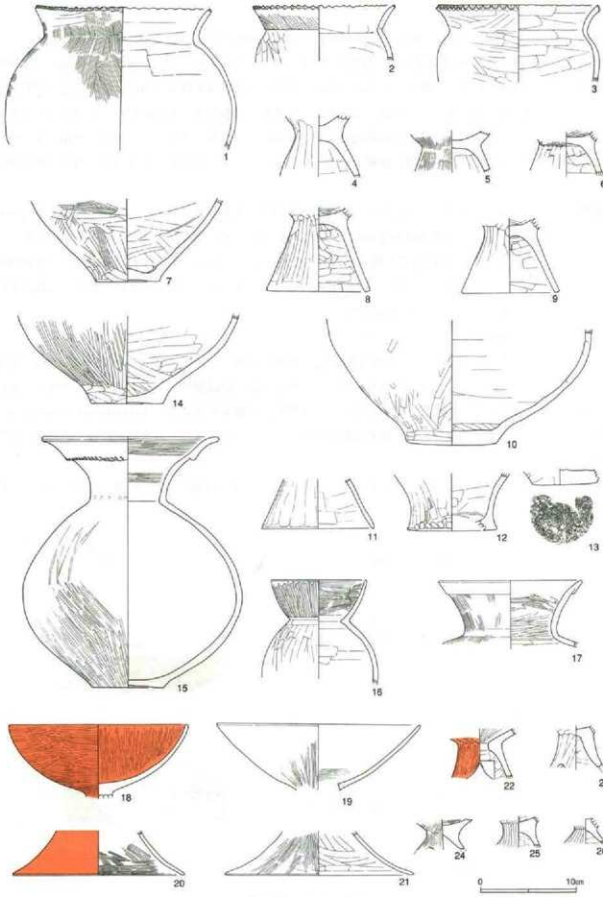
SI-025（第82図，図版28）

9R-25グリッド付近に所在する。SD-016によって南北に切られている。竪穴は6.24m×6.78mの方形ないし長方形で，深さは0.62m～0.86m，主軸方位はN-55°-Wである。壁溝は全周する。P1～P4は深さが0.24m～0.56mと不揃いであるが，主柱穴であろうか。P5はやや不整な楕円形の小穴で，深さは0.39mである。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.86m×0.81mの隅丸方形で，深さ0.49mである。炉はほとんど掘り込みをもたず，0.78m×0.64mの焼け面のうち，中心部の0.63m×0.46mが被熱により赤色化・硬化している。3か所検出した焼土の堆積のうち，東隅付近では焼土中から，伏せた状態で甕（1）が出土した。

遺物（図版48・49）　出土遺物は少ないが，図示した土器はすべて床面上で発見された。甕（1），壺（4・5）は底部から胴下半部を欠損するものの横方向にきれいに折り取られたような印象がある。このような状態で再利用された可能性を考慮すべきかもしれない。なお，1は東隅付近で，倒立状態で発見された。土器以外では土師器片を再利用した製品（7）が出土している。回転研磨に用いたものであろうか。



第83図　SI-026（1）



第84図　SI-026（2）

SI-026（第83・84図，図版28）

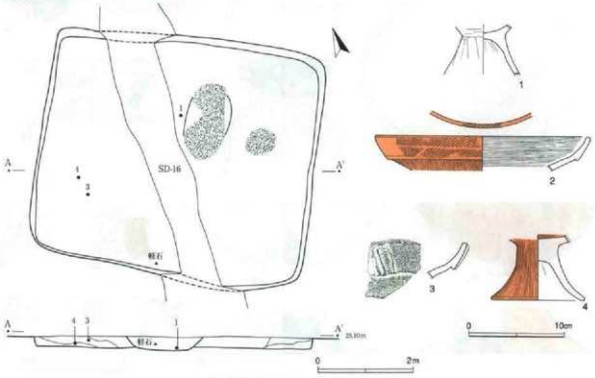
9Q-84グリッド付近に所在する。竪穴は6.66m×6.35mの隅丸方形で，深さは0.64m～0.70m，主軸方位はN-44°-Wである。壁溝は全周する。小穴が4基有り，深さは0.71m～0.43mである。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.69m×0.60mの隅丸長方形で，深さは0.31mである。貯蔵穴と主柱穴の間に深さ0.14mと0.23mの2基の小穴が並んでいるのは棟持柱であろうか。炉は1.12m×0.91mのわずかな掘り込みをもち，全体的に被熱による赤色化と硬化がみられる。西隅を中心として焼土の堆積が4か所でみられ，南西壁中央部からやや南側には粘土の塊が2か所ある。覆土は黒褐色土主体の上層と，暗褐色土主体の下層に分けられる。

遺物（図版49・50）　多量の土器片が入っていた。第83図の垂直分布をみると，床面上に廃棄されたものと，ある程度埋まってから窪みに廃棄されたものに分けることができそうである。前者には2・5・9・10・15・17・18があり，7・8は前者と後者の間で破片が接合したもの，他は後者に属する。半分程度に復元された壺（15・16）を除くと，あとはすでに破片となったものが，2度（以上）にわたって廃棄されたようである。全体として，竪穴の南半に多い。

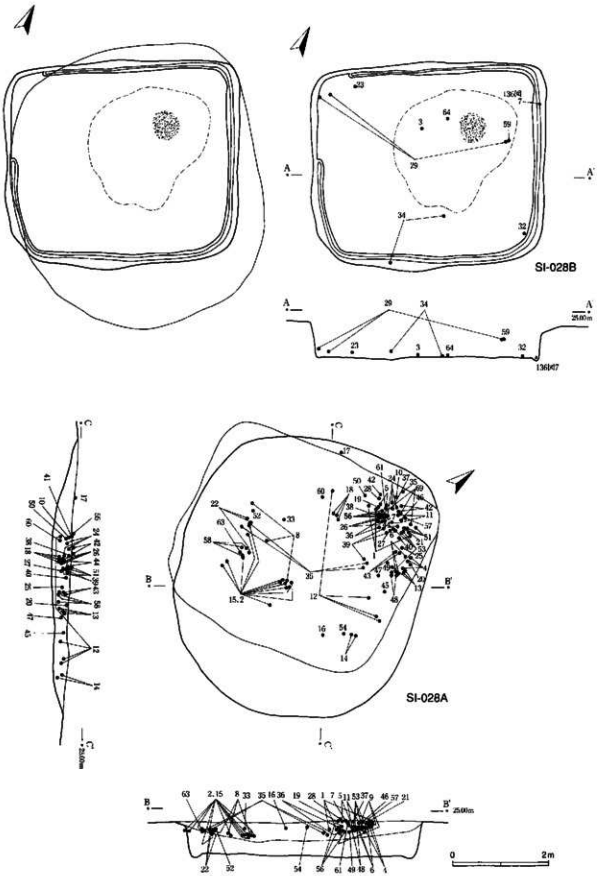
SI-027（第85図，図版28）

9R-45グリッド付近に所在する。中央部を南北にSD-016が切っている。竪穴は5.88m×5.00mの隅丸長方形で，深さは0.21m～0.25m，主軸方位はN-25°-Eである。炉は掘り込みをもたず，1.60m×0.95mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。その東側0.45m離れたところにも0.66m×0.56mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。柱穴は検出されていない。覆土はロームを多量に含んだ褐色土主体であった。

遺物（図版50）　出土遺物は少なく，台付甕（1），壺（2・3），高杯（4）を図示した。ほかに，軽石が1点出土している。

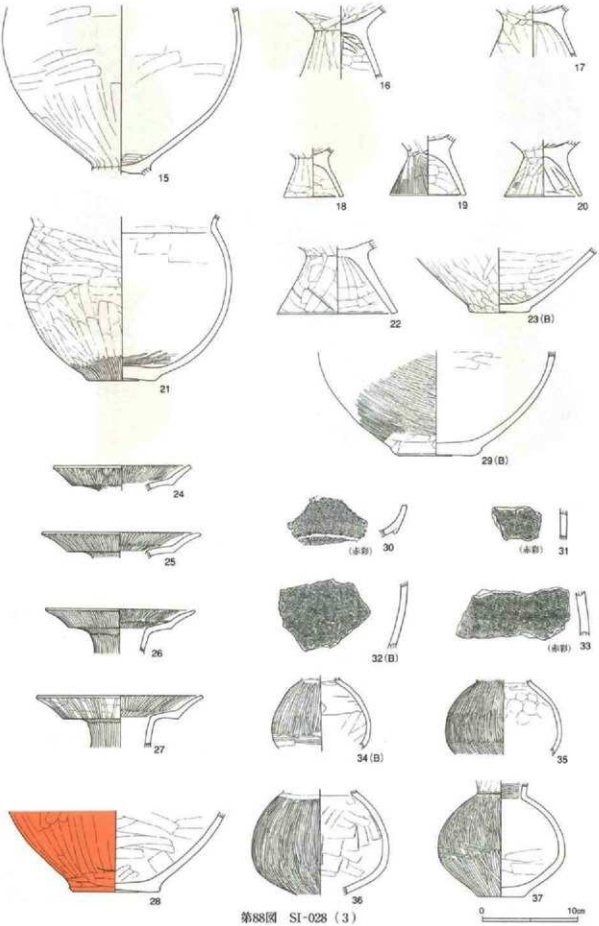


第85図　SI-027

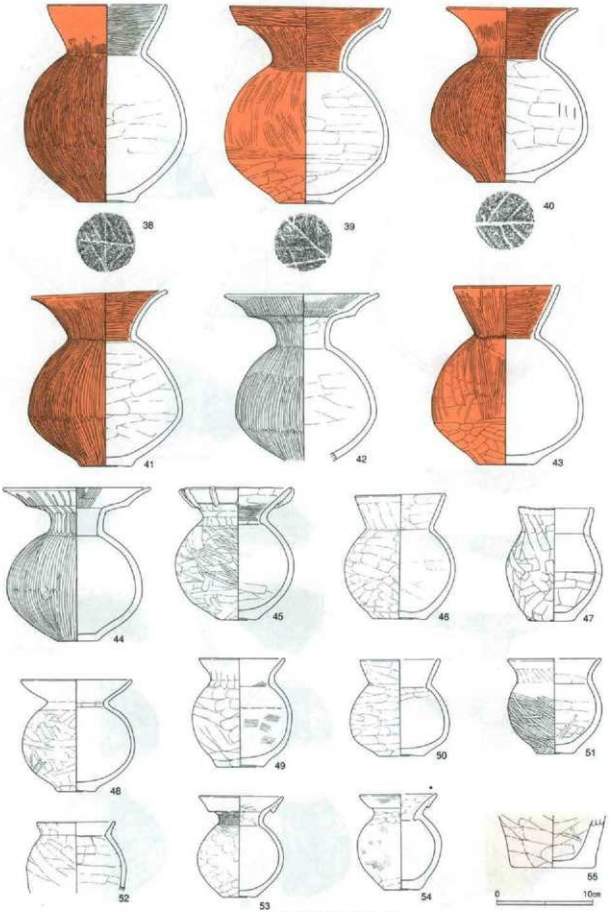


第86図　SI-028（1）

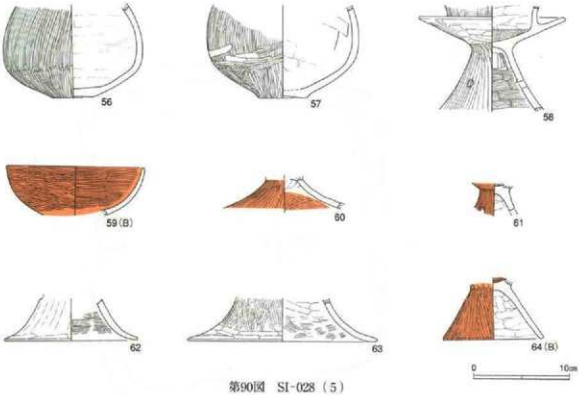
第87図 SI-028（2）


15
16
17
18
19
20
21
22
23(B)
29(B)
24
25
26
27
28
(赤彩) 30
(赤彩) 31
32(B)
(赤彩) 33
34(B)
35
36
37
0
10cm

第88図 SI-028（3）



第89図 SI-028（4）



第90図　SI-028（5）

SI-028（第86～90図，図版29）

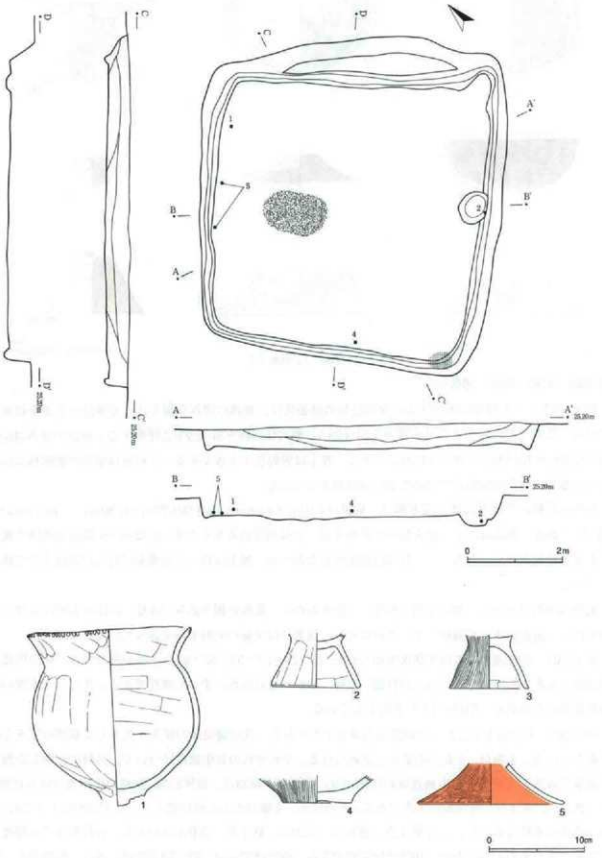
10R-14グリッド付近に所在する。竪穴住居の廃絶後に，皿状の窪みを掘り込んで多量の土器を投棄している。この土器の集中と皿状の窪みをSI-028A，竪穴住居跡をSI-028Bと呼称する。皿状の窪みは6.05m×5.86mの楕円形で，深さは0.41mである。覆土は黒褐色土主体である。この層は竪穴の範囲外に広がっているが，遺物の分布は竪穴のなかにほぼ収まっている。

竪穴住居跡の平面形は隅丸長方形で，規模は4.92m×4.36m，深さは0.72m～0.89m，主軸方位はN-25°-Wである。壁溝はごく一部を除いて存在する。炉は掘り込みをもたず，0.62m×0.55mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。柱穴は検出されなかった。覆土はロームを多量に含んだ褐色土を主体としていた。

遺物（図版51～55）　竪穴住居（B号）に伴うものと，皿状の掘り込み（A号）に伴うものに分けて記載を行う。前者がすべて破損しているのに対し，後者には多量の完形土器を含んでいる。

SI-028B　第86図上段に出土状況を示した3・23・29・32・34・59・64の土器が該当する。炉の周辺や壁の近くなどに散漫に分布する。台付甕，高杯，壺がみられるが，すべて破片である。また，北東壁の壁溝北側部からは砥石（第136図7）が出土している。

SI-028A　B号出土としたもの以外の大量の土器である。住居廃絶後の窪みを拡大して皿状の窪みを掘り直している。遺物は，2か所の集中が認められる。それぞれの集中地点について，器種の判明した個体の構成をみると，北側の集中地点は台付甕10点，甕3点，壺23点，高杯2点。南側の集中地点は台付甕1点，甕2点，壺4点，複合器台1点である。そのほか，東側部からも台付甕2点，壺1点が出土しており，出土位置の不明なものに，台付甕4点，甕9点，壺23点，鉢1点，高杯3点がある。台付甕は半分程度まで復元できたものが多いなか，10はほぼ完形である。壺では37～51，53，54が完形に近い。形態の斉一性が高く，小形品が多いのが特徴である。土器以外の遺物を含まないことも特徴といえる。



第91図　SI-029

SI-029（第91図，図版29）

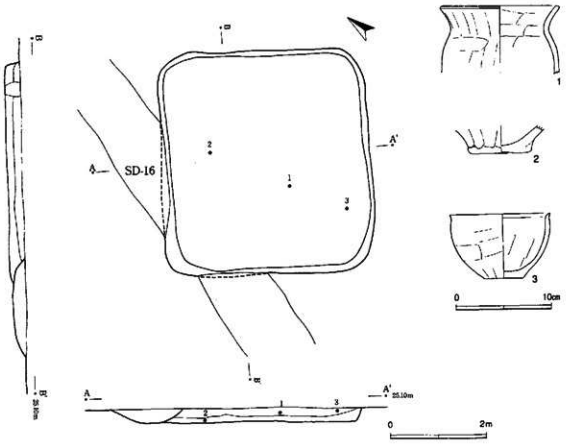
8P-39グリッド付近に所在する。竪穴の平面形はやや不整な方形ないし隅丸方形で，規模は6.85m×6.40m，深さは0.32m～0.54m，主軸方位はN-38°-Wである。壁溝は全周する。北東壁は外側に最大0.85m張り出し，テラスを形成している。ただし，全体的に壁の検出が難しく，掘りすぎた疑いもある。唯一の小穴は南東壁中央部にあるもので，0.68m×0.58mの円形で，深さは0.19mである。貯蔵穴としては小さすぎ，位置からみると出入口施設の可能性がある。炉はほとんど掘り込みがなく，中央部の1.38m×0.80mが被熱によって赤色化・硬化し，周囲は焼けていない（図版29）。これは何らかの囲い施設を伴っていた証拠であろう。南隅には粘土の塊が出土している。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版55）　出土遺物は少ない。床面よりやや浮いた壁際で散漫に出土している。台付甕（1）は台部以外完存する。ほかは台付甕（2・3），甕（4），高杯（5）の破片である。ほかに非掲載の甕2点，鉢1点が出土している。

SI-030（第92図，図版30）

9Q-11グリッド付近に所在する。一部がSD-016によって破壊されている。竪穴は4.70m×4.44mの隅丸方形で，深さは0.29m～0.35m，主軸方位はN-38°-Wである。柱穴などの掘り込みや炉などの施設がない。覆土はロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層である。

遺物（図版55）　出土遺物は少ない。甕（1・2）は小片であり，鉢（3）は7割程度に復元できた。

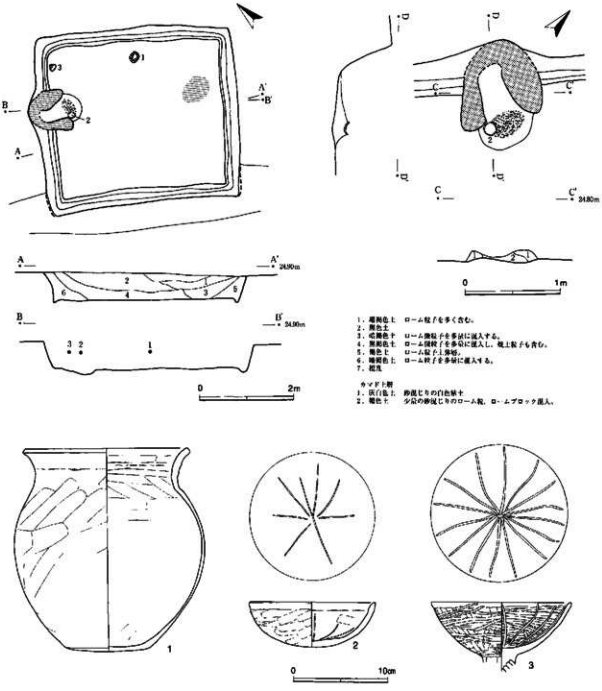


第92図　SI-030

SI-031（第93図，図版30）

10R-40グリッド付近に所在する，当遺跡唯一の古墳時代後期の住居跡である。SD-017に南西壁部分を切られる。竪穴は3.65m×4.40mの長方形で，深さは0.46m～0.66m，主軸方位はN-43°-Wである。壁溝は全周する。北西壁中央部からやや北寄りに竈がある。床面に近いところの南東壁よりに焼土の塊がある。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層に分けられる。

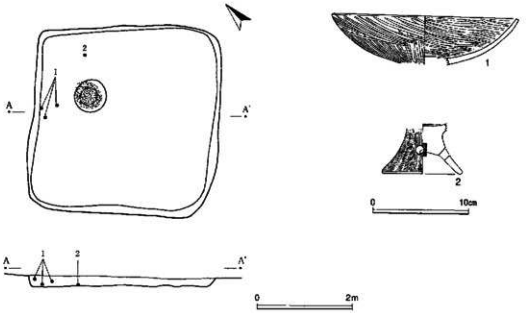
遺物（図版55・56）　古墳時代後期の土器で出土量は少ない。竈の焚き口付近からは杯（2），竈の北西脇から高杯（3）が出土した。北西壁際から出土した完形の甕（1）は床面から若干浮いた場所に正立していた。2は放射状の線刻を，3は放射状の暗文をもつ。



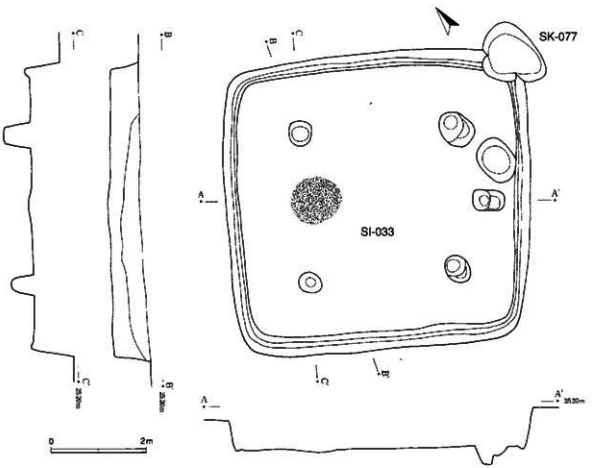
第93図　SI-031

SI-032（第94図，図版30）

9P-47グリッド付近に所在する。竪穴は3.96m×3.90mの隅丸方形で，深さは0.16m～0.23m，主軸方位はN-37°-Wである。炉は若干の掘り込みをもち，0.65m×0.65mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみ



第94図　SI-032



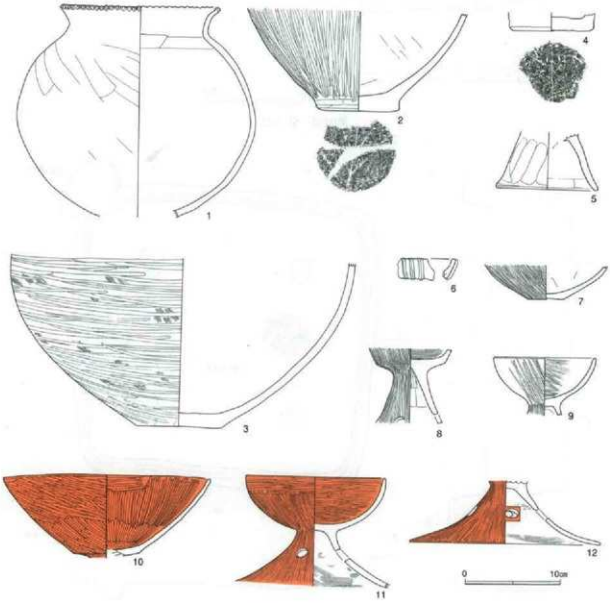
第95図　SI-033（1）・SK-077

られる。覆土はロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層である。壁や床面が検出しにくかった。柱穴は検出されなかった。

遺物（図版56）　出土量は少ない。高杯（1）と，器台（2）が出土している。

SI-033（第95・96図，図版31）

9P-86グリッド付近に所在する。東隅付近をSK-077に切られている。竪穴は6.15m×6.42mの隅丸方形で，深さは0.60m～0.82m，主軸方位はN-53°-Wである。壁溝は全周する。柱穴と考えられる掘り込みは5基あり，そのうち4基が主柱穴であろう。深さは0.38m～0.56mある。また，南東壁中央部付近にも小穴が1基あり，深さ0.36mである。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.97m×0.80mの隅丸方形で，深さ0.36mである。炉は1.00m×1.08mのわずかな掘り込みをもち，全体的に被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。



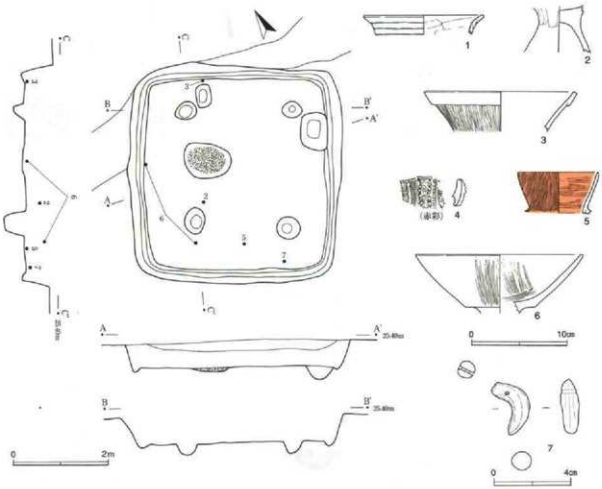
第96図　SI-033（2）

遺物（図版56）　出土地点は不明であるが台付甕（5），甕（1～4），高杯（8～12），壺（6・7）が出土している。1は6割，10は5割，11は4割ほど復元できたが，パッチ状に欠損する箇所が多いので，これらの土器を含めて破片が投棄されたものであろう。

SI-034（第97図，図版31）

10P-24グリッド付近に所在する。北隅付近を東西にSD-002が切っている。竪穴は4.53m×4.51mの隅丸方形で，深さは0.50m～0.59m，主軸方位はN-60°-Wである。壁溝は全周する。小穴4基は深さ0.22m～0.46mと浅いが主柱穴であろうか。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側と，北東壁中央部からやや北側の2か所にある。南東側は0.79m×0.56mの隅丸方形で，深さ0.26mである。北東側は0.48m×0.30mの隅丸方形で，深さ0.23mである。炉は0.98m×0.70mの掘り込みをもち，中心付近に被熱による赤色化と硬化がみられる。周囲には環状の余り焼けていない部分が認められる（図版31）ので，囲い施設を伴った可能性がある。以上のように，小形の竪穴であるにも関わらず，この時期の住居にみられる諸施設が揃っている。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版57）　出土遺物は少なく，分布は散漫である。輪積み痕を残す甕（1），台付甕（2），壺3点（3～5），高杯（6）がみられ，すべて小破片である。1・4～6は竪穴がかなり埋まった後にまとめて廃棄されたものであろう。土器以外では土製勾玉（7）が出土している。



第97図　SI-034

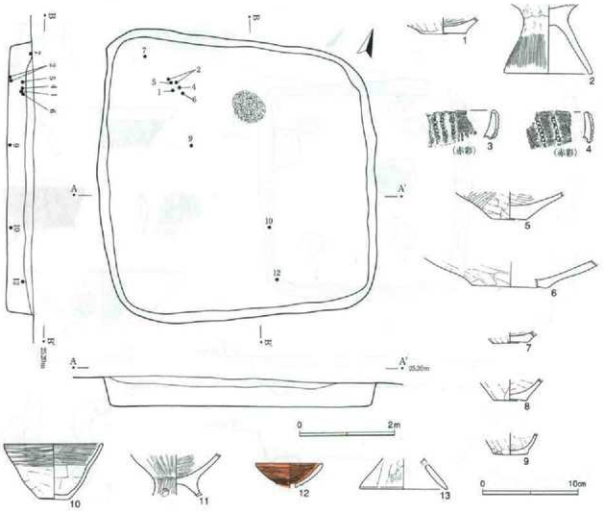
SI-035（第98図）

9P-09グリッド付近に所在する。竪穴の平面形は隅丸方形で西壁が東壁に比べやや長く，規模は5.92m×6.10m，深さは0.49m～0.63m，主軸方位は図のようにみた場合でN-17°-Wである。炉は0.76m×0.58mのわずかな掘り込みをもち，全体的に被熱による赤色化と硬化がみられる。柱穴は検出されなかった。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けることができる。

遺物（図版57）　第98図の垂直分布をみると，床面または若干土が埋まった時点で入っている台付甕（2），壺（9），鉢（10）と，竪穴がかなり埋まってから入った甕（1），壺（4～7），器台（12）に分けることができる。半分程度に復元できた10も含めて，2度以上にわたって破片が廃棄されたものであろう。土器以外では，軽石が1点出土している。

SI-036（第99図，図版31）

10R-44グリッド付近に所在する。竪穴の平面形は隅丸方形である。検出が難しく，掘り上がった状態はかなり傾斜をもつ。規模は3.82m×3.66m，深さは0.37m×0.51mである。主軸方位は決めがたい。仮に炉が中軸線上にあるとみたとき，N-129°-Eである。炉は掘り込みをもたず，0.38m×0.35mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐



第98図　SI-035

色土を主体とした層に分けられる。床面の北西半分に硬化面が確認できている。

遺物（図版57）　床の硬化面の部分から鉢（3），壺（1・2）が出土している。

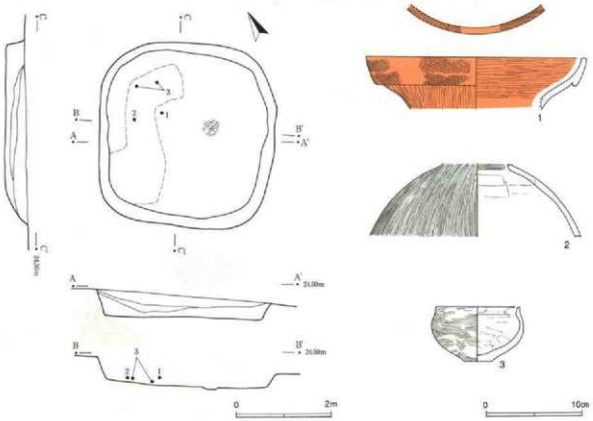
SI-037（第100図，図版32）

10P-17グリッド付近に所在する。北隅付近をSD-002が切っている。竪穴は5.90m×5.86mの隅丸方形で，深さは0.45m～0.52m，主軸方位はN-56°-Wである。壁溝は全周する。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.75m×0.62mの楕円形で，深さ0.26mである。炉は1.00m×0.98mの掘り込みをもち，中心部分の0.69m×0.72mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。周囲は焼けておらず，囲い施設が存在した可能性がある。床面付近の2か所に焼土の堆積，北隅付近には粘土の塊が存在した。覆土は上層が黒褐色主体，下層がローム主体であった。

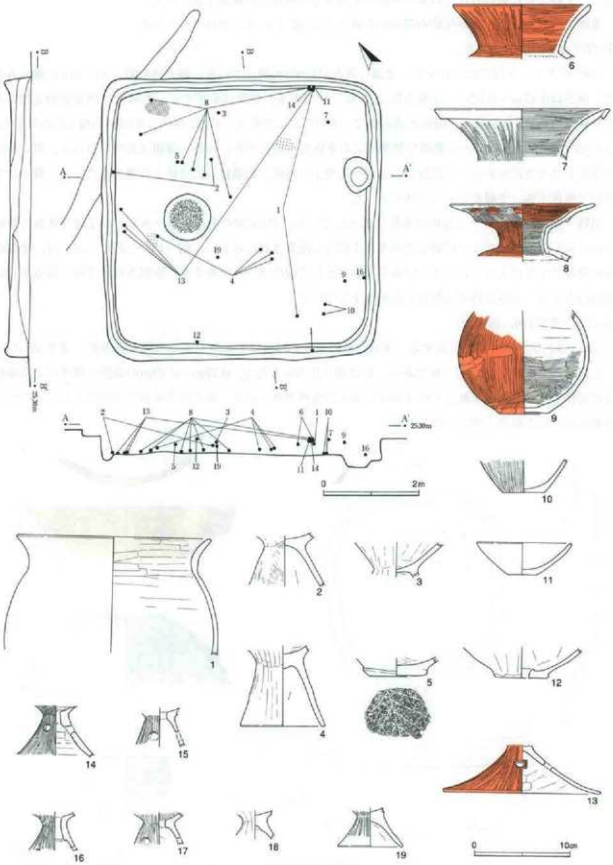
遺物（図版58・59）　土器片が多量に出土している。第100図の垂直分布をみると，住居廃絶後に形成された東から西に向かって傾斜した窪みに土器片が廃棄されたらしい。鉢（10）と器台（16）は，それ以前の段階ですでに入っていたようである。全体として破片ばかりであるが，赤彩された有段口縁壺や複数の器台を含む。土器以外では軽石1点が出土している。

SI-038（第101図，図版32）

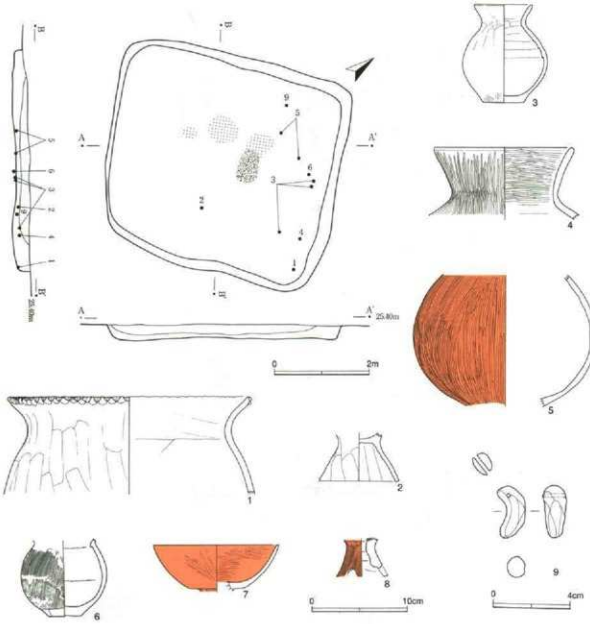
10Q-33グリッド付近に所在する。竪穴は4.97m×4.52mほどのやや不整な隅丸長方形，深さは0.12m～0.35m，主軸方位はN-41°-Wである。炉は掘り込みをもたず，0.75m×0.49mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。床面近くの3か所に焼土の堆積がみられた。覆土は黒褐色土主体の上層と，ロームを多量に含んだ褐色土層に分けられる。



第99図　SI-036



第100図　SI-037



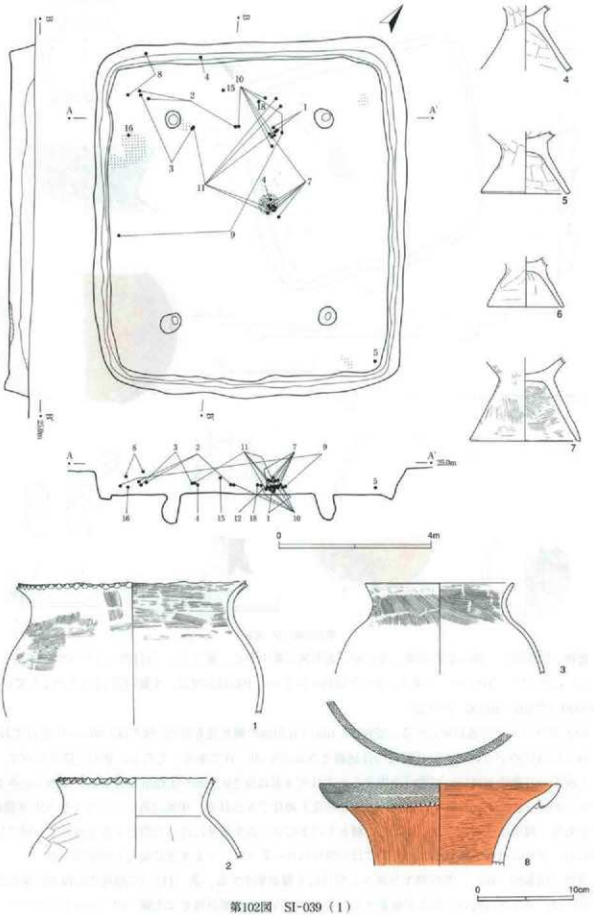
第101図　SI-038

遺物（図版59）　出土遺物は多くないが，北東側に集中する。甕（1），台付甕（2），壺（3～5），鉢（6），高杯（7），器台（8）があり，3と6は残りがよい。土器以外では，土製勾玉（9）が出土している。

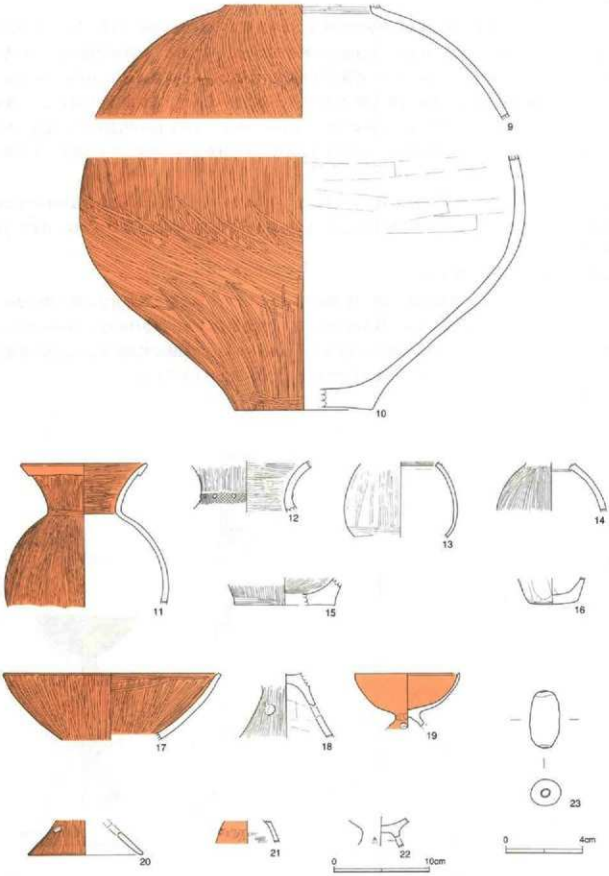
SI-039（第102・103図，図版32）

10Q-87グリッド付近に所在する。竪穴は8.16m×9.31mの隅丸長方形で，深さは0.46m～0.61mである。主軸方位は決めがたいが，仮に縦長の住居跡とみるとN-40°-Wである。ただし，炉の位置からみて，むしろ横長の可能性が高い。壁溝は全周する。主柱穴4基は深さ0.59m～0.73mである。炉は掘り込みをもたず，0.60m×0.58mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。床面に近いところで焼土の堆積が4か所ある。覆土は黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。さらに東西のそれぞれの壁際には三角状にロームブロックを多量に混入した層がある。

遺物（図版59・60）　北西側半分細かく割れた土器が集中する。壺（11）が7割程度に復元できたことを除けば，復元率は低い。破片が廃棄されたものであろう。土器以外では土錘（23）が出土している。



第102図　SI-039（1）



第103図　SI-039（2）

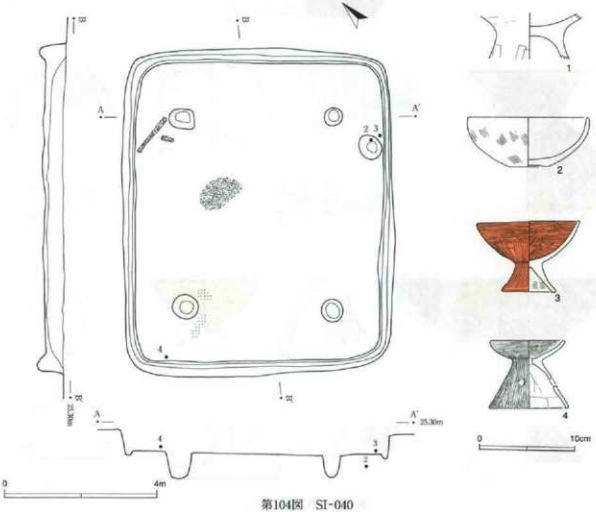
SI-040（第104図，図版33）

10Q-64グリッド付近に所在する。住居南隅付近には本遺構より古いSK-060がある。竪穴は8.58m×7.14mの隅丸長方形で，深さは0.48m～0.56m，主軸方位はN-43°-Wである。壁溝は全周する。主柱穴が4基あり，深さは0.56m～0.70mである。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，0.66m×0.56mの円形で，深さ0.48mである。炉は，図ではわかりにくいが楕円形のものが2基重複しているらしく，南東側のものが新しくみえる（図版33）。全体で1.17m×0.65mのわずかな掘り込みが記録され，被熱による赤色化と硬化がみられる。床面に近いところで炉から北側に炭化材が2点，西側に焼土の塊が2か所出土している。

遺物（図版60・61）　貯蔵穴内から鉢（2）が，近くの床面から高杯（3）が，西隅付近の床面付近から器台（4）が出土している。3は完形に近く，2・4も6割から7割遺存する。土器以外では，軽石が1点出土している。

SI-041（第105・106図，図版33）

11Q-01グリッド付近に所在する。竪穴は7.10m×6.12mほどの不整な隅丸長方形で，深さは0.52m～0.63m，主軸方位はN-54°-Wである。壁溝は全周する。主柱穴が4基あり，深さは0.53m～0.65mである。炉は2基重複しているようである。掘り込みはなく，1.06m×0.68mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。床面に近いところで焼土の塊が3か所出土しており炭化材もみられる。



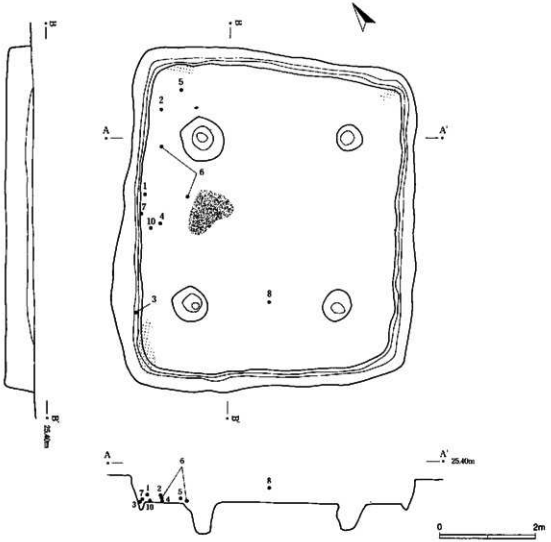
第104図　SI-040

遺物（図版61）　出土量は少ないが，北西壁付近の床面上に集中している。集中は，台付甕（1～3），支脚形土器（4），壷（5～7），高杯（9・10）から構成される。5割～9割遺存するものが多く，遺棄または何らかの意図をもって廃棄された可能性がある。上器以外では，敲石が1点出土している。

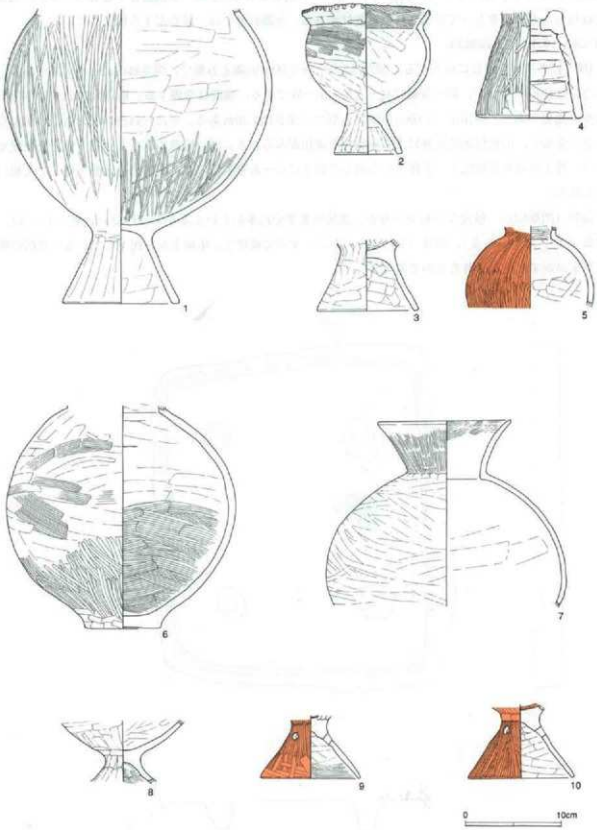
SI-042（第107図，図版33）

10P-47グリッド付近に所在する。竪穴は5.79m×5.90mの隅丸方形で，深さは0.42m～0.56mある。主軸方位は決めがたいが，炉の長軸に従うとN-157°-Wである。壁溝は全周する。貯蔵穴は北東壁中央部からやや北側にあり，0.76m×0.69mの隅丸方形で，深さは0.40mある。炉は1.44m×0.66mのわずかな掘り込みをもち，中央付近に被熱による赤色化と硬化がみられる。囲い施設の存在と，造り替えを想定できよう。覆土は概ね黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層に分けられる。

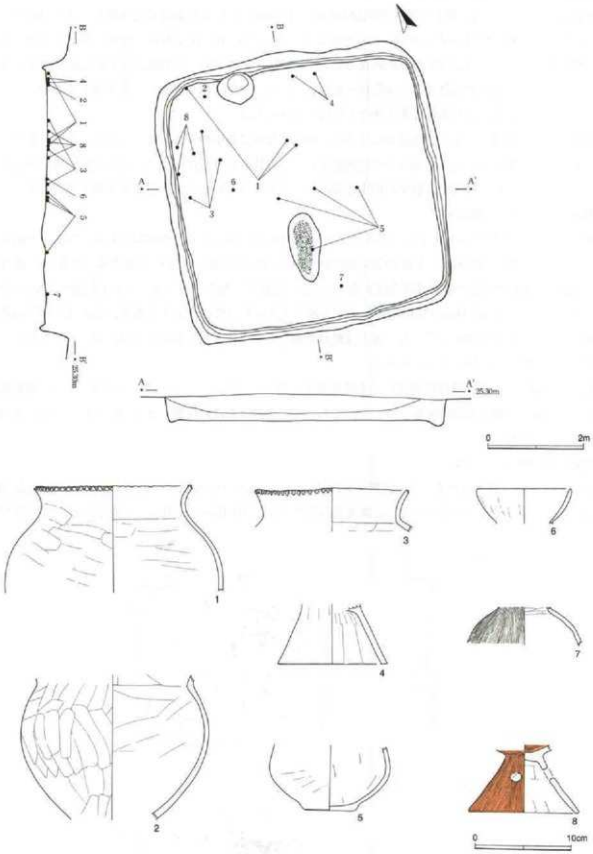
遺物（図版62）　散漫な分布であるが，住居の北半分に多いといえるかもしれない。甕（1～3），台付甕（4），壺（5～7），高杯（8）がみられる。すべて破片で，床面上から出土している。住居の廃絶後間をおかずに廃棄されたものであろう。



第105図　SI-041（1）



第106図 SI-041（2）



第107図　SI-042

SI-043（第108・109図，図版34）

10R-33グリッド付近に所在する。竪穴は3.46m×4.04mのやや不整な隅丸長方形で，深さは0.37m～0.51mある。主軸方位は決めがたい。仮に図のようにみるとN-45°-Wである。貯蔵穴は南西壁中央部からやや南側にあり，0.64m×0.44mの隅丸方形で，深さ0.23mである。炉は0.55m×0.55mのわずかな掘り込みをもち，中心部が被熱により赤色化・硬化している。覆土は概ね黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版62・63）　出土遺物はかなり多く，炉の北東側に集中がみられる。ただし，垂直分布をみると，床面上から覆土の上層までかなりの時間幅をもって堆積した可能性が高い。完形に近い甕形の小形壺（10），高杯（11・12）は覆土上層から出土しており，これ以外は破片が廃棄されたものと思われる。

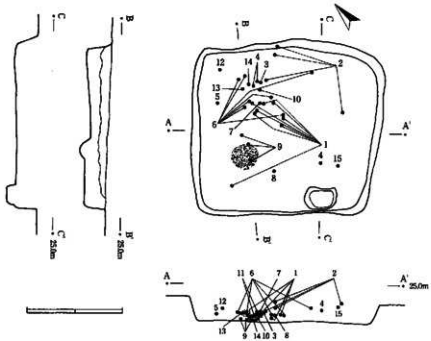
SI-044（第110図，図版34）

10Q-26グリッド付近に所在する。北隅付近をSD-016に切られている。竪穴は7.43m×7.26mの隅丸方形で，深さは0.41m～0.50m，主軸方位は決めがたいが，炉が上に偏っていたとみた場合でN-43°-Wとなる。壁溝は南西壁の一部を除きほぼ全周する。対角線上に整然と配置された主柱穴が4基あり，深さ0.68m～0.73mである。炉は0.66m×0.61mのわずかな掘り込みをもっていたようであり，範囲は不明であるが被熱によって赤色化・硬化していた。覆土は概ね黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

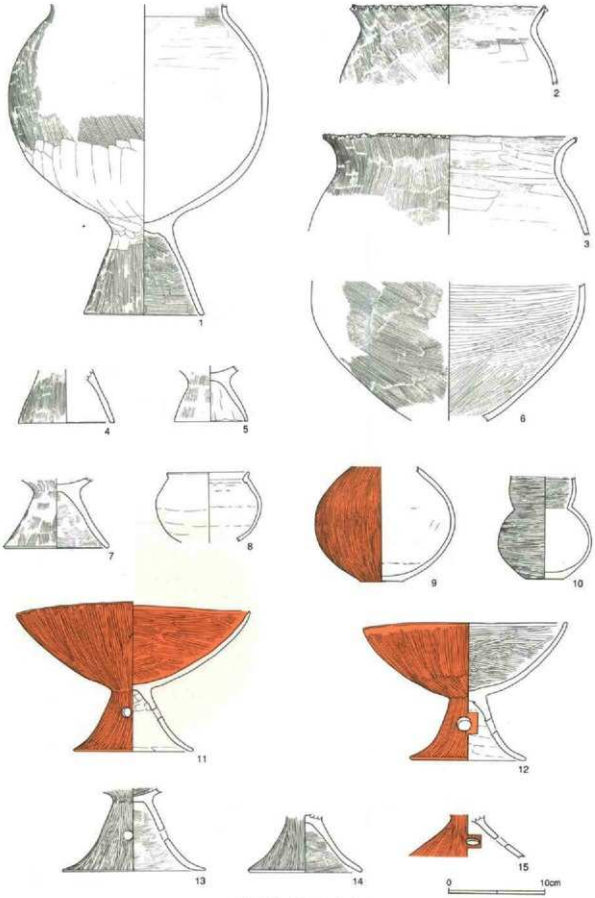
遺物（図版63）　出土遺物は少ない。東隅付近から甕（1）と壺（4）が出土している。4は6割程度復元できた。覆土下層堆積後に廃棄されたものであろう。そのほかは台付甕（2），壺（3），高杯（5・6）も含めて小片である。

SI-045（第111図，図版34）

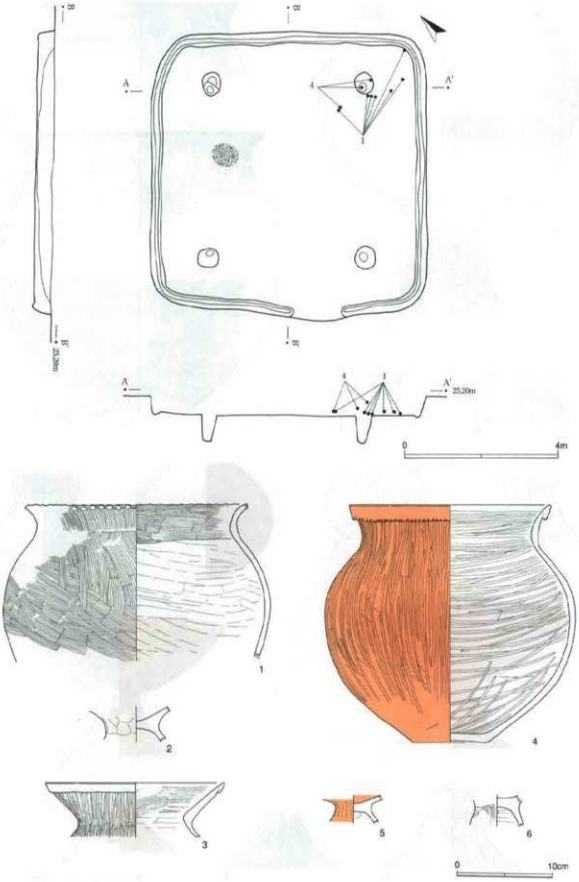
10Q-15グリッド付近に所在する。北側を東西にSD-016に切られ，南東壁中央部からやや東側をSK-079に切られている。竪穴は4.68m×5.00m隅丸長方形で，深さは0.19m～0.31m，主軸方位はN-27°-Wであ



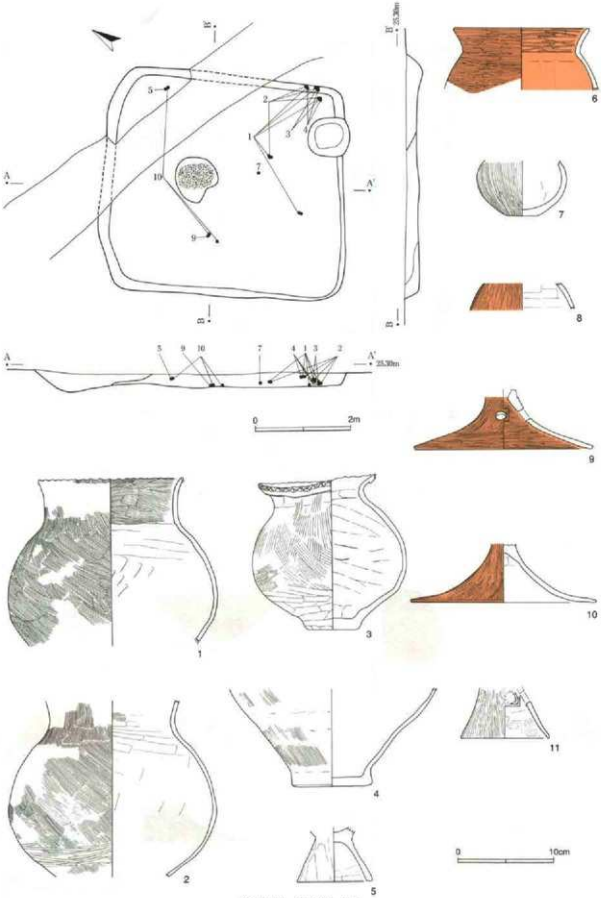
第108図　SI-043（1）



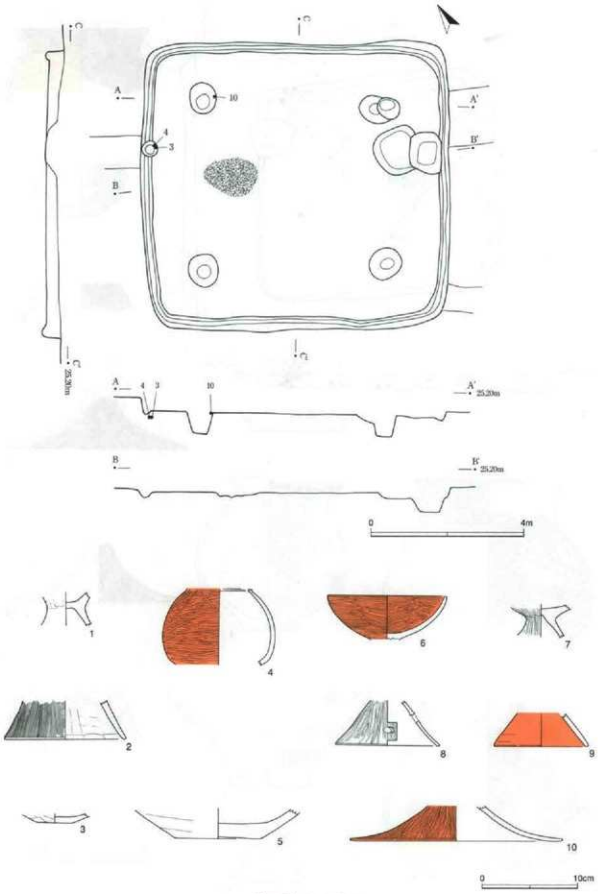
第109図　SI-043（2）



第110図 SI-044



第111図 SI-045（1）



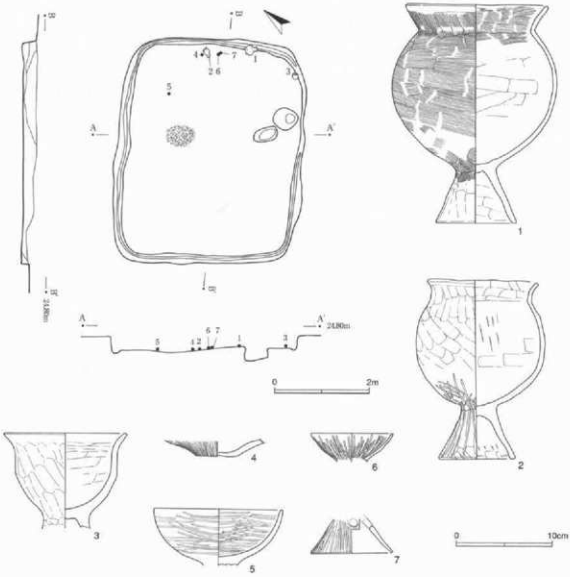
第112図　SI-046

る。炉は0.96m×0.78mのわずかな掘り込みをもち，0.76m×0.56mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。掘り込みは不整形であるが，焼けた面はほぼ竪穴の軸に合う。床面に近いところで焼土の塊が炉から東側に1.24mにある。覆土はロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層である。

遺物（図版63・64）　東隅付近にややまとまりが認められたが，全体として覆土が若干形成された段階で窪みに破片が廃棄されたものであろう。甕（1～4），台付甕（5），壺（6～11）がある。

SI-046（第112図，図版35）

10Q-29グリッド付近に所在する。北西壁から南東壁に向かってSD-016が切っている。北西壁中央部からやや北側の壁溝を切る小穴も当遺構に伴わないであろう。竪穴は7.44m×8.16mの隅丸方形ないし隅丸長方形で，深さは0.41m～0.36m，主軸方位はN-57°-Wである。壁溝は全周する。対角線上に配置された主柱穴が4基あり，深さは0.56m～0.78mある。北東の1基は建て替えの痕跡をもつ。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側にあり，やはり造り替えがみられる。炉は1.43m×1.02mの掘り込みをもち，範囲は不明だが被熱による赤色化と硬化がみられた。覆土はロームを多量に含んだ暗褐色土を主体とした層である。



第113図　SI-047

遺物（図版64）　北西壁際の小穴内から壺（3・4），北隅近くの土柱穴付近から高杯（10）が出土した。これらも含めてすべて破片である。

SI-047（第113図，図版35）

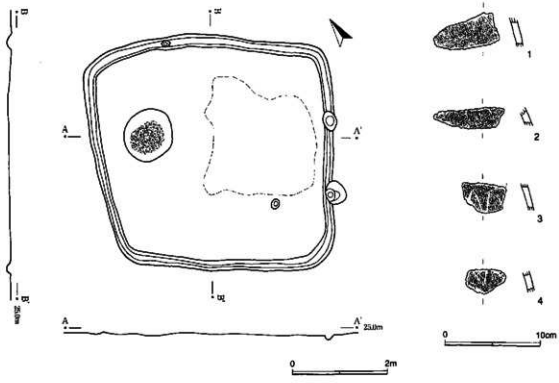
9P-36グリッド付近に所在する。西隅付近を馬土手によりやや削られている。竪穴は4.70m×3.87mの隅丸長方形で，深さは0.22m～0.30m，主軸方位はN-35°-Wである。壁溝は南東壁の東側一部を除いて廻っている。小穴が2基あり，いずれも深さ0.3mである。出入口施設であろうか。炉は掘り込みをもたず，0.65m×0.46mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。覆土は概ね黒褐色土を主体とした層とその下にロームを多量に含んだ褐色土を主体とした層に分けられる。

遺物（図版64）　北東壁近くにかたまっている。台付甕（1～3），壺（4），器台（6・7）が出土した。1と2は完形であり，遺棄または意図をもって廃棄されたものであろう。

SI-048（第114図，図版35）

10Q-46グリッド付近に所在する。本遺構は第6ピット群の中にふくまれ，遺構内に別の建物に付属したと考えられる小穴がある。竪穴は4.96m×5.24mほどの不整な隅丸方形で，掘り込みは数cm程度しか遺存していない。主軸方位はN-55°-Wである。壁溝は全周する。床面の一部に踏みしめによる硬化がみられた。炉は1.12m×1.00mのわずかな掘り込みをもち，中心部の0.70m×0.66mが被熱によって赤色化・硬化していた。囲い施設を伴っていた可能性がある。

遺物（図版64）　出土量は少なく，すべて出土地点は不明である。壺の小片4点と性格不明の土製品1点が出土している。

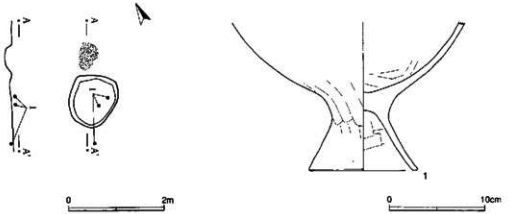


第114図　SI-048

SK-070（第115図，図版36）

9S-10グリッド付近に所在する。古墳時代前期の遺物を伴う炉である。周囲は貼り床状を呈しており，住居跡内の炉とみられる。炉のみを検出したため，便宜的にSKの番号をつけている。炉の南西に隣接して若干床が下がっているところがあったらしく，ここから古墳時代前期の台付甕が1点出土している。確認面が床面まで達していたためにかおよびその近くの遺物がかろうじて残った状態と考えられる。焼けた範囲などは不明である。

遺物　炉と床面上から台付甕（1）が出土した。



第115図　SK-070

2　竪穴状遺構

竪穴状遺構としたのは，土坑のうちやや大きめで，竪穴住居跡の一般的な施設をもたないものである。4基とも古墳時代前期の遺構と考えられるが形状は一定ではなく，性格を知る手がかりがない。

SK-044（第116図，図版36）

8S-83グリッド付近に所在する。竪穴は2.94m×2.70mの不整円形で，深さは0.21m，長軸方位はN-30°-Eである。覆土は上層が新期テフラブロックを含む暗褐色土を主体とした層で，下層が褐色土層である。底面は平坦である。台地の東縁部に所在する。

遺物　壺（1）と非掲載の高杯が出土している。いずれも弥生時代末から古墳時代前期の土器であり，遺構の時期を示すものと考えられる。

SK-060（第116図，図版36）

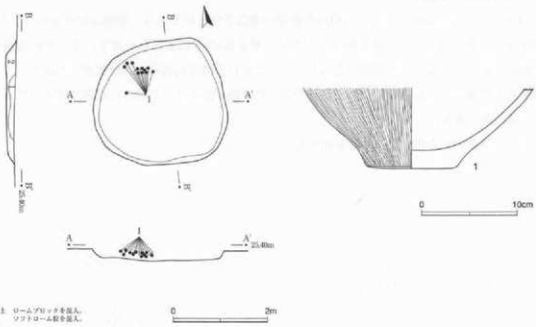
10Q-83グリッド付近に所在する。北隅をSI-040に切られている。竪穴は4.76m×2.32mの隅丸長方形の土坑である。長軸方位はN-63°-Eである。底面は2段になり深さは南西部分が0.44m，北東部分が0.34mである。2つの土坑が重複している可能性もある。

遺物　壺底部（1）のほか，非掲載の土師器片が多数出土している。古墳時代前期の住居跡に切られていることもあり，出土土器の示す古墳時代前期が概ね遺構の時期を示すものと考える。

SK-076（第117図，図版36）

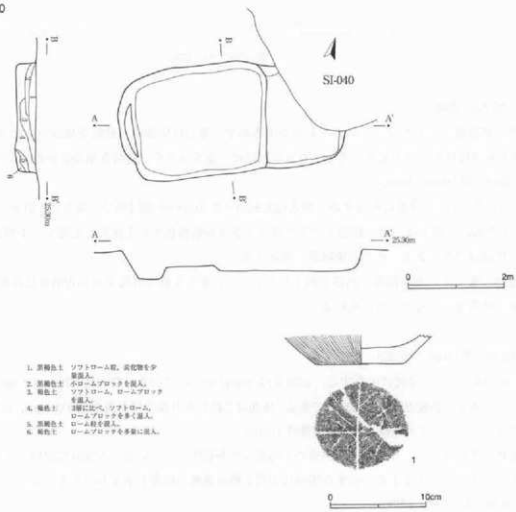
9R-42グリッド付近に所在する。SI-021を切り，SK-075に切られる関係にある。竪穴は3.14m×2.56m

SK-044



1. 暗褐色土　ロームブロックを混入。
2. 褐色土　ソフトローム粒を混入。

SK-060



1. 黒褐色土　ソフトローム粒、炭化物を少量混入。
2. 黒褐色土　小ロームブロックを混入。
3. 褐色土　ソフトローム、ロームブロックを混入。
4. 暗色土　3層に比べ、ソフトローム、ロームブロックを多く混入。
5. 黒褐色土　ローム粒を混入。
6. 褐色土　ロームブロックを多量に混入。

第116図　古墳時代　竪穴状遺構（1）

の長方形で，深さは0.84m，長軸方位はN-36°-Wである。底部は平坦であり，壁溝をもつ。覆土はローム主体の三角堆積層，ロームブロックを含む暗褐色土，黒色土の順に形成されている。

遺物　台付甕（1）と器台（2）の脚部破片が出土した。ただし，2の一部は重複しているSI-021と接合し，他の資料も同時期のものであるため，出土遺物全体としてSI-021から混入した疑いがつよい。したがって，当遺構の時期は不明確であり，古墳時代前期の可能性を指摘できるに留まる。

SK-080（第117図，図版36）

9P-04グリッド付近に所在する。SA-001が南北に切っている。竪穴は3.38m×3.44mの隅丸方形で，深さは0.18m～0.38m，主軸方位仮に図のように見たときN-19°-Eとなる。

遺物　非掲載の土師器片は古墳時代前期とみられる。遺構の時期は不明であるが，古墳時代前期の可能性を指摘しておく。

3　墳墓

（1）古墳

SM-001（第118図，図版36）

10P-18グリッド付近に所在する円墳である。墳丘は遺存していなかった。表土除去後の遺構確認作業によって，周溝と主体部を検出したものである。周溝は主体部の長軸とほぼ同じ方向に長い楕円形を呈し，長軸方向はN-22°-Eである。長軸方向の周溝内径は6.13m，外径は7.68mである。短軸方向の周溝内径は5.26m，外径は6.86mである。周溝の深さは0.16～0.18mで底面は比較的広い平坦面を形成している。

主体部　隅丸長方形を呈し，確認面で2.26m×1.18m，底部で1.72m×0.68m，深さ0.54mを測る。底面は平坦である。覆土はあまり明確に分層できず，木棺等の痕跡を想定することはできなかった。

遺物　土器片が1片出土しているが，時期不明である。1は主体部の底面付近から出土した刀子である。

（2）土壙墓

SK-015（第118図，図版37）

11P-00グリッド付近に所在する。2.96m×，1.95mの長方形の掘り込みをもつ。中央が2段に掘り込まれ，底面には短軸方向に3条の溝が掘られている。1段目の掘り込みの深さは0.30～0.36m，2段目の深さは0.85～0.89mである。中央の深い掘り込みの壁は凸凹が目立つ。覆土は，概ね上層がロームブロック混入の黒褐色土層で，下層（10層）が黒褐色土・ロームブロック混入の暗褐色土層である。10層は非均質土で，埋め戻しまたは棺の上や周囲を埋めた土が崩落したものと思われる。

遺物　縄文時代土器の小片が2点出土したのみで，遺構に伴う遺物は皆無であった。下段の溝は奈良・平安時代の有天井土壙にみられるものであり，古墳時代から平安時代の間に収まるものと考える。

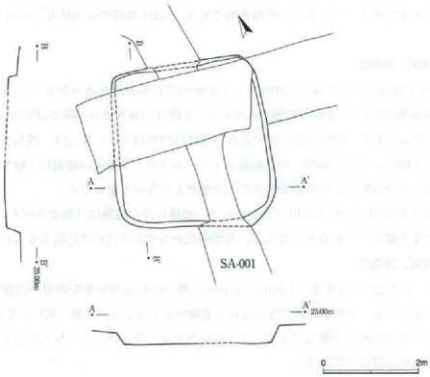
SK-064（第119図，図版37）

10Q-99グリッド付近に所在する。1.89m×1.16m，深さ0.46mの不整な長方形の掘り込みをもつ。長軸方位はN-17°-Eである。形状と副葬品とみられる遺物の出土により，土壙（墓）と考えられる。形状は，東側の壁を掘りすぎたために不整形になったようにもみえる。覆土はローム粒と黒色土が斑に混入する暗褐色土であった。底面は平坦である。

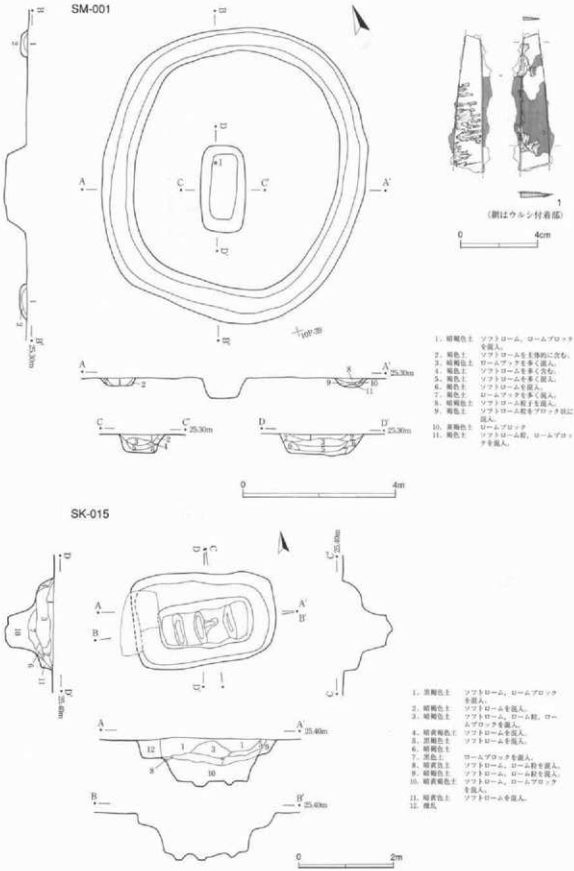
遺物　鉄製の小刀が2点（1・2）出土し，1に伴って砥石（3）が出土している。1は木質が，2は木質と布が付着している。3は鉄分が付着している。時期を知る手がかりは少ないが，1・2の小刀に共通して見

SK-076

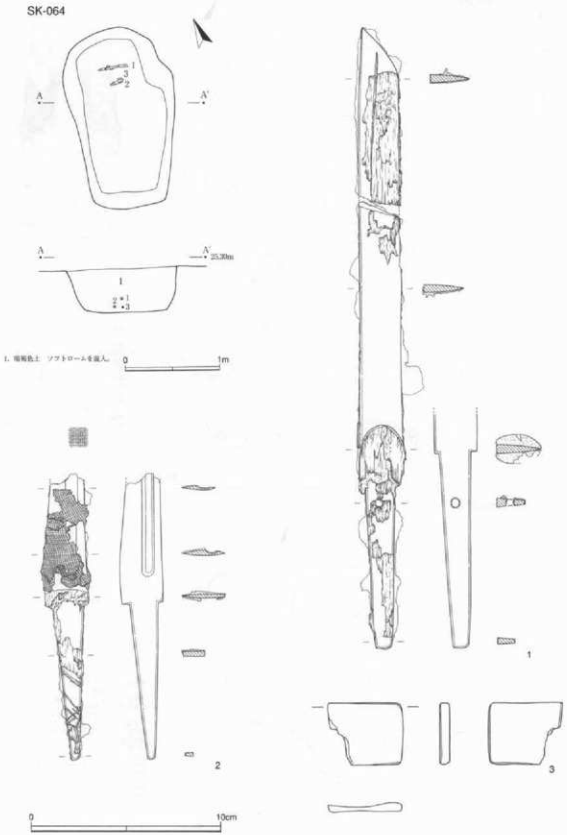
SK-080



第117図　古墳時代　竪穴状遺構（2）



第118図　古墳・土壙墓（1）



第119図　古墳・土壙墓（2）

られる柄が関を呑みこむ形状や，2の鎬の形状をみると集落の時期である古墳時代前期の可能性は低いといえる。古墳時代以降，古代から中世まで検討する必要があるかもしれない。

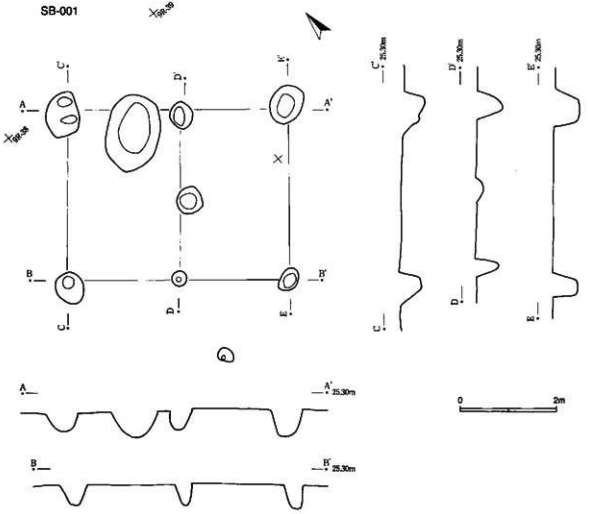
4　掘立柱建物

SB-001（第120図，図版37）

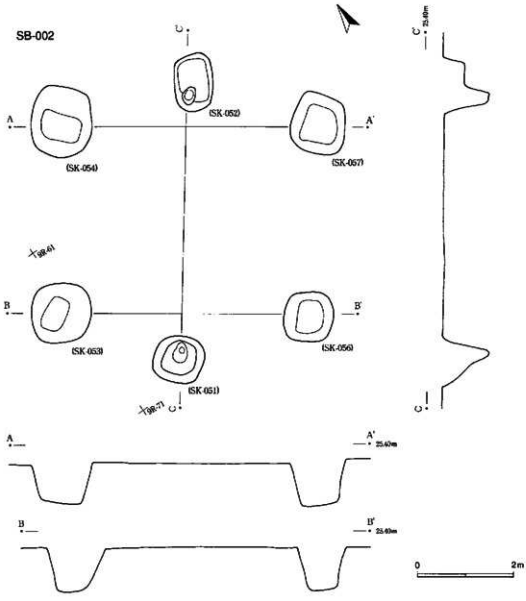
9R-38グリッド付近のSH-007ピット群中に所在する。台地の北東縁辺に近いところにあり，SK-070に隣接する。北西梁行1間（3.5m）×北東桁行2間（4.6m）の建物跡である。柱の掘り方は形状と大きさが不揃いであるが，深さはほぼ一定である。桁行主軸方位はN-48°-Wである。出土遺物はなく，時期の判断は困難であるが，古墳時代の住居群の主軸方位と一致することから，古墳時代前期の建物であった可能性がある。SK-070は炉のみを検出した住居跡であるが，棟を合わせて並んでいた可能性も否定できない。

SB-002（第121図，図版37）

9R-61グリッド付近のSH-003ピット群中に所在する。古墳時代前期の住居群のなかにあり，SI-021に



第120図　古墳時代　掘立柱建物（1）



第121図　古墳時代　掘立柱建物（2）

隣接する。北東梁行2間（5.5m）×北西桁行1間（4.1m）の建物跡である。桁行主軸方位はN-38°-Eである。柱の掘り方は隅丸方形である。6基の柱穴はSK-051～054.056.057として調査されたものである。出土遺物は皆無であり，時期の検討は困難であるが，古墳時代前期の住居群の主軸方位と一致することから，古墳時代前期の建物であった可能性がある。SI-021と棟を合わせて並んでいた可能性も否定できない。

5　土坑

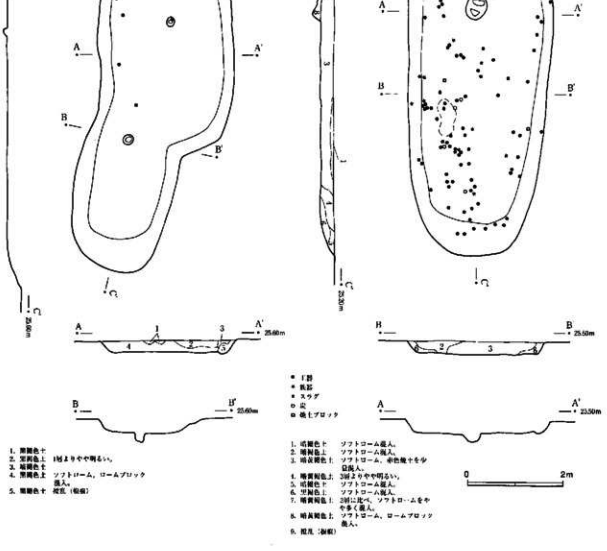
古墳時代前期の製鉄関連の遺構と推定されるものであり，集落の西端部に2基並んで存在する。

SK-013（第122図，図版37）

10M-63グリッド付近に所在する。掘り込みは7.56m×6.61mの小判形ないし楕円形が2つ繋がった形状で，深さは0.25mを測る。底面は平坦であり，長軸方位はN-29°-Wである。2つの土坑が重複するものか，あるいは歪な土坑であるかを土層断面から判断しようとしたが，南半分を試掘の段階で掘りあげてし

まっており，決定するには至らなかった。2つの小穴の位置から，中央付近に小穴を有する土坑が重複していると見るのが妥当と考える。小穴はごく浅く，性格を検討する情報がない。

遺物　土師器の摩滅した小片7点，縄文土器片，鍛冶滓1点，スサ入り焼成粘土塊3点，礫片が出土している。礫片は磨石類であった可能性があり，銹の付着がみられる。しかし，同様の付着が破面にもわずかに認められることから，耕作等によって新しく付いた可能性も考えられる。焼成粘土塊には鉄分の付着がみられず，炉壁や羽口とわかるものはない。本土坑の東側20mほどにあるSK-014と，形状と出土遺物に共通点が多い。時期・性格を示す材料に乏しいが，SK-014と同様のものである可能性が高い。



第122図　古墳時代土坑

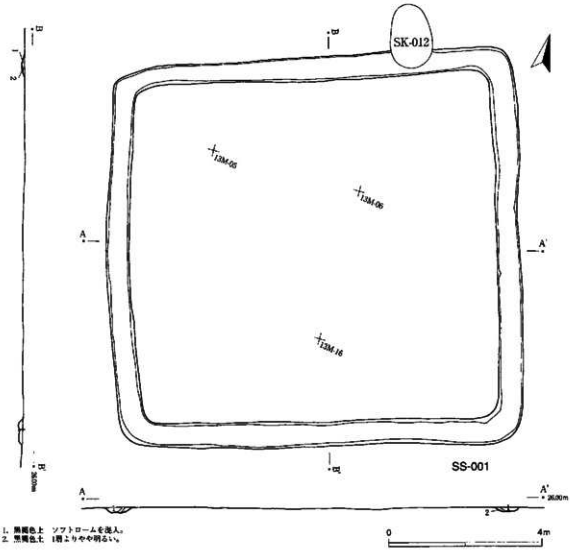
SK-014（第122図，図版37）

10M-58グリッド付近に所在する。掘り込みは6.86m×3.02mの長楕円形，深さは0.27mである。長軸方位はN-13°-Eである。底面は平坦で，一部に踏みしめによる硬化が認められた。覆土はソフトローム・赤色焼土粒を混入した黒褐色土を主体としている。

遺物　土師器小片60点，炭化材４点，椀形滓を含む鍛冶滓６点，小鉄塊ないし鉄製品小片６点（第38表），石１点，焼成粘土塊１点が出土している。焼土や炭化材も取り上げられている。土器はすべて非掲載で，小形器台１ないし２点，高杯２点，甕１点の口縁部小片，赤彩壺と甕の２個体の頸部から胴部片多数が出土している。みな集落の時期の土器とみてよさそうである。遺構の時期を示すものであろうか。小穴が小鍛冶炉であるとは決められないが，関連遺物がまとまっていることから，古墳時代初期の鍛冶関連の遺構である可能性が高い。

第５節　奈良・平安時代

１　方形周溝状遺構



第123図　方形周溝状遺構

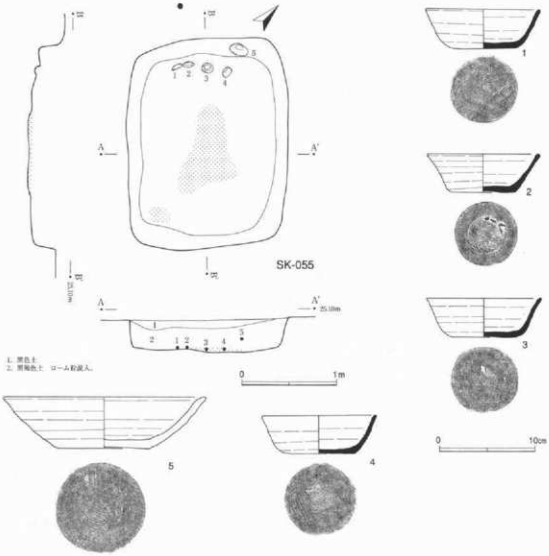
「方形周溝状遺構」は，方墳が奈良・平安時代まで引き続き作られるものであり，終末期方墳と呼ぶのが妥当であろう。

SS-001（第123図，図版37）

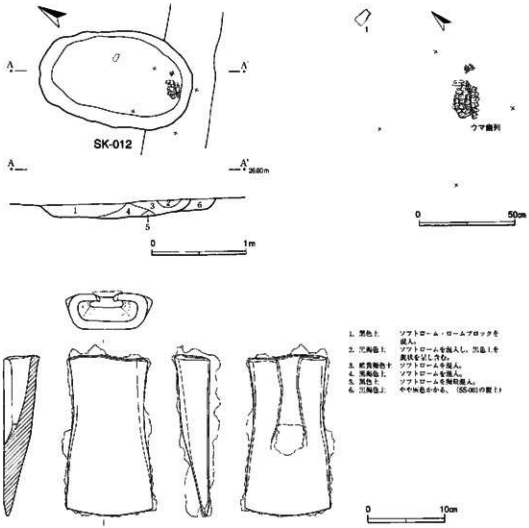
13M-04グリッド付近に所在する。周溝の外側で10.94m×10.14m，溝の幅は0.52m～0.72m，確認面からの深さは0.04m～0.13mである。辛うじて周溝の底近くが遺存したものであり，墳丘の有無は確認できない。周溝底面付近の角度を信頼すると，上部ではかなり幅広くなるはずである。長軸方位はN-73°-Eである。覆土はソフトロームを混入した黒褐色土を主体とした層である。底部はほぼ平坦である。周溝の内側には主体部等の遺構は確認できなかった。SK-012は周溝に対して直交して掘り込まれた土坑であり，ウマの頭部または全身を埋めている。当遺構に伴う可能性がある。第125図の土層断面をみると新旧関係はどちらにも見えて判断しかねる。

遺物　縄文土器の小片３点のみで，遺構に伴うともなう遺物は皆無である。

2　竪穴状遺構



第124図　奈良・平安時代　竪穴状遺構



第125図　奈良・平安時代　土坑

SK-055（第124図，図版38）

9R-85グリッド付近に所在する。掘り込みは2.18m×1.69mの長方形で，深さは0.34mある。長軸方位N-45°-Wである。底面は平坦で中央部分と南角隅に焼土層がある。中央部分は若干の掘り込みとなっている。覆土は上層が黒色土，下層がロームブロックを混入した暗褐色土である。出土した上器は灯明具として使われたと考えられる。遺構の性格は判断できないが，灯明具がこの場所で使われたとみれば住居，工房などが考えられるが，墓などほかの可能性も棄てきれない。

遺物　北西壁際の底面近くから，杯4点（1～4）が，やや上の層から口径の大きな杯または鉢（5）が出土している。1～4は黒褐色からにぶい黄褐色で，図は須恵器として表現したが，土師器との区別が難しいものである。1・3・4は底面手持ちヘラケズリ，2は糸切り後，回転ヘラケズリ調整される。いずれも油煙の付着が認められる。油煙の付く場所は口縁の外面から底面に回るもの，口縁端部の内面から外面に跨るものがみられる。5は橙色で，器形から土師器と思われる。底面は糸切り後，回転ヘラケズリ調整される。内面の口縁部付近に煤が付着する。おそらく一回り大きい5の土器の上に杯を重ねて置き，灯明具として使われたのであろう。これらは，8世紀後半から9世紀初頭の土器群であり，遺構の時期は奈良～平安時代と推定される。

3　土坑

SK-012（第125図，図版38）

12M-96グリッド付近に所在する。1.63m×1.10mの楕円形，深さ0.26mの土坑である。長軸方位はN-18°-Wである。底面は平坦である。終末期方墳のSS-001の周溝部分に掘り込まれている。後述のように，方墳に伴う施設であった可能性があり，時期は奈良・平安時代と考えられる。現地では土坑が周溝を切って掘り込まれたと判断したが，第125図の断面図をみると決めがたい。

遺物　鉄斧（1），ウマ頭骨，縄文土器，土師器小片数点が出土している。土師器は残りの悪い小片であり，遺構の時期を示すものではない。しかし，袋状鉄斧は古代の典型的なものであり，土坑は周溝状遺構とともに古代に掘り込まれた可能性が高い。鉄斧は偏心両刃で横斧（手斧）であろう。ウマ頭骨は土坑南端の床面より出土している。遺存していたのは，ほぼ生前の位置を保って並んでいた上顎・下顎臼歯，下顎骨片，切歯片である。顎骨は上顎左側の臼歯列の下にあった下顎右側のみ遺存している。ウマの骨でもっとも残りやすい部分のみが遺存した状態といえ，本来全身骨があったとしても腐朽したであろう。遺体の全身が埋葬されたものか，または頭部のみが置かれたものかは判断が難しいが，土坑は，身を強く折り曲げればかろうじて全身が入る大きさである。同程度あるいはさらに小さい全身埋葬例がある（松井1990）。全身であったとすると，歯列の方向から，吻端を東に向けて体の右側を下にして横たえられたことになる。終末期古墳の周溝に垂直にかかる土坑の位置からみれば，ウマの埋葬は墳墓の被葬者と関わっていた可能性がある。犠牲獣，被葬者の飼馬の殉葬，飼馬の（自然死後の）追葬などが考えられる。鉄斧がともに埋められたのは，儀礼的殺害に使用された可能性も考えられ，あるいは儀礼が行われたことを象徴するものであったかもしれない。

生物学的観察結果　西野が同定と観察・計測を行い，以下のような結果を得た。

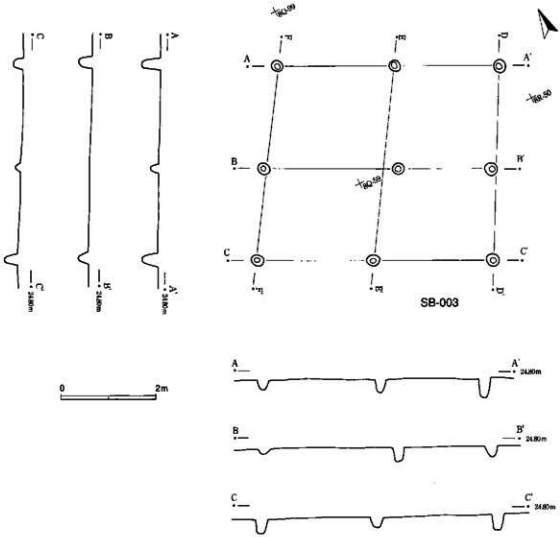
上・下顎の臼歯（P2～M3）がすべて遺存する。ほかに残りの悪い切歯片数点が見られるが歯種の同定は不可能であった。犬歯は含まれないようである。また，一部下顎骨片が遺存した。臼歯は第3後臼歯まで咬耗がすすんでおり高齢である。歯高計測値を以下に示す。これを<久保・松井1999>の年齢表に当てはめると，12.5歳から14.5歳の間に入っているので，13～14歳と推定される。

歯高計測値（mm）

上顎	左	右	平均	上顎	左	右	平均
P3	27	25	26.0	P3	22	23	22.5
P4	29	27	28.0	P4	28	28	28.0
M1	24	25	24.5	M1	30	29	29.5
M2	25	30	27.5	M2	35	35	35.0
M3	23	26	24.5				

第6節　中・近世

当遺跡の周辺には，中世の遺構群が少なくない。松崎Ⅲ遺跡の台地整形区画を伴う遺構群，松崎Ⅰ遺跡の建物跡群などである。したがって，発掘調査の段階から中世遺構群の存在が想定されており，実際に溝や建物跡が検出された。しかし，残念ながら中世の遺物を伴う遺構はSD-021のみであり，掲載はしなかったが，むしろ近世の陶磁器の方が多い。ここでは，中・近世の可能性をもつ遺構をまとめて掲載することにした。



第126図　SB-003

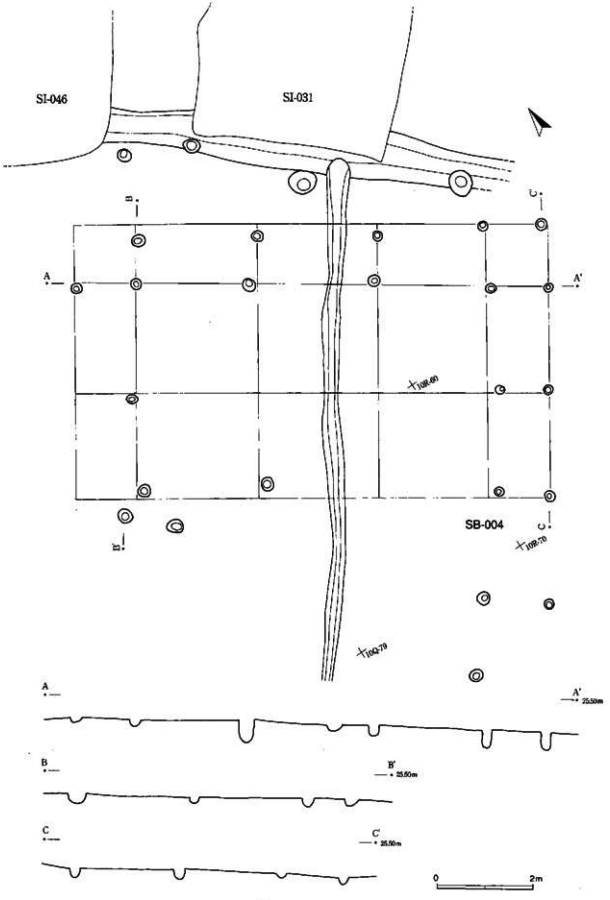
1　掘立柱建物

SB-003（第126図，図版38）

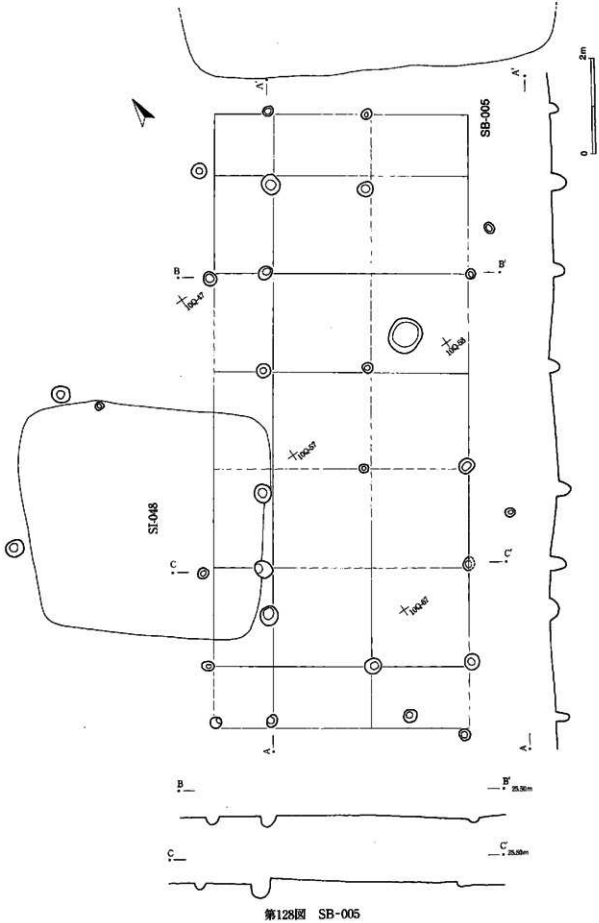
8Q-48グリッド付近のSH-004ピット群中に所在する。SD-016に囲まれた中の北側に位置する。西側梁行2間（4.1m）×北側桁行2間（4.7m）の建物跡であろう。柱穴は小さく浅いが，形状は均一的である。ただし，位置関係にはかなりのゆがみがある。桁行主軸方位はN-65°-Wであり，SD-016の北側を区画する溝より若干東側に振れている。

SB-004（第127図，図版38）

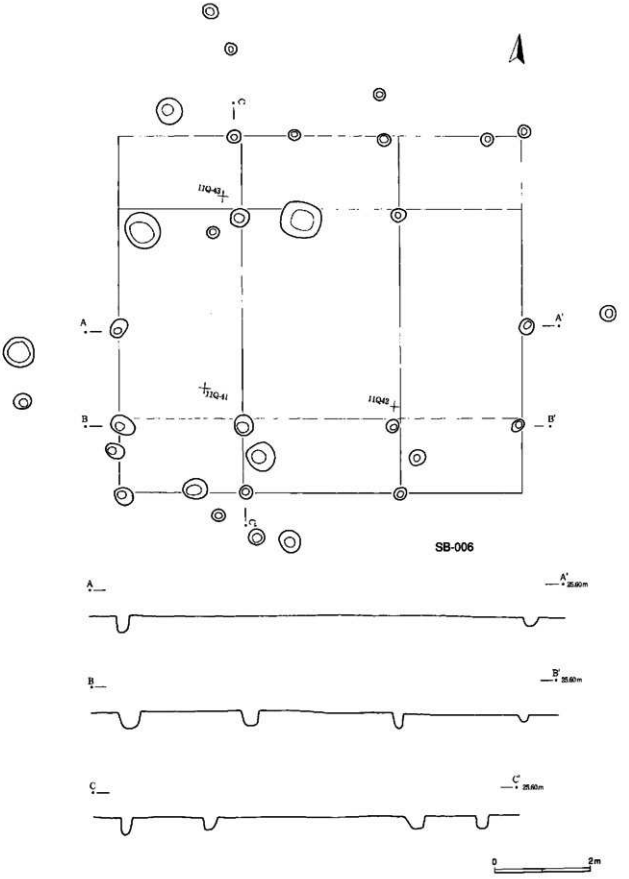
10Q-59グリッド付近のSH-006ピット群中に所在する。SD-016の南側に所在し，桁行がSD-017に平行している。すべての柱穴が揃っているとは考えられないが，確認されている柱穴から北西側梁行3間（5.7m）×北東側桁行5間（10.0m）の建物と考える。桁行5間のうちの中3間は約2.4mの等間隔だが，両端の2間は別の柱間で等間となっており，全体として柱間は中3間が広く，両端が狭くなっている。また梁行も南側2間は等間となっているが，北側1間は狭く，桁行の両端と同じ柱間となっている。柱穴は小さく，浅い。主軸方位はN-60°-Wである。



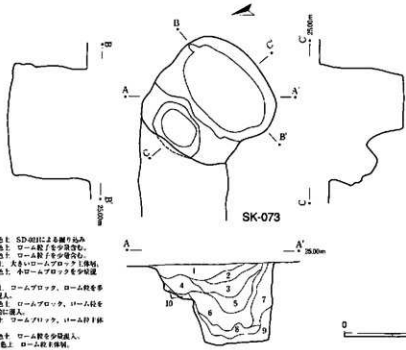
第127図　SB-004



第128図　SB-005


C
IIQ-43
A
A'
IIQ-41
IIQ-42
B
B'
C
SB-006
A
A'
25.60m
B
B'
25.60m
C
C'
25.60m
0
2m

第129図　SB-006



第130図　地下式壙

SB-005（第128図，図版38）

10Q-46グリッド付近のSH-006ピット群中に所在する。SD-016の南側に所在し，梁行がSD-017に平行している。すべての柱穴が揃っているとは考えられないが，確認されている柱穴から北東側梁行３間（5.4m）×北西桁行7間（12.8m）の建物と考える。桁行７間のうちの中５間は2.0mで等間隔となっているが，両端の２間は1.3～1.5mで等間隔となっており，全体としては柱間は中５間が広く，両端が狭くなっている。また，梁行も東側２間は別の長さで等間隔となっているが，西側１間は桁行の両端と同じ間隔である。柱穴は小さく，浅い。桁行主軸方位はN-35°-Eである。

SB-006（第129図，図版38）

11Q-31グリッド付近に所在する。SD-019の南側に所在する。すべての柱穴が揃っているとは考えられないが，確認されている柱穴から東側梁行４間（7.6m）×北側桁行３間（8.6m）の建物が想定される。桁行３間は等間となっている。梁行４間のうちの中２間は等間となっているが，両端の２間は別の柱間で等間となっており，全体として柱間は中２間が広く，両端が狭くなっている。柱穴は小さく，浅い。桁行主軸方位はN-85°-Eである。

2　地下式壙

SK-073（第130図，図版39）

11J-73グリッド付近に所在する。ほぼ東西・南北にはしる溝（SD-021）の北側にある。長軸長2.64m，短軸長2.42m，深さ1.74mの地下式壙と考えられる。長軸方位はN-37°-Wである。覆土は天井部分が崩落したとみられるロームブックを主体とした層をはさむようにその上層と下層に暗褐色土を主体とした層がある。底面は平坦で，入り口部分とみられる段状が底面から0.90mほどのところにある。出土遺物はないが，形態から中世の地下式壙と考えられる。

3　溝状遺構

個々の図は作成しなかった。位置については第1章に示した全体の遺構配置図を参照されたい。

SD-001（第131図）

8P-82グリッド付近から9P-14グリッド付近に向かってS字を描くようにして伸び，野馬上手（SA-001）の下をほぼ同じ方向に伸びている。断面はほぼ丸底を呈している。古墳時代の住居跡（SI-007，006）と竪穴状遺構（SK-080）を切っている。

SD-002

9N-40グリッド付近から10P-01グリッド付近に向かい，N-56°-Wの方向にびている。深さは0.4m，幅は1.9mで，底はやや丸みをもち平坦である。

SD-003

8M-59グリッド付近から8P-41グリッド付近に向かい，南側にやや突き出して湾曲しながら北側に落ち込む谷を囲むようにして伸びている。断面は，V字形を呈し，長さ0.2m～0.7mの長方形で底部は平坦な掘り込みを12か所もつ。

SD-004

7M-74グリッド付近から7M-62グリッド付近まで8.9mほど直線的にN-85°-Wの方位に伸び，そこから南にほぼ直角に曲がり直線的にN-160°-Wの方位に9L-19グリッド付近まで台地の西側縁部と平行するように61mほど伸びている。そこで約3m西側にずれてほぼ同じ方向で南へ向かい10L-54グリッド付近まで58mほど伸びている。溝の方向と同じ向きに長軸方向を持つ長方形を呈した底部が平坦な長さ0.5m～0.9mの掘り込みを5か所もつ。断面はV字形を呈する。

SD-005

8L-78グリッド付近から南に向かい，10K-79グリッド付近までSD-004と平行して同じように台地の西側縁部と平行するように伸びている。本遺構の北側では約6m，南側では約10mSD-004の西側に位置している。途中，9L-75グリッド付近から10L-13グリッド付近まで確認できず，欠損している。また8L-78グリッド付近から北側は弧を描きながら台地の北西部の縁部から台地の下におりている。特別な掘り込みなどはみられず，底部は平坦であり道路状遺構と考えられる。

SD-006

9L-26グリッド付近からSD-007を起点としてN-43°-Wの方向に9.4m伸びている。溝の北西の先端部は径1.2mの円形を呈した確認面からの深さ0.23m掘り込みとなっている。

SD-007

9L-18グリッド付近でSD-004が西側に約3mずれた付近を起点とし，N-35°-Wの方向で9L-80グリッド付近まで約44m伸びている。そこからほぼ直角に南東方向にN-135°-Eの方向に伸び，10L-13グリッド付近でSD-005と接したところで終わっている。底部は平坦であり，道路状遺構と考えられる。また，SD-005の欠損した部分を迂回したようになっている。

SD-008

SD-005の10L-22グリッド付近を起点として9K-98グリッド付近までSD-007とほぼ平行にN-45°-Wの方位で約19m伸びている。底部は平坦である。性格は不明である。

SD-009

SD-005の10L-23グリッド付近を起点として10L-73グリッド付近に向かってほぼ直線的に南へ伸び，さらに調査区外へと伸びていると考えられる。性格は不明である。

SD-010

SD-004の南端が10L-54グリッド付近から西に向かって二つに分かれ，北側の溝をSD-010，南側の溝をSD-011とした。SD-010はSD-005と交わり10K-59グリッド付近まで約19m伸びている。また本遺構の西端には，長さ2.7mと1.9mの長方形で底部が平坦な掘り込みをもつ。性格は不明である。

SD-011

SD-010と同様にSD-004から分かれた溝である。SD-010の南側平行するように西に向かい，SD-005と交わる部分から南へ弧を描きながら曲がり，10K-69グリッド付近でSD-012と接したところで終わっている。

SD-012

SD-005の10K-69付近を起点として，西に向かってN-67°-Wの方位で台地の縁部から降りていくと考えられる。0.6m～1.1mの円形または楕円形の掘り込みが8か所確認された。性格は不明である。

SD-013

12Q-76グリッド付近から東に向かい台地の縁部より降りている。また12Q-76グリッド付近から西に向かっては3条に枝分かれしている。その3条の溝のうち一番南側の溝は底部の中央部が平坦であり硬化面が確認され，道路状遺構と考えられる。遺構の北側縁部には，幅0.5m，深さ0.4m前後の細い溝が付随して確認された。12Q-77グリッド付近には土坑（SK-036）が1基確認されたが，溝との関係は不明である。

SD-014

SD-013の12Q-77グリッド付近を起点としてほぼ南に向かって直線的に13Q-97グリッド付近まで伸び，そこから東に直角に曲がり7.5mのところでまた南に直角に曲がり直線的に伸びている。14Q-19グリッド付近まで確認できたが，さらに南に伸びていると考えられる。遺構の東側には幅0.3m～0.5m，深さ0.3m～0.7mの細い溝が付随して確認された。形状から耕地などの境界の根切り溝と考えられる。

SD-015

SD-013の12Q-69グリッド付近を起点としてほぼ南に向かって直線的に14Q-19グリッド付近まで確認できたが，さらに南に伸びていると考えられる。SD-014と同様に形状から耕地などの境界の根切り溝と考えられる。

SD-016

全体的に台形状を描き，西側の南北方向を約72m，東側の南北方向を約84m，北側の東西方向を約37m，南側の東西方向を約56mの長さで一周している。地点としては8Q-14グリッド付近から南方N-110°-Wの方位に向かってはじまり，9P-89グリッド付近まで伸びている。そこからほぼ直角に東方曲がりN-113°-Eの方位に向かって10R-31グリッド付近まで伸びている。そこからほぼ直角に北方曲がりN-23°-Eの方位に向かって9R-04グリッド付近までやや東側に突き出るように弧を描きながら伸び，そこからさらにやや向きを変えN-04°-Eの方位向かって8R-33グリッド付近まで伸びている。そこからほぼ直角に西方N-80°-Wの方位に向かって伸び，8Q-14グリッド付近にもどり全体的に台形を描きながら一周している。確認面での溝の幅は0.9m～1.7m，確認面からの深さは0.15m～0.38mである。断面の形状は皿状を呈している。本遺構に囲まれた中には径0.2m～0.6mのピット群があり，その中にはさらに2間×2間の掘立柱建物が1棟ある。性格は不明である。

SD-017

SD-016の10R-27グリッド付近を起点としてN-135°-Eの方位に10R-52グリッド付近まで確認され，さらにさきに伸びている。確認面での溝の幅は0.6m～1.15m，確認面からの深さは0.13m～0.38mである。断面は皿状を呈している。性格は不明であるが，SB-004，005の建物の向きとほぼ同じような向きをもつが，関係についての詳細は不明である。

SD-018

SD-017の10R-40グリッド付近を起点としてN-144°-Wの方位に10Q-78グリッド付近まで伸びていることが確認されている。溝の幅は0.22m～0.44m，確認面からの深さは0.11m～0.20mである。断面の形状は丸底を呈している。性格は不明であるが，SD-017とほぼ直角の関係にあり，同様にSB-004，005とほぼ同じような向きをもつが，関係についての詳細は不明である。

SD-019

11Q-24グリッド付近をほぼ直角のコーナーとして西方にN-70°-Wの方位に10P-96グリッド付近まで伸び，南方にN-148°-Wの方位に4mまで確認されているが，その先の続いていると考えられる。周囲の状況や遺構の形状から耕地などの境界の根切り溝と考えられる。

SD-020

本遺構は，SD-016に囲まれた中に所在し，SD-016の北側溝や東側溝とほぼ平行関係にある。また，本遺構の西側8R-32グリッド付近でほぼ直角のコーナーとしてN-167°-Wの方位に8R-81グリッド付近まで伸びて，S字を描きながら5m西側にずれ，ほぼ同じ方位に9Q-29グリッド付近まで伸びる。そこでほぼ直角に西方へ曲がりN-15°-Wの方位に5.6m伸びている。本遺構とSD-016，SH-004との関係についての詳細は不明である。

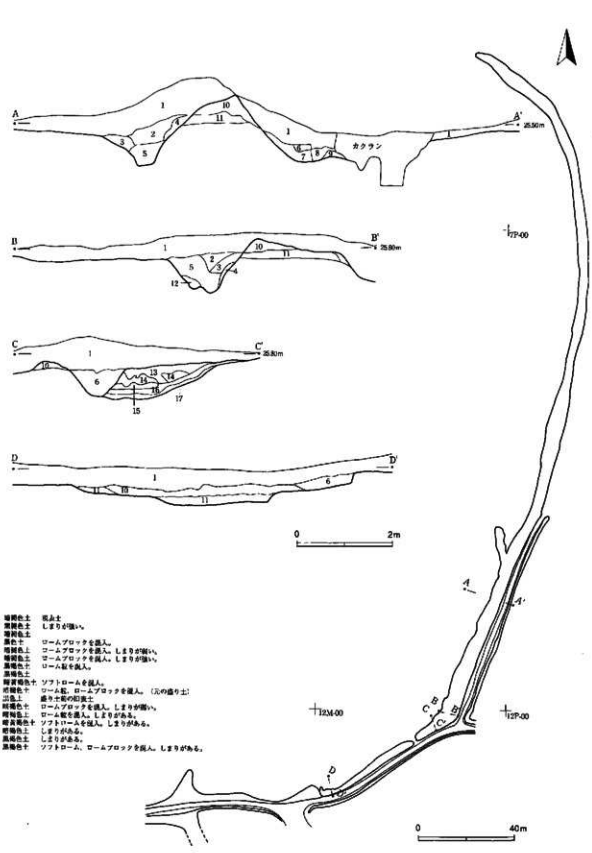
SD-021

本遺構は東西に伸びる溝2条とこれらの2条の西端を南北に結び，さらに南へ伸びる溝で構成されている。まず北側の東西溝は，11J-66グリッド付近から西方へN-80°-Wの方位に11H-59グリッド付近まで伸び，ここで南方に曲がり南北溝となる。南側の東西溝は12H-37から東方へN-80°-Eの方位に伸び，9mほど確認されているが，さらにさきに続いていると考えられる。この2条の東西溝の西端を結ぶ南北溝は，11H-59グリッド付近から南方へN-155°-Wの方位に12H-37グリッド付近まで伸びて，南側の東西溝の西端と接する。そこからさらにほぼ真南方向へ伸び，12H-87グリッド付近まで確認でき，さらに南方へ続いており，隣接する松崎Ⅲ遺跡の調査区内に確認できる。本遺構の確認面での幅は0.96m～2.36m，底部は断面が皿状を呈し，長さ0.62m～3.08mの円形もしくは楕円形の掘り込みが0m～4mの間隔で疎らにつづいている。台地整形の一部と考えられる。また北側の東西溝には地下式坑（SK-073）が溝中にある。本遺構の覆土からは，常滑焼きの甕（肩部）の押印文のある破片が1点出土しており，遺物の形態から中世の遺物としてもやや古い時期のものと考えられる。本遺構は台地整形区画にともなう中世の溝と考える。

4　野馬土手

SA-001（第131図）

本遺構は，北に向かって突き出している舌状台地上の先端部から，ほぼ南に向かってやや東に突き出た形に湾曲しながら舌状台地の根本付近から西に伸びている。台地の北端から台地の根本付近までの長さは


A
A'
25.90m
カクラン
B
B'
25.80m
C
C'
25.80m
D
D'
0
2m
12P-00
12M-00
12P-00
0
40m
1. 暗褐色土　表土
2. 黒褐色土　しまりが強い。
3. 暗褐色土
4. 黄色ナ　ロームブロックを混入。
5. 暗褐色土　ロームブロックを混入。しまりが弱い。
6. 暗褐色土　ロームブロックを混入。しまりが強い。
7. 黒褐色ナ　ローム粒を混入。
8. 黒褐色土
9. 暗茶褐色ナ　ソフトロームを混入。
10. 褐褐色ナ　ローム粒、ロームブロックを混入。（元の盛り土）
11. 黒色土　盛り土前の旧表土
12. 褐褐色ナ　ロームブロックを混入。しまりが弱い。
13. 暗褐色土　ローム粒を混入。しまりがある。
14. 暗黄褐色ナ　ソフトロームを混入。しまりがある。
15. 褐褐色土　しまりがある。
16. 黒褐色土　しまりがある。
17. 黒褐色ナ　ソフトローム、ロームブロックを混入。しまりがある。

第131図　野馬土手

約300m，さらに西に向かって150mほど伸びる総延長450mが残っている。

土手の盛土は，北側部分ほど残りがよく，南に向かって崩れている。したがって野馬堀も北側部分の方が埋まりきらずに残っている状況である。4か所の試掘十層断面からは，両側に野馬堀を掘削した際の排出土により構築され，旧表土からの高さは最も高低差があるところで約1mほどであるが，現表土部分については頂部から野馬堀に崩れた様子がわかる。

第7節　その他の遺構・遺物

時期の決定が困難な遺構を一括した。確実に整理対象外の時期と判断できたものは除外した。

1　土坑

SK-002（第132図，図版39）

8M-85グリッド付近に所在する。2.10m×1.67m，深さ0.61mの方形上坑である。長軸方位はN-80°-Wである。覆土は炭化物・赤色焼土・ローム粒などを混入した黄褐色土を主体とした層である。焼土層も底部にあり，4面の壁とも底部から0.30～0.35mの範囲で赤く硬化している。底部は平坦で赤味はないが硬化している。遺物の出土はなく，性格不明である。

SK-003（第132図，図版39）

10M-01グリッド付近に所在する。1.49m×1.37m，深さ0.17mのほぼ円形土坑である。長軸方位はN-15°-Eである。覆土上層は炭化物・炭化材を混入した暗褐色土で，下層は炭化物・ローム粒を混入した黄褐色土の層である。底部は平坦で焼けた痕はみられない。炭化物以外は出土せず，性格不明である。

SK-004（第132図，図版39）

9M-99グリッド付近に所在する。1.75m×1.63m，深さ0.76mの方形土坑である。長軸方位はN-92°-Wである。覆土はロームブロックを混入した明黄褐色土を主体として炭化物を含んでいる。底部は平坦であり，壁面は赤味を帯び硬化している。炭化物以外は出土しなかった。

SK-005（第132図，図版39）

10M-28グリッド付近に所在する。1.42m×1.40m，深さ0.10mのほぼ円形土坑である。長軸方位はN-80°-Wである。覆土はソフトロームを混入した暗褐色土を主体として炭化物を含んでいる。底部は平坦で，壁面・底面に焼けて硬化している。炭化物以外は出土しなかった。

SK-006（第132図，図版39）

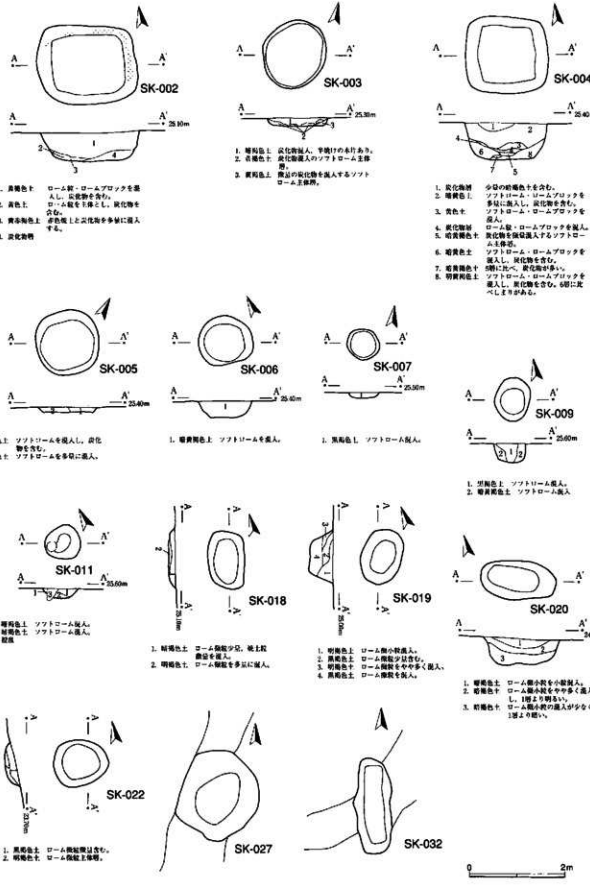
10M-27グリッド付近に所在する。1.17m×1.06m，深さ0.34mのほぼ円形土坑である。長軸方位はN-68°-Wである。覆土は黒色土・ソフトロームを混入した暗黄褐色土主体としている。底部は平坦である。遺物の出土はなく，性格不明である。

SK-007（第132図，図版39）

10M-27グリッド付近に所在する。0.67m×0.56m，確認面すらの深さ0.11mのほぼ円形土坑である。長軸方位はN-79°-Eである。覆土はソフトロームを混入した黒褐色土を主体としている。底部は平坦である。遺物の出土はなく，性格不明である。

SK-009（第132図，図版39）

10M-77グリッド付近に所在する。0.91m×0.77m，深さ0.39mのほぼ円形土坑である。長軸方位はN-17°-Eである。覆土は土坑中央部分にソフトロームを混入した黒褐色土の層で，その周りに黒褐色土・ソ


SK-002
1. 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを混入し、炭化物を含む。
2. 黄色土　ローム粒を主体とし、炭化物を含む。
3. 黄赤褐色土　赤色味土と炭化物を多量に混入する。
4. 炭化物層
SK-003
1. 暗褐色土　炭化物混入、半焼けの土片あり。
2. 赤褐色土　炭化物混入のソフトローム主体層。
3. 黄褐色土　微量の炭化物を混入するソフトローム主体層。
SK-004
1. 炭化物層　少量の暗褐色土を含む。
2. 暗褐色土　ソフトローム・ロームブロックを多量に混入し、炭化物を含む。
3. 黄色土　ソフトローム・ロームブロックを混入。
4. 炭化物層
5. 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを混入。炭化物を微量混入するソフトローム主体部。
6. 暗黄色土　ソフトローム、ロームブロックを混入し、炭化物を含む。
7. 暗黄褐色土　5層に比べ、炭化物が多い。
8. 明黄褐色土　ソフトローム・ロームブロックを混入し、炭化物を含む。6層に比べしまりがある。
SK-005
暗黄褐色土　ソフトロームを混入し、炭化物を含む。
暗黄褐色土　ソフトロームを多量に混入。
SK-006
1. 暗黄褐色土　ソフトロームを混入。
SK-007
1. 黒褐色土　ソフトローム混入。
SK-009
1. 黒褐色土　ソフトローム混入。
2. 暗黄褐色土　ソフトローム混入
SK-011
1. 暗褐色土　ソフトローム混入。
2. 褐褐色土　ソフトローム混入。
3. 粘土
SK-018
1. 暗褐色土　ローム微粒少量、褐土粒微量を混入。
2. 明褐色土　ローム微粒を多量に混入。
SK-019
1. 明褐色土　ローム微小粒混入。
2. 黒褐色土　ローム微粒少量含む。
3. 明褐色土　ローム微粒をやや多く混入。
4. 黒褐色土　ローム微粒を例入。
SK-020
1. 暗褐色土　ローム微小粒を少量混入。
2. 暗褐色土　ローム微小粒をやや多く混入し、1層より明るい。
3. 暗褐色土　ローム微小粒の混入が少なく、1層より暗い。
SK-022
1. 黒褐色土　ローム微粒塊は含む。
2. 明褐色土　ローム微粒土体層。
SK-027
SK-032
0　2m

第132図　不明土坑（1）

フトロームを混入した暗黄褐色土の層である。底部は丸底となっている。炭化物以外は出土せず，性格不明である。

SK-011（第132図，図版40）

10M-85グリッド付近に所在する。0.76m×0.71m，深さ0.22mほぼ円形土坑である。長軸方位はN-87°-Wである。覆土はソフトローム・黒褐色土の混入した暗褐色土の層である。底部は皿状の丸底である。遺物の出土はなく，性格不明である。

SK-018（第132図，図版40）

10N-28グリッド付近に所在する。1.20m×0.78m，深さ0.14mの方形の土坑である。長軸方位はN-11°-Eである。覆土はローム少量の微粒子・焼土粒を含む暗褐色土を主体としている。底部は平坦に近い皿状の丸味を呈している。古墳時代前期の土師器片1点以外は出土せず，性格不明である。

SK-019（第132図，図版40）

9P-91グリッド付近に所在する。1.15m×0.84m，深さ0.48mの楕円形の土坑である。長軸方位はN-37°-Eである。覆土はローム粒子混入した黒褐色土を主体とした層である。底部は凸凹のある皿状を呈している。縄文時代土器片1点以外は出土せず，性格不明である。

SK-020（第132図，図版40）

8N-91グリッド付近に所在する。1.55m×0.84m，深さ0.54mの楕円形の土坑である。長軸方位はN-70°-Wである。覆土はローム微粒子を混入した暗褐色土を主体とした層である。底部は平坦で少し凸凹がある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-022（第132図）

8N-64グリッド付近に所在する。1.14m×0.97m，深さ0.21mのほぼ円形の土坑である。長軸方位はN-80°-Eである。覆土はローム微粒子を含む黒褐色土を主体としている層である。底部は平坦で皿状を呈している。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-027（第132図，図版40）

9L-07グリッド付近に所在する。1.90m×1.68m，深さ0.45m，溝底部からの深さ0.36mのほぼ円形の土坑である。方位はN-38°-Eである。底部は平坦に近い皿状を呈している。出土遺物はなく，性格不明である。

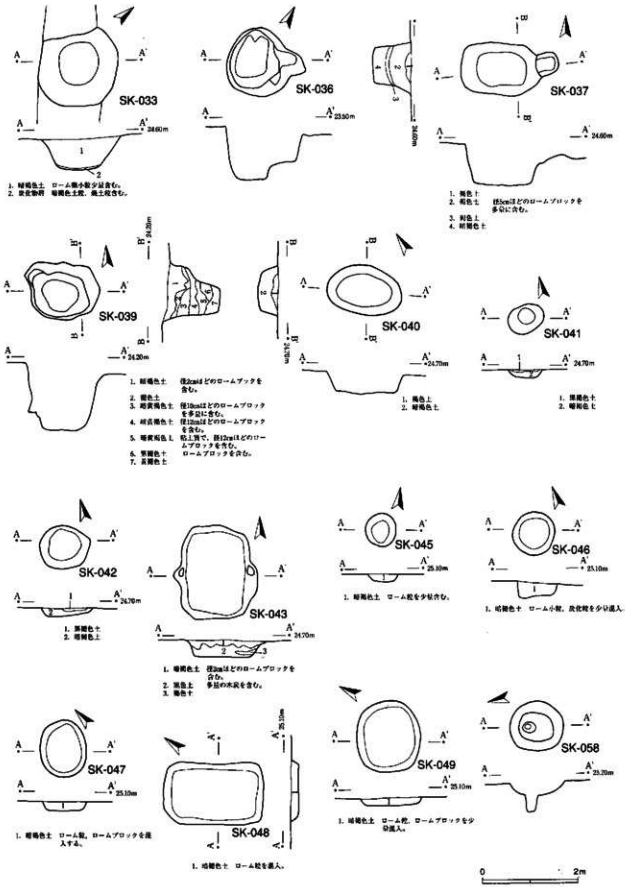
SK-032（第132図，図版40）

10L-53グリッド付近に所在する。2.04m×0.78m，深さ0.58m，溝底部からの深さ0.27mの長方形の土坑である。長軸方位はN-07°-Wである。底部はほぼ平坦である。SD-011を横切る形となっているが，SD-011との新旧関係は不明である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-033（第133図，図版40）

9L-90グリッド付近に所在する。1.74m×1.46m，深さ0.68mのほぼ円形の土坑である。長軸方位はN-24°-Eである。覆土はローム微粒子を少量混入の暗褐色土の層を主体とし，底部に焼土粒を少量混入の炭化物を主体とした層がある。底部は平坦で炭化物を主体とした層があり，底面から0.15mくらいまでは壁が若干焼けて赤化している。SD-008と切り合い関係にあるが新旧の関係は不明である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-036（第133図）


SK-033
1. 暗褐色土　ローム粒小数少量含む。
2. 炭化物用　暗褐色土炭、焼土粒含む。
SK-036
SK-037
1. 褐色土
2. 褐色土　径5cmほどのロームブロックを多量に含む。
3. 灰色土
4. 暗褐色土
SK-039
1. 暗褐色土　径2cmほどのロームブロックを含む。
2. 褐色土
3. 暗黄褐色土　径10cmほどのロームブロックを多量に含む。
4. 赤黄褐色土　径10cmほどのロームブロックを含む。
5. 暗黄褐色土　粘土質で、径10cmほどのロームブロックを含む。
6. 黒褐色土　ロームブロックを含む。
7. 黒褐色土
SK-040
1. 褐色土
2. 暗褐色土
SK-041
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土
SK-042
1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
SK-043
1. 暗褐色土　径2cmほどのロームブロックを含む。
2. 黒色土　多量の木炭を含む。
3. 褐色土
SK-045
1. 暗褐色土　ローム粒を少量含む。
SK-046
1. 暗褐色土　ローム小粒、炭化粒を少量含む。
SK-047
1. 暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを混入する。
SK-048
1. 暗褐色土　ローム粒を混入。
SK-049
1. 暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを少量混入。
SK-058
0
2m

第133図　不明土坑（2）

12Q-67グリッド付近に所在する。1.70m×1.46m，深さ1.13mの円形土坑である。長軸方位はN-60°-Eである。東側壁にテラス状の段があり，深さは確認面から0.77mである。底部は平坦である。この付近は東西溝SD-013・南北溝SD-014・015があり，台地整形が確認されている。本遺構はSD-013とSD-014の交差した平坦地の北西角の溝内にある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-037（第133図，図版40）

13Q-07グリッド付近に所在する。掘り込みは2.05m×1.05m，深さ0.87mの長方形土坑である。長軸方位はN-83°-Eである。覆土は上層に褐色土を主体とした層，中層にロームブロックを混入した褐色土を主体とした層，下層に暗褐色土を主体とした層が確認できる。東側壁にテラス状の段があり，深さは確認面から0.47mである。底部は平坦である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-039（第133図）

13R-70グリッド付近に所在する。1.60m×1.34m，深さ1.22mの円形土坑である。長軸方位はN-47°-Wである。覆土は全体的にロームブロックを混入した暗褐色土を主体とした層である。北西方向にやや突き出した部分がある。底部は平坦である。全体的な形状がSK-036に似ている。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-040（第133図，図版41）

13Q-68グリッド付近に所在する。1.58m×1.02m，深さ0.42mの楕円形土坑である。長軸方位はN-53°-Wである。覆土は上層が褐色土層で下層が暗褐色土層である。底部は平坦である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-041（第133図，図版41）

13R-51グリッド付近に所在する。0.76m×0.56m，深さ0.14mの円形土坑である。長軸方位はN-70°-Eである。覆土は上層が黒褐色土層で，下層が暗褐色土層である。底部は皿状を呈した丸底である。縄文時代土器片が1点出土しているが，性格不明である。

SK-042（第133図，図版41）

13R-41グリッド付近に所在する。1.08m×0.90m，深さ0.16mの円形土坑である。長軸方位はN-05°-Eである。覆土は上層が黒褐色土層で，下層が暗褐色土層である。底部は皿状を呈した丸底である。縄文時代土器片が1点出土しているが，性格不明である。

SK-043（第133図，図版41）

13Q-15グリッド付近に所在する。1.94m×1.76m，深さ0.36mの方形土坑である。長軸方位はN-03°-Eである。覆土は上層がロームブロックを混入した暗褐色土を主体とした層で，下層が多量の炭化材を含む黒色土を主体とした層である。底部は平坦である。炭化材以外は出土せず，性格不明である。

SK-045（第133図）

11Q-50グリッド付近に所在する。0.72m×0.64m，深さ0.16mの円形土坑である。長軸方位はN-15°-Wである。覆土はローム粒子を混入した暗褐色土層を主体とする。底部は皿状を呈した丸底である。SH-001（ピット群）として調査した範囲に含まれる。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-046（第133図）

11Q-51グリッド付近に所在する。0.90m×0.90m，深さ0.32mの円形土坑である。覆土はローム微粒子・炭化粒子を混入する暗褐色土を主体とする層である。底部は平坦である。SH-001（ピット群）とし

て調査した範囲に含まれる。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-047（第133図）

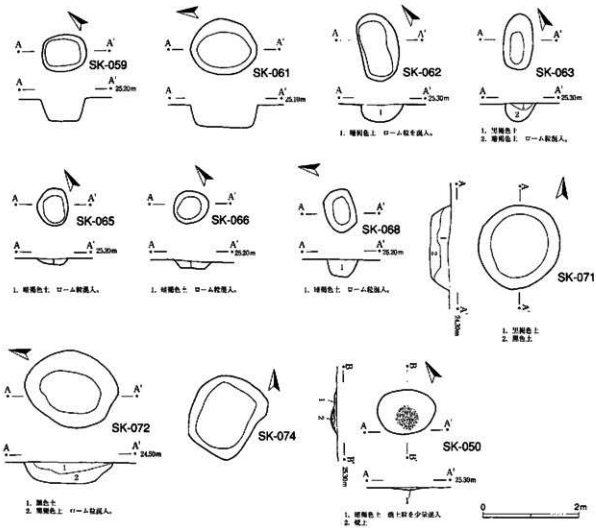
11Q-32グリッド付近に所在する。1.20m×0.96m，深さ0.20mの円形土坑である。長軸方位はN-40°-Eである。覆土はローム粒をブロック状に含む暗褐色土を主体とした層である。底部は平坦である。SH-001（ピット群）として調査した範囲に含まれる。縄文時代土器小片1点，土師器小片2点が出土しているが，性格不明である。

SK-048（第133図，図版41）

10Q-92グリッド付近に所在する。2.12m×1.28m，深さ0.15mの方形の土坑である。長軸方位はN-40°-Eである。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする層である。底部は平坦である。縄文時代土器小片10点，土師器小片6点が出土しているが，性格不明である。

SK-049（第133図，図版41）

11Q-81グリッド付近に所在する。1.50m×1.06m，深さ0.21mの隅丸方形の土坑である。長軸方位は



第134図　不明土坑（3）・炉跡

N-57°-Eである。覆土はローム粒子を混入する暗褐色土を主体とした層である。底部は平坦である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-058（第133図）

9R-50グリッド付近に所在する。1.12m×1.04，深さ0.27mの隅丸方形の土坑である。長軸方位はN-25°-Eである。底部は皿状を呈している。ピットが1つあり，形状はSK-051，052に似ている。状況から柱穴の可能性がある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-059（第134図）

9R-40グリッド付近に所在する。0.95m×0.76m，深さ0.47mの隅丸方形の土坑である。長軸方位はN-50°-Wである。底部は平坦である。周辺の遺構から類推すると柱穴の可能性がある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-061（第134図，図版41）

9Q-87グリッド付近に所在する。1.42m×1.17m，深さ0.47mの楕円形の土坑である。長軸方位はN-03°-Wである。覆土は上層に黒色土を主体とした層があり，下層はロームが多量に混入した褐色土層である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-062（第134図）

10P-99グリッド付近に所在する。1.42m×0.82m，深さ0.36mの方形の土坑である。長軸方位はN-26°-Eである。覆土はローム粒と黒色土が斑状に混入する暗褐色土を主体とした土砂で埋め戻されたものと思われる。底部は平坦である。土坑群の中にある。土師器片が5点出土しているが，時期及び性格とも不明である。

SK-063（第134図）

10P-99グリッド付近に所在する。1.15m×0.62m，深さ0.41mの隅丸方形の土坑である。長軸方位はN-28°-Eである。覆土は上層が黒褐色土を主体とした層で，下層がローム粒と黒色土が斑に混入する暗褐色土を主体とした層で埋め戻されたものと考えられる。底部は平坦である。土坑群の中にある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-065（第134図）

11P-09グリッド付近に所在する。0.78m×0.65m，深さ0.12mの楕円形の土坑である。長軸方位は，N-22°-Eである。覆土はローム粒と黒色土が斑に混入する暗褐色土を主体とした層で埋め戻されたものと考えられる。底部は平坦である。土坑群の中にある。出土遺物はなく，性格不明である

SK-066（第134図）

11Q-11グリッド付近に所在する。0.83m×0.68m，深さ0.16mの円形土坑である。長軸方位はN-57°-Wである。覆土はローム粒と黒色土が斑状に混入する暗褐色土を主体とした層で埋め戻されたと考えられる。底部は平坦である。SH-001（ピット群）として調査した範囲に含まれる。土師器片6点が出土しているが，性格不明である。

SK-068（第134図）

10P-79グリッド付近に所在する。0.88m×0.62m，深さ0.36mの隅丸方形の土坑である。長軸方位はN-62°-Eである。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とした層で埋め戻されたものと考えられる。底部は丸底である。第8ピット群の中にある。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-071（第134図，図版41）

12J-95グリッド付近に所在する。1.76m×1.71m，深さ0.41mの円形土坑である。長軸方位はN-10°-Wである。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体とした層である。底部は平坦である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-072（第134図，図版41）

12J-90グリッド付近に所在する。1.98m×1.62m，深さ0.84mの楕円形の土坑である。長軸方位はN-05°-Wである。覆土はローム粒子を少量混入する黒褐色土を主体とした層である。底部は皿状を呈した丸底である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-074（第134図）

11H-79グリッド付近に所在する。1.66m×1.38m，深さ0.39mの方形の土坑である。長軸方位はN-34°-Eである。覆土は小ロームブックを含む暗褐色土を主体とした層である。底部は皿状を呈した丸底である。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-075（第134図）

9R-42グリッド付近に所在する。1.06m×1.00m，深さ1.06mの円形土坑である。長軸方位はN-36°-Eである。覆土は上層にローム粒を微量含む黒色土を主体とした層があり，その下層にローム粒・ロームブロックを混入する暗褐色土・褐色土のそれぞれを主体とする層が重なり合っている。底部は平坦である。大きな柱穴状の土坑を呈している。SI-021・SK-076を切っている。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-077

9P-78グリッド付近に所在する。1.46m×1.21m，深さ0.33mの円形土坑である。長軸方位はN-27°-Wである。底部は平坦である。SI-033の東コーナーを切っている。出土遺物はなく，性格不明である。

SK-079

10Q-15グリッド付近に所在する。0.89m×0.83m，深さ0.57mの隅丸方形の土坑である。長軸方位はN-30°-Wである。底部は平坦である。SI-045の南東壁中央からやや東側の壁を切っている。出土遺物はなく，性格不明である。

2　炉跡

SK-050（炉跡）（第134図）

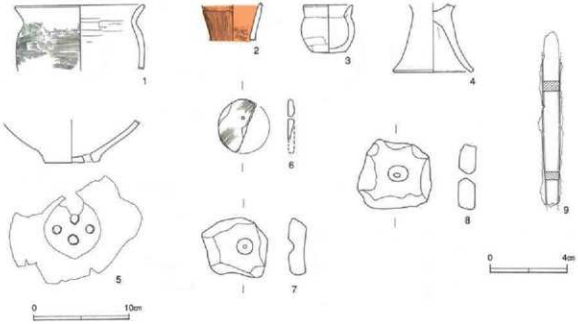
10P-39グリッド付近に所在する。1.21m×0.96mのやや楕円形に焼土が堆積する。炉であろう。長軸方位はN-56°-Wで，焼土の厚みは0.08mである。出土遺物はなく，時期の決定には至らなかった。

3　ピット群

ピット群として調査されたものである。掘立柱建物や単独の土坑として掲載した遺構については，それぞれの図を参照されたい。それ以外，ここに記載する小穴については全体の遺構配置図（第2図）に示すにとどめた。

SH-001

11Qグリッド付近に所在する。SK-045，046，047，066を含み，SD-019を挟んで両側に43基の小穴がある。そのなかで，掘立柱建物と想定した部分をSB-006として掲載した。



第135図　遺構外出土遺物

SH-002

9Qグリッド付近に所在する。8基の小穴が確認された。性格は不明である。

SH-003

9Rグリッド付近に所在する。9基の小穴が確認され，そのうち6基については古墳時代の掘立柱建物（SB-002，2間×1間）として掲載した。

SH-004

8Qグリッド付近に所在する。54基の小穴が確認された。そのうち9基については中～近世の掘立柱建物（SB-003，2間×2間）として掲載した。

SH-005

9Rグリッド付近に所在する。8基の小穴が確認された。並び方や小穴の形状からも性格不明である。

SH-006

10Qグリッド付近に所在する。57基の小穴が確認された。2棟の掘立柱建物（SB-004，3間×5間・SB-005，3間×7間）を想定し，掲載した。

SH-007

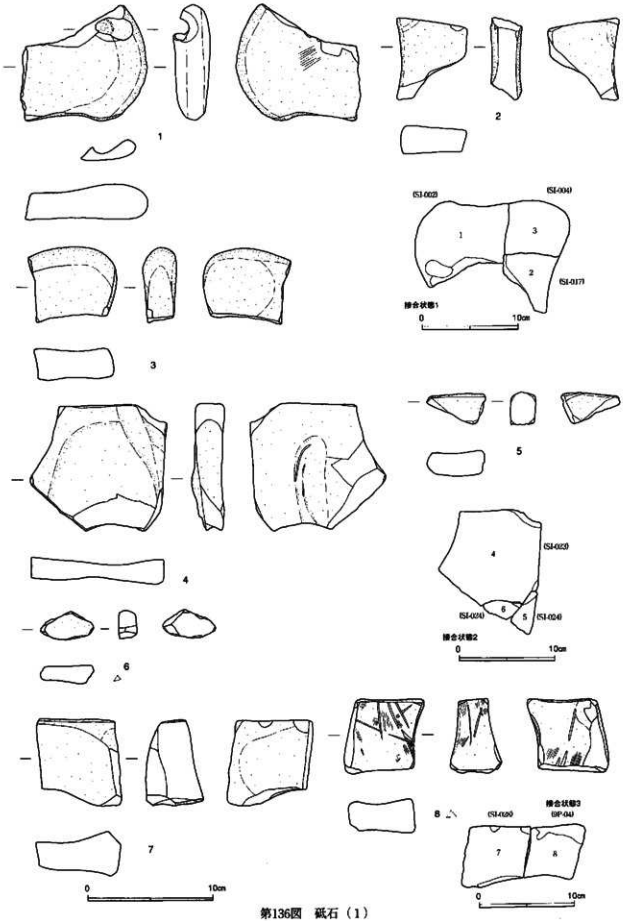
9Rグリッドに所在する。10基の小穴が確認された。そのうち7基については古墳時代の掘立柱建物（SB-001，1間×2間）として掲載した。

SH-008

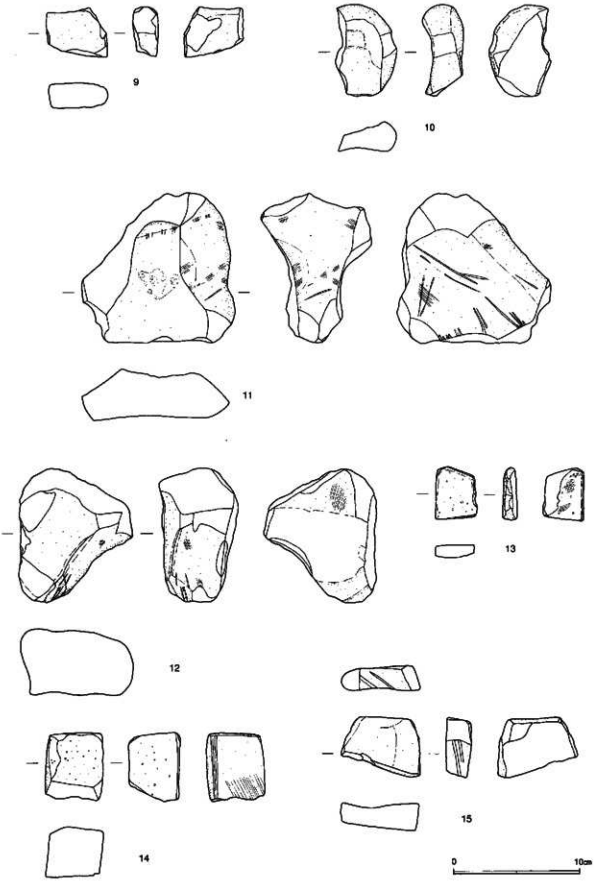
10Pグリッドに所在する。22基の小穴があり，並びや形状からみても性格不明である。

4　遺構外出土遺物

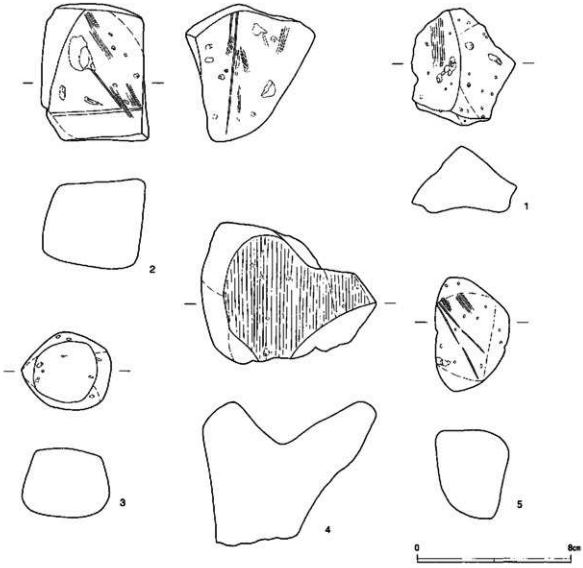
1～5は土師器である。5は底面に4つの穿孔をもつ甑である。6は石製有孔円盤である。7・8は土師


1
2
3
4
5
6
7
8
SI-003
SI-004
SI-017
接合状態1
SI-020
SI-024
SI-026
接合状態2
SI-020
SP-04
接合状態3
0
10cm

第136図　砥石（1）



第137図　砥石（2）



第138図　軽石

器片に回転研磨痕が付く。9は中世のSD-021から出土した工具の柄である。やりがんなであろうか。

5　砥石・軽石

（1）砥石（第136・137図，図版66，第34表）　古墳時代前期の遺構から比較的多くの砥石が見つかっている。遺構間で接合するものを提示するために便宜上遺構出土のものもここに掲載する。ただし，SK-064で小刀とともに埋められていた砥石のみは遺構の部分（第119図）に示した。第34表と第136・137図に掲載したものは全部で15点ある。このうち，13～15については石材を切り出す鋸によって整然と切り取られ，加工されたものであり，中・近世の資料と思われる。これ以外の12点が古墳時代前期の資料である。形状には扁平なもの，方柱状のもの，磨り面が多く不整形のもの，礫素材のものが存在する。研磨の痕跡は数種類ある。そのうち8・11・12に観察された溝状の研磨痕は，あきらかに金属製品の刃部を研磨したものであろう。砥石は金属の加工や手入れに使用された可能性が高い。以下は，破片が接合する例である。大形の砥石，またはその素材が持ち込まれ，割れたものあるいは意識的に分割したものが集落内の広範囲

で使用されている。

1＋2＋3　長さ16cm以上，厚さ3cm以上の大きな板状砥石またはその素材が持ち込まれている。SI-002から出土した1が先に分離し，その後SI-017から出土した2と，SI-004から出土した3に分かれたとみるのが自然である。住居跡の位置をみると，SI-017はずっと離れているので，一概には言えないが，SI-002とSI-004のある西側で使われて分割された後，一部がさらに分割されて東側のSI-017まで運ばれて利用されたとみることが可能ではないだろうか。SI-004とSI-017は120mほど離れている。

4＋5＋6　長さ13cm以上，厚さ2.5cm以上の大きな板状砥石またはその素材が持ち込まれている。縁辺のうち2辺は平端で，互いに垂直をなす。したがって，持ち込まれたものは板状に加工された規格性の強い素材であった可能性がある。SI-023から出土した4は分割後に使用されているのに対して，SI-024から出土した2点（5・6）は小片で，分割後使用されていない。利用に耐えなかった可能性の高い小片の方がその場に廃棄される可能性が高いこともあるので，SI-024→SI-023という動きを想定できる。

7＋8　長さ13cm以上の方柱状の素材を想定できる。SI-028Bから出土した7には分割後の使用が認められない。遺構外の09P-04から出土した8は分割後に多くの面が引き続き使用されている。この付近には溝と野馬土手があるため，遺構内の遺物が動いた可能性がある。両地点はかなり離れており，直線距離で90mある。

（2）軽石（第138図，図版66，第35表）

第35表に13点を示した。このうち，比較的残りのよい5点を図示した。多くは平坦に摩滅した面を複数もつ多面体で，みな不整形である。4は棚状に窪んだ摩滅面をもち，線状痕が明瞭についている。2と5には金属製品の刃部によるとみられる溝状の研磨痕がついている。このことと，軽石と砥石が共伴する例が少なくないことから，金属製品の加工や手入れに利用されたものと推定される。

参考文献

松井章　1990　「31号墳出土の馬について」『佐倉市大作遺跡』，第24表，第113図

久保和士・松井章　1999　「家畜その2-ウマ・ウシ」『考古学と自然科学②　考古学と動物学』同成社

第27表　土製品

図	No.	位置	注記No	種類	軸長*	幅	厚さ	重量	出土遺構	遺構時期	備考
50	1	07Z-87	7M-87-0004	土器片錘	44	41	14	27	－	－	阿玉台
50	2	07Q-64	7Q-64-0001	土器片錘	38	34	12	15	－	－	加曽利E
50	3	07Q-64	7Q-64-0001	土器片錘	44	38	14	23	－	－	加曽利E
50	4	09M-82	9M-82-0002	土器片錘	56	36	8	25	－	－	加曽利E
50	5	10L-91	10L-91-0002	土器片錘	46	41	11	25	－	－	加曽利E
50	6	10P-19	SI-37-0077	土器片錘	48	45	10	26	住居跡	古墳前期	加曽利E
50	7	10Q-04	10Q-04-0001	土器片錘	40	32	13	21	－	－	中期?
50	8	13N-08	13N-08-0001	土器片錘	62	40	11	44	－	－	加曽利E
50	9	10Q-66	SI-40-0002	土器片錘	48	42	10	28	住居跡	古墳前期	阿玉台
50	10	11R-00	11R-00-0001	土器片錘	46	46	12	28	－	－	阿玉台
50	11	10R-06	10R-06-0001	土器片錘	77	66	12	60	－	－	阿玉台
50	12	13P-54	13P-54-0001	土器片錘	－	－	13	12	－	－	加曽利E, 半欠
50	13	表採	SURFACE-0001	土器片錘	33	33	8	15	－	－	中期?
50	14	08Q-68	08Q-68-0001	皿	78	74	9	60	－	－	堀之内, 半欠, 把手欠
50	15	表採	SURFACE-0001	皿	－	－	－	37			堀之内, SI 021-9接合

*軸長＝土器片錘では 径以軸, 皿では把手の長軸

第28表　石鏃

図	No.	位置	注記No.	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	欠損	分類	出土遺構	遺構時期	備考
50	1	08Q-24	SI-13-0014	黒曜石	22.3	18.5	5.3	1.6	－	五角形	住居跡	古墳前期	鄂分離製, 信州or神津?産
50	2	10Q-66	SI-40-0002	黒曜石	26.9	17.3	4.1	1.0	－	凹基	住居跡	古墳前期	信州産
50	3	09P-86	SI-33	黒曜石	12.1	13.6	3.4	0.5	先端	凹基	住居跡	古墳前期	信州産(和田峠付近), 再加工
50	4	07M-97	7M-97-0027	チャート	19.8	11.5	4.3	0.7	－	凸基	－	－	青灰色, 後晩期か
50	5	10Q-16	SI 45-0010	チャート	18.4	14.7	3.2	0.9	先端	凹基	住居跡	古墳前期	灰褐色
50	6	10P-66	SI-37-0069	チャート	28.0	19.1	5.6	2.2	－	凹基	住居跡	古墳前期	青灰色
50	7	08K-25	8M-25-0002	チャート	24.0	21.4	3.6	1.5	先端	凹基	－	－	暗青灰色
50	8	10K-99	10K-99-0001	チャート	21.0	13.9	2.8	0.5	－	凹基	－	－	先端鋭角, 草創期か
50	9	13P-40	13P-40-0002	チャート	25.4	14.9	3.3	1.1	－	平基	－	－	青灰色, 再加工?
50	10	13N-24	JW 0187	安山岩	39.7	24.6	6.5	5.0	先端	凹基	－	－	
50	11	08M-25	8M-25-0002	安山岩	24.1	17.0	3.5	0.9		凹基		－	
50	12	09M-67	SI-01-0068	頁岩	35.9	19.8	4.0	1.4	基部	凹基	住居跡	古墳前期	
50	13	10N-16	10N-16-0001	三稜	17.8	15.1	3.2	0.5	－	凹基	－		
50	14	13N-10	13N-10-0001	流紋岩or珪質頁岩	24.7	13.1	3.6	0.7	－	凹基	－	－	側縁丸み, 長脚, 草創期か

第29表　打製石斧・磨製石斧

区	No.	位置	注記No	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	欠損	分類	出土遺構	遺構時期	備考
51	1	09W-99	9W 99-0002	頁岩	108	139	26	278	?	不明?	－	－	縄文?石斧類?
51	2	08M-08	8M-08-0027	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	－	86	21	134	半欠	分類	－	－	扶り部研磨
51	3	10L-50	10L-50-0001	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	130	58	21	198		短肩		－	刃部研磨, 周部磨製石斧?
51	4	10P-66	SI-37-0041	角閃石片	111	53	19	160	－	撥?	住居跡	古墳前期	全面研磨, 再利用?
51	5	09P-41	SI-10-0001	頁岩	94	56	13	103	－	分類	住居跡	古墳前期	全面研磨, 再利用?
51	6	表採	表採001	左岸	－		26.5	130.1	半欠	不定形	－	－	基面を除いて研磨, 再利用
51	7	08M-27	8M-27-0002	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	－	50	18	21	刃部片	?	－	－	砥石?
51	8	08Q-46	8Q 46-0004	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	－	53	22	56	胴部片	?	－	－	打製石斧?

第30表　磨石・石皿類

図	No.	位置	注記No	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	欠損	器種・使用痕	出土遺構	遺構時期	備考
52	1	10Q-28	SI-44-0001		124	67	40	508		擦り・叩き	住居跡	古墳前期	両端叩き, 側面回形の研磨(粗面化)3
52	2	10Q-93	SI-41-0002		111	42	28	182	－	叩き	住居跡	古墳前期	両端叩き, 一部被熱顕
52	3	08M-08	8M-08-0048		－	83	42	493	半欠	敲り・叩き	－	－	欠損部両端研磨面(粗面化), 欠損部縁辺擦減
52	4	09M-69	SI-11-0021		81	44	29	154	－	叩き	住居跡	古墳前期	両端叩き
52	5	13N 67	13N-67 0002		－	－	－	385	部分欠?	台石	－	－	縄文大形石皿破片再利用?敲打1, 煤み4or5
52	6	10P-66	SI-37-0015		105	－	－	226	半欠	叩き	住居跡	古墳前期	両端研磨と叩き
53	7	09Q 84	9Q-84 0001		154	105	43	522	周囲欠	台石	－	－	凹面研ぎかに窪む, 片
53	8	09Q-59	9Q-59-0001		61	39	22	83	－	叩き	－	－	両端研磨or叩き(粗面化)
53	9	07Q 80	7Q 80-0001		78	56	46	304		回石			4面に窪み, 使用痕不明瞭
53	10	11Q-08	11Q-08-0001		－	－	80	979	小片	石皿	－	－	縄文人形石皿片
－	－	08M-06	8M-06-0004		－	－	－	81	小片	石皿	－		縄文石皿破片, 小窪み

第31表　縄文土器

遺構出土

図	No.	位置	群	主要文様	文様, 成形・調整, 備考	注記
42	1	SK-067	10群	キャリパー型	RL, 垂下隆帯+沈線, 雲母多い	SK024/0001
42	2	SK-067	?	縄文のみ	LRヨコか	SK024/0001

遺構外出土

図	No.	位置	群	主要文様	文様, 成形・調整, 備考	注記
45	1	08M 97	01群	縄文のみ	縄文RL密, 口縁上, 口縁内面にも施文	08M/97/0002
45	2	07Q-48	01群	撚糸文のみ	撚糸文密, 口唇ナデ	07Q/48/0001
45	3	表採	01群	縄文のみ	縄文RL密, 口唇ナデ, 口縁屈曲, 断面接合痕明瞭	SARFACE
45	4	06S-60	01群	縄文のみ	縄文RLやや粗, 口唇ナデ	06S/60/0001
45	5	表採	01群	縄文のみ	縄文RL重畳して密, 口縁折り返し	SARFACE
45	6	07Q-80	01群	縄文のみ	縄文RL. 口唇下ナデにより無文	07Q/80/0001
45	7	07Q-62	01群	撚糸文のみ	撚糸文粗, 口縁屈曲, 内面横, 口唇下無文	07Q/62/0001
45	8	07Q-66	01群	撚糸文のみ	撚糸文密, 口縁屈曲. 口唇下ナデにより無文	07Q/66/0001
45	9	08M-38	02群	沈線のみ	クズリに近いナデ→回線文	08M/38/0001, 2
45	10	12L	09群	角押文, 楕円区画	竹管円形	12L/0001
45	11	表採	09群	角押文, 楕円区画	竹管円形	SARFACE
45	12	表採	09群	角押文, 楕円区画	竹管円形, 隆帯上刻み	SARFACE
45	13	08Q-48	09群	沈線, 楕円区画	山形把手?	08Q/48/0001
45	14	09S-20	09群	複列角押文	竹管2本か	09S/20/0001
45	15	07Q-66	09群	キャタピラ文		07Q/66/0001
45	16	S1005	09群	幅広角押文	竹管多数	S1005/0053
45	17	S1037	09群	沈線	一部刺先状押引	S1037/0058
45	18	10Q 42	09群	隆帯+沈線	隆帯上刻み, 交互刺突, RL粗	10Q/42/0001
45	19	08S-04	09群	隆帯	隆帯上と下幅広角押文	08S/04/0001
45	20	12N 67	09群	隆帯	貼付隆帯上刻み, 鎖鎖状把手, 撚糸文	12N/67/0001
45	21	09Q-02	09群	沈線	交互刺突	09Q/02/0001
45	22	表採	09群	平行沈線	沈線区画, 沈線充填	SARFACE
45	23	10Q-62	10群	キャリパー型	背割隆帯, 沈線充填, 交互刺突	10Q/62/0001
45	24	表採	10群	キャリパー型	波状隆帯, RL	SARFACE
46	25	S1020	10群	キャリパー型	低・隆帯区画, RL	S1020/0012+08Q/48/1
46	26	07Q-04	10群	キャリパー型	隆帯渦巻文, RL	07Q/04/0001
46	27	08Q-84	10群	キャリパー型	隆帯渦巻文, RL?	08Q/84/0001
46	28	09L-69	10群	キャリパー型	隆帯渦巻文（微隆帯的）, RL	09L/69/0002
46	29	07Q-22	10群	キャリパー型	低・隆帯渦巻文, RL	07Q/22/0001
46	30	09L-68, 69	10群	キャリパー型	隆帯, LRL	09L/68, 69/0002
46	31	07Q-80	10群	連弧文系	交互刺突（円形刺突）	07Q/80/0001+07Q/82/0001
46	32	SI039	10群	連弧文系	交互刺突, LRL	SI039/0001
46	33	07Q 00, 02	10群	曽利系	沈線	07Q/00, 02/0001
46	34	13N-63	10群	連弧文系?	円形刺突列	JW/0067
46	35	09R-68	10群	連弧文系?	低い隆帯上に爪形文, RL	09R/68/0001
46	36	SI039	10群	連弧文系	LRL	SI039/0001
46	37	13N-67	10群	沈線のみ	櫛描沈線	JW/0097+13N/58/0002
46	38	13P-63	10群	意匠充填系	浅い沈線・ナゾリによる低隆帯, 渦巻文, RL	JE/0012
46	39	07Q-62, 64	10群	横位連続弧線文系?	沈線区画内RL	07Q/62, 64/0001
46	40	08R-22	10群	微隆帯	RL	08R/22/0001
46	41	表採	10群	微隆帯	RL	SARFACE
46	42	13Q-71	10群	微隆帯	LR	13Q/71/0001
46	43	13P-66	10群	横位連続弧線文系?	LR	JE/0071
46	44	13N-32	10群	微隆帯	LR	JW/0110
46	45	23N-23	10群	微隆帯	LR	JW/0350
46	46	13N-04	10群	沈線	RL?	JW/0336
46	47	13N-13	10群	横位連続弧線文系	RL	JW/0306
46	48	13N 23	10群	横位連続弧線文系	RL, 口縁部刺突	JW/0153
46	49	10Q-60	10群	加曽利E浅鉢	背割隆帯	10Q/60/0001
46	50	10Q-40	10群	加曽利E浅鉢	沈線	10Q/40/0001
47	51	09Q-00	12群	沈線	意匠内沈線充填	09Q/00/0001
47	52	SI021	12群	沈線	意匠内刺突文充填	SI021/0090
47	53	SI021	12群	沈線	意匠内外刺突文充填	SI021/0090
47	54	表採	12群	沈線	衣装ない刺突文, 口縁指頭押圧	SARFACE
47	55	表採	12群	沈線	描線のみ	SARFACE
47	56	08S-60	12群	沈線	4本櫛描沈線	08S/60/0001

図	No.	位置	群	主要文様	文様,成形・調整,備考	注記
47	57	10P-00	12群	沈線	口縁部無文帯,RL	10P/00/0001
47	58	表採	12-14群	沈線	沈線（条線）→区画沈線→口縁ミガキ	SARFACE
47	59	09M-96	12-14群	沈線	沈線（条線）→区画, 口縁ナデ	09M/96/0001
47	60	09R-40	12-14群	沈線	深い集合沈線→幅広区画沈線, 口縁ナデ	09R/40/0001
47	61	09S-00	12 14群	沈線	蛇行有節沈線→幅広区画沈線→口縁ナデ	09S/00/0001
47	62	08M-17	12-14群	沈線	蛇行沈線→区画沈線	08M/17/0001
47	63	09R-02	12-14群	沈線	格子状沈線→区画沈線→口縁ミガキ	09R/02/0001
47	64	SI038	12-14群	沈線	沈線2条, RL, 口縁上沈線	SI038/0001
47	65	10A-42	12-14群	沈線	口縁貼付肥厚, 平行沈線内蛇行沈線, 口唇刻, 無節L	10A/42/0001
47	66	10P-55	12-14群	沈線	口縁貼付, 肥厚, 蛇行沈線, 無節L	10P/55/0001
47	67	08M-79	12 14群	沈線	条線, 1本引き？指頭押圧	08M/79/0002
47	68	08M-18	12-14群	沈線	区画沈線→蛇行沈線, 地文あり？	08M/18/0002
47	69	08M-26	12-14群	沈線	縦沈線→区画沈線, LR, 口縁刻み	08M/26/0002
47	70	M-21	12-14群?	沈線	時期不明. 隆帯上刻み, LR	09M/21/0002
47	71	13N-65	12-14群?	沈線	時期不明. 沈線区画多段, 爪形刺突	JE/0070, 74
47	72	13N-13	12-14群	縄文のみ	RL	JE/0250
47	73	13N-14+65	10群	沈線	6本櫛描沈線	JE/0271, 320
47	74	13N-04, 13, 23	12-14群	沈線	格子状条線. フレキシブルな櫛によるか?	13N/04, 13, 23
48	75	10R-20	14群	縄文＋沈線	懸垂文意匠内無文, RL. 口縁沈線3条	10R/20/0001
48	76	表採	14群	縄文＋沈線	蕨手文意匠内無文?LR±?	SARFACE
48	77	08M-34	14群	縄文＋沈線	蛇行沈線, 波状口縁沈線3条, RL	08M/34/0002
48	78	08M-74	14群	縄文＋沈線	懸垂文, 口縁沈線3条, 波状口縁	08M/74/0002
48	79	10Q-68	14群	縄文＋沈線	隅部区画沈線, LR. 口縁小波状	10Q/68/0001
48	80	08M-88	14群	縄文＋沈線	隅部区画沈線, 口縁部無文帯, RLタテ?口縁小波	08M/88/0002
48	81	12N-47	14群	縄文＋沈線	蕨手文, 口縁沈線2条, LR	12N/47/0002
48	82	08M-28	14群	縄文＋沈線	蛇行沈線意匠内無文?口縁沈線1条, ナデ無文部, RL	08M/28/0002
48	83	13N-14	14群	縄文＋沈線	懸垂文, 口縁沈線1条, ナデ無文部, 円形貼付, 小波状	JE/229, 356
48	84	07N-90	14群	縄文＋沈線	蕨手文, 刺突充填, 口縁沈線2条, 波状口縁, 反撥の跡? 90と同一?	07N/90/0003
48	85	08M-08	14群	縄文＋沈線	蕨手文, 刺突＝押引充填, 89と同一?	08M/08/20, 57
48	86	10R-82	14群	縄文＋沈線	蕨手文, LR±?	10R/82/0001
48	87	10Q-84	14群	縄文＋沈線	3本組沈線, LR	10Q/84/0001
48	88	09M-02	14群	縄文＋沈線	集合沈線, 押引文	09M/02/0001
48	89	09M-11	14群	縄文＋沈線	集合沈線, 波状口縁	09M/11/0002
48	90	10Q-84	14群	縄文＋沈線	集合沈線, 波状口縁	10Q/84/0001
48	91	10Q-82	14群	縄文＋沈線	平行沈線+充填沈線, 胴部文様帯下端区画	10Q/82/0001
48	92	10Q-82	14群	縄文＋沈線	沈線意匠口縁内面の調整により屈曲	10Q/82/0001
48	93	SI040	14群	縄文＋沈線	口縁部無文帯, 口縁沈線1条, 縄文・結節回転文	SI040/0001
48	94	08R 86	14群	縄文＋沈線	口縁部無文帯, 刺突列, 8の半貼付	08R/86/0001
48	95	10Q-04	14群	縄文＋沈線	把手	10Q/04/0001
48	96	09M-06	15群	結繞文系	内面沈線, RL	09M/06/0002
49	97	13Q-84	15群	結繞文系	内面沈線, RL. 平行沈線	13Q/84/0001
49	98	13Q-25+34	15群	精製擦消	平行沈線+縄文帯. LR縦密縄文, 内面沈線	13Q/25/0001+13Q/34/0002
49	99	SI016	15群	精製擦消	平行沈線+縄文帯. RL.（)状文	SI016/0038
49	100	SI027	15群	精製擦消	口縁無文帯−平行沈線+縄文帯. ()状文. 口縁波状	SI027/0005
49	101	08Q-00	15群	精製擦消	縄文帯−無文帯−平行沈線+縄文帯. 上部算盤形, LR	08Q/00/0001
49	102	SI041	15群	精製擦消	平行沈線+縄文帯. LR. 口唇摘みあげ, 屈曲, 刻み	SI041/0001
49	103	08M-37+38	15群	精製擦消	平行沈線+縄文帯, 刻み帯, LR, 突起	08M/37/0001+08M/38/0002, 08M/27/0001
49	104	13P-63	15群	精製擦消	縄文帯, 突起, LR	JE/0001, 0033
49	105	07Q-44+62	15群	精製擦消	格子状沈線帯, 無文帯. 口唇内面肥厚	07Q/44/0001+07Q/62/0001
49	106	10P-22	15群	結繞文系	結繞なし. 内面沈線, LR	10P/22/0001
49	107	07S-00	15群	結繞文系	結繞上若干隙間, 撚糸文	07S/00/0001
49	108	表採	15群	結繞文系	RL, 条線（折断竹管内面による平行沈線）	SARFACE
49	109	09Q-02	15群	結繞文系	RL, 条線. 口唇内面肥厚	09Q/02/0001
49	110	07Q-20	15群	結繞文系	粗い縄文, 条線	07Q/20/0001
49	111	08Q-00	15群	結繞文系	撚糸文, 条線, 内面凹線	08Q/00/0001
49	112	07Q-86	15群	結繞文系	粗い縄文, 条線	07Q/86/0001

第32表　古墳時代住居跡

遺構No.	遺構規模	主軸方位	柱穴	炉	貯蔵穴	壁溝等	備考
SI-001	8.75×8.41	N-28°-W	主柱4	1	1	全周	小形鉢・高杯・複数, 軽石, 砥石
SI-002	6.25×6.16	N-30°-W	0	2	1	全周・仕切溝	砥石
SI-003	4.74×4.78	N-36°-E	0	2	1		
SI-004	6.66×5.66	N-32°-W	主柱4	2	1	全周・仕切溝	焼土堆積, 砥石, 軽石
SI-005	5.14×5.00	N-66°-W	0	1	0	一部	器台2ほか土器やや多, 軽石
SI-006	5.06×4.62	N-50°-W	0	1	0		
SI-007	6.10×5.30	N-22°-W	主柱4	1	1		焼土・炭堆積, 小形壺・壺・高杯, 砥石
SI-008	3.86×4.08	N-46°-W	0	1	1	ほぼ全周	焼土堆積
SI-009	5.36×5.41	N-43°-W	3	2	1		建替え
SI-010	5.48×5.46	N-48°-W	主柱4+3	1	1	一部	棟持柱あり
SI-011	5.12×4.78	N-42°-W	主柱4+1	1	1	ほぼ全周	焼土・炭堆積
SI-012	4.66×4.61	N-37°-W	0	2	2		炉と貯蔵穴造替え
SI-013	6.82×7.62	N-24°-W	主柱4	1	1	全周	主柱穴造替え, 焼土, 砥石, 軽石
SI-014	5.30×5.86	N-19°-W	0	1	0		
SI-015	3.74×3.80	N-59°-W	0	1	1?		軽石
SI-016	6.46×6.66	N-30°-E	主柱4	1	1		台付甕2
SI-017	4.30×4.20	N-18°-W	0	1	0	全周	砥石
SI-018	5.72×5.18	N-15°-W	?	1	0	全周	
SI-019	5.10×??	N-27°-W	8	1	0		焼土堆積
SI-020	3.91×4.88	N-33°-W	0	1	0	一部	
SI-021	5.10×5.56	N-35°-W	0	1	0		
SI-022	5.45×4.68	N-43°-W	0	1	0	全周	壺・鉢
SI-023	4.42×4.08	N-57°-W	0	1	1		鉄斧, 砥石
SI-024	6.14×6.08	N-45°-W	主柱4	1	1	全周	焼土, 壺
SI-025	6.24×6.78	N-55°-W	主柱4+1	1	1	全周	
SI-026	6.66×6.35	N-44°-W	主柱4+2	1	1	全周	焼土, 土器破片多数
SI-027	5.88×5.00	N-25°-E	0	2	0		
SI-028	4.92×4.36	N-25°-W	0	1	0	ほぼ全周	上層に皿状の土器溜まり, 壺・台付甕多数, 砥石
SI-029	6.85×6.40	N-38°-W	0	1	1?	全周	
SI-030	4.70×4.44	N-38°-W	0	0	0		
SI-031	3.65×4.40	N-43°-W	0	無	0	全周	唯一後期の住居
SI-032	3.96×3.90	N-37°-W	0	1	0		
SI-033	6.15×6.42	N-53°-W	主柱4+1	1	1	全周	
SI-034	4.53×4.51	N-60°-W	0	1	2	全周	
SI-035	5.92×6.10	N-17°-W	0	1	0		軽石
SI-036	3.82×3.66	N-129°-E	0	1	0		
SI-037	5.90×5.86	N-66°-W	0	1	1	全周	焼土, 粘土塊, 軽石
SI-038	4.97×4.52	N-41°-W	0	1	0		
SI-039	8.16×9.31	N-40°-W	主柱4	1	0	全周	焼土, 土錘
SI-040	8.58×7.14	N-43°-W	主柱4	1	1?	全周	炭化材, 焼土, 軽石
SI-041	7.10×6.12	N-54°-W	主柱4	1	0	全周	焼土, 敲石
SI-042	5.79×5.90	N-157°-W	0	1	1?	全周	炉造替え
SI-043	3.46×4.04	N-45°-W	0	1	0		小形壺・高杯2ほか土器片多
SI-044	7.43×7.26	N-43°-W	主柱4	1	0	ほぼ全周	
SI-045	4.68×5.00	N-27°-W	0	1	0		焼土
SI-046	7.44×8.16	N-57°-W	主柱4	1	1	全周	柱, 貯蔵穴造替え
SI-047	4.70×3.87	N-35°-W	1	1	1	ほぼ全周	台付甕2
SI-048	4.96×5.24	N-55°-W	0	1	0	全周	
SK-070	—	—		1	0		炉と硬化面のみ

第33表　土師器・須恵器観察表

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・脚径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
55	SI-001	1	土師	甕	20.0		19.1	60%	橙褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
55	SI-001	2	土師	甕			13.2	20%	黄褐色		ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
55	SI-001	3	土師	甕		14.2	3.2	10%	黄褐色		ﾊｹ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
55	SI-001	4	土師	台付壺		7.8	6.0	20%	橙褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
55	SI-001	5	土師	壺			9.7	40%	暗赤褐色		ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ	外面:赤彩
55	SI-001	6	土師	壺			13.4	10%	赤褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ	
55	SI-001	7	土師	鉢	7.8	3.4	5.6	60%	橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	小形鉢, 黒斑
55	SI-001	8	土師	鉢	8.6		4.0	10%	にぶい橙褐色	雲母	ﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	小形鉢
55	SI-001	9	土師	高杯		18.8	13.0	80%	赤褐色	長石・雲母	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔4
55	SI-001	10	土師	高杯		17.0	8.6	40%	橙褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	穿孔なし
55	SI-001	11	土師	高杯		19.0	3.8	30%	赤褐色	石英	ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ	穿孔2残存→4か
56	SI-002	1	土師	台付甕			2.4	10%	黒褐色	石英・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾅﾃﾞ	
56	SI-002	2	土師	壺		3.2	1.5	10%	橙褐色		ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩
56	SI-002	3	土師	高杯	13.4		4.2	10%	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	煤付着
56	SI-002	4	土師	高杯	21.8		5.9	0.2	赤褐色	雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
57	SI-003	1	土師	甕	19.2		21.0	60%	黄褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	黒斑, 煤付着
57	SI-003	2	土師	鉢	10.2	4.4	5.5	90%	黄褐色	石英	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
57	SI-003	3	土師	高杯	17.4		8.5	40%	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
60	SI-005	1	土師	甕			10.5	70%	にぶい橙褐色	胴上部:ﾊｹ 胴下部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 口頸部:ﾊｹ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	胴上部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 口縁:ﾐｶﾞｷ	
60	SI-005	2	土師	壺			6.5	10%	灰褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
60	SI-005	3	土師	台付壺			3.6	10%	赤褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾊｹ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
60	SI-005	4	土師	台付壺			7.4	20%	橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	
60	SI-005	5	土師	壺	22.0		3.4	10%	橙褐色	石英・雲母	口縁・口唇部:単節縄文 口頸部:ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩, 折返し口縁
60	SI-005	6	土師	壺	26.0		4.3	20%	橙褐色		口縁・口唇部:羽状縄文, 結節文, ﾐｶﾞｷ	
60	SI-005	7	土師	壺			7.4	10%	黒褐色	石英・長石	胴上部:網目撚糸文 胴下部:ﾐｶﾞｷ, 胴上部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 胴下部:ﾐｶﾞｷ	外面:赤彩?, 煤付着
60	SI-005	8	土師	壺			6.8	10%	赤褐色	石英	口頸部:ﾐｶﾞｷ 肩部:網目撚糸文, 口頸部:ﾐｶﾞｷ 肩部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面顔部:赤彩
60	SI-005	9	土師	壺		3.0	1.9	40%	褐色		ﾅﾃﾞ 底部:ﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	ミニチュア
60	SI-005	10	土師	壺		2.6	1.1	10%	橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	ミニチュア
60	SI-005	11	土師	高杯	14.0		4.5	10%	赤褐色	長石・雲母	ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
60	SI-005	12	土師	高杯		8.0	2.7	70%	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
60	SI-005	13	土師	器台	7.8		5.0	30%	黄褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
60	SI-005	14	土師	器台	9.2	11.2	9.0	80%	にぶい赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
60	SI-005	15	土師	器台	8.4	9.8	8.8	90%	赤褐色	雲母・砂粒	杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	黒斑, 穿孔3
61	SI-006	1	土師	壺	11.0		5.7	10%	赤褐色	雲母	ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面:赤彩
61	SI-006	2	土師	壺					にぶい黄褐色		網目撚糸文, ﾍﾗﾅﾃﾞ	折り返し口縁, 刻み, 内面:赤彩
61	SI-006	3	土師	器台	3.8		2.7	0.4	暗赤褐色	雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面:赤彩
62	SI-007	1	土師	甕	8.1	4.6	9.2	100%	橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	甕?
62	SI-007	2	土師	壺	16.6		5.9	20%	暗赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
62	SI-007	3	土師	壺	11.7	2.0	7.2	80%	橙褐色	長石・ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	
62	SI-007	4	土師	壺	10.2	6.0	12.3	90%	にぶい黄橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
62	SI-007	5	土師	高杯	24.8	13.8	15.2	80%	橙褐色	石英	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾅﾃﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3, 杯部接
62	SI-007	6	土師	高杯	12.8		7.9	90%	黄褐色	雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔4
62	SI-007	7	土師	高杯		18.6	5.8	40%	橙褐色	長石	ﾐｶﾞｷ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	外面:赤彩, 穿孔3
63	SI-008	1	土師	台付壺	17.2		23.7	70%	黒褐色	石英・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着, 口唇刻み

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・脚径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
63	SI-008	2	土師	甕	12.8		8.5	40%	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
63	SI-008	3	土師	甕	19.4		5.8	10%	黒褐色	石英	ﾍﾗｹｽﾞﾘ →ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
63	SI-008	4	土師	高杯			2.5	10%	赤褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ	外面:赤彩・黒彩, 穿孔3
64	SI-009	1	土師	甕			4.1	10%	黒褐色	石英・雲母	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
65	SI-010	1	土師	台付甕		9.0	7.5	20%	暗褐色	石英・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗｹｽﾞﾘ	煤付着
65	SI-010	2	土師	壺		7.5	3.1	10%	黄褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
65	SI-010	3	土師	器台	7.5	8.5	6.6	70%	橙褐色	石英・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔3, 穿孔のやり直し痕跡
66	SI-011	1	土師	甕		5.8	1.7	10%	黒褐色	長石・ｽｺｼﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	黒斑, 煤付着
66	SI-011	2	土師	壺	11.8		17.8	40%	黄褐色	石英・雲母	ﾍﾗﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着
66	SI-011	3	土師	壺			3.8	2.2	40%	にぶい黄褐色	石英	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
66	SI-011	4	土師	壺		7.0	1.8	10%	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
66	SI-011	5	土師	壺		7.2	8.6	30%	にぶい黄褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→一部ﾐｶﾞｷ	
67	SI-012	1	土師	甕		6.2	1.6	10%	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
67	SI-012	2	土師	壺		10.8	8.5	30%	黄褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ →ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	底面:木葉痕
67	SI-012	3	土師	高杯	11.1	16.2	10.1	90%	暗褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
68	SI-013	1	土師	台付甕		10.6	8.7	40%	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
68	SI-013	2	土師	台付甕		8.4	6.6	20%	にぶい黄褐色	石英・長石	ﾍﾗ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗ→ﾍﾗﾅﾃﾞ	
68	SI-013	3	土師	台付甕			2.0	10%	黄褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	
68	SI-013	4	土師	壺		4.4	2.1	10%	にぶい黄褐色	雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
68	SI-013	5	土師	壺		3.2	1.6	20%	褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
68	SI-013	6	土師	器台		6.6	3.2	20%	黒褐色	石英	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	
69	SI-014	1	土師	甕	17.6		11.8	20%	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ →ﾐｶﾞｷ	黒斑, 煤付着, 口唇刻み
69	SI-014	2	土師	台付甕		9.6	4.9	30%	橙褐色	長石	ﾍﾗ→ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
69	SI-014	3	土師	台付甕			2.8	10%	にぶい黄褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾅﾃﾞ	
69	SI-014	4	土師	壺		6.8	5.0	10%	黄褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
69	SI-014	5	土師	壺		8.0	5.9	20%	橙褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ →ﾐｶﾞｷ	
69	SI-014	6	土師	高杯		11.2	3.4	10%	橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
70	SI-015	1	土師	甕	11.8		4.1	10%	赤褐色	石英・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
70	SI-015	2	土師	壺			4.7	10%	赤褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
70	SI-015	3	土師	器台	8.3	8.3	7.4	90%	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 穿孔3
71	SI-016	1	土師	台付甕	22.6	29.8	39.3	90%	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍｶ, 胴上部:ﾐｶﾞｷ 胴下部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾍｶﾞｷ	煤付着, 口唇刻み
71	SI-016	2	土師	台付甕	14.0	8.3	17.9	100%	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着
71	SI-016	3	土師	高杯	13.4		6.7	30%	赤褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面:赤彩
72	SI-017	1	土師	台付甕		8.4	5.0	10%	橙褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
72	SI-017	2	土師	壺		4.0	1.7	10%	赤褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩
74	SI-019	1	土師	甕	9.6		6.1	10%	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
75	SI-020	1	土師	甕	10.0	5.0	14.9	90%	赤褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
75	SI-020	2	土師	甕	7.6		5.5	30%	橙褐色		ﾍｶ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
75	SI-020	3	土師	鉢		2.4	3.6	40%	にぶい橙褐色		ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
75	SI-020	4	土師	高杯	16.4		4.7	20%	赤褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
75	SI-020	5	土師	高杯	11.8		7.9	40%	橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍｶ→ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
77	SI-021	1	土師	甕	17.6		11.4	20%	黒褐色	雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着
77	SI-021	2	土師	甕	20.4		9.4	20%	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着, 口唇刻み
77	SI-021	3	土師	甕	20.2		5.1	20%	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
77	SI-021	4	土師	甕	23.0		4.2	10%	黒褐色	長石	ﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	黒斑
77	SI-021	5	土師	台付甕		11.2	11.9	20%	暗褐色	長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
77	SI-021	6	土師	台付甕			5.1	10%	黄褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・脚径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
77	SI-021	7	土師	甕		6.2	3.0	10%	黒褐色	長石	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾅﾀﾞ	底面:木葉痕
77	SI-021	8	土師	壷	20.2		3.5	10%	赤褐色	長石	口縁部:網目撚糸文 頸部:ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩. 折返し口縁
77	SI-021	9	土師	壷	13.6		9.9	20%	にぶい黄橙色	石英・長石・雲母	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍｶﾗｹﾞ	
77	SI-021	10	土師	壷					赤褐色	石英・長石	胴上部:山形文, 網目撚糸文 胴下部:ﾐｶﾞｷ, ﾍｶﾗｹﾞ	外面:赤彩
77	SI-021	11	土師	壷		4.6	2.0	10%	にぶい橙褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	内外面:赤彩
77	SI-021	12	土師	鉢	10.8	4.0	5.8	60%	にぶい橙褐色	長石・ｽｺｼﾞ	ﾍｶﾗｹﾞ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑
77	SI-021	13	土師	鉢	11.0	2.8	6.8	80%	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑, 煤付着
77	SI-021	14	土師	鉢		4.2	4.0	20%	赤褐色	石英・長石・雲母	ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	外面:赤彩
77	SI-021	15	土師	高杯	13.0		7.0	20%	赤褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍｶﾗｹﾞ	外面・杯部内面:赤彩
77	SI-021	16	土師	器台	9.8		4.9	60%	赤褐色	長石・ｽｺｼﾞ	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍｶﾗｹﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍｶﾗｹﾞ	外面・杯部内面:赤彩. 穿孔3(円形と三角形)
77	SI-021	17	土師	器台			3.6	30%	黄褐色	長石	ﾅﾀﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍｶﾗｹﾞ	外面:赤彩, 穿孔4
78	SI-022	1	土師	甕	20.6		4.1	10%	にぶい赤褐色	長石	ﾊｹ→ﾅﾃﾞ, 口縁部:ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾊｹ→ﾐｶﾞｷ 頸部:ﾍｶﾗｹﾞ	内外面:赤彩. 折返し口縁, 卜編刻み
78	SI-022	2	土師	甕	17.4		21.5	60%	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑, 煤付着. 口唇刻み
78	SI-022	3	土師	台付甕			2.5	10%	橙褐色	長石	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	
78	SI-022	4	土師	甕		9.8	8.0	10%	黒褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑. 若干上底
78	SI-022	5	土師	壷	14.8		8.1	40%	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍｶﾗｹﾞ→ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾍｶﾗｹﾞ→ﾐｶﾞｷ 頸部:ﾍｶﾗｹﾞ	
78	SI-022	6	土師	壷	17.5	9.4	32.4	90%	赤褐色	石英・長石・雲母	口縁部・胴上部:網目撚糸文 頸部・胴部:ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍｶﾗｹﾞ	外面・口縁内面:赤彩, 黒斑, 煤付着. 折返し口縁
78	SI-022	7	土師	壷		3.0	5.6	30%	赤褐色	石英・長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	外面:赤彩
78	SI-022	8	土師	鉢	8.3	3.8	4.6	80%	にぶい橙褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘ 底面:ﾍｶﾗｽﾞﾘ, ﾍｶﾗｽﾞﾘ	
78	SI-022	9	土師	高杯			5.5	30%	にぶい橙褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾅﾀﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3(円形・三角形)
78	SI-022	10	土師	高杯	8.4		8.3	30%	橙褐色		ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	穿孔3
78	SI-022	11	土師	高杯	23.0		6.1	20%	橙褐色		ﾅﾀﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾅﾀﾞ→ﾐｶﾞｷ	
79	SI-023	1	土師	甕	24.0		22.0	40%	にぶい黄褐色	石英・長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑, 煤付着
79	SI-023	2	土師	甕		9.0	2.2	10%	黒褐色	石英・長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	
79	SI-023	3	土師	鉢	6.4	3.2	3.7	80%	橙褐色	長石	ﾊｹ→ﾍｶﾗｹﾞ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑
79	SI-023	4	土師	高杯		17.2	4.3	30%	赤褐色	長石・雲母	ﾐｶﾞｷ→ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
81	SI-024	1	土師	台付甕			11.3	20%	黒褐色	長石・雲母	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	煤付着
81	SI-024	2	土師	台付甕			3.9	10%	にぶい橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	
81	SI-024	3	土師	台付甕			3.4	10%	黒褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘ, ﾍｶﾗｹﾞ	煤付着
81	SI-024	4	土師	台付甕		9.8	7.7	60%	褐色	石英	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	煤付着
81	SI-024	5	土師	台付甕		9.4	6.7	10%	褐色	石英	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	煤付着
81	SI-024	6	土師	甕		10.0	14.6	40%	橙褐色	長石・ｽｺﾘｱ	ﾊｹ→ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑, 煤付着
81	SI-024	7	土師	壷	6.2	4.5	9.7	100%	にぶい橙褐色	砂粒	ﾍｶﾗｹﾞ 底面:ﾅﾀﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ. 頸部押文	外面:赤彩
81	SI-024	8	土師	鉢	11.8		4.9	20%	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	
81	SI-024	9	土師	鉢		2.4	3.1	70%	橙褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘ 底面:ﾅﾀﾞ, ﾅﾀﾞ	小形orミニチュア
81	SI-024	10	土師	高杯			9.4	40%	橙褐色	石英・長石・雲母	杯部:ﾍｶﾗｽﾞﾘｰﾅﾃﾞ 脚部:ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾅﾀﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾊｹ→ﾅﾀﾞ	
81	SI-024	11	土師	高杯			2.1	10%	にぶい橙褐色	長石	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾅﾀﾞ 脚部:ﾍｶﾗｹﾞ	
81	SI-024	12	土師	器台	6.4		3.1	40%	赤褐色	石英・長石・雲母	ﾍｶﾗｹﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍｶﾗｹﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍｶﾗｹﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔2残存
82	SI-025	1	土師	甕	19.0		15.5	0.6	赤褐色	長石	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	口唇刻み, 外面と内面赤み強い
82	SI-025	2	土師	甕	20.6		10.5	0.1	赤褐色	石英・長石・雲母	ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	
82	SI-025	3	土師	台付甕			3.2	0.1	褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	ﾍｶﾗｽﾞﾘｰ→ﾍｶﾗｹﾞ, ﾍｶﾗｹﾞ	黒斑

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・裾径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
82	SI-025	4	土師	壺	11.0		14.8	0.6	橙褐色	石英	ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	
82	SI-025	5	土師	壺	16.6		13.2	0.4	赤褐色		ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・口縁内面:赤彩, 折返し口縁
82	SI 025	6	土師	高杯			3.4	0.2	黄褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾅﾃﾞ	
84	SI-026	1	土師	甕	18.1		15.0	0.4	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
84	SI-026	2	土師	甕	15.0		5.8	0.1	にぶい橙褐色		口縁部:ﾊｹ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
84	SI-026	3	土師	甕	16.8		8.0	0.2	灰褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
84	SI-026	4	土師	台付甕			6.5	0.1	橙褐色	長石・ｽｺｺｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	5	土師	台付甕			4.3	0.1	橙褐色	雲母	ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
84	SI-026	6	土師	台付甕			4.6	0.1	にぶい赤褐色		杯部:ﾊｹ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	7	土師	甕		6.6	8.6	0.1	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ(一部ﾊｹ) 底面:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	8	土師	台付甕		11.0	8.7	0.2	にぶい褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	9	土師	台付甕		10.2	7.8	0.3	浅黄褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	10	土師	甕		9.4	13.1	0.3	にぶい赤褐色	砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ→底部ﾍﾗｹｽﾞﾘ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
84	SI-026	11	土師	台付甕		11.8	5.2	0.3	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着
84	SI-026	12	土師	甕		9.4	5.9	0.1	褐色		ﾊｹｰ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	13	土師	壺		6.8		0.1	明黄褐色	雲母・ｽｺｺｱ・砂粒	ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ	黒斑, 底面:木葉痕
84	SI-026	14	土師	壺		7.5	9.0	0.1	にぶい赤褐色		ﾐｶﾞｷ→底部ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	15	土師	壺	18.3	7.4	26.2	0.7	橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁, ド雑刻み, 円形浮文, 黒斑
84	SI-026	16	土師	壺	10.0		10.8	0.5	にぶい橙褐色		口縁部:ﾐｶﾞｷ 頸部:ﾅﾃﾞ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 口縁部:ﾊｹ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	17	土師	壺	14.8		7.0	0.2	橙褐色		ﾊｹ, 口縁部:ﾊｹ→ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
84	SI-026	18	土師	高杯	18.8		7.5	0.3	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺｺｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
84	SI-026	19	土師	高杯	21.4		6.9	0.1	橙褐色	石英・長石	ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	
84	SI-026	20	土師	高杯		18.0	4.8	0.1	にぶい赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	外面:赤彩
84	SI-026	21	土師	高杯		20.0	4.6	0.2	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	22	土師	高杯			5.2	0.3	灰赤色		ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩・黒彩, 杯部内面:赤彩, 穿孔2(変形三角形)
84	SI-026	23	土師	高杯			4.8	0.2	にぶい赤褐色	石英	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 穿孔1残存
84	SI-026	24	土師	高杯			3.2	0.2	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔1残存
84	SI-026	25	土師	高杯			3.2	0.2	にぶい赤褐色		ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
84	SI-026	26	土師	器台			2.6	0.2	にぶい褐色		ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
85	SI-027	1	土師	台付甕			5.3	0.2	黒褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
85	SI-027	2	土師	壺	22.4		3.7	0.1	赤褐色	石英・長石・雲母	口縁部:網目撚糸文 頸部:ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	外面頸部:赤彩, 内面:赤彩, 折返し口縁
85	SI-027	3	土師	壺					黄褐色	長石	口縁部:網目撚糸文 頸部:ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ	折り返し口縁, 浮文
85	SI-027	4	土師	高杯		9.8	6.9	0.4	赤褐色		ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 黒斑
87	SI 028	1	土師	甕	22.0		14.6	0.2	橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI-028	2	土師	甕	21.4		9.5	0.1	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI 028	3	土師	甕	15.7		13.0	0.2	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI-028	4	土師	台付甕	13.5		14.4	0.3	にぶい赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI-028	5	土師	甕	12.2		10.5	0.2	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI-028	6	土師	甕	17.1		3.1	0.1	にぶい褐色		指頭圧痕, ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁, 口唇刻み
87	SI-028	7	土師	甕	13.6		8.3	0.2	にぶい黄褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
87	SI 028	8	土師	甕	12.2		10.5	0.2	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み

区	遺構	No.	器種	器形	口径	底・裾径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
87	SI-028	9	土師	台付甕	12.8	7.5	21.9	0.6	にぶい橙色	砂粒	ヘラナデ、ヘラナデ	口唇刻み
87	SI-028	10	土師	台付甕	11.9	8.0	17.8	0.9	橙色	雲母・スコリア・砂粒	ヘラナデ、ヘラナデ	煤付着
87	SI-028	11	土師	台付甕	12.3	8.4	17.6	0.7	にぶい褐色		ヘラナデ→胴上部:ハケ、脚部:ハケ、ヘラナデ→口縁部・脚下部:ハケ	
87	SI-028	12	土師	台付甕		9.2	15.9	0.5	にぶい褐色		ヘラナデ、ヘラナデ	
87	SI-028	13	土師	台付甕		9.0	14.5	0.4	にぶい黄橙色		胴部:ヘラナデ 脚部:ハケ→ヘラナデ、胴部:ヘラナデ 脚部:ヘラナデ→ハケ	
87	SI-028	14	土師	台付甕		8.6	13.2	0.3	にぶい橙色		ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	15	土師	台付甕			17.4	0.2	にぶい赤褐色		ヘラナデ、ヘラナデ	煤付着
88	SI-028	16	土師	台付甕			7.5	10%	灰褐色		ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	17	土師	台付甕			5.3	10%	にぶい褐色		ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	18	土師	台付甕		6.3	4.0	0.4	にぶい橙色		ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	19	土師	台付甕		7.9	6.2	0.2	にぶい橙色	砂粒	ヘラナデ→脚部:ハケ、ヘラナデ	
88	SI-028	20	土師	台付甕		8.0	5.7	0.2	にぶい褐色		ヘラナデ(一部ハケ)、ヘラナデ	
88	SI-028	21	土師	甕		7.1	17.3	0.7	にぶい赤褐色	スコリア・砂粒	ヘラナデ→底部:ミガキ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ:底部:ミガキ	
88	SI-028	22	土師	台付甕		12.6	7.6	0.1	にぶい褐色	砂粒	ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	23	土師	甕		6.3	6.7	0.3	にぶい橙色		ヘラナデ 底面:ヘラケズリ、ヘラナデ	煤付着
88	SI-028	24	土師	壺	14.2		2.6	0.2	にぶい橙色		ミガキ、ミガキ	有段口縁
88	SI-028	25	土師	壺	16.4		2.8	0.2	にぶい赤褐色		ミガキ、ヘラナデ→ミガキ	有段口縁
88	SI-028	26	土師	壺	15.6		4.6	0.2	にぶい橙色		ミガキ、ヘラナデ→口縁部:ミガキ	有段口縁
88	SI-028	27	土師	壺	17.2		5.4	0.3	橙色		ヘラナデ→ミガキ、ヘラナデ→口縁部:ミガキ	有段口縁
88	SI-028	28	土師	壺		4.4	8.5	0.2	にぶい赤褐色	雲母	ヘラナデ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	外面:赤彩
88	SI-028	29	土師	壺		7.8	10.8	0.2	にぶい橙色		ミガキ→底部:ヘラナデ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	
88	SI-028	30	土師	壺					橙色		網目撚糸文、ヘラナデ	外面頸部:赤彩、折返し口縁
88	SI-028	31	土師	壺					明赤褐色		網目撚糸文、ヘラナデ	外面:赤彩、山形文
88	SI-028	32	土師	壺					橙色	スコリア	網目撚糸文、ヘラナデ	
88	SI-028	33	土師	壺					橙色	長石・スコリア・砂粒	網目撚糸文、ヘラケズリ→ヘラナデ	外面:一部赤彩
88	SI-028	34	土師	壺			7.3	0.4	橙色	スコリア・砂粒	ヘラケズリ→ミガキ、ヘラナデ	黒斑
88	SI-028	35	土師	壺			7.8	0.2	にぶい褐色		ミガキ、ヘラナデ	
88	SI-028	36	土師	壺			11.2	0.3	にぶい赤褐色	雲母	ミガキ、ヘラナデ	
88	SI-028	37	土師	壺		4.9	12.2	0.8	にぶい橙色	雲母	口縁部:ヘラナデ 胴部:ミガキ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ→口縁部:ミガキ	
89	SI-028	38	土師	壺	12.4	6.0	20.4	0.9	橙色	雲母・砂粒	ミガキ・口縁部:ナデ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	外面:赤彩、底面:木葉痕
89	SI-028	39	土師	壺	16.7	5.8	20.4	0.8	にぶい橙色		ミガキ→胴下部:ヘラナデ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	外面・口縁内面:赤彩、底面:木葉痕、折返し口縁
89	SI-028	40	土師	壺	13.6	6.0	18.2	0.9	にぶい橙色	雲母	ミガキ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	外面・口縁内面:赤彩、底面:木葉痕
89	SI-028	41	土師	壺	14.0	5.6	18.0	0.8	にぶい橙色		ミガキ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	外面・口縁部内面:赤彩、底面:木葉痕
89	SI-028	42	土師	壺	16.1		17.5	0.7	にぶい橙色		ミガキ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	有段口縁
89	SI-028	43	土師	壺	10.8	6.0	18.7	0.9	にぶい褐色		ミガキ→胴下部:ヘラナデ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	外面・口縁内面:赤彩、底面:木葉痕
89	SI-028	44	土師	壺	15.7	4.3	15.9	0.9	橙色	スコリア・砂粒	ミガキ→胴下部:ヘラナデ 底面:ヘラケズリ、口縁部:ミガキ ヘラナデ	黒斑、有段口縁
89	SI-028	45	土師	壺	11.6	4.0	13.8	0.8	にぶい橙色		ヘラナデ→ミガキ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ→口縁部:ミガキ	折返し口縁、浮文
89	SI-028	46	土師	壺	9.3	5.6	12.9	0.9	にぶい黄橙色	砂粒	ヘラナデ→底部:ヘラケズリ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	
89	SI-028	47	土師	壺	7.9	4.8	11.9	0.9	明黄褐色	雲母・スコリア・砂粒	ヘラナデ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	黒斑
89	SI-028	48	土師	壺	11.4	4.2	11.6	0.8	にぶい黄橙色		ヘラナデ(一部ミガキ) 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・脚径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
89	SI-028	49	土師	壺	8.8	5.0	11.3	0.9	灰褐色	砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ(一部ﾍﾗ)	
89	SI-028	50	土師	壺	8.2	4.6	10.0	0.9	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
89	SI-028	51	土師	壺	9.5	3.8	9.9	0.7	灰黄褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→胴部:ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
89	SI-028	52	土師	壺	8.0		7.5	0.3	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
89	SI-028	53	土師	壺	8.8	3.6	10.7	0.9	にぶい橙色	雲母・砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ→頸部:ﾊｹ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁
89	SI-028	54	土師	壺	7.8	3.7	10.1	0.9	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ(一部ﾍﾗ) 底部:ﾍﾗﾅｽﾞ), ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁
89	SI-028	55	土師	壺		8.5	5.0	0.2	にぶい橙色	砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗｽｽﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ(一部ﾐｶﾞｷ)	
90	SI-028	56	土師	壺		4.4	9.6	0.3	にぶい橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗｽｽﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
90	SI-028	57	土師	壺		5.0	9.6	0.3	にぶい赤褐色	雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
90	SI-028	58	土師	複合器台	15.1		11.0	0.3	にぶい橙色	雲母	受部:ﾊｹ 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾐｶﾞｷ, 受部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	黒斑, 穿孔2
90	SI-028	59	土師	高杯	14.3		5.0	0.4	橙色		ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩・黒彩
90	SI-028	60	土師	高杯			4.2	0.4	にぶい橙色	雲母	ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
90	SI-028	61	土師	高杯			3.3	20%	明赤褐色	砂粒	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩, 穿孔3
90	SI-028	62	土師	高杯		14.0	4.2	30%	にぶい橙色	雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	穿孔1残存
90	SI-028	63	土師	高杯		20.0	4.5	10%	にぶい橙色		ﾐｶﾞｷ→底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾊｹ	
90	SI-028	64	土師	高杯		10.5	6.3	40%	にぶい褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・杯部内面:赤彩
91	SI-029	1	土師	台付甕	17.3		18.5	0.9	黄褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着, 口唇刻み
91	SI-029	2	土師	台付甕		9.6	5.7	0.3	黒褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
91	SI-029	3	土師	台付甕		8.4	5.5	0.1	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗｽｽﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
91	SI-029	4	土師	甕		7.4	2.9	0.1	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｴﾗﾅ	ﾍﾗｽｽﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
91	SI-029	5	土師	高杯		15.4	4.4	0.3	橙色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面:赤彩, 黒斑
92	SI-030	1	土師	甕	12.0		7.0	0.1	赤褐色	石英・長石	ﾍﾗｽｽﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
92	SI-030	2	土師	甕		5.7	2.8	0.1	にぶい黄褐色	長石・ｽｴﾗﾅ	ﾍﾗｽｽﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
92	SI-030	3	土師	鉢	10.6	4.0	6.8	0.7	にぶい黄褐色	石英・ｽｴﾗﾅ	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
93	SI-031	1	土師	甕	17.2	8.8	21.3	0.9	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｽｽﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾍﾗｽｽﾞ	黒斑, 煤付着
93	SI-031	2	土師	杯	13.3		4.8	0.9	明赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	内面:放射状線刻
93	SI-031	3	土師	高杯	14.5		7.3	0.7	明赤褐色		ﾍﾗｽｽﾞ→ﾊｹ→ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	放射状暗文
94	SI-032	1	土師	高杯	19.2		4.9	0.3	赤褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	煤付着
94	SI-032	2	土師	器台		8.4	5.3	0.4	橙褐色	長石・雲母	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔3
96	SI-033	1	土師	壺	16.4		22.1	0.6	黒褐色		ﾍﾗｽｽﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着, 口唇刻み
96	SI-033	2	土師	甕		8.7	10.4	0.4	橙褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 木葉痕
96	SI-033	3	土師	壺		9.0	17.6	0.4	赤褐色	長石	ﾊｹ→ﾍﾗｽｽﾞ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
96	SI-033	4	土師	甕		8.0	1.9	0.1	にぶい黄褐色	石英・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	木葉痕
96	SI-033	5	土師	台付甕		10.8	6.0	0.2	褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
96	SI-033	6	土師	壺					にぶい褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁, 浮文
96	SI-033	7	土師	甕		3.8	3.5	0.2	にぶい黄褐色	雲母・ｽｴﾗﾅ	ﾐｶﾞｷ 底面:ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
96	SI-033	8	土師	高杯			7.7	0.3	にぶい黄褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔3, 杯部稜
96	SI-033	9	土師	高杯	10.6		6.0	0.1	橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
96	SI-033	10	土師	高杯	21.6		8.8	0.5	にぶい橙褐色		ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩, 杯部稜
96	SI-033	11	土師	高杯	14.8		11.6	0.4	赤褐色	長石	ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾊｹ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔1残存, 黒斑
96	SI-033	12	土師	高杯		20.2	6.7	0.4	赤褐色	石英・長石・雲母	ﾐｶﾞｷ, ﾊｹ	外面:赤彩, 穿孔4
97	SI-034	1	土師	甕	12.3		2.0	0.1	にぶい黄褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	輪状底装飾
97	SI-034	2	土師	台付甕			4.9	0.1	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾅﾃﾞ	

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・裾径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
97	SI-034	3	土師	壺	16.0		4.0	0.1	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着,折返し口縁
97	SI-034	4	土師	壺					黒褐色		浮文	内外面:赤彩,折返し口縁
97	SI-034	5	土師	壺	8.4		4.3	0.2	赤褐色	石英・雲母	ﾐｶﾞｷ,口縁部:ﾐｶﾞｷ 肩部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・口縁内面:赤彩
97	SI-034	6	土師	高杯	17.4		6.1	0.1	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺｼﾘ	ﾐｶﾞｷ,口縁部:ﾐｶﾞｷ 肩部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑,煤付着,杯部穿
98	SI-035	1	土師	甕		4.7	1.7	0.1	褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾐｶﾞｷ	煤付着
98	SI-035	2	土師	台付甕		9.2	7.2	0.3	にぶい橙褐色	長石	ﾊｹｰ→ﾅﾃﾞ,杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
98	SI-035	3	土師	壺					橙褐色			内外面:赤彩,折返し口縁,浮文
98	SI-035	4	土師	壺					黒褐色			内外面:赤彩,折返し口縁,浮文
98	SI-035	5	土師	壺		3.6	2.9	0.1	にぶい褐色		ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
98	SI-035	6	土師	壺		4.0	2.6	0.1	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
98	SI-035	7	土師	壺		3.7	1.1	0.1	にぶい褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
98	SI-035	8	土師	壺		3.5	2.3	0.2	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
98	SI-035	9	土師	壺		3.5	2.3	0.2	明褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
98	SI-035	10	土師	鉢	10.5	3.2	5.9	0.5	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ →口縁部:ﾐｶﾞｷ	
98	SI-035	11	土師	高杯			4.3	0.2	にぶい黄褐色	長石	ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔4
98	SI-035	12	土師	器台	10.2		2.6	0.4	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
98	SI-035	13	土師	器台		9.2	3.3	0.1	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾊｹｰ→ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	穿孔1残存
99	SI-036	1	土師	壺	23.0			0.1	赤褐色	石英・長石	口縁部:網目状糸文 頸部:ﾐｶﾞｷ,ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩,折返し口縁
99	SI-036	2	土師	壺			7.6	0.3	橙褐色	長石	ﾐｶﾞｷ,肩部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
99	SI-036	3	土師	鉢	8.6	2.7	5.7	0.7	にぶい橙色		ﾊｹ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
100	SI-037	1	土師	甕	20.2		12.1	0.2	黒褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
100	SI-037	2	土師	台付甕			5.7	0.2	黒褐色	長石	ﾊｹ→杯部:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ・脚部:ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑,煤付着
100	SI-037	3	土師	台付甕			3.7	0.1	赤褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
100	SI-037	4	土師	台付甕		9.0	8.5	0.3	褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
100	SI-037	5	土師	甕		5.4	1.9	0.1	黒褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	木葉痕
100	SI-037	6	土師	壺	14.2		5.7	0.2	にぶい赤褐色		ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ →口縁部:ﾐｶﾞｷ	外面・口縁内面:赤彩,黒斑
100	SI-037	7	土師	壺	18.2		5.4	0.1	黄褐色	石英・長石	ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,ﾐｶﾞｷ	折返し口縁
100	SI-037	8	土師	壺	15.0		6.1	0.3	赤褐色	石英・長石・ｽｺｼﾘ	ﾊｹ→頸部・肩部:ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ →口縁部:ﾐｶﾞｷ	頸部・肩部外面・口縁部内面:赤彩,口縁部:円形赤彩,有段口縁
100	SI-037	9	土師	壺		5.2	10.7	0.3	にぶい褐色		ﾐｶﾞｷ(一部ﾍﾗﾅﾃﾞ) 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ→胴下部:ﾊｹ	外面:赤彩,煤付着
100	SI-037	10	土師	鉢		4.4	3.3	0.5	にぶい黄褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	
100	SI-037	11	土師	鉢	9.3	3.0	3.4	0.2	灰褐色	長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
100	SI-037	12	土師	甑		5.4	3.1	0.1	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
100	SI-037	13	土師	高杯		12.6	5.0	0.3	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩,穿孔4
100	SI-037	14	土師	器台			5.3	0.3	にぶい黄褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔3
100	SI-037	15	土師	器台			4.1	0.2	橙褐色	長石・雲母	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ,杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔3
100	SI-037	16	土師	器台			4.1	0.2	橙褐色		ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾅﾃﾞ	穿孔3
100	SI-037	17	土師	器台			3.5	0.2	橙褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔1残存
100	SI-037	18	土師	器台			3.0	0.1	黒褐色	ｽｺｼﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着,穿孔4
100	SI-037	19	土師	器台		7.0	4.2	0.4	にぶい黄褐色	長石・ｽｺｼﾘ	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
101	SI-038	1	土師	甕	25.0		10.2	0.1	黄褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着,口縁刻み
101	SI-038	2	土師	台付甕		8.4	5.1	0.1	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑,煤付着
101	SI-038	3	土師	壺	5.9	4.4	10.2	0.6	にぶい橙褐色		ﾊｹ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・脚径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
101	SI-038	4	土師	壺	14.4		7.5	0.2	橙褐色	長石・雲母	ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾐｶﾞｷ	黒斑
101	SI-038	5	土師	壺			13.5	0.1	赤褐色	長石・スコリア	ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩
101	SI-038	6	土師	鉢		3.6	8.0	0.9	にぶい橙褐色	長石・雲母	ﾊｹｰ→底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
101	SI-038	7	土師	高杯	13.0		4.9	0.1	橙褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ,ﾐｶﾞｷ	外面・杯部内面:赤彩
101	SI-038	8	土師	器台			4.1	0.4	赤褐色	長石	ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
102	SI-039	1	土師	甕	24.0		15.0	0.1	黒褐色	長石	ﾊｹ, 口縁部:ﾊｹ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着, 口唇刻み
102	SI-039	2	土師	甕	16.2		8.5	0.1	にぶい橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	口唇刻み
102	SI-039	3	土師	甕	15.4		9.5	0.2	黒褐色	雲母	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ→口縁部:ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾊｹ	煤付着
102	SI-039	4	土師	台付甕			6.7	0.2	褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
102	SI-039	5	土師	台付甕		9.4	6.5	0.2	暗褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
102	SI-039	6	土師	台付甕		8.0	5.2	0.1	黒褐色	長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑
102	SI-039	7	土師	台付甕		11.6	8.3	0.2	黒褐色	雲母	ﾊｹ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾊｹ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾊｹ→ﾅﾃﾞ	煤付着
102	SI-039	8	土師	壺	25.0		8.8	0.1	赤褐色	石英・雲母	口縁部:網目撚糸文 頸部:ﾐｶﾞｷ, ﾐｶﾞｷ	頸部外面・内面:赤彩, 折返し口縁, 下端刻み
103	SI-039	9	土師	壺			11.2	0.1	赤褐色		ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ →頸部:ﾐｶﾞｷ	外面:赤彩, 黒斑
103	SI-039	10	土師	壺		14.6	26.5	0.4	赤褐色		ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩
103	SI-039	11	土師	甕	13.0		14.9	0.7	赤褐色	石英・長石	ﾐｶﾞｷ, 口縁部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・口縁内面:赤彩, 黒斑, 折返し口縁
103	SI-039	12	土師	壺			5.3	0.1	黒褐色	石英・雲母	頸部:ﾐｶﾞｷ 肩部:網目撚糸文, 円形浮文, ﾐｶﾞｷ	黒斑
103	SI-039	13	土師	壺			7.9	0.2	黄褐色	長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 頸部:ﾐｶﾞｷ 胴部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
103	SI-039	14	土師	壺			5.0	0.1	橙褐色		ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	
103	SI-039	15	土師	壺		10.6	2.9	0.1	橙褐色	石英	ﾐｶﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	
103	SI-039	16	土師	壺		5.0	2.5	0.1	橙褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
103	SI-039	17	土師	高杯	22.6		7.0	0.2	赤褐色		ﾐｶﾞｷ,ﾐｶﾞｷ	内外面:赤彩
103	SI-039	18	土師	高杯			6.8	0.1	橙褐色		ﾐｶﾞｷ,杯部:ﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	穿孔2残存→3
103	SI-039	19	土師	高杯	11.0		5.6	0.2	にぶい黄褐色			内外面:赤彩, 黒斑, 穿孔3
103	SI-039	20	土師	高杯		10.2	3.9	0.1	黄褐色		ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面:赤彩, 穿孔2残存
103	SI-039	21	土師	高杯			2.5	0.2	にぶい赤褐色	長石	ﾊｹ→ﾅﾃﾞ, ﾊｹ→ﾅﾃﾞ	外面:赤彩
103	SI-039	22	土師	高杯			3.2	0.1	にぶい黄褐色	石英	ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	穿孔3残存(三角形)
104	SI-040	1	土師	台付甕			4.8	0.1	橙褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ, 杯部:ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	
104	SI-040	2	土師	鉢	12.5	4.0	5.2	0.6	橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ	黒斑
104	SI-040	3	土師	高杯	10.9	5.8	7.4	0.9	赤褐色	雲母・砂粒	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾅﾃﾞ(「節」ﾊｹ)	外面・杯部内面:赤彩, 黒斑
104	SI-040	4	土師	器台	7.9	8.3	7.2	0.7	橙褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒斑, 煤付着, 穿孔1残存→2
106	SI-041	1	土師	台付甕		12.3	37.5	0.7	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, 胴上部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 胴下部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着
106	SI-041	2	土師	台付甕	13.2	7.2	15.6	0.9	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→胴上部:ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾊｹ	煤付着, 口唇刻み
106	SI-041	3	土師	台付甕		10.7	7.5	0.2	明赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	
106	SI-041	4	土師	支脚		11.1	11.2	0.9	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	内面接合痕
106	SI-041	5	土師	壺			8.5	0.3	にぶい橙褐色		ﾐｶﾞｷ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾐｶﾞｷ	外面:赤彩
106	SI-041	6	土師	壺		8.0	23.3	0.7	にぶい橙褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾊｹ→胴下部:ﾐｶﾞｷ→底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 底面:ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→胴下部:ﾊｹ	煤付着
106	SI-041	7	土師	壺	14.0		19.6	0.5	にぶい赤褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ→口縁部:ﾊｹ, ﾍﾗﾅﾃﾞ→口唇部:ﾊｹ	
106	SI-041	8	土師	高杯			6.7	0.3	にぶい褐色		ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾍﾗﾅﾃﾞ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾊｹ	
106	SI-041	9	土師	高杯		10.6	6.7	0.4	にぶい橙色	スコリア	ﾐｶﾞｷ→底部:ﾍﾗﾅﾃﾞ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ→底部:ﾊｹ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
106	SI-041	10	土師	高杯		11.1	7.7	0.5	にぶい橙色		ﾐｶﾞｷ, 杯部:ﾐｶﾞｷ 脚部:ﾍﾗﾅﾃﾞ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
107	SI-042	1	土師	甕	16.0		11.1	0.2	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着, 口唇刻み
107	SI-042	2	土師	甕			15.2	0.5	黒褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾅﾃﾞ	煤付着

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・裾径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
107	SI-042	3	土師	甕	15.9		4.6	0.1	黒褐色	長石・雲母	ナデ、ヘラナデ	煤付着. 口唇刻み
107	SI-042	4	土師	台付甕		11.6	6.4	0.1	黄褐色	石英・長石	ヘラナズリ→ヘラナデ、ヘラナデ	
107	SI-042	5	土師	壺		5.4	6.9	0.4	黄褐色	石英・長石	ヘラナズリ→ヘラナデ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	
107	SI-042	6	土師	壺	9.8		3.7	0.1	黒褐色		ヘラナズリ→ナデ、ナデ	煤付着
107	SI-042	7	土師	壺			4.2	0.2	黒褐色	雲母	ヘラナズリ→ナデ→ミガキ、ヘラナデ	煤付着
107	SI-042	8	土師	高杯		19.6	7.1	0.4	橙褐色	長石	ミガキ、杯部:ミガキ 脚部:ヘラナデ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
109	SI-043	1	土師	台付甕		12.6	32.4	0.4	橙褐色	石英・長石・雲母	ハケ→胴下部:ヘラナズリ→ナデ、蛸部:ハケ→胴部:ヘラナデ 脚部:ハケ	黒斑, 煤付着
109	SI-043	2	土師	甕	20.0		8.4	0.1	黒褐色	長石・雲母	ハケ, 口縁部:ハケ→胴部:ヘラナデ	煤付着. 口唇刻み
109	SI-043	3	土師	甕	26.2		10.3	0.1	暗赤褐色	石英・長石・雲母	ハケ, ハケ→ヘラナデ	煤付着. 口唇刻み
109	SI-043	4	土師	台付甕		10.2	5.5	0.1	褐色	長石	ハケ, ヘラナデ	
109	SI-043	5	土師	台付壺		8.6	5.8	0.1	にぶい橙褐色		ハケ→ナデ、ヘラナデ	煤付着
109	SI-043	6	土師	台付甕			14.5	0.2	橙褐色	石英・雲母	ハケ, ミガキ	煤付着
109	SI-043	7	土師	台付甕		11.2	7.4	0.2	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ハケ→ナデ、杯部:ヘラナズリ→ナデ 脚部:ハケ→ナデ	黒斑, 煤付着
109	SI-043	8	土師	甕	8.4		7.3	0.4	橙褐色		ヘラナズリ→ヘラナデ、ヘラナデ	黒斑
109	SI-043	9	土師	壺		4.4	12.0	0.4	赤褐色	石英・長石	ミガキ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	外面:赤彩, 黒斑, 煤付着
109	SI-043	10	土師	壺		4.0	10.7	0.8	にぶい橙褐色	石英・長石	ハケ→胴下部:ヘラナズリ→ミガキ 底面:ヘラナデ、口縁部:ミガキ 胴部:ヘラナデ	黒斑, 煤付着. 歪形
109	SI-043	11	土師	高杯	24.4	12.5	15.6	0.9	にぶい橙色		ミガキ, 杯部:ミガキ 脚部:ヘラナデ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
109	SI-043	12	土師	高杯	21.2	11.8	14.3	0.9	灰褐色		ミガキ, 杯部:ミガキ 脚部:ヘラナデ	外面・杯部内面:赤彩, 穿孔3
109	SI-043	13	土師	高杯		15.0	8.7	0.3	にぶい黄褐色	雲母	ミガキ, 杯部:ミガキ 脚部:ハケ	黒斑, 穿孔3残存→4
109	SI-043	14	土師	高杯		11.7	6.2	0.4	橙褐色	石英	ミガキ, 杯部:ナデ 脚部:ハケ	
109	SI-043	15	土師	高杯			4.6	0.1	赤褐色	石英・長石	ミガキ, ヘラナデ	外面:赤彩, 穿孔2残存→4
110	SI-044	1	土師	甕	23.0		15.3	0.3	にぶい赤褐色		ハケ, 口縁部:ハケ→胴部:ヘラナデ	煤付着. 口唇刻み
110	SI-044	2	土師	台付甕			3.7	0.1	にぶい橙褐色	雲母	ヘラナデ、ヘラナデ	
110	SI-044	3	土師	壺	18.8		5.8	0.1	にぶい橙褐色	石英・長石・雲母	ミガキ, 口縁部:ミガキ→胴部:ヘラナデ	折返し口縁
110	SI-044	4	土師	壺	21.0	7.8	24.8	0.6	赤褐色	雲母	ヘラナズリ→ミガキ 底面:ヘラナデ、ナデ→ミガキ	外面:赤彩, 折返し口縁, 下端刻み
110	SI-044	5	土師	高杯			3.1	0.1	赤褐色	長石・雲母	ヘラナデ、ヘラナデ	外面・杯部内面:赤彩
110	SI-044	6	土師	高杯			3.4	0.1	黄褐色	スコリア	ハケ→ナデ、ヘラナデ	
111	SI-045	1	土師	甕	15.0		17.5	0.4	橙色		ハケ→口縁部:ナデ、ヘラナデ →口縁部:ハケ	煤付着. 口唇刻み
111	SI-045	2	土師	甕			18.6	0.3	黒褐色		ハケ→胴下部:一部ミガキ, 頸部:ハケ→ヘラナデ	煤付着
111	SI-045	3	土師	甕	12.2	5.4	15.6	0.5	にぶい赤褐色		ハケ→胴下部:ヘラナデ、ヘラナデ	口唇刻み
111	SI-045	4	土師	甕			10.2	0.4	黄褐色	石英・長石	ハケ→ヘラナデ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	煤付着
111	SI-045	5	土師	台付甕		8.0	5.9	0.2	褐色		ヘラナズリ→ヘラナデ、杯部:ナデ 脚部:ヘラナデ	
111	SI-045	6	土師	壺	14.0		6.5	0.1	赤褐色	石英・長石	ミガキ、ヘラナデ →口縁部:ミガキ	内外面:赤彩
111	SI-045	7	土師	壺		3.0	5.8	0.7	赤褐色	石英・長石・雲母	ミガキ 底面:ヘラナデ、ヘラナデ	
111	SI-045	8	土師	壺			2.8	0.2	赤褐色	長石・雲母	ヘラナズリ→ナデ→ミガキ、ヘラナデ	外面:赤彩
111	SI-045	9	土師	壺		18.8	6.2	0.2	赤褐色	石英・長石・雲母	ミガキ、ヘラナデ →ミガキ	内外面:赤彩, 穿孔3
111	SI-045	10	土師	壺		19.4	6.2	0.2	赤褐色	長石・雲母	ヘラナズリ→ナデ→ミガキ、ナデ	外面:赤彩
111	SI-045	11	土師	壺		9.2	5.3	0.1	黒褐色	雲母	ヘラナズリ→ミガキ、ハケ→ナデ	黒斑, 穿孔3残存→4
112	SI-046	1	土師	台付甕			3.5	0.1	にぶい赤褐色	石英・雲母	ヘラナデ、ヘラナデ	煤付着
112	SI-046	2	土師	台付甕		12.6	4.1	0.1	黒褐色	長石	ハケ、ヘラナデ	黒斑
112	SI-046	3	土師	壺		3.8	1.0	0.1	暗褐色		ヘラナズリ→ナデ 底面:ヘラナズリ、ヘラナデ	
112	SI-046	4	土師	壺			8.0	0.2	赤褐色	石英・長石	ヘラナズリ→ナデ→ミガキ、ヘラナデ→胴部:ミガキ	外面:赤彩
112	SI-046	5	土師	壺		9.0	3.3	0.1	にぶい黄褐色	石英・長石	ヘラナズリ→ナデ 底面:ヘラナズリ→ナデ、ヘラナデ	煤付着
112	SI-046	6	土師	高杯	12.4		4.6	0.3	赤褐色	雲母	ナデ→ミガキ、ナデ→ミガキ	内外面:赤彩
112	SI-046	7	土師	高杯			3.5	0.1		雲母	ミガキ、ナデ	黒斑
112	SI-046	8	土師	高杯		11.0	4.2	0.2	黄褐色		ヘラナズリ→ナデ→ミガキ、ヘラナデ	黒斑, 穿孔2残存→4

図	遺構	No.	器種	器形	口径	底・裾径	器高	残存	色調	胎土	手法の特徴	備考
112	SI-046	9	土師	高杯		10.0	3.5	0.2	橙褐色	長石	ﾍﾗﾅｽﾞﾘｰ→ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	内外面:赤彩
112	SI-046	10	土師	高杯		22.4	3.8	0.2	橙褐色	石英・雲母	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ，ﾅﾅﾞ	外面:赤彩
113	SI-047	1	土師	台付甕	14.6	8.3	22.8	1.0	にぶい褐色	雲母・砂粒	ﾍﾗ→脚部:ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ→口縁部:ﾍﾗ	煤付着
113	SI-047	2	土師	台付甕	11.4	7.9	18.7	1.0	にぶい黄橙色	雲母・砂粒	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾅﾅﾞ→胴下部・脚部:ﾐｶﾞｷ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	
113	SI-047	3	土師	台付甕	12.4		10.0	0.4	暗褐色	長石・ｽｺｺｱ	ﾍﾗｶｽﾞﾘ→ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	煤付着
113	SI-047	4	土師	壺		4.4	1.5	0.1	黄褐色	雲母・ｽｺｺｱ	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ｺﾋﾞｷ 底面:ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	
113	SI-047	5	土師	高杯	13.4		6.0	0.3	暗褐色	石英・長石	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ，ｺﾋﾞｷ	
113	SI-047	6	土師	器台	8.6		3.0	0.3	にぶい橙褐色	石英・雲母	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ，ﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ	
113	SI-047	7	土師	器台		8.6	3.7	0.1	橙褐色	長石	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	穿孔4
114	SI-048	1	土師	壺					にぶい褐色		山形文，網目撚糸文，沈線，ﾅﾅ	
114	SI-048	2	土師	壺					にぶい褐色		網目撚糸文，沈線，ﾅﾅ	
114	SI-048	3	土師	壺					にぶい褐色		山形文，網目撚糸文，沈線，ﾅﾅ	
114	SI-048	4	土師	壺					にぶい黄橙色		山形文，網目撚糸文，沈線，ﾅﾅ	
115	SK-70	1	土師	台付甕		11.4	15.5	0.2	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺｺｱ	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰ→ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	煤付着
116	SK-44	1	土師	壺		9.2	8.4	0.2	橙褐色	長石	ｺﾋﾞｷ 底面:ﾍﾗｶｽﾞﾘ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	
116	SK-60	1	土師	壺		9.1	3.1	0.1	黄褐色	長石・ｽｺｺｱ	ｺﾋﾞｷ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	煤付着・木葉痕
117	SK-76	1	土師	台付甕		12.0	9.3	0.3	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍﾗﾅﾅﾞ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	煤付着
117	SK-76	2	土師	高杯		11.2	3.8	0.3	赤褐色	長石	ｺﾋﾞｷ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	内外面:赤彩，穿孔3残存→4
124	SK-55	1	須恵	杯	11.8	7.0	4.1	1.0	灰褐色	雲母・砂粒	回転ﾅﾅﾞ 底面:回転糸切り→手持ちﾍﾗｶｽﾞﾘ，回転ﾅﾅﾞ	油煙付着
124	SK-55	2	須恵	杯	11.9	6.7	4.0	0.8	にぶい黄橙色	砂粒	回転ﾅﾅﾞ 底面:回転糸切り→回転ﾍﾗｶｽﾞﾘ，回転ﾅﾅﾞ	油煙付着
124	SK-55	3	須恵	杯	11.9	7.0	4.0	0.9	にぶい褐色	雲母・砂粒	回転ﾅﾅﾞ 底面:回転糸切り→手持ちﾍﾗｶｽﾞﾘ，回転ﾅﾅﾞ	油煙付着
124	SK-55	4	須恵	杯	11.9	7.1	4.0	1.0	灰黄褐色	雲母・砂粒	回転ﾅﾅﾞ 底面:回転糸切り→手持ちﾍﾗｶｽﾞﾘ，回転ﾅﾅﾞ	油煙付着
124	SK-55	5	須恵	杯	21.0	9.5	5.4	0.9	橙色	石英・雲母・砂粒	回転ﾅﾅﾞ 底面:回転糸切り→回転ﾍﾗｶｽﾞﾘ，回転ﾅﾅﾞ	内面上部煤付着
135	遺構外	1	土師	甕	13.4		6.8	0.2	黒褐色	長石・雲母・ｽｺｺｱ	ﾍﾗ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	煤付着
135	遺構外	2	土師	壺			3.7	0.1	赤褐色	長石	ﾍﾗｰﾅﾅﾞ→ｺﾋﾞｷ，ﾍﾗｰﾅﾅﾞ	内外面:赤彩
135	遺構外	3	土師	壺	5.1	3.4	5.1	0.9	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｶｽﾞﾘ ﾅﾅﾞ 底面:ﾍﾗｶｽﾞﾘ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	
135	遺構外	4	土師	台付甕		8.4	7.2	0.4	橙褐色	石英・長石・雲母	ﾍﾗﾅﾅﾞ，杯部:ﾅﾅ 脚部:ﾍﾗﾅﾅ	黒斑，煤付着
135	遺構外	5	土師	甑		5.8	4.5	0.2	にぶい橙褐色	石英・長石	ﾍﾗｶｽﾞﾘｰﾍﾗﾅﾅﾞ 底面:ﾍﾗｶｽﾞﾘ，ﾍﾗﾅﾅﾞ	底面に穿孔4

第34表　砥石

図	No.	位置	注記	種類	最大長	重量	出土遺構	遺構時期	備考
119	3	SK-064	SK-064-3	扁平	39	85	土坑	古墳	鉄製小刀に共伴, 鉄分付着
136	1	SI-002	SI-002-69	扁平	117	277	住居跡	古墳前期	No.1・2・3接合, 接合面研磨, 平坦面3より薄い, 擦み状研磨
136	2	SI-017	SI-017-1	扁平	60	92	住居跡	古墳前期	No.1・2・3接合, 接合面・割れ面研磨なし
136	3	SI-004	SI 004-54	扁平	74	152	住居跡	古墳前期	No.1・2・3接合, 接合面研磨なし
136	4	SI-023	SI-023-1	扁平	116	278	住居跡	古墳前期	No.4・5・6接合, 接合面・割れ面研磨ないが, 8と離れた後研磨
136	5	SI-024	SI-024-43	扁平	44	24	住居跡	古墳前期	No.4・5・6接合, 接合面・割れ面研磨なし
136	6	SI-024	SI-024-88	扁平	40	12	住居跡	古墳前期	No.4・5・6接合, 接合面・割れ面研磨なし
136	7	SI 028	SI-028B-21	方柱	72	222	住居跡	古墳前期	No.7・8接合, 接合面研磨なし
136	8	09P-04	9P-04-1	方柱	81	156	遺構外	—	No.7・8接合, 接合面研磨・割れた後多面使用, 擦状研磨痕
137	9	SI-001	SI-001-1	扁平	57	51	住居跡	古墳前期	割れ面研磨なし
137	10	11Q-04	11Q-04 6	礫	73	97	遺構外	—	磨石類?被熱顕著
137	11	SI-024	SI-024-80	不整	129	858	住居跡	古墳前期	研磨面の位置不規則, 擦状研磨痕
137	12	SI-007	SI-007-25	不整	101	560	住居跡	古墳前期	元は大形の方柱状?擦状研磨痕
137	13	10P-48	10P-48-1	小形扁平	40	22	遺構外	—	擦切断痕, 規格品
137	14	SI-013	SI-013-15	方柱/規格	48	143	住居跡	古墳前期	擦切断痕, 中近世以降の流れ込み?
137	15	SD-003	SD-003-1	方柱	61	71	溝状遺構	中近世	擦切断痕, 規格品

第35表　軽石

図	No.	位置	注記	加工/使用	最大長	重量	出土遺構	遺構時期
97	1	SI-001	SI-001-180	欠損面以外の5面研磨	61	15	住居跡	古墳前期
97	2	SI 004	SI-004-52	全7面研磨, 溝状研磨多	85	45	住居跡	古墳前期
97	3	SI-005	SI-005-170	全面研磨, 平坦面2面と丸みを帯びた側面	46	12	住居跡	古墳前期
97	4	SI-027	SI-027-6	不整形, 全面研磨, 大きな凹面2か所は線条痕明瞭	107	58	住居跡	古墳前期
97	5	SI-013	SI-013-8	全5～7面研磨, 溝状研磨あり	51	20	住居跡	古墳前期
—	6	SI-015	SI-015-12					
—	7	SI-019	SI-019-10					
—	8	SI-020	SI-020-12					
—	9	SI-021	SI-021-90					

10	—	SI-035	SI-035-3
11	—	SI-037	SI-037-89
12	—	SI-040	SI-040-1
13	—	10R-06	10R-06-1

第36表　土製品・石製品

図	No.	位置	注記	器種/分類	最大長	重量	出土遺構	遺構時期	備考
58	1	SI-004	SI-004-63	焼成粘土塊	34	16.4	住居跡	古墳前期	素地粘土?数点圧着後焼成, 指紋あり
58	2	SI-004	SI 004-66	不明	30	4.3	住居跡	古墳前期	焼成後剥離の痕跡
64	2	SI-009	SI-009-21	土玉	45	43.3	住居跡	古墳前期	孔径6mm, 一端の孔周囲に平坦面
82	7	SI-025	SI-025-21	加工土器片	32	7.2	住居跡	古墳前期	土師器片再利用, 回転研磨の擦みもつ
97	7	SI-034	SI-034-1	土製勾玉	28	3.6	住居跡	古墳前期	
101	9	SI-038	SI-038-32	土製勾玉	27	3.3	住居跡	古墳前期	
103	23	SI-039	SI-039-1	管状土錘	30	7.0	住居跡	古墳前期	孔径4mm
132	6	10N 87	10N 87-1	石製有孔円盤	27	2.3	遺構外	—	平欠品
132	7	09R-40	09R-40-1	加工土器片	38	9.2	遺構外	—	土師器片再利用, 回転研磨の擦みもつ
132	8	表採	SURFACE-1	加工土器片	41	14.1	遺構外	—	土師器片, 両面穿孔, 再利用?
—	9	SI-048	SI-048-1	焼成粘土塊	38	3.2	住居跡	古墳前期	スサ入り, 不整形
—	10	SI-044	SI-044-1	焼成粘土塊	29	20.9	住居跡	古墳前期	素地粘土?顕著に焼成×2
—	11	SI 021	SI 021-9	不明	45	11.6	住居跡	古墳前期	全体ﾃﾞ, 土製品or土器の部分

第37表　鉄製品

図	No.	位置	注記	器種	外形・寸法	重量	出土遺構	遺構時期	備考
79	5	SI-023	SI-023-18	鉄斧	76×45×5	87.2	住居跡	古墳前期	短冊形, 片刃
118	1	SM-001	SM-001-1	刀子	72×15×3	8.3	古墳	古墳	木質と漆状の皮膜残存
119	1	SK-064	SK-064-1	小刀	320×24×15	104.1	古墳	古墳	木質残存
119	2	SK-064	SK-064-1	小刀	148×23×5	23.8	古墳	古墳	木質と布残存
125	1	SK-012	SK-012-1	鉄斧	84×45×19	151.3	土坑	奈良・平安	
135	9	SD-021	SD-021-1	工具柄	90×9×5	15.1	溝	中近世	やりがんな?

第38表　SK-014鉄滓・鉄塊等

No.	遺構	注記	種類	重量	磁着1	磁着2
1	SK-014	0015	椀形滓	22.9	なし	なし
2	SK-014	0094	椀形滓?	13.9	なし	なし
3	SK-014	0010	鍛冶滓	9.8	なし	なし
4	SK-014	0007	鍛冶滓	3.8	弱	なし
5	SK-014	0095	鍛冶滓	5.8	弱	なし
6	SK 014	0018	小鉄塊	3.2	やや強	なし
7	SK-014	0096	小鉄塊	1.2	やや強	なし
8	SK-014	0101	小鉄塊	1.2	やや強	なし
9	SK-014	0037	小鉄塊	0.6	強	なし
10	SK-014	0097	小鉄塊	3.7	強	なし
11	SK-014	0098	鉄製品小片	1.3	強	弱
12	SK-014	0031	鍛冶滓	1.8	なし	なし
13	SK-014	0004	鍛冶滓	1.3	なし	なし

磁着1=磁石の反応, 磁着2=メタルチェッカーの反応

第3章　まとめ

第1節　旧石器時代

当遺跡において出土した石器群は地点別で 254点，単独等を含めると 280点ほどになる。出土地点16地点として整理をすすめたが，この中には単独に近いような出土数の少ない地点もあり，文化内容を把握するまでには至らない石器群も存在した。このような状況では多くを語ることはできないが各文化層について簡単にまとめておくこととしたい。

第1文化層　豊富な石器群が出土した第4～6地点を含む本文化層は層序的にも一番古い時期に属する文化層として捉えることのできるものであり，出土石器群も器種構成という点からみて特徴的な一面もある。それは尖頭器類が存在せず，局部磨製石斧とスクレイパーを主体にした石器群を構成していた点であり，いわゆる剥接生産具とそれに関わる痕跡と位置づけることができよう。先にも触れたが特に磨製石斧の刃部は薄く，しかも鋭利に研磨され単なる斧とは考えにくい精巧な仕上げであった。石材についてみると，大規模な集中地点である第4～6地点では安山岩，珪質頁岩，瑪瑙，頁岩の4種で87%を占めており，ホルンフェルスを除く，他の石材は主要石材を補完するような形で用いていたものと考えられよう。また第2・3地点では瑪瑙が卓越しており，一応第4～6地点の傾向を裏付けているのではないだろうか。

第2文化層　第1文化層に次いで位置づけたのは第8地点の石器群である。層序的には比較的古く位置づけられるものの小規模なまとまりであり，その内容については多く語れない。ただここで出土した黒曜石についてみると半透明の良質な黒曜石であり，第3文化層としたものとは共通性を見出せるが，黒色で気泡の混在する第1文化層のそれとは明らかにことなる材質のものであった。

第3文化層　本文化層に属する石器出土地点は4か所となるがいずれも小規模であり，出土点数合計が18点と少ない。成品ではナイフ形石器が2点出土したのみで他の器種は認められなかった。これを参考に論述することはできないが，第12地点出土のナイフ形石器は特徴的なものであり，他の遺跡との比較も可能となる資料といえよう。一方，剥片では第9地点から集中して安山岩の剥片が出土している。だが石器に加工できるような良好な剥片は少なく，技術的な面あるいは使用石材という点からも本文化層を語るだけの資料を提供したとはいいがたい。

第4文化層　出土量は69点と第1文化層についで多いが，約半数は礫群であるため本文化層はいわゆる礫群を伴う石器文化と位置づけられる。破砕した礫から原石を推定するとほとんど拳大ほどの大きさになるような礫と思われた。これらの一部には，熱を受けた結果であろうか表面がやや赤みがかったものもあった。成品ではナイフ形石器が計4点出土した。とりわけ第13地点出土のナイフ形石器は，欠損部はあるものの柳葉形のきれいな形に仕上げられている。これは石刃状剥片を素材として用いており，製作技術という点からは特筆できよう。にもかかわらず第14地点出土のナイフ形石器は小形で粗雑な仕上げとなっており比較すると大きな差違を感じる。ところが粗雑なナイフ形石器に伴う剥片類には縦長の石刃状剥片が伴っており（第32図8・9・12），あながち時間差に結びつけることはできないように思われた。ただ礫群を主とした第15・16地点との関連では石器類の少なさ，使用石材という点でも第13・14地点の両者を結びつける材料は乏しいものであった。

第39表　文化層と石材

文化層	石材 地点	瑪瑙	安山岩	硅質頁岩	頁岩	黒曜石	チャート	ホルンフェルス	流紋岩	砂岩	凝灰岩	礫	合計
第1文化層	1									1			1
	2	14	3	1		1	1	1	1				22
	3	12	2	2				6	1				23
	4・5・6	21	31	28	19	4	5	3	3				114
	7		1	1									2
	計	47	37	32	19	5	6	10	5	1			162
第2	8	1	1		1	2							5
	計	1	1		1	2							5
第3文化層	9		8										8
	10					2							2
	11				1						1		2
	12		2	1	1		1		1				6
	計		10	1	2	2	1		1		1		18
第4文化層	13	1			1		1						3
	14	8	1	11	1		4		1				26
	15	1					1		1			22	25
	16		4	1			1					9	15
	計	10	5	12	2		7		2			31	69

第2節　弥生時代末期から古墳時代前期

第2章第4節に「古墳時代」の遺構として掲載したのは，住居跡49軒，竪穴状遺構4基，円墳1基，掘立柱建物跡2棟，鍛冶関連土坑2基である。そのほとんどは事実記載において「前期」とした，正確には弥生時代末から古墳時代前期の遺構群である。住居跡48軒，竪穴状遺構4基，鍛冶関連土坑2基からなり，掘立柱建物跡2棟も含まれた可能性がある。この後にも述べるように，墳墓は集落廃絶後のものと考えられ，後期の住居跡も1軒のみ単独で存在する。

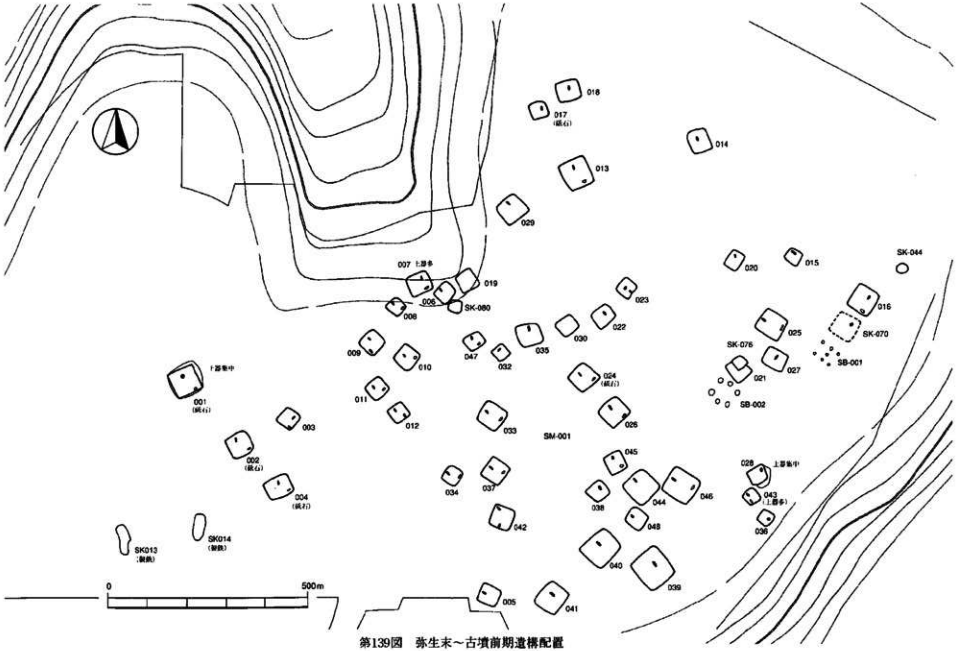
1．上器の内容と集落の時期

第39表に非掲載の参考資料も含む住居跡ごとの器種組成を示した。集落形成期の土器は，口縁部に棒状工具による刻みや押捺を施す甕が主体となる。これは加藤修司氏の草刈遺跡編年[1]でいう，草刈Ⅰ期に相当する。弥生後期のいわゆる「印手式」に特徴的な付加条縄文をもつ土器は破片も見当たらないので，集落の開始期は草刈Ⅰ期としてよいであろう。一方，坩や柱状脚の高杯を全く伴わないことから，下限は草刈Ⅲ期に至らないであろう。したがって，集落の時期は草刈Ⅰ期からⅡ期に比定できる。

壺には，装飾壺と装飾をもたない壺が存在する。前者は折返し口縁，網目状撚糸文，棒状浮文，山形（沈線区画）文，赤彩といった特徴をもつ弥生後期の壺の系譜を引くものである。しかし，当遺跡の資料には装飾要素の省略や，頸部が「く」の字に屈曲する器形の変化が認められる。器形の変化は装飾をもたない，むしろ新しい要素として登場する壺の影響を受けていると考えられる。したがって，装飾壺の存在を，安易に古い要素とすることはできないであろう。甕では，全体として台付甕の割合が高いことが特徴である。煮炊きは平底の甕＋炉器台ではなく，おもに台付甕が使われたようである。器形は頸部の屈曲の弱いものから，強いものに変化していったと考えられ，前者が中心となるSI-016・SI-043は相対的に古い時期を示す可能性がある。ほかに古い要素としてSI-034の輪積痕装飾をもつ甕がある。しかし，これらについても，頸部が強く屈曲する壺を伴う例があるので，一部は残存した形跡がある。高杯や器台は系統や新旧の要素を明らかにできないものが多い。元屋敷系の高杯（SI-001）や在地的な高杯（SI-003）など様々な器形が混在しているのが特徴である。小形器台についても，ヘラ磨きによる精製品で杯部が椀

第40表　古墳時代出土遺物数集計　　・掲載資料+参考資料(器種を検討したもの)

遺構	土器								石器		鉄器	土製品
	甕	台付甕	壺	鉢	高杯	器台	甑	合計	軽石	砥石		
SI-001	3	1	7	2	5			20	1	1		
SI-002	2		2		6			11		1		
SI-003	2		2	1	3			8				
SI-004			1		3			8	1	1		2
SI-005	4	3	12		5	3		29	1			1
SI-006	1		3		1	1		6				
SI-007	3	1	4		7			16		1		
SI-008	5	1	1		4			11				
SI-009	3				2			6				1
SI-010	5		2		2	1		10				
SI-011	5		4		5			14				
SI-012	2		5		1			8				
SI-013	2	5	6		2	2		18	1			
SI-014	4		2		2			8				
SI-015	3	1	1		1	1		8	1			
SI-016	1	2	2		4			9				
SI-017		1	1		2			5		1		
SI-019	2				2			5	1			
SI-020	3	1	1	1	2			9	1			
SI-021	6	2	6	3	4	2		25	1			1
SI-022	4	2	4	1	5			16				
SI-023	2			2	1			8		1	2	
SI-024	2	5	7	2	14	1		35	1	3		
SI-025	2	1	5		2			11				1
SI-026	6	9	16	1	8	2		42				
SI-027	1	1	3		4	1		11	1			
SI-028A・E	17	19	57	1	8	1		103				
SI-029	3	2			2			7				
SI-030	4		1	1	3			9				
SI-032					1	1		2				
SI-033	4	1	7		5			17				
SI-034	6		5		2			14				1
SI-035	3	1	13	1	5	2		26	1			
SI-036	3		8	1	1			13				
SI-037	2	3	12	2	1	6	1	28	1			
SI-038	3	1	9	1	4	1		20				1
SI-039	3	4	23		9			40				1
SI-040		1	6	1	6	1		16	1			
SI-041		3	3		3			10				1
SI-042	5	1	9		1			16				
SI-043	4	8	8		6			26				
SI-044	4	1	9		5			20				1
SI-045	6	1	6		8	1		22				
SI-046	2	2	5		9			18				
SI-047	1	3	7		2	3		16				
SI-048	1		8					10				1
SK-044			7		1			8				
SK-060			1					1				
SK-070		1						1				
SK-076		1			1			2				
総計	144	89	301	21	180	30	1	802	13	9	2	12



第139図　弥生末～古墳前期遺構配置

状を呈するもの（SI-005）や，脚孔の無いもの（SI-037），さらに器受部がほぼ平行なもの（SI-021）など，住居跡内・住居跡間で様々なものが混在している。

以上のように，集落が存在した期間は短く，土器のセット関係から新旧を確信できる例はみられない。多数の住居跡が同時に存在したとは考えにくいが，現状では時期的な変化を検討することはできなかった。

2．遺構配置

第139図のように，住居跡は比較的密集しているにも関わらず，重複例は皆無である。建て替えの痕跡もSI-012・SI-046の２例に認められたに過ぎない。重複や建て替えが少ないことは，この時期の集落の一般的な傾向といえ，集落の継続期間は，廃屋の位置が見失われることのない程度の短期間であった可能性が高い。

主軸方位は全体として斉一性が高い。住居跡の掘り込みと，炉の長軸・位置の片寄りからみた主軸は，北と西の間，N-15°-WからN-66°-Wまでの40度に入るものが45軒のうち41軒を占める。主柱穴構造の住居跡に限るとさらに方位は揃っており，長・短辺の方向に関わらず炉を北西方向に向けている。北東を向くSI-016を例外とすれば，その振れ幅は小さい。貯蔵穴は炉の反対側，中心軸の右側に横長に掘り込まれているものがほとんどであるといえる。

3．土器の集中廃棄例

SI-028では，隅丸方形の住居跡の掘り込みがほぼ埋まった場所に皿状の窪みをつくり，そこに多量の土器を廃棄している。出土土器を概観すると，口縁部に押捺を施す甕類が多数出土していることから，時期は草刈Ⅰ期に比定できる。

土器群の性格を知る上で，畿内系とされる有段口縁壺や複合器台（壺結合形器台）が含まれることは注目に値しよう。これらは古墳から，あるいは祭祀を想起させる状況で出土することの多い器種である。壺類の割合が多いことも特徴である。一方で，日常品とされる台付甕も多い。台付甕はヘラナデ調整の小形品が多い。非掲載資料を含めると，壺類は57点，台付甕は19点を数える。さらに，土器以外を含まないことも特徴といえる。遺跡全体では土製・石製の模造品類が若干出土しているものの，みな単独である。以上の諸点から土器が多量に廃棄されたのは何らかの祭祀的な行為によるものとみられる。祭祀の内容・形態を知る手がかりは乏しいが，器種組成からは例えば饗宴・饗食型の祭祀が考えられる。

そのほかSI-001・005・007・026・043からも，土器の集中や完形に近い壺や高杯・小形器台などの出土がみられた。SI-026は破片のみであったが，他の４軒には完形土器が伴っていた。SI-001は完形の高杯１点が，SI-005は完形の器台２点が，SI-007は完形またはそれに近い壺２点・高杯２点が，SI-043は完形高杯２点・壺１点が出土している。SI-028をはじめとして，これらの住居跡の位置が住居跡群の外縁に位置するのは偶然とは考えにくい。おそらくは，居住区の外縁部または谷に面した地で，祭祀などの行為が行われたことを示すものであろう。

4．墳墓の時期

この時期の集落には，集落域内の外縁に墳墓群を伴う例が知られている。いずれも初期方墳（あるいは方形周溝墓）といわれる低墳丘の方形墳墓によって構成される。このことからすれば，当遺跡で検出した円墳（SS-001）からは時期を決定できる遺物が出土していないが，集落の時期よりは下る可能性が高い。土壙墓2基についても，事実記載で述べたように集落に伴う可能性が低いと判断した。現在整理作業中である松崎Ⅰ遺跡では当該時期の初期方墳群を検出しており，墓域はそこに存在したものであろう。第140

図のように，墳墓を伴う集落はこの地域では貴重な存在である。

5．鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構としたのは，SK-013・014の2基の土坑である。事実記載において述べたように，直接的な証拠は決して多くない。まず，時期についてである。土器は小片のみであるが集落形成期のものがまとまっており，周囲に遺構が少ないことから，鍛冶滓等とともに同時期に廃棄された可能性が高いものと考えた。性格については，出土遺物が鍛冶に関わることは疑いのないところである。椀形滓は遠くまで運ばれることが少ないので，この付近で鍛冶が行われたことも確実であろう。鍛冶炉自体や炉壁は発見されていないが，焼土や木炭を伴っており，窪みが炉であった可能性は否定できない。

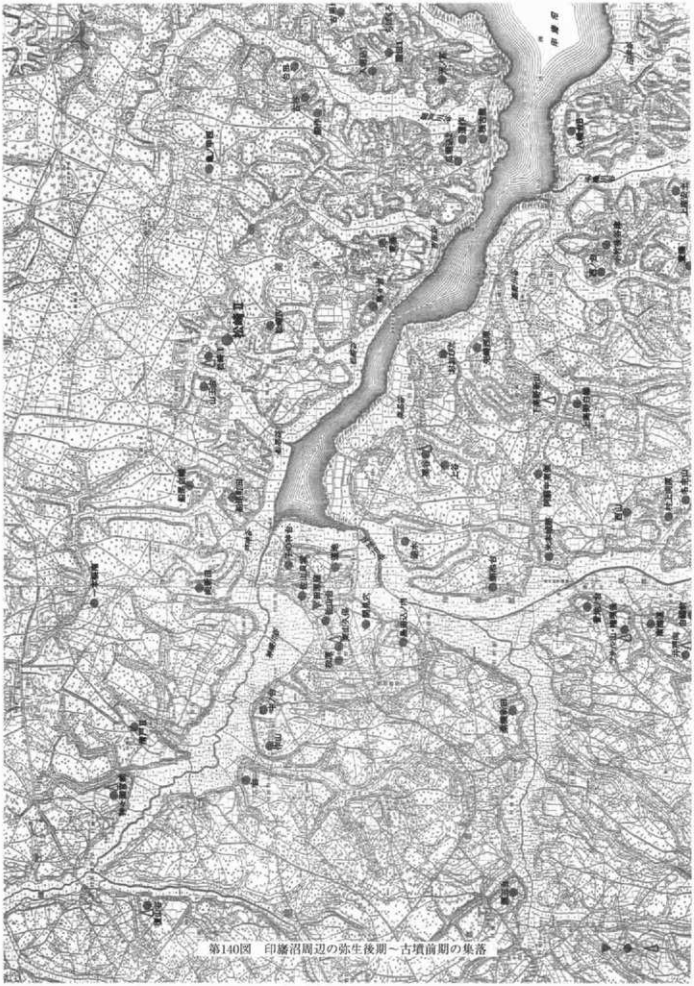
このような見解から，2つの遺構は古墳時代初期の鍛冶工房の可能性が高いと判断した。これが正しいとすれば，八千代市沖塚遺跡[12]と並んで，東日本における最古級の例となる。貧弱な資料群とはいえ，今後詳細な分析を経て鉄素材の産地や生産工程の検討などが行われるべきであろう。なお，当遺構出土の椀形滓はかなり厚く，重い印象があるため沖塚遺跡の「鍛冶工房跡」遺構出土資料を実見したところ，違和感はなかった。もしも時期の比定が誤っている場合には，SK-055竪穴状遺構の時期，すなわち平安時代が候補となるだろう。

なお，周辺のS1-001・002・004号住居跡からは砥石と軽石が出土しており，集落西端部が鍛冶などの作業場として使われた可能性を示唆する。当集落では大形の板状砥石や軽石が多用されており，砥石の住居跡間接合例も複数見られた。鉄の生産と製品の使用が，集落自体に直接関わっていたことを示すものであろう。鍛冶関連遺構の時期が明確でない段階ではあるが，集落に付随した村鍛冶的な施設であったと考えておきたい。

6．集落の位置づけ

以上の点を踏まえ，当集落について周辺の同時代集落を概観しながら考えてみたい。第140図は，印旛沼低地西半域の弥生時代と古墳時代前期の集落分布である。このなかで弥生中期の集落は小規模な環濠集落である田原窪遺跡のみであり，ほとんどは弥生後期後葉から古墳前期の集落である。ここには示していないが，古墳中期の集落も多くない。集落は弥生時代の終わりころに急増し，古墳前期まで多数が存在した。ほとんどは小規模な集落である。発掘例をみると，重複や建て替えが少なく，長期間集落が継続する例が少ないといえる。廃絶された集落の故地に再び居住する例も少ないようである。例外的に住居跡の数が多い平戸台地や栗谷遺跡周辺などにおいても，台地上の一部分で多数の遺構が重複するといった小範囲へのこだわりは認められない。松崎Ⅱ遺跡の集落のあり方は，このような特徴をよく表しているといえる。

未発掘の遺跡が多いことを考慮すると，当地域には小集落が連綿と分布している印象である。このような集落のあり方から推定される居住様式は，小集団がある程度の期間で移動を繰り返した，というものであろう。一般的な傾向として，定住民の集落は生産の場あるいは湧水の位置などの条件によって好適地が選ばれ，その場所にある程度のこだわりをもつと考えられる。もし，主要な生産の場が灌漑施設等の整った水田であったとしたら，なおさらのことである。先に推定した居住様式からは，このような水田稲作を想定するのは困難であろう。最近の研究で，この時代のコメは灌漑を必要とせず，あまり手を加えなくても収穫できる熱帯ジャポニカであった可能性が指摘されている[13]。当地域の集落は初期稲作農耕とその社会を研究する上で貴重な資料となるはずである。そのために，炭化植物遺体の回収・分析の積み重ねや，低地遺跡の調査・研究などが望まれるところである。



第140図　印旛沼周辺の弥生後期～古墳前期の集落

第3節　古墳時代から奈良・平安時代

1．土壙墓

円墳については既に述べた。土壙墓のうちSK-064には小刀と砥石が副葬されている。掘り込みの北側に，主軸に直交する形で置かれており，遺体は北を枕にして置かれたものであろう。なお，砥石の片面に酸化鉄が付着し，小刀には布の痕跡が付着していることから，小刀と砥石が布に包まれて副葬されたと考えられる。

2．方形周溝状遺構

方形周溝状遺構とした墳墓は平安時代まで連続する方形墳であり，本来終末期古墳あるいは方墳と呼ぶべきであろう。SS-001では周溝内に掘り込まれたSK-012が古墳に伴うかどうかが問題となった。手がかりは少ないが，周溝に直交する位置関係から関連施設と判断した。土坑からは鉄斧，ウマ頭骨，土師器小片数点が出土している。共伴する鉄斧が古代の特徴を呈しており，それより下る可能性は少ない。ウマの埋葬は，殉葬または犠牲獣とされた可能性や，被葬者の飼馬が追葬された可能性を指摘した。また，鉄斧は馬の殺害または頭部の切断に使われ，犠牲行為に関わった可能性についても触れた。分析の結果，ウマはかなりの老獣であった。

3．奈良・平安時代の竪穴状遺構

SK-055は完形の杯が5点出土した竪穴状遺構である。このうち4点にはところどころに油煙が付着しており，やや径の大きい土師器杯ないし鉢の内面上部には煤が付着している。大きな杯のなかにほかの杯を重ねて灯明具として使ったものと推定した。土坑の性格は同様の例を見つけて併せて判断すべきであろう。

第4節　中・近世

1．掘立柱建物と溝

中・近世の掘立柱建物とした遺構のうち，SB-004，005，006は，梁行や桁行外側の両側または片側に狭く柱間をとる点に共通性を見いだすことができる。また，位置や方向からみて周辺の溝と何らかの関係があると考えられる。時期や性格を示す材料は少ないが，例えば中・近世に存在した「田屋」「垣内」が想起される。「田屋」は開発や出作のために現地に置かれた小屋，「垣内」は周囲を竹木・垣・堀などで区切った耕地とされている[4]。SD-016・019など方形を呈するものや一周するものがそれにあたるかもしれない。

2．台地整形区画

11J，11H，12Hグリッド付近の，SD-021によって方形に区画された遺構群である。SD-021の北側部分，東西に走る溝には地下式壙（SK-073）が重複している。SD-021からは出土した常滑産の甕の年代から，台地整形は中世に遡る可能性がある。本遺構の北西方向の松崎Ⅰ遺跡の台地東縁にも，台地整形区画と考えられるものがあり，地下式壙が確認されている。さらに南側の松崎Ⅲ遺跡からも台地整形区画が4か所確認されている。このように周辺に台地整形区画が複数確認されていることから，中世に広く造成が行われ，耕地あるいは屋敷地として利用されたものであろう。

註

1　加藤修司 2000 「第1章　土器編年案」『研究紀要』21 千葉県文化財センター

2　大廣依子他 1994 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他』

3　佐藤洋一郎 1996 『ＤＮＡが語る稲作文明－起源と展開－』日本放送出版協会など

4　宮本常一 1979 『開拓の歴史』

写 真 図 版

図版 1

結縁寺遺跡
新井堀 I
新井堀 II
結縁寺遺跡
山田台
松塚 I
松塚 III
松塚 III
松塚 III
松塚 IV
東海道
東海道跡
松塚 V
松塚 III
松塚遺跡分布調査地点等位置図（一部）　縮尺1:10,000

（北東方より）

（北方より）

松崎Ⅱ遺跡付近航空写真（2）

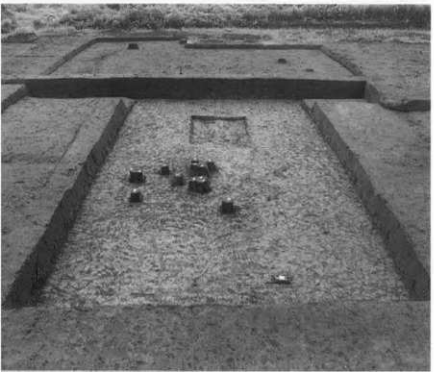
第1文化層（Ⅳ-c層）
第4・5・6地点
第2地点
（北西より）

第4・5・6地点
第2地点
（南より）

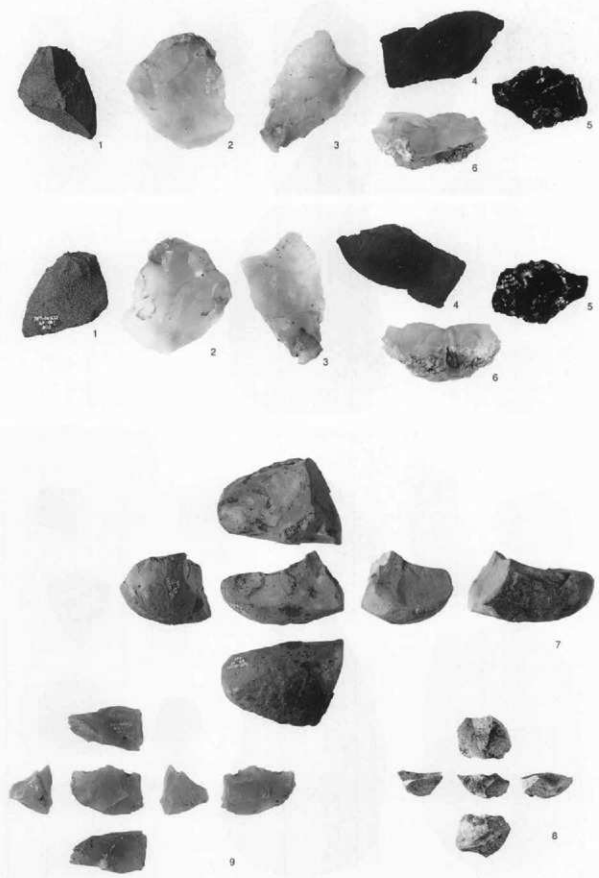
第4地点
石斧出土状況

第2地点

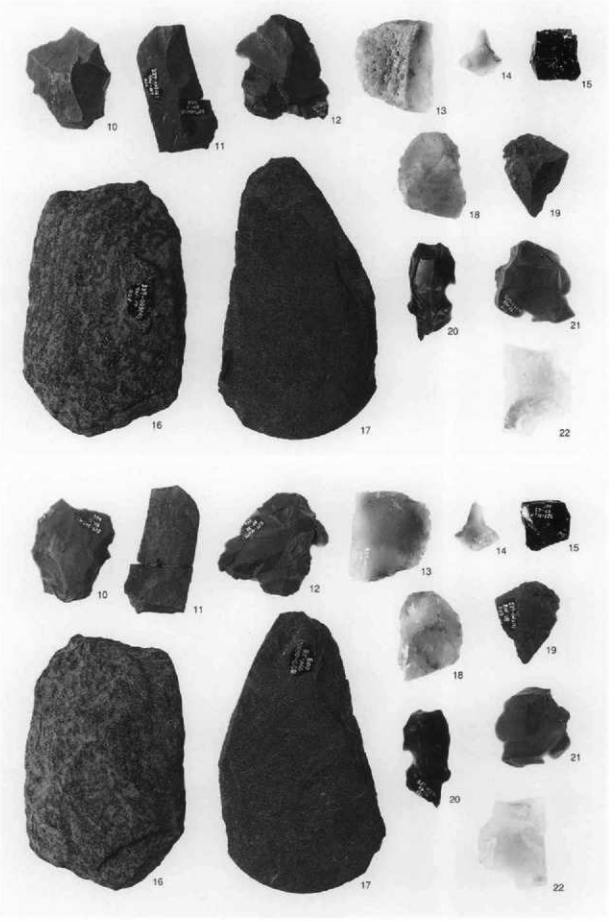
第3文化層（Ⅳ～Ⅴ層）
第9地点



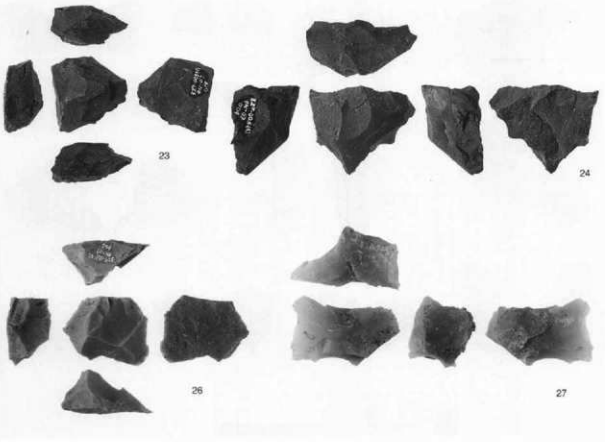
第4文化層（Ⅲ層）
第16地点

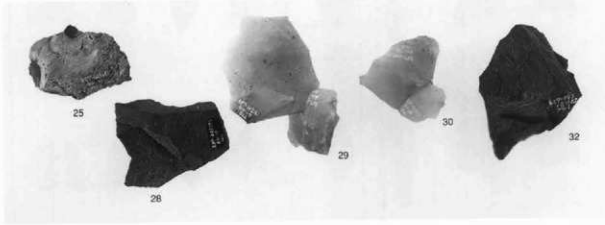


第 1 文化層出土遺物（1）

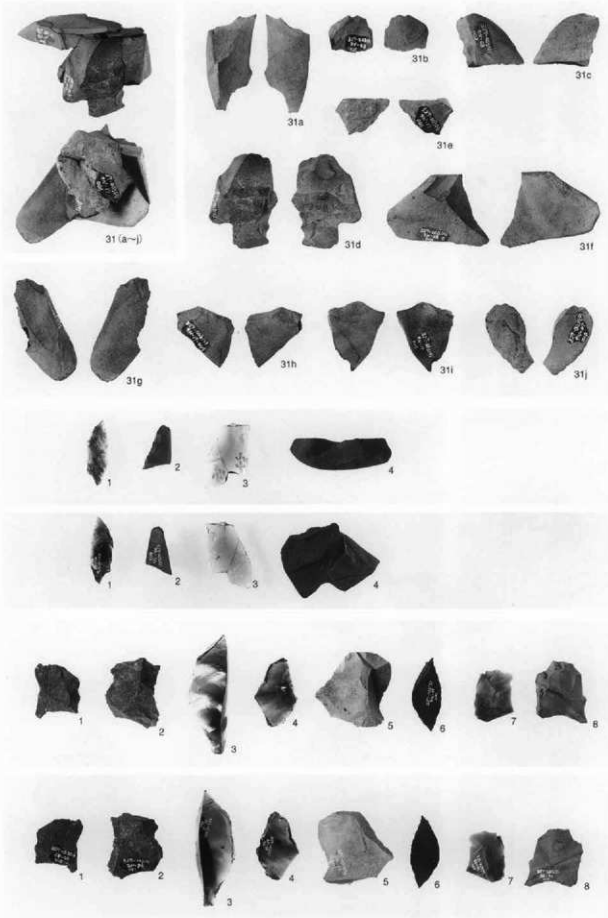

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22

第 1 文化層出土遺物（2）

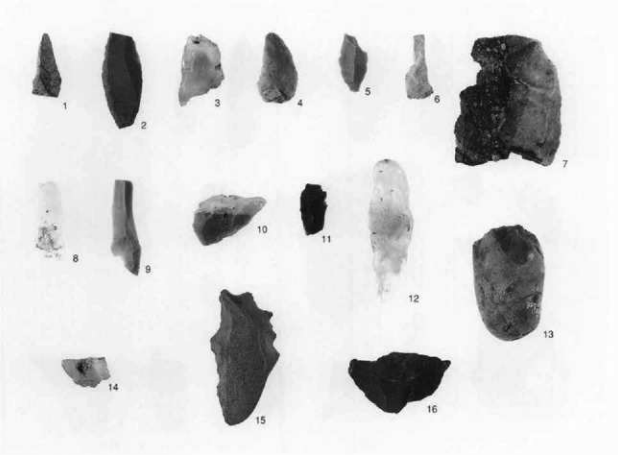


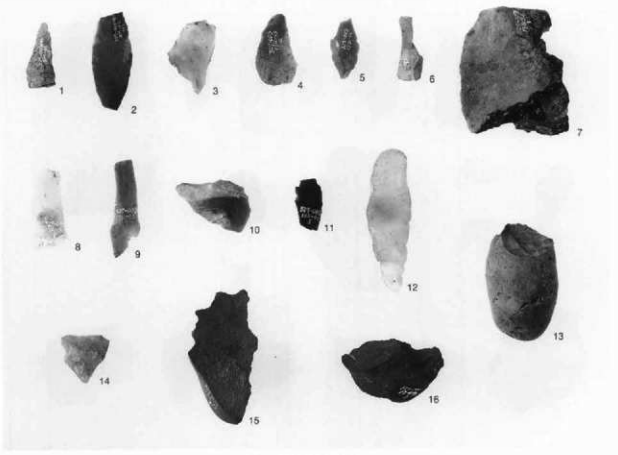


第 1 文化層出土遺物（3）

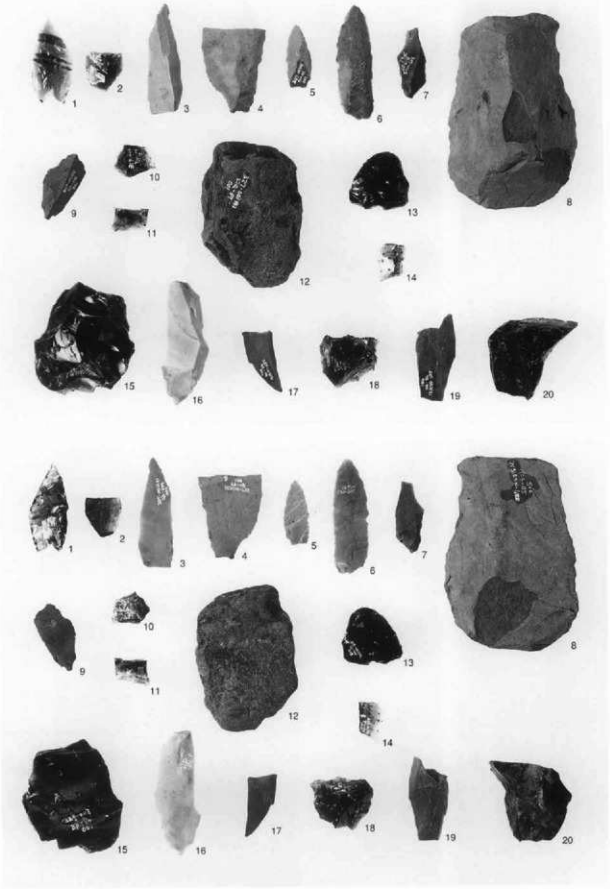


第１文化層出土遺物（４）・第２文化層・第３文化層出土遺物





第 4 文化層出土遺物



地点外及び単独出土遺物

51

18

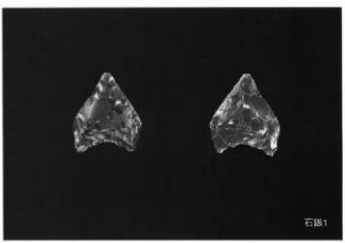
38

74

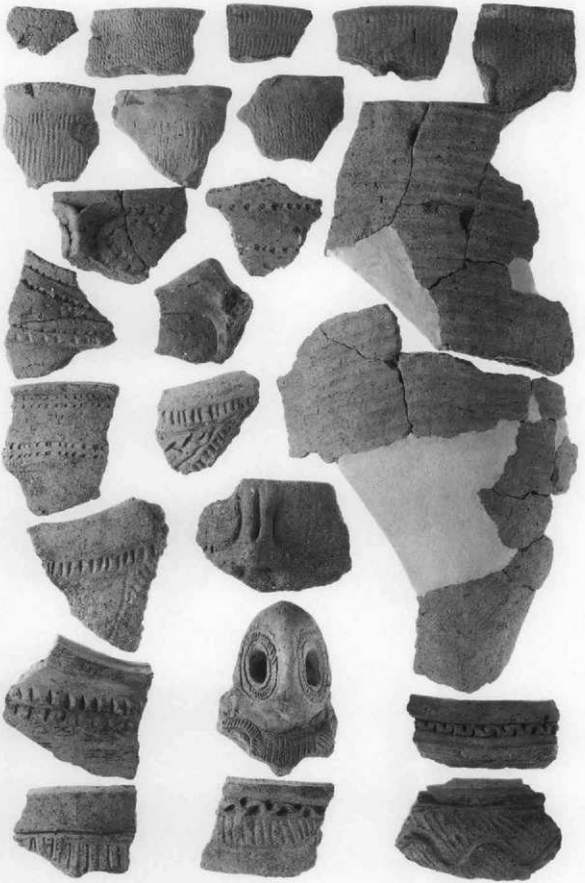
96

105

101

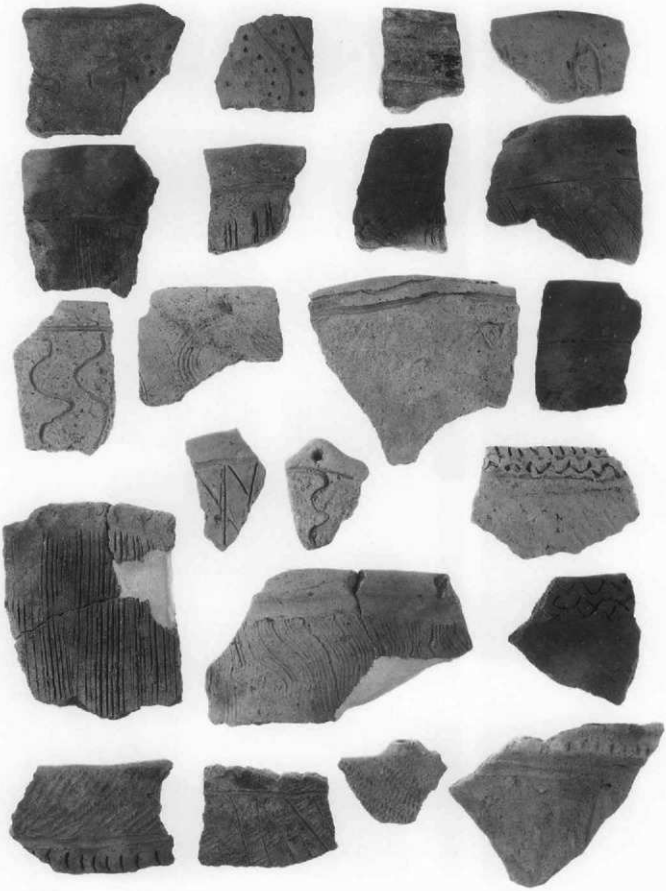


縄文土器1・石鏃1 接写

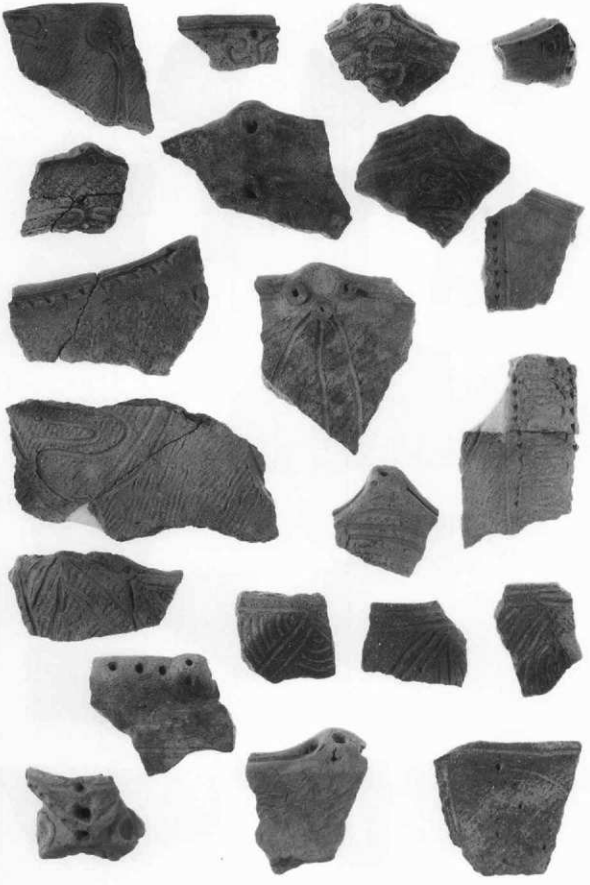


縄文土器2

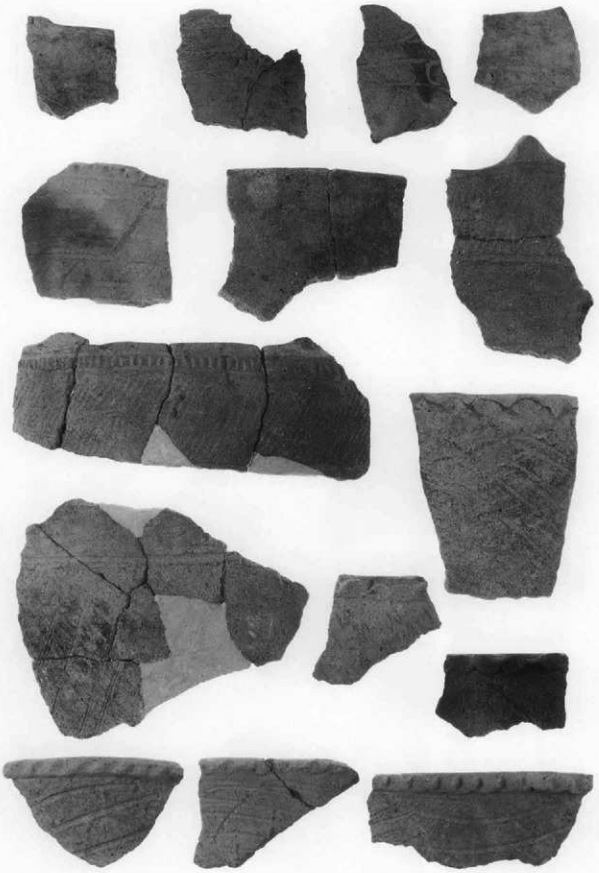
縄文土器3



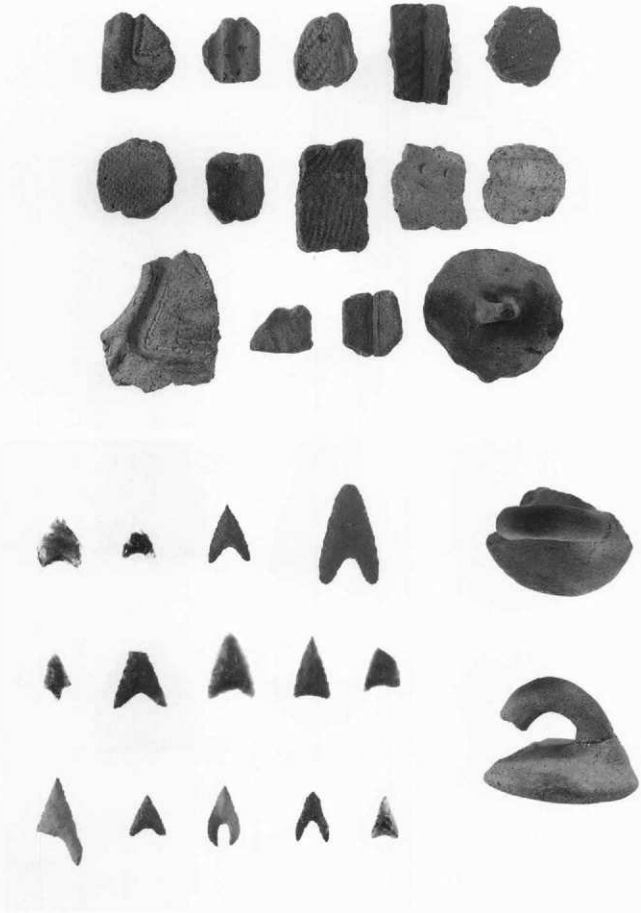
縄文土器4



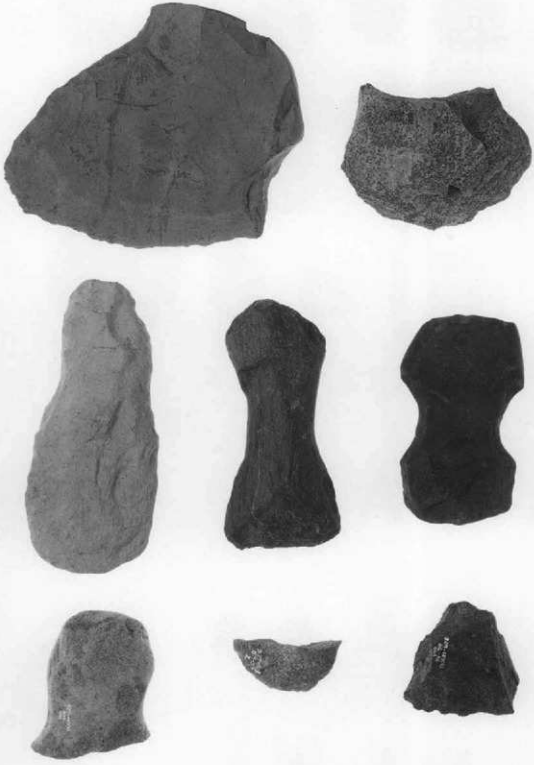
縄文土器5



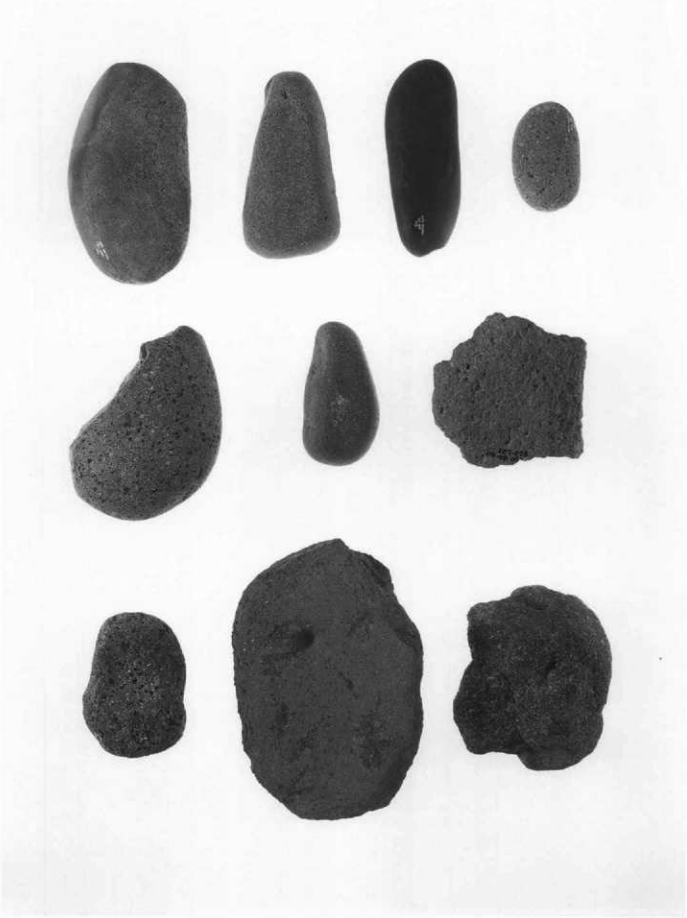
縄文土器6



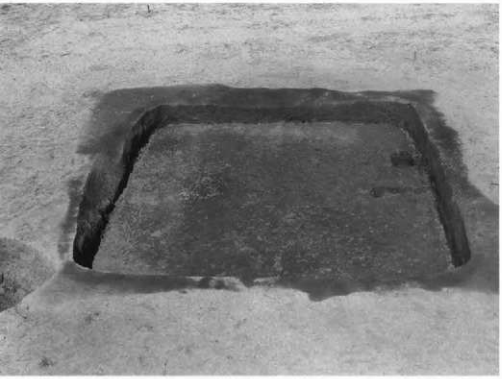
縄文土製品・縄文石器 1



縄文石器 2



縄文石器3



SI-002

SI-004

SI-005

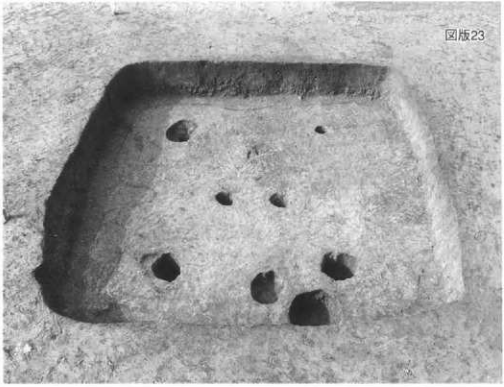
SI-006

SI-007

SI-008

遺物出土状況

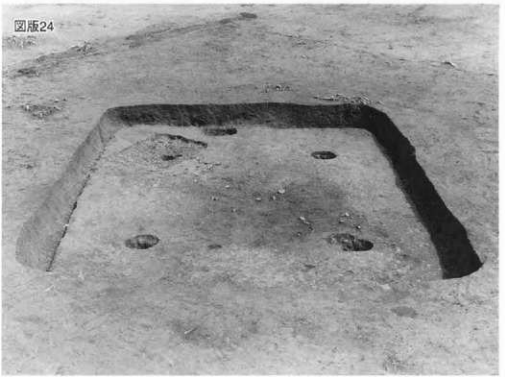
SI-009



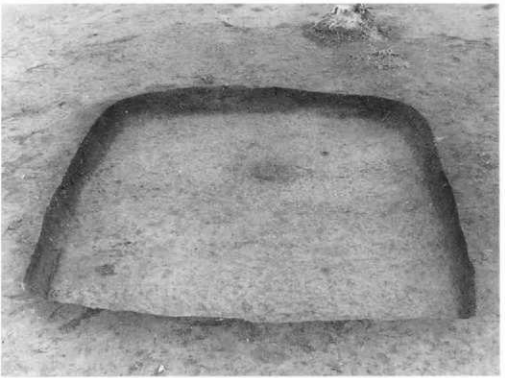
SI-010

SI-011

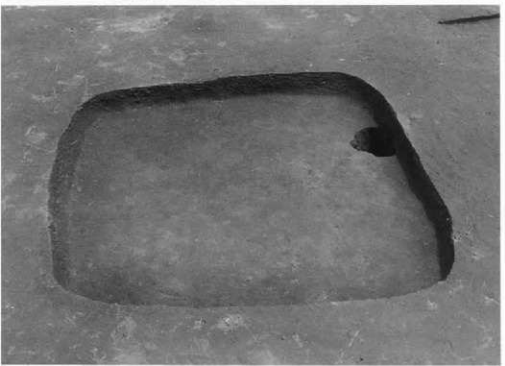
SI-012



SI-013

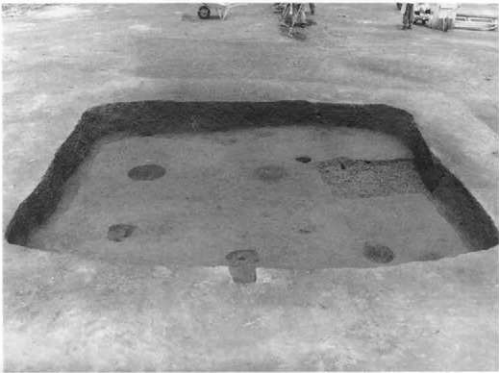


SI-014



SI-015

SI-017



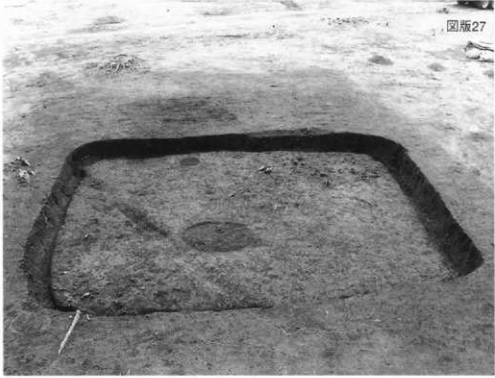
SI-018

SI-019

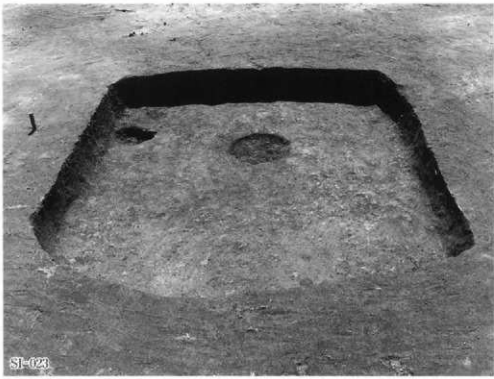
SI-020

遺物出土状況

SI-021



SI-022

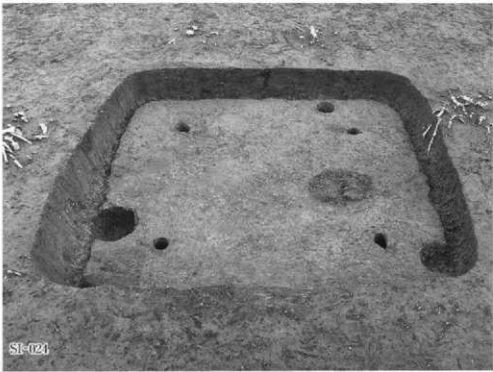


SI-023

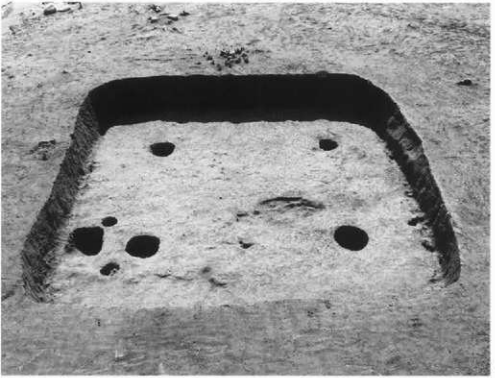
遺物出土状況

遺物出土状況

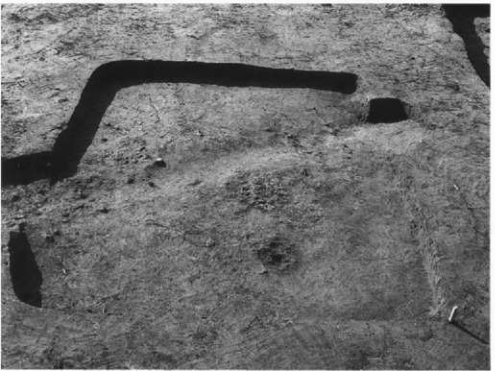
遺物出土状況



SI-024



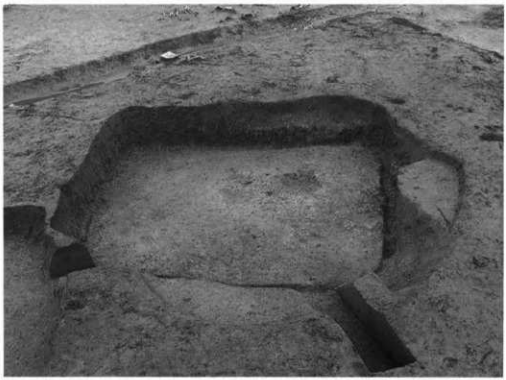
SI-026



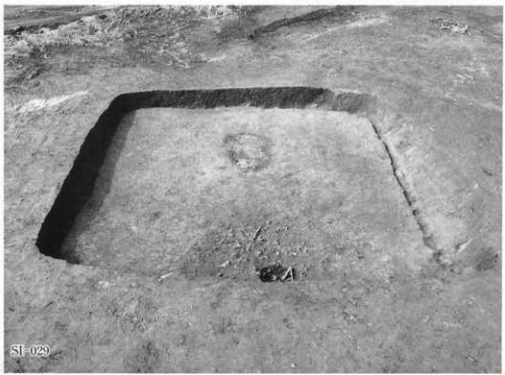
SI-027

遺物出土状況

SI-028-A


SI-028-B

遺物出土状況



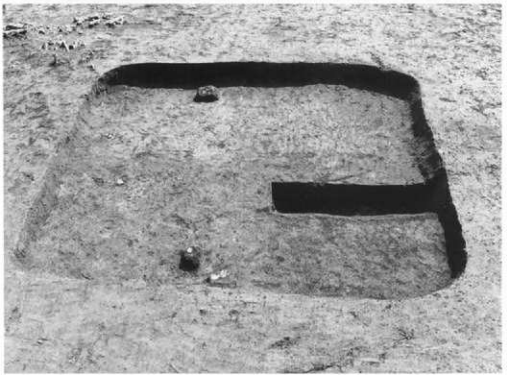
SI-029

SI-030

SI-031

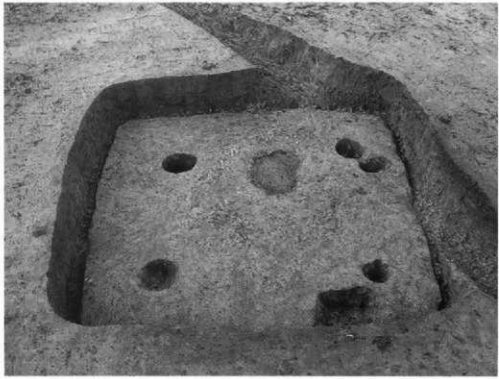
カマド

遺物出土状況

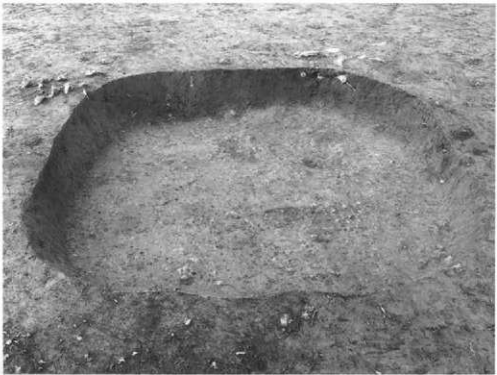


SI-032

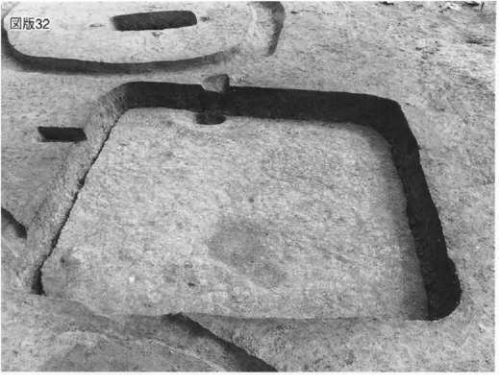
SI-033



SI-034



SI-036



SI-037

SI-038

SI-039

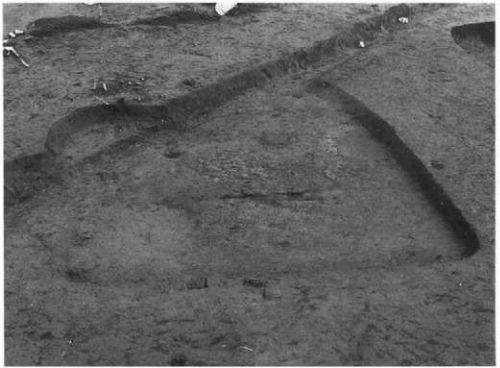
SI-040

SI-041

遺物出土状況2

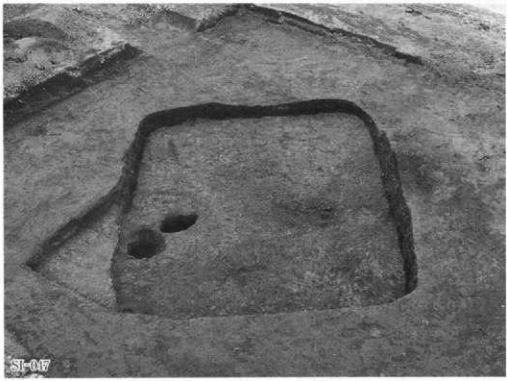
SI-042

SI-044



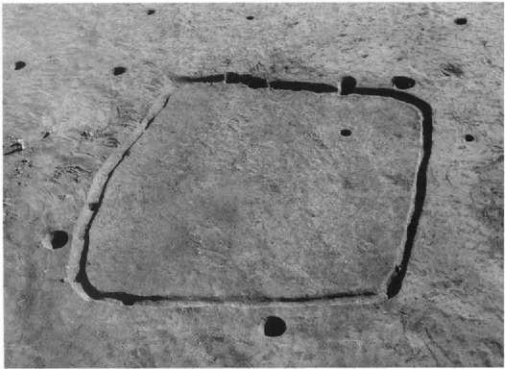
SI-045

SI-046



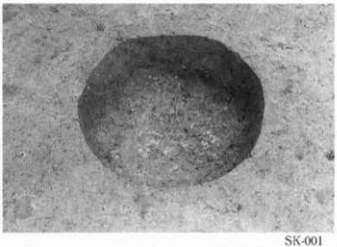
SI-047

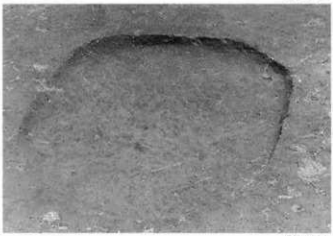
遺物出土状況



SI-048

SK-070

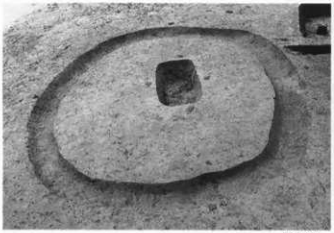

SK-001

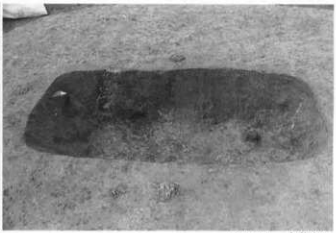

SK-044

SK-060

SK-076

SK-080

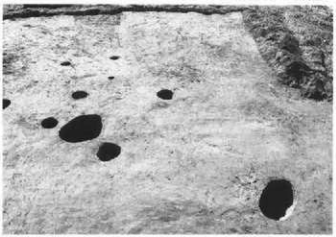

SM-001


SM-001　主体部

古墳時代土坑・墳墓（1）

SK-015　土墳墓

SK-064　刀子・刀剣



SH-007・SB-001

SH-003・SB-002

SK-013

SK-014

SS-001

古墳時代墳墓（2）・ピット群・建物跡、奈良・平安時代墳墓（1）

SK-055

SK-055　遺物出土状況

SK-012・SS-001(南方から)

SK-012・SS-001(北方から)

SH-004・SB-003

SH-006・SB-004

SH-002・SB-006

SH-006・SB-005・SI-048

奈良・平安時代建物跡・墳墓，中・近世建物跡

SK-011

SK-018

SK-019

SK-020

SK-027

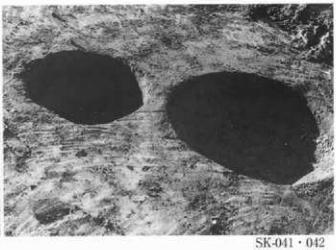
SK-032

SK-033

SK-037

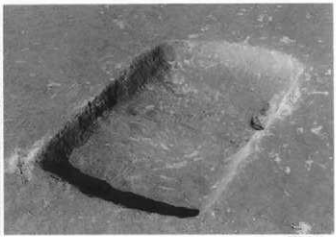
その他の土坑（1）

SK-040

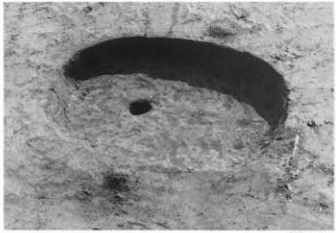


SK-041・042

SK-043



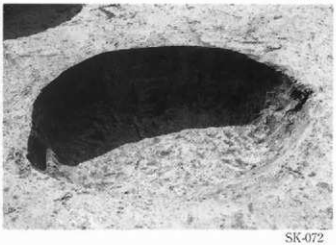
SK-048



SK-049

SK-061

SK-071

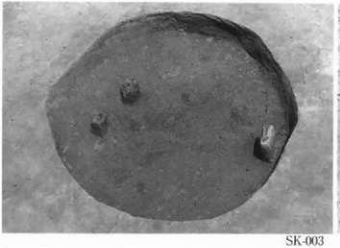


SK-072

その他の土坑（2）

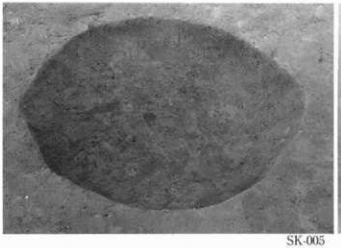
SK-073

SK-002



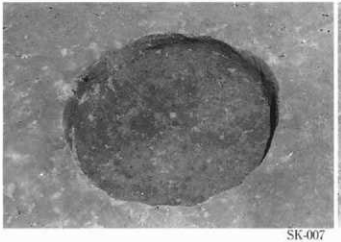
SK-003

SK-004



SK-005

SK-006



SK-007

SK-009

その他の土坑（3）

001-1

001-2

001-5

001-6

001-7

001-8

002-1

001-3

001-9

001-10

001-11

001-4

002-2

002-3

002-2

003-1

003-2

003-3

005-11

005-12

005-15

SI-001～003.005号住居出土土器

005-1

005-8

007-4

005-5

005-3

005-9

005-6

005-10

007-1

005-13

005-7

006-3

007-3

007-7

005-4

006-1

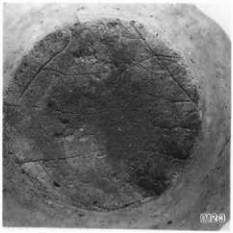
007-2

007-7

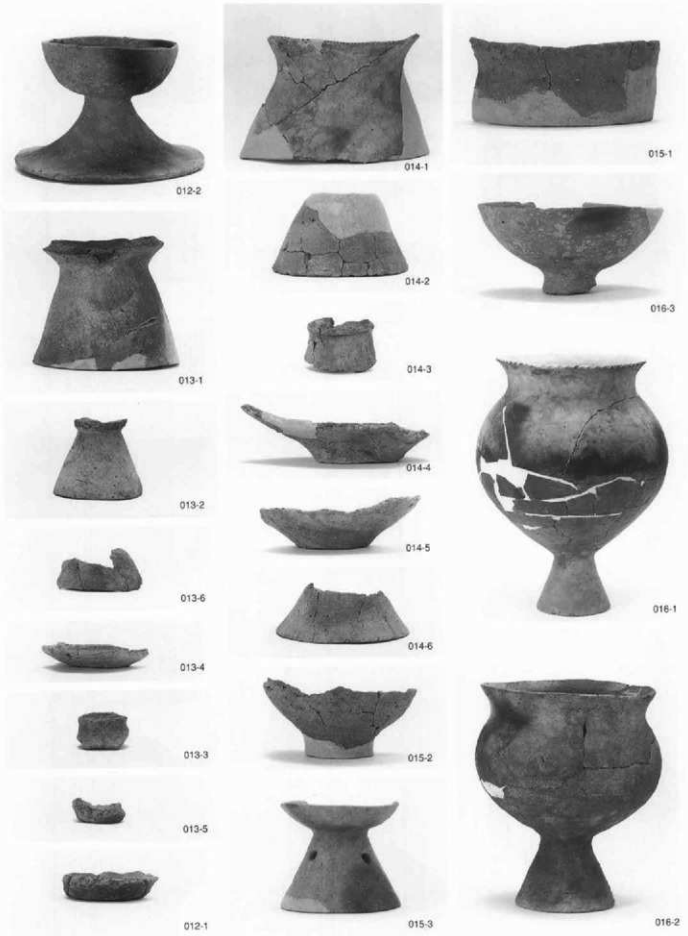
001-14

006-2

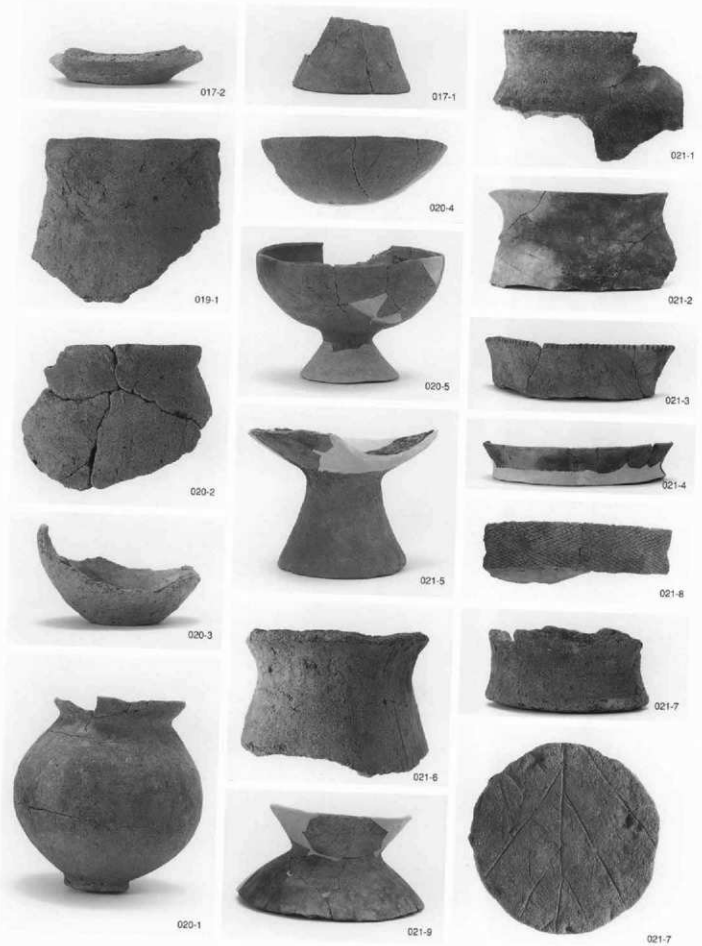
SI-005～007号住居出土土器



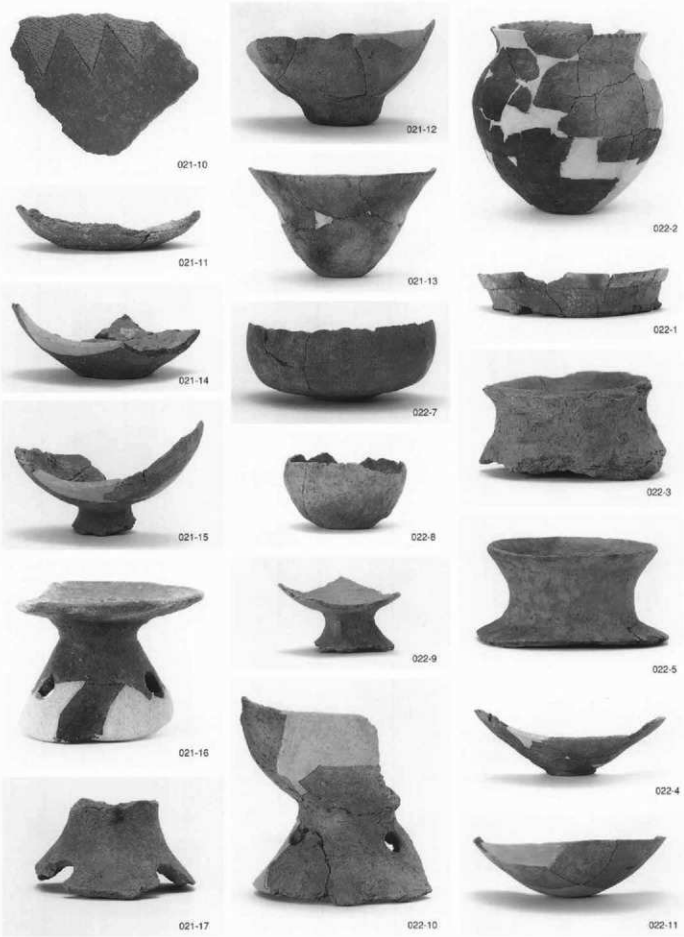
SI-007～012号住居出土土器



SI-012～016号住居出土土器



SI-017,019～021号住居出土土器



SI-021～022号住居出土土器

022-6

024-7

024-2

024-3

023-1

024-8

024-11

023-2

024-9

024-4

023-3

024-6

024-5

023-4

024-1

024-10

024-12

025-7

SI-022～025号住居出土土器

025-1

025-2

025-3

025-5

025-4

026-2

025-6

026-4

026-5

026-6

026-8

026-9

026-1

026-3

026-7

026-11

026-12

026-10

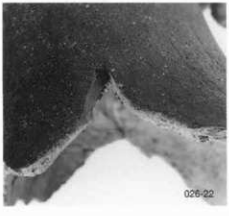
SI-025～026号住居出土土器

026-15

026-16

026-17

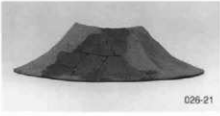
026-22


026-22

026-18

026-19

026-20

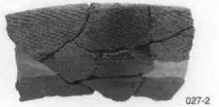

026-21

026-23

026-24

026-25

026-26


027-2

027-3

027-1

027-4

026-13

026-14

SI-026～027号住居出土土器

028-1

028-2

028-3

028-7

028-4

028-6

028-5

028-8

028-12

028-12

028-9

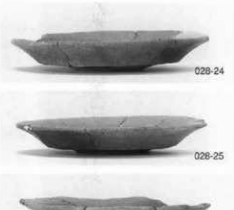
028-10

028-11

SI-028号住居出土土器

028-14

028-21


028-24

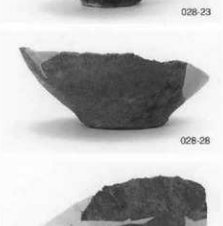
028-25

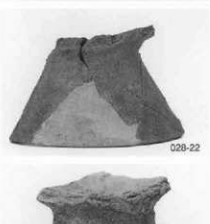
028-13

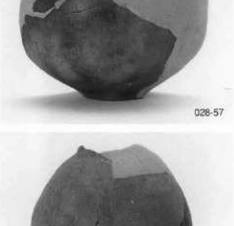
028-29

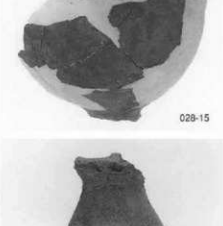
028-26

028-27

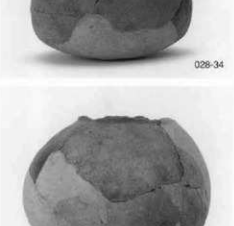

028-23


028-22


028-57


028-28

028-18


028-34

028-15

028-20

028-19

028-35

SI-028号住居出土土器

SI-028号住居出土土器

028-44

028-55

028-51

028-53

028-62

028-45

028-46

028-47

028-48

028-60

028-49

028-50

028-54

028-52

028-63

SI-028号住居出土土器

028-59

028-64

028-17

028-16

028-58

028-61

029-1

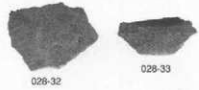
029-2

029-3

030-1

029-5

028-30 028-31


028-32 028-33

029-4

030-2

030-3

031-1

SI-028～031号住居出土土器

031-2

031-2

031-3

031-3

032-1

032-2

033-1

033-2

033-3

033-5

033-4

033-4

033-6

033-7

033-8

033-9

033-10

033-11

SI-031～033号住居出土土器

034-4

035-3・4

035-5

035-12

033-12

035-2

035-11

034-1

034-2

034-5

034-6

036-1

035-13

036-2

035-1

035-6

035-7

035-8

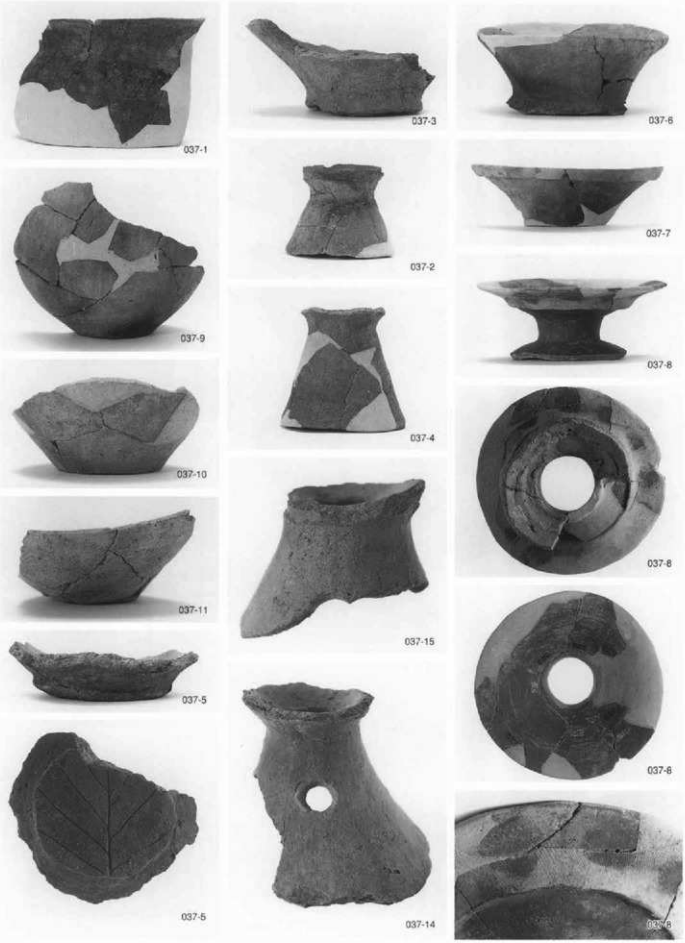
035-9

035-10

036-3

034-3

SI-033～036号住居出土土器



SI-037号住居出土土器

037-12

037-12

037-12

037-13

037-16

037-18

038-1

038-4

037-17

037-19

038-2

038-8

038-3

038-5

038-7

038-6

039-5

039-5

SI-037～039号住居出土土器

039-1

039-2

039-3

039-11

039-12

039-8

039-8

039-9

039-10

039-13

039-14

039-15

039-16

039-4

039-17

039-19

039-20

039-21

039-18

040-1

039-22

039-22

SI-039～040号住居出土土器

040-2

040-3

040-4

041-3

041-8

041-5

041-6

041-7

041-4

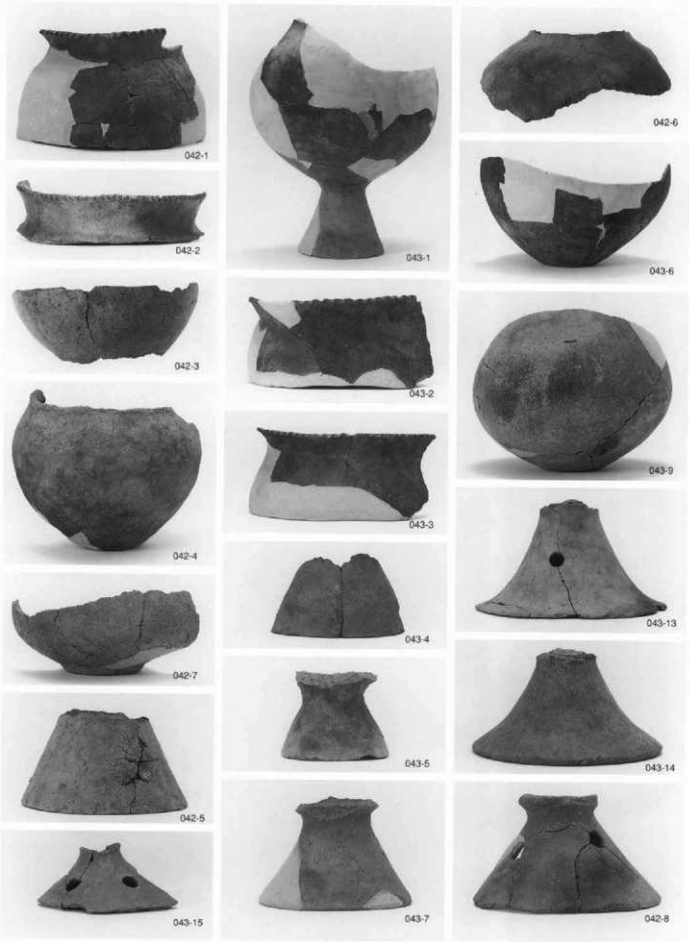
041-1

041-2

041-10

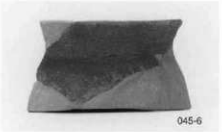
041-9

SI-040～041号住居出土土器



SI-042～043号住居出土土器

SI-043～045号住居出土土器


045-6

045-7

046-1

046-2

047-7

045-11

046-7

046-8

046-9

046-10

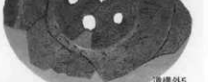
047-2

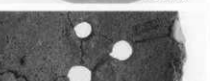
047-3

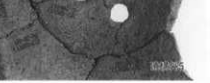
047-6

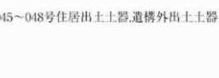
遺構外5

遺構外5









047-1

046-4

048-1・2・3・4

046-6

047-5

047-4

046-3

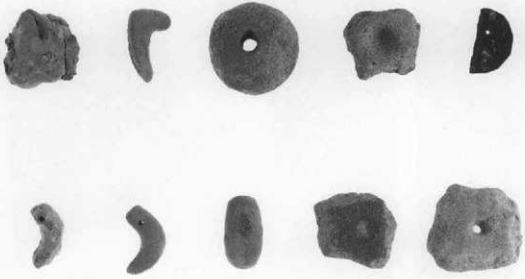
046-5

SI-045～048号住居出土土器,遺構外出土土器

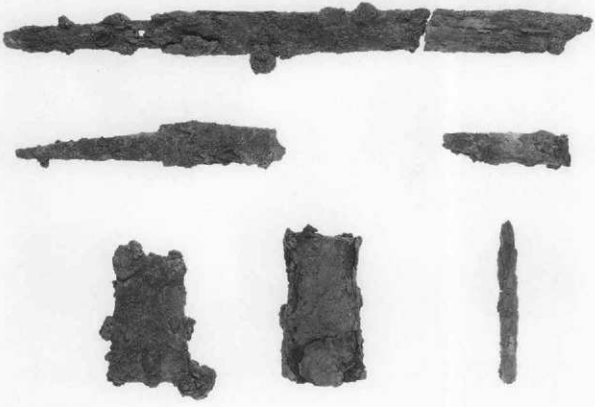
砥石接合状態

軽石

砥石接合状態・軽石



古墳時代石・土製品

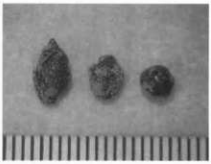


鉄器

古墳時代石・土製品，鉄器

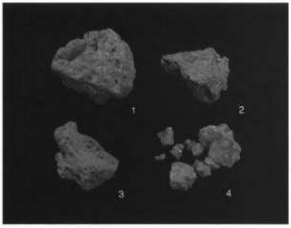
SI-001 炉

SI-003 焼土



SI-002 炉

炭化種子
（土壌サンプルより検出）



SK-014　鉄滓

報告書抄録

ふ り が な	まつざきちくないりくこうぎょうようちぞうせいせいびじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書 名	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書
副 書 名	松崎Ⅱ遺跡
巻 次	1
シ リ ー ズ 名	千葉県文化財センター調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第445集
編 著 者 名	西野雅人・鈴木弘幸・古内 茂
編 集 機 関	財団法人 千葉県文化財センター
所 在 地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
発 行 年 月 日	2003年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まつざきⅡいせき 松崎Ⅱ遺跡	ちばけんいんざいしまつざき 千葉県印西市松崎 きざなみ 字1037-1ほか	12 327	003	35度 46分 50秒	140度 09分 00秒	19930901～ 20020329 (6年次)	66,309㎡	松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
松崎Ⅱ遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点 16か所	ナイフ形石器, 台形様石器, 削器, 石錐, 楔形石器, 局部磨製石斧, 石核, 剥片	弥生時代末から古墳時代前期の集落跡。多量の土器を廃棄した例や鍛冶関連遺構・遺物あり。
	包蔵地	縄文時代	土坑 3基 陥し穴 1基	縄文土器, 石器, 土製畜, 土器片錘	
	集落	古墳時代	住居跡 49軒 竪穴状遺構 4基 古墳 1基 土壙墓 2基 掘立柱建物 2棟 製鉄関連土坑 2基	土師器, 土製品 (勾玉, 管状土錘, 土玉) 鉄製品(斧, 刀子, 小刀), 鉄滓, 砥石, 軽石	奈良・平安時代の終末期方墳に伴う土坑からウマの頭骨と鉄斧が出土した。
		奈良・平安時代	方形周溝状遺構 1基 竪穴状遺構 1基 土坑 1基	土師器, 須恵器, 鉄斧, ウマ頭骨	
		中・近世	掘立柱建物 4棟 地下式壙 1基 溝 21条 野馬土手 1	鉄製品	

千葉県文化財センター調査報告第445集

松崎地区内陸工業用地造成整備事業
埋蔵文化財調査報告書1
-印西市松崎Ⅱ遺跡-

平成15年3月25日発行

編集　財団法人　千葉県文化財センター

発行　千葉県企業庁
千葉市中央区長洲1-9-1

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町1-10-6